

下 触 牛 伏 遺 跡

身体障害者スポーツセンター建設予
定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

下融牛伏遺跡正誤表

頁	誤	正
P5 右段下から8行	グリップ	トレンチ
P8 左段下から7行	創製期	発掘期
P12 No19上から4行	出土している。	出土している。
P13 No28上から3行	天変、	干変
P13 No35上から2行	積圧土	積圧表
P13 No35上から3行	塚立	塚立
P14 No42上から1行	住居址	住居址
P16 No48上から6行	三重瓦文軒平瓦	三重瓦文軒平瓦
P57 右段下から3行	Q41-307削片	Q41-308削片
P58 左段下から13行	6プロックから 出土した46点	6プロック外から 出土した65点
P142 右段下から12行	黒曜石	黒曜石
P191 右段下から12行	長頸瓶	長頸瓶
P198 右段下から5行	兜形(6)	兜形(4)
P214 右段上から18行	(8・10)	(8・9)
P214 右段下から4行	8・10	9・9
P228 左段下から2行	断面	前後断面
P232 左段上から13行	左側位	左側位
P242 右段上から3行	右側	右側
P248 右段上から6行	銅金具	足金具
P261 図1	第2個体 成年女性	第2個体 成年女性
"	第3個体 若い成年	第3個体 若い成年
P276 右段上から3行	出土例と伴に	出土例と共に
参考文献 P277 23	『高宮古墳群』	『高宮古墳群』
" 38	赤坂村8号墳	赤坂村8号墳
" 44	赤坂村教育委員会	赤坂村教育委員会
" 54	松村浩一	松村浩一
参考文献 P278 56 57 58	松原一昭	松村一昭
" 88	若月省吾	若月省吾

図版番号	誤	正	図版番号	誤	正
PL 58	8住 11	8住 10	PL 60	6住 19	6住 14
"	12	11	"	29	24
"	4住 11	4住 9	"	10住 5	10住 4
"	12	10	"	10	5
"	13	11	"	11	6
PL 59	9住 6	9住 7	PL 61	14住 13	14住 6
"	6住 11	6住 8	PL 62	11住 9	6
"	16	11	"	10	9
"	20	15	"	7住 4	7住 10
"	28	23	"	8	9
"	15	10	"	8	7
"	17	12	PL 63	7住 7	7住 8
"	18	13	"	10	6
PL 60	6住 26	21	"	20	22

図版番号	誤	正	図版番号	誤	正
PL 64	6墳 2	6墳 1	PL 66	1墳 10-12	1墳 9-11
"	7墳 4	7墳 1	"	18	15
"	1	2	"	17	18
PL 65	1墳 7	1墳 5	"	19	17
PL 66	1墳 5	1墳 7	"	20	18
"	13	12	"	21	19
"	15	14	PL 67	図-4	図221-4
"	18	13	"	図-5	図221-5

*P203・図159中の19は左右が逆転している。

*1号墳出土野金環については残存状態が不良な為図示できなかった。

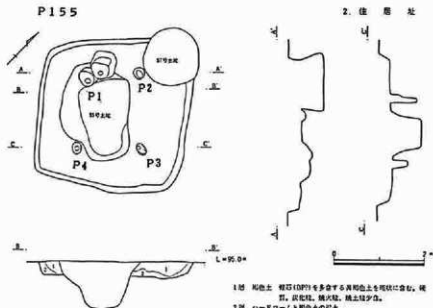
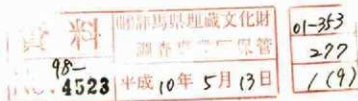


図145号住居



下 触 牛 伏 遺 跡

身体障害者スポーツセンター建設予
定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 8 6

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



▲先土器時代の調査が進む下触牛伏遺跡（北から）

▼台地縁辺に分布する古墳群と住居址



先土器時代
第I文化層の石器



先土器時代
第II文化層の局部磨製石斧



1号古墳石室の出土遺物



序

群馬県中央部に裾野を長くひいて位置する赤城山およびその周辺は、原始・古代より、私たちの祖先が生活の場としてきた地域であります。その生活の足跡も岩宿遺跡をはじめとして、各地で検出されています。

赤城山南麓地域においても上武道路建設や荒砥南部・北部土地改良事業などの大型開発事業により埋蔵文化財の発掘調査があいついで行われました。その成果も次々に報告書としてまとめられております。

佐波郡赤堀村下触牛伏の地に県立身障者スポーツセンターの建設が計画されました。ここは伊勢崎市北部にある波志江沼に隣接する台地上で、原始より生活が続いた地ですので、事業着手前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することになりました。

本報告書は、県教育委員会の指導により、県民生活部の委託を受けた当事業団が、昭和57年度、58年度に発掘調査を実施し、昭和59年度、60年度に整理作業を行った成果であります。先土器時代・縄文時代および古墳時代を中心として赤城山麓地域で営まれた先人の生活の一端を調査し、報告しました。本報告書が文字資料の少ない、あるいは全くない社会究明に手がかりを与えるものとして、多くの人々に利用され、新学に貢献することができることを望みます。

おわりに、発掘調査ならびに整理事業を通じてご指導、ご協力をいただきました群馬県教育委員会・群馬県県民生活部の関係者の皆様、調査担当者および作業員、補助員の方々に感謝申し上げます。

昭和61年3月31日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は、県立身障者スポーツセンター建設工事に伴う^{しほがらし}下触牛伏遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2. 遺跡は群馬県佐波郡赤堀村大字下触牛伏238番地に所在する。

3. 発掘調査は、群馬県県民生活部(障害福祉課)の委託により、^{しほがらし}群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った。

4. 調査を実施した年月日は次の通りである。

発掘調査 昭和57年11月24日～昭和58年3月25日(昭和57年度)

昭和58年4月1日～9月3日(昭和58年度第1次)

昭和59年2月6日～3月31日(昭和58年度第2次)

整理作業 昭和59年4月1日～昭和61年3月31日

5. 調査組織は次のとおりである。

事務担当 小林起久治、白石保三郎、梅沢重昭、大沢秋良、松本浩一、上原啓己、近藤平志、細野雅男、神保侑史、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のふ江、吉田笑子、並木綾子、吉田恵子、今井もと子、石田智子、竜崎めぐみ

調査担当 石坂 茂(群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員)

昭和57年度・昭和58年度第1次

飯田陽一(同 上) 昭和57年度

岩崎泰一(同 上) 昭和57年度・昭和58年度第1次

徳江秀夫(同 上) 昭和58年度第2次

小島敦子(同 上) 昭和58年度第1次・第2次

6. 本書作成の担当者は次のとおりである。

編 集 岩崎泰一、小島敦子

本文執筆 石坂 茂 I-1、III 徳江秀夫 I-5、IV-3、VII-2

岩崎泰一 I-3、II 小島敦子 I-2・4、IV-1・2・

4、V、VII-1

VI章では、テフラの同定について群馬大学新井朋夫教授に、1号古墳石室内の人骨・歯について国立科学博物館佐倉明氏に、玉槌を賜った。また県工業試験場の花岡敏一氏には古墳出土須恵器の胎土分析をお願いした。なおローム層の花粉分析は、^{しほがらし}鶴パリノサーヴェイの分析による。

遺構写真 石坂 茂・飯田陽一・岩崎泰一・徳江秀夫・小島敦子

遺物写真 佐藤元彦(群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師)

図版作成 保坂雅美、田村栄子、関口加津枝、角田孝子、田中精子、長谷川春美、星野春子(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

株式会社測研

7. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略・五十音順)

新井房夫、安斎正人、伊藤恒彦、岡村道雄、金山喜昭、小島純一、
佐倉 朔、佐藤宏之、鹿田雄三、鈴木忠司、戸田哲也、中束耕志、
能登 健、石島和夫、山下秀樹、

8. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
9. なお調査にあたって、作業に従事し、また多くの便宜を図っていただいた地元の方々に記して感謝いたします。

凡 例

1. 遺構図の方位記号は座標北を表わす。
2. II章の遺物Noは、調査時のグリッド毎の通し番号であり、別冊一覧表と一致している。
3. II章の遺物分布図に使用されたマークは次のことを表わしている。

第I文化層標 赤化 割れ面非赤化 ○ 0~50g 非赤化 ○ 0~50g

○ 51~100g ● 51~100g

○ 101~300g ● 101~300g

○ 301g~ ● 301g~

石器 ◆ 尖頭器

■ 撻・削器

○ 目的的剥片

◆ ナイフ形石器

□ 撻集器

● 石核調整剥片

▼ 台形石器

△ 削片

● 剥片

▲ 彫器

■ 石核

○ 砕片

第II文化層石器 ◆ ナイフ形石器

▲ 彫器

● 剥片

◇ 基部側縁整形石器

■ 撻・削器

○ 砕片

○ 局部磨製石斧

■ 石核

★ 敲石

● 局部磨製石斧剥片 ☆ 目的的剥片

4. II章の遺物実測図中の矢印は、使用痕が確認できる範囲を示している。
5. 遺構図のうち出土遺物および出土位置を示すドット(○)につけられた数字は、遺物実測図および遺物観察表・一覧表の数字と一致する。
6. III~V章の遺物の番号は、住居、土坑、古墳などの遺構ごとに通し番号を付した。包含層出土の遺物も一括通し番号である。
7. II・III章で使用したスクリーンは次のことを表わしている。
▨ 研磨面 ▨ 胎土に繊維を含む。 ▨ 磨り面
8. IV章の遺構図のうち、住居のカマドおよび古墳の周堀・前庭の埋没土断面は、見やすくするために平面図の2倍になっている。

目 次

序

例 言

凡 例

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 発掘調査に至る経緯 3
2. 調査の方法と経過 4
3. 基本層序 6
4. 遺跡の立地と周辺の地形 7
5. 周辺の遺跡分布 8

II 先土器時代の遺物と遺物分布

1. 調査区の設定と調査方法 17
2. 石器の出土層位 18
3. 第I文化層の調査 18
4. 第II文化層の調査 79

III 縄文時代の遺構と遺物

1. 概 要149
2. 住 居 址149
3. 土 壇156
4. 集 石170
5. 遺構外の出土遺物171

IV 古墳時代の遺構と遺物

1. 概 要191
2. 住 居 址191
3. 古 墳222
4. 遺構外の出土遺物251

V その他の遺構と遺物

1. 土 壇253
2. 溝255
3. 遺構外の出土遺物257

VI 科学的分析

1. テフラの同定258
2. 牛伏1号墳の人骨と歯260
3. 古墳出土須恵器の胎土分析261
4. 花粉分析264

VII 成果と問題点

1. 古墳時代の住居について267
2. 検出された古墳をめぐって 270

挿 図 目 次

図 1 群馬県の地勢と下融牛伏遺跡の位置	3	図 41 第I文化層の接合資料(9)	57
図 2 遺構確認トレンチと発掘区	4	図 42 目的的削片の長幅比	62
図 3 牛伏遺跡の基本土層	6	図 43 尖頭器・ナイフ形石器の長幅比	64
図 4 牛伏遺跡周辺の地形区分	7	図 44 彫器の長幅比	64
図 5 周辺の遺跡分布	9	図 45 彫器機能部の長幅比	65
図 6 先土器時代の調査区	17	図 46 削片の長幅比	65
図 7 第I文化層 1 礫群の分布と接合関係	20	図 47 第I文化層の器種構成と石材	68
図 8 第I文化層 2 礫群の分布と接合関係	21	図 48 第I文化層のブロック別石材分布	68
図 9 第I文化層 3 礫群の分布と接合関係	22	図 49 第I文化層の母岩別器種構成	69
図 10 第I文化層 4 礫群の分布と接合関係	23	図 50 石器ブロックと器種構成(1)	72
図 11 第I文化層 5 礫群の分布と接合関係	24	図 51 石器ブロックと器種構成(2)	73
図 12 第I文化層 6 礫群の分布と接合関係	25	図 52 母岩と器種構成(1)	74
図 13 第I文化層 7 礫群の分布と接合関係	26	図 53 母岩と器種構成(2)	75
図 14 第I文化層 1 ブロックの石器分布	27	図 54 母岩と器種構成(3)	76
図 15 第I文化層 2 ブロックの石器分布	28	図 55 第II文化層 5・6 ブロックの石器分布	81
図 16 第I文化層 3・4 ブロックの石器分布	29	図 56 第II文化層 9 ブロックの石器分布	82
図 17 第I文化層 5 ブロックの石器分布	30	図 57 第II文化層 10 ブロックの石器分布	82
図 18 第I文化層 6 ブロックの石器分布	30	図 58 第II文化層 11・12 ブロックの石器分布	83
図 19 第I文化層 7 ブロックの石器分布	31	図 59 第II文化層 13 ブロックの石器分布	84
図 20 第I文化層の石器(1)	33	図 60 第II文化層 14 ブロックの石器分布	84
図 21 第I文化層の石器(2)	35	図 61 第II文化層 8 ブロックの石器分布	85
図 22 第I文化層の石器(3)	36	図 62 第II文化層 1 ブロックの石器分布	86
図 23 第I文化層の石器(4)	37	図 63 第II文化層 3 ブロックの石器分布	87
図 24 第I文化層の石器(5)	38	図 64 第II文化層 7 ブロックの石器分布	89
図 25 第I文化層の石器(6)	39	図 65 第II文化層 4 ブロックの石器分布	90
図 26 第I文化層の石器(7)	40	図 66 第II文化層 15 ブロックの石器分布	91
図 27 第I文化層の石器(8)	41	図 67 第II文化層 2 ブロックの石器分布	92
図 28 第I文化層の石器(9)	42	図 68 第II文化層の石器(1)	94
図 29 第I文化層の石器(10)	43	図 69 第II文化層の石器(2)	95
図 30 第I文化層の石器(11)	44	図 70 第II文化層の石器(3)	96
図 31 第I文化層の石器(12)	46	図 71 第II文化層の石器(4)	98
図 32 第I文化層の石器(13)	47	図 72 第II文化層の石器(5)	99
図 33 第I文化層の接合資料(1)	49	図 73 第II文化層の石器(6)	100
図 34 第I文化層の接合資料(2)	50	図 74 第II文化層の石器(7)	101
図 35 第I文化層の接合資料(3)	51	図 75 第II文化層の石器(8)	103
図 36 第I文化層の接合資料(4)	52	図 76 第II文化層の石器(9)	104
図 37 第I文化層の接合資料(5)	53	図 77 第II文化層の石器(10)	105
図 38 第I文化層の接合資料(6)	54	図 78 第II文化層の石器(11)	107
図 39 第I文化層の接合資料(7)	55	図 79 第II文化層の石器(12)	108
図 40 第I文化層の接合資料(8)	56	図 80 第II文化層の石器(13)	109

図 81	第II文化層の石器(14)……………	110	図124	II類の土坑(7)……………	165
図 82	第II文化層の石器(15)……………	111	図125	II類の土坑(8)……………	166
図 83	第II文化層の石器(16)……………	112	図126	III類の土坑(1)……………	167
図 84	第II文化層の石器(17)……………	113	図127	III類の土坑(2)……………	168
図 85	第II文化層の接合資料(1)……………	115	図128	土坑出土の遺物……………	169
図 86	第II文化層の接合資料(2)……………	117	図129	集 石……………	170
図 87	第II文化層の接合資料(3)……………	118	図130	包含層出土縄文土器の分布……………	171
図 88	第II文化層の接合資料(4)……………	119	図131	遺構外出土遺物(1) 第1類土器……………	172
図 89	第II文化層の接合資料(5)……………	120	図132	遺構外出土遺物(2) 第1類土器……………	173
図 90	第II文化層の接合資料(6)……………	122	図133	遺構外出土遺物(3) 第2・3・4類土器……………	174
図 91	第II文化層の接合資料(7)……………	123	図134	遺構外出土遺物(4) 第5-a類土器……………	175
図 92	第II文化層の接合資料(8)……………	124	図135	遺構外出土遺物(5) 第5-b・c類土器……………	176
図 93	第II文化層の接合資料(9)……………	125	図136	遺構外出土遺物(6) 第5-c類土器……………	177
図 94	第II文化層の接合資料(10)……………	126	図137	遺構外出土遺物(7) 第5-c・d・e類土器……………	178
図 95	第II文化層の接合資料(11)……………	127	図138	遺構外出土遺物(8) 第5-c類土器……………	179
図 96	第II文化層の接合資料(12)……………	128	図139	遺構外出土遺物(9) 第6類土器……………	180
図 97	第II文化層の接合資料(13)……………	129	図140	遺構外出土遺物(10) 第7類土器……………	181
図 98	第II文化層の接合資料(14)……………	130	図141	遺構外出土遺物(11)……………	182
図 99	第II文化層の接合資料(15)……………	131	図142	遺構外出土遺物(12)……………	183
図100	第II文化層の接合資料(16)……………	132	図143	遺構外出土遺物(13)……………	184
図101	ローム層の逆転現象(1)……………	136	図144	遺構外出土遺物(14)……………	185
図102	ローム層の逆転現象(2)……………	137	図145	遺構外出土遺物(15)……………	186
図103	石核素材とその形状……………	138	図146	遺構外出土遺物(16)……………	187
図104	素材切片とその形状……………	139	図147	遺構外出土遺物(17)……………	188
図105	切片剥離工程の復元……………	140	図148	遺構外出土遺物(18)……………	189
図106	第II文化層の器種構成と石材……………	143	図149	縄文時代の遺構……………	190
図107	ブロックと器種組成……………	144	図150	8号住居……………	192
図108	第II文化層の石器分布とローム逆転層の位置……………	147	図151	8号住居の出土遺物……………	193
図109	13号住居……………	150	図152	4号住居……………	195
図110	13号住居の遺物出土位置……………	151	図153	4号住居の出土遺物……………	196
図111	13号住居の出土遺物(1)……………	152	図154	9号住居……………	197
図112	13号住居の出土遺物(2)……………	153	図155	9号住居の出土遺物……………	199
図113	13号住居の出土遺物(3)……………	154	図156	6号住居……………	200
図114	15号住居……………	155	図157	6号住居の出土遺物(1)……………	201
図115	15号住居の出土遺物……………	155	図158	6号住居の出土遺物(2)……………	202
図116	I類の土坑(1)……………	157	図159	6号住居の出土遺物(3)……………	203
図117	I類の土坑(2)……………	158	図160	6号住居の出土遺物(4)……………	204
図118	II類の土坑(1)……………	159	図161	2号住居の出土遺物……………	204
図119	II類の土坑(2)……………	160	図162	2号住居……………	204
図120	II類の土坑(3)……………	161	図163	10号住居……………	206
図121	II類の土坑(4)……………	162	図164	10号住居の出土遺物……………	207
図122	II類の土坑(5)……………	163	図165	3号住居……………	208
図123	II類の土坑(6)……………	164			

図166	3号住居の出土遺物	209	図198	5号古墳の石室	237
図167	14号住居の出土遺物	210	図199	5号古墳石室の掘り方	238
図168	14号住居	211	図200	5号古墳の出土遺物	238
図169	1号住居とその出土遺物	212	図201	2号古墳の出土遺物	239
図170	12号住居	213	図202	2号古墳	240
図171	12号住居の出土遺物	214	図203	2号古墳の石室	241
図172	11号住居の出土遺物	215	図204	1号古墳	243
図173	12号住居	216	図205	1号古墳の石室	244
図174	7号住居	217	図206	1号古墳石室の掘り方	245
図175	7号住居の出土遺物(1)	218	図207	1号古墳の出土遺物(1)	246
図176	7号住居の出土遺物(2)	219	図208	1号古墳の出土遺物(2)	247
図177	7号住居の出土遺物(3)	220	図209	1号古墳の遺物出土位置	247
図178	5号住居	221	図210	1号古墳の出土遺物(3)	248
図179	6号古墳	222	図211	1号古墳の出土遺物(4)	249
図180	6号古墳の石室	223	図212	1号古墳の出土遺物(5)	250
図181	6号古墳の出土遺物	224	図213	10号古墳	250
図182	6号古墳石室の掘り方	225	図214	遺構外の出土遺物(1)(古墳時代)	251
図183	8号古墳	226	図215	遺構外の出土遺物(2)(古墳時代)	252
図184	8号古墳の出土遺物	227	図216	60号土壇	253
図185	9号古墳	227	図217	3号土壇(上)と4号土壇	254
図186	7号古墳	228	図218	1・2・56号土壇	255
図187	7号古墳の石室	229	図219	古墳時代以降の遺構	256
図188	7号古墳石室の掘り方	230	図220	2号溝埋土断面	257
図189	7号古墳の出土遺物	230	図221	遺構外の出土遺物	257
図190	3号古墳	231	VII-1	図1 テフラ分析資料採取層位	258
図191	3号古墳の石室	232	2	図1 1号古墳石室の入骨・壘	261
図192	3号古墳の出土遺物	232	3	図1 分析資料実測図	262
図193	4号古墳	233	図2	牛伏遺跡および吉井窯跡資料	264
図194	4号古墳の石室	234	図3	太田金山・秋間・笠懸窯跡資料	264
図195	4号古墳の出土遺物	235	4	図1 牛伏遺跡花粉分析試料採取地点柱状図265	
図196	4号古墳石室の掘り方	235	VII-1	図1 牛伏遺跡の住居形態と土器の変遷	268
図197	5号古墳	236	2	図1 下触牛伏遺跡周辺の古墳	274

表 目 次

表 1	牛伏遺跡周辺の遺跡	11	表 2	太田・金山窯跡群試料 胎土分析値一覧	
表 2	第1文化層の礫群	19			263
表 3	第I文化層の石器ブロック	19	表 3	吉井・藤岡窯跡群試料 胎土分析値一覧	
表 4	第I文化層				263
VI-1	表 1 テフラ分析結果 830907牛伏遺跡R-36 ブリッド	258	4	表 1 下触牛伏遺跡花粉分析試料	265
3	表 1 下触牛伏遺跡試料 胎土分析値一覧	263	表 2	下触牛伏遺跡花粉分析値一覧	266
			VII-2	表 1 古墳形状等一覧	271

写真図版目次

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|------------|
| P L 1 | 空から見た下触牛伏遺跡 (北上空から) | P L 8 | I類の土壌 |
| | 遺跡の遠景 (東南から) | P L 9 | II類の土壌 |
| | 遺跡の遠景 (北から) | P L 10 | II類の土壌 |
| | 遺跡の遠景 (東から) | P L 11 | III類の土壌 |
| P L 2 | 牛伏遺跡基本土層 | P L 12 | III類の土壌 |
| | テフラの同定 (群大 新井房夫教授) | P L 13 | 弧状に展開する土坑群 |
| | 花粉分析試料サンプリング | | 1号集石 |
| | 先土器時代遺物と出土層位 | | 2号集石 |
| | ローム層の調査 | P L 14 | 8号住居全景 |
| P L 3 | 第I文化層 | | 埋没土断面 |
| | 1標群 | | カマド |
| | 2標群 | | 床面 |
| | 4標群 | | 掘り方 |
| | 5標群 | P L 15 | 床下土壌 |
| P L 4 | 6標群 | | 床下断面 |
| | 7標群 | | 4号住居全景 |
| | 2・3標群 | | 埋没土断面 |
| | 1ブロック | | カマド |
| | 3ブロック | P L 16 | 掘り方 |
| | 4ブロック | | 床下土壌埋没土断面 |
| | 6ブロック | | 2号住居埋没土断面 |
| | 7ブロック | | カマド |
| P L 5 | 石器の出土状態 Q43 | | 全景 |
| | R33・133 | P L 17 | 9号住居全景 |
| | Q43・3 | | 埋没土断面 |
| | S40・59 | | カマド |
| | | | 床面遺物出土状態 |
| | | | 石製品出土状態 |
| | | P L 18 | 掘り方 |
| | | | 床下土壌埋没土断面 |
| | | | 6号住居全景 |
| | | | 埋没土断面 |
| | | | 周辺の住居址 |
| | | P L 19 | カマド遺物出土状態 |
| | | | カマド |
| | | | 床面遺物出土状態 |
| | | | 南壁付近遺物出土状態 |
| | | | 掘り方全景 |
| | | | 掘り方半截状態 |
| | | | 床下土壌埋没土断面 |
| P L 7 | 13号住居全景 | | |
| | 炉址 | | |
| | 埋没土断面 | | |
| | 遺物出土状態 | | |
| | 15号住居全景 | | |

	床下土壇		左壁から奥壁野石積み
P L 20	10号住居全景		掘り方全景
	埋没土断面		石室掘り方埋没土断面
	カマド		
	遺物出土状態		7号古墳全景
	貯蔵穴埋没土断面		前庭埋没土断面
P L 21	3号住居全景	P L 29	石室
	床面遺物出土状態		全景
	1号住居全景		石室奥壁
	カマド		左壁の石積み
	埋没土断	P L 30	玄門の石積み
P L 22	14号住居全景		閉そく(外面)
	埋没土断面		閉そく(内部)
	カマド		前庭埋没土断面
	掘り方全景		周溝埋没土断面
	遺物出土状態		12号古墳全景
P L 23	12号住居全景		2号住居埋没土断面
	カマド		石室
	11号住居全景		周溝埋没土断面
	埋没土断面	P L 31	4号古墳石室
	カマド		周辺古墳
P L 24	7号住居全景		全景
	埋没土断面		石室閉そく(外面)
	遺物出土状態		石室閉そく(内部)
	周辺の住居址	P L 32	石室右壁の石積み
	カマド		石室奥壁
P L 25	カマド遺物出土状態		掘り方全景
	厨房空間		掘り方工具痕
	貯蔵穴		5号古墳全景
	5号住居全景	P L 33	石室
	遺物出土状態		石室前庭
	カマド		石室左壁の石積み
P L 26	調査された古墳群		石室奥壁
	西群の古墳(6~9号古墳)		周溝埋没土断面
	東群の古墳(1~5号古墳)		前庭埋没土断面
P L 27	6号古墳石室		2号古墳全景
	隣接する古墳		石室
	前庭埋没土断面	P L 34	1号古墳全景
	前庭の石積み		石室
	石室玄門		石室前室
P L 28	直刀出土状態		石室玄門
	奥通石積み	P L 35	直刀出土状態
	左袖・左壁の石積み		須恵器出土状態
			わらび手刀出土状態

	閉そく (内部)		局部磨製石斧
	掘り方埋没土断面	P L 44	第II文化層の石器 石核
	10号古墳全景	P L 45	第II文化層の石器 石核
	石室		折断剥片
P L 36	2号溝全景	P L 46	第III文化層の接合資料
	埋没土断面	P L 47	第II文化層の接合資料
	2号土壇全景	P L 48	第II文化層の石器 蔽石
	埋没土断面	P L 49	13号住居出土遺物
	3号土壇全景	P L 50	13・15号住居出土遺物
	埋没土断面	P L 51	土壇の出土遺物
	4号土壇全景	P L 52	遺構外の出土遺物 第1・2・3類土器
	埋没土断面	P L 53	第4・5類土器
P L 37	56号土壇全景	P L 54	第5・6類土器
	埋没土断面	P L 55	第7類土器
	60号土壇全景		蔽石・磨石
	埋没土断面		凹み石・石皿
	造成後の下触牛伏遺跡	P L 56	三角錐形石器
P L 38	第I文化層の石器 ナイフ形石器		石鏃・磨製石斧
	台形石器	P L 57	その他の石器
	彫器	P L 58	8号・4号住居出土遺物
P L 39	第I文化層の石器 削器	P L 59	9号・6号住居出土遺物
	石	P L 60	6号・9号住居出土遺物
	石核	P L 61	3号・14号・1号住居出土遺物
	打面調整剥片	P L 62	12号・11号・7号住居出土遺物
	削片	P L 63	7号住居出土遺物
P L 40	第I文化層の石器 蔽長剥片	P L 64	7・3・2・5・6・8号住居出土遺物
P L 41	第I文化層の接合資料	P L 65	1号古墳出土遺物
P L 42	第I文化層の接合資料	P L 66	1号・6号古墳出土遺物
	第III文化層の石器 ナイフ形石器	P L 67	1号古墳出土遺物
P L 43	第II文化層の石器 側縁部整形石器	P L 68	住居出土の棒状河原石
	その他の石器		

下觸牛伏遺跡

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 発掘調査に至る経緯

身障者スポーツセンターは、群馬県の県民生活部障害福祉課が県立身障者リハビリセンターの隣接地に建設を計画している身障者のためのスポーツ施設である。野球場や陸上競技用トラック、テニスコートといった施設がつけられる予定になっている。用地は42935㎡に及び、東に傾斜したローム台地を切り盛りして造成する計画がたてられた。県の教育委員会文化財保護課が分布調査を行なったところ、東半の盛土になる部分に主体的に遺物が散布していることが判明した。

9月中旬に障害福祉課、文化財保護課と当事業団

で調整会議がもたれ、造成区域のうち西半の切り土部分の発掘調査を実施することは決定されたが、東半の盛り土部分をどうするか協議が必要となった。盛り土保存の声もあったが、盛り土が東端で4mを越えること、また東端にはコンクリートの擁壁という半永久的構築物が造られることから、造成区域全域を調査の対象とし、範囲確認調査を行なって本調査実施区域を限定していくことになった。

また調査期間は、昭和57年度の11月～3月があてられることになったが、終了しなかった部分については次年度に継続することとなった。この身障者スポーツセンター建設予定地は、岩宿遺跡とともに著名な先土器時代の石山遺跡のある石山丘陵に連続す

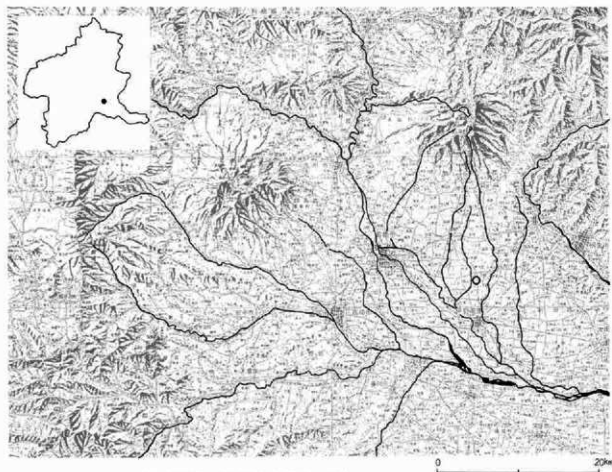


図1 群馬県の地勢と下陸牛伏遺跡の位置

1 発掘調査と遺跡の概要

る洪積台地であり、安定した関東ローム層の堆積が認められるところである。当然先土器時代の文化層の存在も予想され、関東ローム層の調査が必要であった。このことについても、予算と期間の中で調査を実施していくことになった。

用地買収が遅れた畑地や宅地が若干残されていたが、昭和57年11月1日から範囲確認を先行して調査を開始した。当初の文化財保護課の分布調査の結果から古墳時代～平安時代の集落址が予想されていたが、範囲確認調査により発掘区南端に古墳群が存在し、横穴式石室が良好に残存していることが判明した。また試掘トレンチより縄文土器が検出され、その出土状況から縄文時代の遺構の存在も予想された。この範囲確認調査によって、北側のやや凹地になっている約10000㎡に遺構が少ないことから先行調査区域とし、約33000㎡を本調査実施区域として調査を開始した。

2. 調査の方法と経過

昭和57年度調査はほぼ200×200m、40000㎡のスポーツセンター造成区域の中で、遺構の分布状況を確認し全面調査する範囲を限定することから始まった。この遺構確認のトレンチ調査は造成区域全域に重機により実施した。調査区北東隅のトレンチでは、黒色土に埋積された浅谷であることが判明したが、竪穴住居(1号)と土壇(1号)が検出された。これらは先行調査を行い、埋積物は掘削排土を置くことにした。また、北西隅・東端北半のトレンチにも遺構の検出がみられず、調査区から除外した。調査当初は西側の宅地と南東部の桑畑および中央部の桑畑一帯が未買収であった。これを含めて全面的に発掘調査を実施することになった面積は28000㎡であった。遺構確認トレンチの土層観察から、表土とローム層の間に明瞭な間層が全域に認められなかったため、古墳時代以降の遺構確認面であるローム層上面まで重機により表土を削いだ。古墳および古墳時代の住居が発掘区南東部に集中して検出された。遺構確認作業と併行して、発掘区域内にグリッド設定を行った。グリッドは5×5mとし、多角測量を総測研に委託し国家座標系に組み入れた。グリッドの呼称は西から東へ0から48、南から北へAからZ・a・b……wとする座標の交点のうち南西隅の杭名称による。なお国家座標は、28ラインがY=-57300、1ラインがX=+40300である。

ローム層上面で検出された住居および古墳は同時進行で発掘調査を行った。古墳は周堀や前庭の埋土断面の記録をとり、全掘した。発掘区域外に拡がる遺構については、道路等がある為拡張はしていない。石室



図2 遺構確認トレンチと発掘区

2. 調査の方法と経過

はまず、床面まで掘り下げ石室展開図を作製した。その後、裏込めおよび鋪石の立ち削りを行い、石室構造の断面記録を行った。石室掘り方の全掘調査も実施した。墳丘は削平を受けて残存状態はよくなかったので、2、3の古墳で盛り土部分をわずかに断面で記録できたにすぎない。住居群は、古墳と重複するものもあり、埋土断面の観察・記録を行ない掘り下げた。床下の状態および掘り方の調査は小トレンチを設定して地山面まで掘り下げた。住居の中には床下に大きな土壇をもつものがあり、それらの住居は床下を全掘調査することにした。その後、溝や土壇を調査し、57年度の調査を終了した。調査中堅穴住居壁のローム層中より石器剥片が検出されたり、古墳周郷内に縄文時代の土壇が確認されており、次年度に調査が継続された。

昭和58年度は、縄文時代の遺構を調査した。ローム層上面平面形が確認できるものもあったが、周辺の踏遺跡の調査例から不十分と考えられたので、遺物の散布のみられるところを中心に遺構を確認するためのグリッド調査を行った。その結果、住居2軒、土壇35基が検出された。土壇はいくつかの形態に分けられた。小判形で底面中央に杭穴のあるⅡ類については、杭の柱根と掘え方の識別を試みたが、あまり良い結果は得られなかった。土壇はローム層に似た土で埋まっているため、遺構の検出には手間どったが次にローム層の調査を予定していたので、この時点では深く試掘をすることはさし控えた。

次に先年度に壁のハードローム上面で、剥片を検出した堅穴住居周辺から人力で先土器時代文化層の検出を試みたが、遺物の広がりを押えることができなかった。そこで文化層の有無を再確認するため、発掘区東半を中心に2×5mのグリッドを配置して掘り下げた。その一部で、ソフトロームからハードロームにかけて遺物が出土し、第Ⅰ文化層とした。第Ⅰ文化層の広がりはほぼ1500㎡となり、検出した石器は1637点であった。この間、検出漏れを予想していた縄文時代の土壇を数基調査した。

続いて、下層の文化層の有無を確認するために

2×5mのトレンチを5～10mおきに設定し、HPまで掘り下げたところ、40ライン付近のトレンチで、いわゆる暗色帯から多数の石器を検出した。北側のトレンチの状況や地形から石器分布を想定し、北はXライン、南はIライン、西は37ライン、東は43ラインに囲まれた範囲を第Ⅱ文化層の調査区に設定した。第Ⅰ文化層の分布はさらに広がらないこと、試掘トレンチで暗色帯上層のBPを含む土層には石器が出土しないことを確認していたので、暗色帯直上のBPブロックを含むローム層を若干残す程度まで重機で掘り下げた。そして改めて2×5mのグリッドを設定し、石器の広がる約1600㎡を調査したが、西側はさらに設定した調査区から石器の分布が広がることを判明した。以上のように、先土器時代の調査では2枚の文化層を確認し、予想以上の調査が必要となった。そこで9月段階で障害福祉課と協議し、12月の補正予算を待って再度調査することになり、9月30日で第1次調査は中断した。

2月に再開された第2次調査では、1次調査終了間近、それまで遺構は存在しないと考えていた発掘区中央部に土壇1基を検出したため、発掘区西半の縄文時代遺構の再確認をまず行った。重機によりハードローム上面まで2mおきにトレンチを入れ、新たに土壇10数基を検出し調査した。また、当初未買取であった桑畑および宅地については、トレンチ調査を行い、土壇2基を検出し調査した。先土器時代のローム層の調査は、第Ⅱ文化層の石器分布西側および南側の限界を把握するため、トレンチ調査を行った。その結果、西側は32ライン、南側は従前のIラインがほぼ石器分布の限界となることを判明した。なお、このトレンチ調査で発掘区南端で梅林の攪乱土下から古墳時代の住居(14号)を確認し調査している。第2次調査のローム層掘り下げは厳寒の中困難を極めたが、約1000㎡の調査を行い、本遺跡第Ⅱ文化層の石器の広がりを全掘することができた。

その後、遺物の水洗・注記と埋め戻し作業を行い3月31日に調査を終了した。

3. 基本層序

下独牛伏遺跡は、赤城山南麓の洪積台地上にある。ほぼ遺跡全体に関東ローム層の安定した堆積があるが、f-u-20~40グリッドには浅い埋積谷が東側沖積地から入りこんでいた。また、37ラインにはX層(HP)の堆積がみられない部分もあった。ローム層の上には表土がのっているが、その中間にAs-C(浅間C軽石)を含む黒褐色土(II・III層)が残存している地点が部分的にあった。この黒褐色土は赤城山南麓地域に一般的にみられるもので、古墳時代から平安時代の堅穴住居址はほとんどこの土で埋没している。調査当初の試掘で、古墳時代の遺構はローム層上面を掘りこんでいることが判明していたので、ソフトローム(IVa層)上面が住居・古墳の確認面となった。

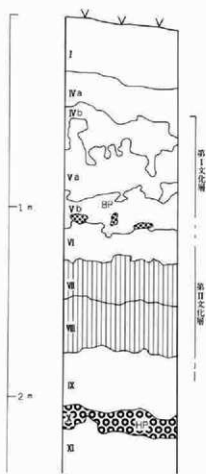


図3 牛伏遺跡の基本土層

IV層はいわゆるソフトロームである。その上半(IVa層)は土壌化が進み、縄文時代の遺物包含層となっている。IV層の細分は色調の違いとパミスの混入の有無による。V層はハードロームである。埋土がソフトロームに似た土色である縄文時代の遺構は、このV層上面が最終的な遺構確認面となった。V層の細分は色調の相違によるが、結果としてVaがAs-SP(浅間一白糸軽石)の混入層、Vb層がAs-BP(浅間一板泉褐色軽石群)をブロック状に含むものと把握され、それぞれの指標となっている。IVb層からVb層にかけては第I文化層の石器包含層である。

VI層は台地平坦部で安定した硬質ローム層として認められたが、南傾斜部では軟質で不安定な堆積状況を示していた。VI層は第II文化層を構成する石器群の包含される上位部分にあたる。またAT含有の最大値は本層にある。VII・VIII層は「岩宿層」にあたるものと思われる。VII層が粘質であるのに対して、VIII層はやや硬質で漸移層的であり日をおくと黒味を増す。VII・VIII層を「暗色帯」ととらえておく。また37ラインのX層の堆積のみられない部分では、VIII層が著しく粘土化しており、掘削後1日で堅くしまってしまうほどであった。VI層からIX層上半にかけて第II文化層の石器包含層となっている。

IX層は黄褐色の粘質ロームで、下層のHP(八崎軽石)粒を混入している。X層は層厚10~15cmのHP純層である。XI層は黒褐色粘土層で、南東傾斜面では本層から湧水が始まる。以上が本遺跡の基本土層の概略であるが、赤城山南麓地域の洪積台地の一般的な土層堆積であるといえる。

- | | |
|--------|--------------------------------------|
| I 層 | 表土層 |
| II 層 | 黒色土層 FPやAs-Cを多量に含む。しまりの少ない。 |
| III 層 | 黒褐色土層 ローム層への漸移層。しまり少ない。 |
| IVa 層 | 軟質ローム層 ローム粒子をブロック状に含む。土壌化している。 |
| IVb 層 | 軟質ローム層 ロームブロック・白色パミスを含む。 |
| Va 層 | 黄色ローム層 As-SP 粒を含む。 |
| Vb 層 | 黄色ローム層 砂粒を含む。下位にAs-BPをブロック状に含む。 |
| VI 層 | 黄褐色ローム層 上層に比して赤味が強い。ATの最大層序。 |
| VII 層 | 茶褐色ローム層 |
| VIII 層 | 褐色ローム層 「暗色帯」。VIII層はVII層とIX層の漸移的ローム層。 |
| IX 層 | 褐色ローム層 HP 粒を混入する。 |
| X 層 | HP (八崎軽石)層 |
| XI 層 | 黒褐色粘土層 |

4. 遺跡の立地と周辺の地形

群馬県の地形は、赤城山や榛名山といった古い火山や上越国境まで連なる東北の山地と、南東部に広がる関東平野の外縁部とに大きく分けられる。下舂牛伏遺跡は、それらが接する県央に位置する赤城山の広大な裾野の南端近く、佐波郡赤堀村下舂238番地に所在する。

赤城山は第三紀の複合成層火山で、以後の数回の爆発により複合的な山体を形づくっている。現在の最高峰は、1828mの黒松山である。地形的には下部ローム層以上のロームを第三紀層原形面にのせる古いもので、南面は広大な裾野が標高90mラインまで広がっている。その南端は旧利根川(広瀬川)の侵食による運線で区切られ、桃木川や広瀬川につくった沖積地に接している。山頂付近からは樹枝状に小河

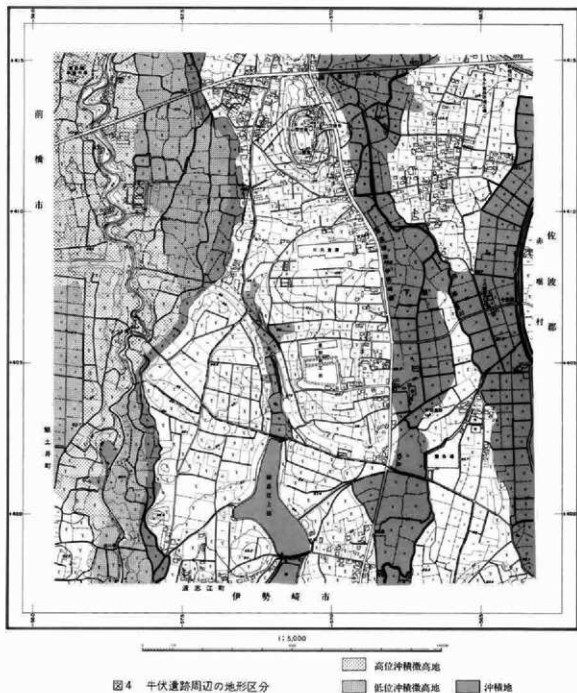


図4 牛伏遺跡周辺の地形区分

1 発掘調査と遺跡の概要

川が流下しており、そのため標高200mから90mの間は、河川流路によって裾野の台地は細長く舌状に区切られることになる。これらの小河川は、様々な沖積作用を山体・山麓に与えている。流路沿いのローム台地に砂壤土性の微高地を付随させるところがあったり、粕川のように完新世の扇状地をつくっている河川もある。従来、赤城山南麓はローム台地と単純に考えられることが多かったが、荒砥地域や粕川村内などで発掘調査が進むにつれ、複雑な地形環境を呈していることが明らかになっている。

下触牛伏遺跡は、このような赤城山南麓を流下する河川のうち神沢川の左岸ローム台地に立地している。神沢川も屈曲の多い河川で、兩岸のローム台地のところどころに砂壤土性微高地をつくっているが、遺跡周辺は神沢川と東方の西桂川によって細長く区切られたローム台地の部分である。この台地には先土器時代遺跡で著名な石山丘陵も所在する。この台地のほぼ中央石山丘陵西側には、巾が狭く河川のない沖積地が南北方向に入り込んでいる。その西岸に遺跡は立地する。谷頭は発掘区南端から北方500mのところであり、南方の波志江で神沢川の沖積地に合流するまで1.7kmの規模の沖積地である。遺跡南方にある波志江沼は沖積地の中ほどのところに堤を設けて造られた溜池である。この沖積地には、谷頭近くや遺跡北辺に小さな谷地が突起した瘤のように入り込んでいる。遺跡北辺のものは、埋積されて現状では谷地とは見えないような状態であった。

遺跡はこのような細長い沖積地に面して立地している。先土器時代の遺物は、東斜面に集中して検出され、沖積地に近い台地縁辺が生活の場となっていたことを示しているし、縄文時代には東南に傾斜する斜面の等高線に沿って陥穴群が掘られ、格好の猟場となっていただろう。古墳時代になっても、東南斜面に主として住居がつくられ、群集墳も同様に分布している。河川のないこの沖積地は、初期水田耕作には不適であったと考えられ、何らかの取水技術の採用によって古墳時代後期「第1次新開集落」が定着したものであろう。その後、墓域に変化し、奈

良・平安時代の集落が継続しないことは、波志江沼の開発の時期や周辺の遺跡分布との関連の中で考察され得るだろう。

- 註1 宮川流域の荒砥二之堰遺跡、神沢川流域の荒砥二之堰遺跡などで、ローム台地の縁辺に砂壤土性微高地を確認しており、遺構も分布していることがわかっている。
井上・他江地1984(文献2) 石坂他1984(文献3)
また粕川村交通・河川跡では、粕川扇状地の堆積物下にローム層が確認され、縄文時代中期の遺構を検出している。
小島純一1982(文献4)

5. 周辺の遺跡分布

この節では下触牛伏遺跡で検出された各時代の遺構・遺物を周辺地域の遺跡分布の中で関連づけようとするものである。但し図5の作成はあくまで便宜的なものであり、表中に登載した遺跡も発掘調査の成果を中心としている。

先土器時代 当遺跡の他、図中に堀下八幡遺跡(35)に近接して、前橋市荒口町北三木堂遺跡、伊勢崎市書上本山遺跡がある。近年、周辺地域の開発の進行とともに遺跡数は増加傾向にあるが、一定の分析を行う為にはここで取り上げた以上の範囲での検討を要する段階である。

縄文時代 縄文時代の遺跡は図中に21例あり、その他にも遺物散布地が多い。遺跡はいずれの時期も沖積地や湧水池を臨む台地や微高地上に位置している。前期・中期後半の集落址が多いが、現時点の資料からは2時期以上継続する遺跡の調査例は少ない。荒砥二之堰遺跡(18)、下縄引遺跡(61)、今井柳田遺跡が該当する。荒砥二之堰遺跡は神沢川右岸に位置し前期の諸磯a・b式期、加曾利E3式から堀之内I式期に至る各期の住居址を検出している。

当遺跡では創草期の爪形土器を出土しているが遺跡の北、石山丘陵の南西斜面には石山遺跡、北東(図外)には北三木堂遺跡があり、ともに尖頭器が検出されている。また、神沢川右岸の飯土井二木松遺跡では砂壤土下の包含層中から早期、田戸下層式期の沈線文や押型土器が多数出土している。荒砥上川久保遺跡(51)や北三木堂遺跡では熱系土器が検

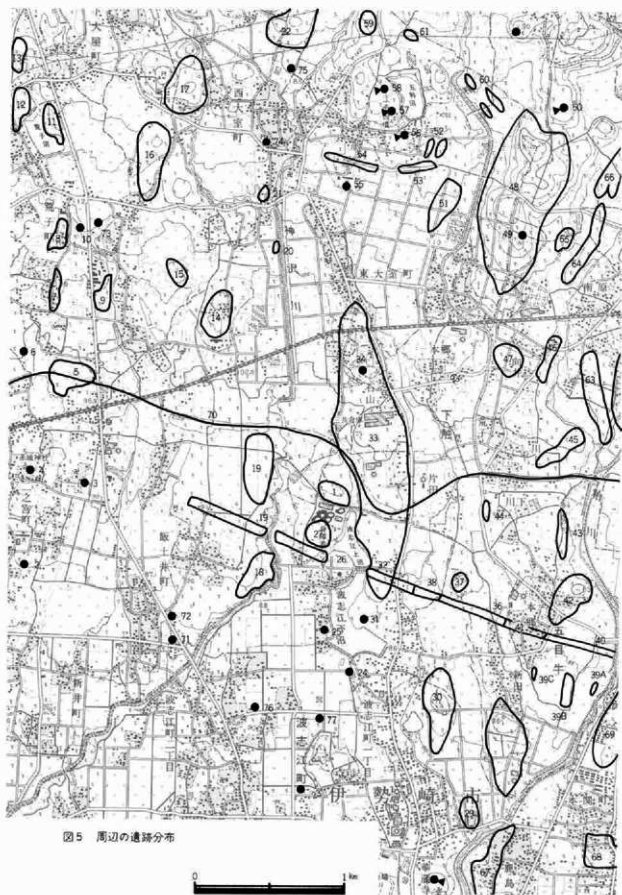


図5 周辺の遺跡分布

1 発掘調査と遺跡の概要

出されている。

前期、諸磯期の集落址の検出例は多い。荒砥二之堰遺跡(18)、荒砥上ノ坊遺跡(5)、荒砥上原訪遺跡(54)がある。桂川流域、多田山丘陵東側から南延する沖積地に接する台地上では五日牛東遺跡群(39)、北通遺跡(43)、今井柳田遺跡(64)、南原遺跡(63)、多田山東遺跡で住居址が検出されている。いずれの遺跡も数軒の住居を検出した集落址である。

陥穴と考えられる土坑は五日牛南組遺跡(41)、堀下八幡遺跡(35)で検出されている。

弥生時代 中期後半には小規模な沖積地を生産域とした集落が出現したと考えられる。前橋市荒砥前原遺跡、荒口前原遺跡、伊勢崎市西太田遺跡などの遺跡があるが現時点では遺跡数の限界から下触牛伏遺跡周辺の状況を把握することは困難である。

後期の遺跡も沖積地を臨む台地や微高地上に立地していると考えられる。

古墳時代 前期の遺跡は弥生時代後期の遺跡立地を引き継いでいると思われるが、当遺跡周辺の遺跡分布は複雑な様相を呈している。弥生時代後期の赤井戸式土器・樽式土器はこの時期まで残存し、土師器と伴出する。北山遺跡(22)、上綱引遺跡(59)、荒砥上ノ坊遺跡で住居址や周溝墓が検出されている。石田川式土器を出土する住居址は荒砥二之堰遺跡(18)、荒砥上原訪遺跡(54)、川上遺跡(45)、南原遺跡(63)などで検出されている。これらの住居址とともに方形周溝墓や円形周溝墓も多く検出されている。図中に8遺跡が分布しており堤東遺跡では前方後方形周溝墓が検出されている。

前期古墳はこれを築造した首長層が統括しえた支配領域についての検討が必要であるが、本地域に接しては認められない。前橋市天神山古墳、伊勢崎市華蔵寺真山古墳(28)が本地域を包括しえる地点にあると言える。

当遺跡では後期の住居址と古墳が検出されている。図中の周辺地域の分布からは中期・後期の遺跡増加は明確に看取できない。しかし、前期の遺跡の多くは後期に継続しており、個々の遺跡の集落も拡

大している。

古墳時代以降の農耕集落の変遷については前橋市二之宮町に所在した宮川下流域遺跡群の検討が^{註1}ある。古墳時代前期の居住域は台地縁辺に立地し、小河川に依拠した生産域を維持していたと思われる。後期になると前期からの居住域は台地内部に占地範囲が広がる。それとともに河川のない沖積地を臨む台地上にも住居が出現する。この背景には河川灌漑に加えて、荒砥天ノ宮遺跡で検出された、湧水を積極的に利用する溜井灌漑という新たな土木技術の獲得による生産域の拡大があったと考えられる。このように導き出された考え方は当遺跡の周辺地域全般での遺跡の変遷と合致していると思われる。

前期以降の古墳として赤堀茶臼山古墳(48)、地藏山古墳群(34)の初期の古墳、前橋市今井神社古墳、伊勢崎市丸塚山古墳などがある。後期の集落の変遷とともに古墳は小地域ごとに築造されるようになり、後期古墳の数は激増している。その中で前二子古墳に代表される前方後円墳や荒砥荒子遺跡で検出された方形区画遺構は一小地域を越えた首長層の存在を想定させる。

奈良・平安時代 当遺跡の周辺地域におけるこの時代の様相は不明な点が多い。遺跡の南側、波志江今宮遺跡で奈良時代の住居址1軒と浅間Bテフラ下の水田址が検出された。波志江六反田遺跡^{註2}は奈良時代の、飯土井二本松遺跡は奈良・平安時代の集落址である。

奈良・平安時代になって形成される集落は図中で6例と少ない。うち青柳遺跡(2)や波志江今宮遺跡(26)、宮貝戸下遺跡(25)は調査範囲が狭く遺跡の内容がすべて把握できていない可能性もある。その他の遺跡は伝統地域における居住域や生産域が随和状態に達する中で第2次の開発に伴うものである。

荒砥上原遺跡(13)では基壇を備える建物址を検出した。この遺構の南には奈良・平安時代の堅穴住居址が多数あり、同じ台地上、川龍番戸遺跡(12)まで延びているようである。

5. 周辺の遺跡分布

伊勢崎市上植木廃寺(68)は文化様式でいうところの白鳳時代の創建瓦を出土している。近接地を東山道が通過しており、佐位駅家も周辺に求められている。この地域を掌握していた有力者の存在が推定される。

中世以降 当遺跡周辺における遺跡の変遷は奈良・平安時代に至るまで大筋ながら把握できている。しかし、中世以降どのような変遷を経ていったかを考古資料で追求することは困難であり、不明な点も多い。八坂用水(佐波・新田用水)、大正用水に代表される灌漑用水が整備される中で耕地の水田化が継続され現在に至っていると考えられる。

平安時代末から中世初期、赤城山南麓のこの地域には西側から大胡郷、大室荘、淵名荘があり、当遺跡の位置する波志江は淵名荘域内にあったとされている。女畑は先述の郷・荘域を買い取っている用水で、12世紀中葉に淵名荘内への用水供給を目的として開

削されたと考えられている。荘園の成立や浅間Bテフラの降下による災害からの復旧等の問題を追究するための重要な遺跡である。

中世の城郭址としては、白井長尾氏に属していた大室城(74)、大室元城(75)や、赤石氏の築城した赤石城があげられる。前橋市今井城や、赤堀村の毒島城、赤堀城が近接している。

北山遺跡では中世の火葬墓が検出されているが、周辺には同時期の遺跡が多く分布し、板碑や五輪塔・小皿等の遺物が出土している。

註1 前橋市二之宮町所在の宮川下流域遺跡群についての考察は文献99で示されている。また、熊倉健・小島敦子は、農耕集落の発展プロセスを「新里村の遺跡」(文献97)で提示している。

註2 表中の略・記号は次のことを表している。
 「縮刷」→「上巻古墳総覧」(文献100)
 生原址⇒浅間Bテフラ埋没水田
 □⇒浅間C軽石埋没品
 墓址○→古墳 □→方形周溝墓

表1 牛伏遺跡周辺の遺跡(註2)

No	遺跡名	時期	検出された遺構				遺跡の概要	文献
			住居址	生原址	墓址	その他		
1	下輪牛伏遺跡	先土器 縄文 古墳	○ ○			包蔵地 土墳	本報告の遺跡	
2	青柳遺跡	奈良 平安	○ ○			土墳 溝	台地の中央部に位置する。神蹟地との比高差は小さいと思われる。二之宮小学校内でも遺構の存在が確認されている。	5
3	つくば山古墳	古墳			○		台地の東端部に位置する。一辺30m、高さ7mの方墳である。	6
4	赤城神社境内 塔礎	平安				礎石	赤城神社の境内に塔礎があり、神社周辺から布目瓦が出土している。	7
5	荒砥上ノ坊 遺跡	縄文 奈良 古墳 奈良 平安 中世	○ ○ ○ ○ ○	□	①	土墳 溝	2つの洪積台地と宮川の支流によって形成された神蹟台地上にあたる。西側の台地上からは方形周溝墓群が検出された。東側の台地縁辺部からは縄文時代前期の住居址が検出された。弥生時代～古墳時代前期には台地縁辺が居住域に、中央部が畠として利用されていたが、奈良・平安時代になると居住域が台地内部にまで拡大している。住居址は合計25軒検出された。	8
6	荒砥貫子遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○		①	溝	五世紀後半と考えられる方形区画内に柱穴状、古墳時代中期・後期の住居址を検出した。これらの遺構は群馬町三ツ寺I遺跡で検出された居宅跡と同様の性格を有していると考えられる。この区画を侵食している埋没谷からは浅間Bテフラにより埋没した水田址が検出された。	12 13
7	荒砥 中屋敷II遺跡	古墳 平安	○ ○	①	○		□荒砥中屋敷I遺跡の北側、同一台地上に位置する。古墳時代後期、平安時代の住居址、横穴式石室を有する円墳1基を検出した	11

I 発掘調査と遺跡の概要

No.	遺跡名	時期	検出された遺構				遺跡の概要	文献	
			住居址	生産址	墓址	その他			
8	荒砥中屋敷Ⅰ遺跡	古墳 中近世	○				溝	台地の東端に位置し沖積地に臨む。古墳時代前期(弥生時代後期とも考えられるものも含める)の住居址を検出する。	10
9	新屋遺跡	古墳	○					台地の東端に位置し、前期の住居址1軒を検出した。	9
10	舞台西遺跡	中世					井戸	中世の井戸を検出した。道路をはさんで南東に荒子の畚跡がある。	10
11	堤東遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○		□			台地の西端に位置し、沖積地をはさんで西側に川籠戸遺跡が位置する。古墳時代前期の方形周溝墓が3基検出され、うち1基は前方後方形を呈する。奈良・平安時代の住居址は12軒、住居址に接して小敷治遺構も検出されている。	14
12	川籠戸遺跡	奈良 平安	○ ○					台地の東端に位置する東側の沖積地は谷頭が近い。聖穴住居址とともに孤立柱建物址も検出されている。北側に位置する荒砥上西原遺跡と同一台地上に位置する。	15
13	荒砥 上西原遺跡	奈良 平安	○ ○				方形区画 と基壇	台地の東側斜面に位置し、幅1.5mほどの溝で囲まれた60m四方の区画が検出された。区画内からは5×4間の礎石を有する基壇や柱穴列が確認されている。上野四分寺と同一タイプの瓦、墨書土器、銅鐸の残片、鉄釘などを出土している。この遺構の南から西側には聖穴住居址が50軒ほど検出されている。	16
14	天神山古墳群	古墳			○			赤城山の残丘状の台地上に群集する。『総覧』によると円墳6基あまりが確認されている。現在はほとんど消滅している。	6
15	丸山古墳群	古墳			○			天神山古墳の北側、沖積地をはさんだ小台地上に立地する。	6
16	阿久山古墳群	古墳			○			残丘状の台地上に群集している。『総覧』によると円墳6基あまりが存在していたことが記されているが現在はほとんど消滅している。	6
17	伊勢山古墳群	古墳			○			西神沢川の右岸、残丘状の台地上に位置する『総覧』には産妻神社周辺に10数基の円墳が群集していたことが記載されている。伊勢山古墳は横穴式石室を有する前方後円墳である。	6
18	荒砥 二之塚遺跡	縄文 古墳	○ ○		□○		土 地	神沢川右岸に位置する。縄文時代、諸磯り、加曾利E3・4式、称名寺I・II式、堀之内I式期の住居址、土器、遺物を検出した。後期の住居址は楕圓形を呈する。古墳時代の住居址は前期13軒、後期5軒、方形周溝墓9基、古墳21基も検出されている。	2
19	籠土井 二本松遺跡	縄文 古墳 平安	○				包含層	神沢川右岸、砂礫土からなる隆高地上に平安時代の住居址がひろがっている。赤井戸式土器を伴出する古墳時代前期の住居1軒も検出されている。砂礫土の下位からは縄文時代早期の土器、割片が出土している。	17 18
20	荒砥東京遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○					神沢川右岸に立地する。古墳時代前期から平安時代前期まで継続する小規模集落である。遺跡の東側には帯状の沖積地が南へ延びている。これは神沢川の旧流跡と考えられている。集落形成期には既に埋没しており、生産域の一部にあてられていたと考えられる。	19
21	牛島古墳群	古墳			○			神沢川とその支流が合流する舌状台地の先端に位置する。『総覧』には4基が確認されている。	6
22	北山遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○		□			神沢川により形成された沖積地と乾谷沼に続く沖積地にはさまれた台地上に立地する。台地の最高位と沖積地との比高差は25m程度である。古墳時代前期の住居址は華蓋文土器を伴出する。これらの住居址は縁辺に集中し、中央部には方形周溝墓がつくられている。古墳時代後期の住居址は台地全域にひろがり、奈良・平安時	20

5. 周辺の遺跡分布

No	遺跡名	時期	検出された遺構				遺跡の概要	文献
			住居址	生産址	墓址	その他		
							代には再び東側斜面に集中している。	
23	西福岡遺跡	古墳				溝	中期の溝を検出。	21
24	大沼下遺跡	古墳 奈良 奈良 平安	○ ○ ○			溝 井戸	波志江沼西側、大沼上遺跡等と同一台地上に立地する。古墳時代前期、奈良・平安時代の集落である。	21
25	宮貝戸下遺跡	奈良	○				神沢川左岸の台地西縁に立地する。住居址1軒を検出。	22
26	波志江 今宮遺跡	古墳 奈良 奈良 天安	○		○	溝	神沢川左岸に位置する。古墳は東側、波志江沼との間の台地上にある。6世紀から7世紀におたる8基の古墳が調査された。うち1基は箱式石棺を主体部に有する帆立形古墳であった。台地の西側には狭い谷地が入りこみ浅間Bアフラ下の木田趾と溝が検出されている。	23
27	宮貝戸古墳群	古墳			○		波志江今宮遺跡の北側に位置し、今宮遺跡、下船牛伏遺跡で検出された古墳との関連が強く考えられる。4基が調査され、うち2基は円筒埴輪を伴っている。3号古墳は前庭を有し、石室構築の為の廻り方を有している。	24
28	華藏寺 真山古墳	古墳			○		粕川右岸の独立丘陵状の台地の頂部に位置する。有段口縁の壺の破片を出土し4世紀代の古墳と考えられている。	25
29	台所山古墳群	古墳			○		粕川の右岸、華藏寺の北方に位置する台地上にある。10余基の古墳の存在が伝えられたが現在はほぼ消滅している。うち1基が調査された。これは主体部に箱式石棺が用いられている。	26
30	蟹沼東古墳群	縄文 古墳	○ ○		□○		石山丘陵から南へ延びる台地上に位置する。50基以上の円墳が群集する。沖積地をはさんで地蔵山古墳群と対峙するが、地蔵山古墳群が中期から後期へと継続するのに対して、この古墳群は数基の主体部が箱式石棺であったのを除いて後期の横穴式石室を主体としている。縄文時代の住居址、古墳時代前期の住居址、方形埴輪溝墓も検出されており、台地縁辺が居住域となっていたと考えられる。	22 24 27 ～ 29
31	波志江六反田 天神山遺跡	奈良	○				石山丘陵の南、東西を狭い沖積地にはさまれた台地上に位置する。台地の東側縁辺に住居が散在していた。	31
32	片田山古墳群	古墳			○		石山丘陵の全域にわたり古墳が築造されていた。『総覧』によれば前方後円墳を含む70余基の古墳が確認されている。狭い沖積地をはさんで下船牛伏遺跡と対峙する。台地東側には三、二子古墳の南側から広がる沖積地が南延する。	30
33	石山遺跡	縄文				包含層	石山丘陵の南側斜面に位置する。100余点の尖頭器をはじめとし多数の割片等の遺物を出土した。	32
34	地蔵山古墳群	古墳			○		赤城山の残丘状の台地上に位置する。達磨山、巖手塚古墳をはじめ5～8世紀にいたる古墳55基が群集する。南側には赤堀村14号古墳があり、北側も洲山古墳群へとつながっている。	33 34
35	廻下八幡遺跡	先土器 縄文 奈良 奈良 平安	○ ○ ○ ○			包含層 土坑・船穴 掘立、溝 井戸	両側を沖積地にはさまれた台地上に位置する。東側の沖積地は穂川の旧河道である。台地は遺跡の北側が残丘上にかまかっており、八幡林古墳群となっている。奈良～平安時代の住居址は台地の東側に10軒検出された。縄文時代の住居址は前期磨石Ⅱ期で同時期の土坑も検出された。先土器時代の遺物は板敷褐色石(BP)混入層以下暗色帯を含めた間に3つの文化層として確認された。	35

I 発掘調査と遺跡の概要

№	遺跡名	時期	検出された遺構				遺跡の概要	文献
			住居址	生産址	墓址	その他		
36	大沼上遺跡		○				住居址は1軒を検出した。	30
37	八幡林古墳群	縄文 古墳	○			○	地下八層遺跡の北側に接する。縄文時代関山期の住居址4軒と古墳24基を検出した。古墳は6～7世紀後半の築造と考えられ、うち1基は墓穴式石室を有している。	36
38	渡志江 中峰岸遺跡	平安			⊕		地下八層遺跡、渡志江六反田天神山遺跡の位置する向台地にはさまれた沖積地。浅間Bテララに埋没した水田址が検出された。	37
39	五日午東 遺跡群	縄文 古墳 奈良 平安	○ ○ ○ ○			包含層 掘立	船川と旧種川にはさまれた微高地上に3地点に分かれて立地する。A地点は船川よりの微高地で縄文時代早期の山形押型文、浅緑文土器を出土。古墳時代前期・後期の住居址を出土した。B地点では古墳～平安時代の住居址が広がる。C地点では縄文時代の滑磯期、黒須期の住居址を各1軒ずつ検出した。	38
40	五日午清水田 ・中田遺跡	縄文 古墳 奈良 平安 中近世	○ ○ ○ ○			○ ○□ 掘立 溝 井戸・溝	船川右岸の微高地とその東西の沖積地にひろがる。古墳時代前期と後期の住居址は微高地の東平にひろがる。船川より谷地は畠と水田がつくられている。西側の沖積地は浅間Bテララ下の水田址以下7期の水田址が検出されている。微高地には住居址と重複して畠がつくられていた時期もある。また、軌立貝形の古墳も築造されていた。	39
41	五日午 南沼遺跡	縄文 古墳 近世	○ ○ ○			掘穴 木炭窯 土塔	清水田遺跡の西側の台地上に立地する。古墳は円墳である。近世末から明治時代にかけての居宅が検出されている。	40
42	岡山遺跡	縄文 古墳	○			○	船川右岸の残丘状の台地上にある。縄文時代後期の住居址が調査され、土偶や石棒が出土している。古墳は北側を除く斜面に分布しており「総覧」では17基が確認された。小型の前方後円墳とされる岡山古墳をはじめ7基以上が調査され主体部に箱式石棺を有する円墳もあった。	42
43	北港遺跡	縄文 古墳 平安	○ ○ ○			土塔	船川右岸の台地縁辺に立地する。南に岡山遺跡が立地する。2地点の発が実態され、縄文時代滑磯期、関山期の住居址、土塔、古墳時代前期の住居址1軒、平安時代の住居址2軒を検出した。	42
44	鹿嶋遺跡	縄文 奈良 平安	○ ○ ○			掘立	旧種川の左岸、台地縁辺に位置する。縄文時代滑磯期の住居址と土塔、奈良・平安時代の墓穴住居と掘立柱建物址を検出した。	42
45	川上遺跡	古墳 平安	○ ○			掘立	多田山丘陵から南に延びる台地の東縁部に位置した台地内部にも遺構はひろがる。古墳時代前期、後期、平安時代の住居址を検出した。掘立柱建物は礎石を有しており、その礎石の構造は上野国分寺と同様のものである。布目瓦片も多く出土した。	43
46	下触向井遺跡	縄文 古墳	○			土塔	台地縁辺部に位置し、東側に狭い沖積地を臨む。縄文時代の土塔は早期と報告されている。古墳時代後期の住居址26軒を検出した。	44
47	向井古墳群	古墳				○	桂川の左岸に位置する。下触向井遺跡に接する。うち1基が調査されている。	6
48	赤堀茶臼山 古墳	古墳				○	多田山丘陵の中の北側に位置する。東西両側に沖積地を臨み、古墳と現在の水田面との比高差は約50mである。西へ1.2kmに三、二子古墳が位置する。全長45mの軌立貝形の古墳である。主体部は木炭層で神像鏡、内行花文鏡、石製横造品、鉄製品等が出土した。墳丘上には家形埴輪をはじめとした形象埴輪、円筒埴輪が樹立されていた。5世紀中葉の築造と考えられる。	46 47

5. 周辺の遺跡分布

No	遺跡名	時期	検出された遺構				遺跡の概要	文献	
			住居址	生産址	墓址	その他			
49	多田山古墳群	古墳					赤城山の残丘状の丘陵である多田山丘陵の東側斜面には後期の円墳が集中する。中里古墳は切石敷紐積の横穴式石室を有していた。	6	
50	多田山火葬墓地群	平安					多田山丘陵の東斜面にある。安山岩でつくられた、蓋・身部分からなる骨甕器13基が発見されている。	45	
51	荒砥上川久保遺跡	縄文 古墳 奈良 平安	○ ○ ○			□	包含層	桂川右岸の台地上に位置し、西側には沖積地がひろがる。古墳時代前期から平安時代まで継続する集落であり、平安時代の住居址は50軒を検出した。古墳時代の方形周溝墓5基も検出され、赤井戸式土器が出土している。	48
52	梅ノ木遺跡	古墳 平安	○ ○					前二子古墳の東側、台地の縁辺部に位置する。古墳時代各期と平安時代の住居址を検出した。	49
53	荒砥五反田遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○					三、二子古墳の立地する台地の南端に位置し、西側に荒砥上諏訪遺跡が隣接する。古墳時代前期から平安時代にいたる住居址を検出した。	50
54	荒砥上諏訪遺跡	縄文 古墳 平安 中近世	○ ○ ○			○		樹枝状に開析された地形の台地上に東西に調査しており、東側の沖積地は湧水によって形成されたもので遺跡の北東に谷道がある。縄文時代諸磯期、古墳時代後期から平安時代の住居址が検出された。また『総覧』荒砥村第54号古墳の周囲も調査されている。	51 52
55	東大室小学校校庭遺跡	古墳 奈良 平安	○ ○ ○					荒砥上諏訪遺跡と同一台地上、台地南端に位置する。古墳時代前期、奈良、平安時代の住居址4軒を検出した。	51
56	前二子古墳	古墳				○		桂川と沖積川にはさまれた台地上に立地する。南側、台地の縁辺には荒砥上諏訪遺跡や荒砥五反田遺跡があり、沖積地がひろがる。全長95mの前方後円墳で袖籠型の横穴式石室を主体部に有する。6世紀前半の築造と位置づけられている。周辺には中・後二子古墳のほか10数基の円墳が集中する。	53
57	中二子古墳	古墳				○		全長85mの前方後円墳。周堀を有し一部は二重になっている。	53
58	後二子古墳	古墳				○		全長76mの前方後円墳。主体部は同軸型の横穴式石室である。	53
59	上磯引遺跡	縄文 古墳	○			□○		桂川右岸の台地上、東側の緩斜面に位置する。縄文時代の住居址は1軒で諸磯も明のものである。周溝墓と古墳、扇輪岡岡は立地を同じくしており墓域として継続性が注目される。12基の周溝墓からは横式土器、赤井戸式土器と土師器が伴出している。	54
60	久保菅戸遺跡	古墳	○					桂川左岸、舌状台地の縁辺に位置する。2軒の住居址は横式土器を出土しているがいずれも古墳時代前期の遺構であろう。瓦塔片も出土している。	55
61	下磯引遺跡	古墳	○					桂川左岸の台地上に位置する。検出された4軒の住居址はいずれも久保菅戸遺跡と同様の土器を出土している。	55
62	丸山古墳	古墳						台地の南端、孤丘状の高まりの頂部に位置する。	6
63	今井南家遺跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安	○ ○ ○ ○ ○				掘立	沖積地をはさんで向井遺跡、川上遺跡が位置する。縄文時代は諸磯期の住居址一軒。弥生時代後期から古墳時代の前期36軒、古墳時代後期8軒、奈良・平安時代115軒、掘立柱建物4棟を検出している。東側に古墳群が接する。『総覧』によれば27基の古墳が存在していた。	56

I 発掘調査と遺跡の概要

No.	遺跡名	時期	検出された遺構				遺跡の概要	文献
			住居址	生産址	墓址	その他		
64	今井柳田遺跡	縄文 古墳 奈良 平安	○ ○ ○ ○				毒島から続く沖積地の左岸、台地上に位置する。同一台地上に多田山東遺跡が、沖積地をはさんだ西側には田向遺跡がある。縄文時代は諸磯期と堀之内期で堀之内期の住居址は柄杓形を呈する。古墳時代後期12軒、奈良・平安時代の7軒の住居跡を検出した。	58
65	田向遺跡	縄文 古墳 奈良 平安	○ ○ ○ ○				多田山丘陵の東南、沖積地を臨む台地上に位置する。縄文時代は加賀利B期一軒。古墳時代前期は3軒と少ないが以後平安時代まで集落は継続する。	58
66	多田山東遺跡	縄文 弥生 平安	○ ○ ○				柳田遺跡の北側台地の西縁部に位置する。縄文時代の住居址は諸磯期で7軒を検出した。弥生時代の後半から以後各期の住居址があり、平安時代まで継続する遺跡である。	59
67	上西根遺跡	古墳			□		船川の右岸、台地上に位置する。古墳時代後期の方形両溝墓を検出した。	60
68	上榎木庵寺跡	白鳳				寺院址	南北に延びる台地上に位置し、南東に恵下遺跡が近接する。また、周辺は東山道、佐位駅家の存在が推定されている。従来から高寺址として重要性が高かったが1982（昭57）年から寺域とその内の遺構の確認調査が継続されている。調査では西辺を築ると考えられる溝と6カ所の墓壇が検出されるとともに、創建期の瓦と思われる単宇型八弁蓮文軒丸瓦や三重弧文軒平瓦、土野国分寺系の瓦、三形陶片、墨書土師、瓦塔片などが出土している。	61 62
69	本間古墳群	古墳			○		船川右岸の台地上に位置する。「総覧」では円墳を主体にが確認されている。築塚村71号古墳は前方後円墳で主体部に横穴式石室を有している。光仙坊遺跡（図外）では船川の現流路に接する地点で箱式石棺を主体部に持った円墳が検出されている。	6
70	女堀	平安 中世				用水遺構	下敷牛伏遺跡の東側に遺構の一部が残存する。前橋市上泉町付近の旧利根川を起点に終点の佐放都東村西部定まで、赤城山南麓から大開々扇状地I面にかけて幅15～30m、深さ3～4mの規模で12.75kmにわたって開削された用水遺構である。前橋市付近で8地点が調査され、工事が未完成であったことが判明した他当時の土木技術の一端が明らかになった。また、女堀は後関白テフラ降下後の農耕地の再開発、古代末期から中世にかけて荘園の成立等、社会史解明において重要な位置をしめている。	63
71	赤石城跡	中世					神沢川右岸の台地上に位置し、西側には狭い沖積地が南延する。高さ4mの土居をめぐらした本丸と西側の御曲輪があった。	64
72	城山遺跡	中世					赤石城に近接している。土居の一部を残す。	64
73	瓦子の砦跡	中世					南北120m、東西80mの単郭堡であった。	
74	大室城跡	中世					神沢川右岸に位置する。本丸、二ノ丸、さき曲輪などがあつた。	64
75	大室元城跡	中世					北山遺跡の占める台地の南端部に位置する。大室城跡の北西500mにあたる。単郭堡であり、惣跡から小堀や土牆が出土している。	64
76	中屋敷跡	中世					南北、東西150mの規模を有し土居が残存している。	6
77	関屋敷跡	中世					東西100m、南北130mの規模を有する。	6
78	推定東山道	奈良 以降						65

II 先土器時代の遺物と遺物分布

1. 調査区の設定と調査方法

先土器時代石器群の存在は縄文・古墳時代遺構の調査が進む中で、ローム層中から剥片が採集されたことにより確定的になった。調査は一部縄文時代の遺物包含層の調査と並行して行われた。石器群の存在が予想される台地縁辺を中心に試掘溝を設定し、その他の地点については調査済みの遺構を精査することにより、石器群の有無を確認するという方法で調査区を限定していった。

試掘溝は5mグリッドの北辺を基準に2m幅で各

グリッド毎に設定し、とりあえず、石器群の包含の予想されたVb(BP)層まで掘り下げ、VI~X層については重機を用いてVb層まで全体を除去した後調査を行うこととした。これは調査対象となるX層まで2m程の層厚をもつため、調査期間・安全性等を勘案した結果で、神奈川県寺尾遺跡〔文献103〕でとられた方法と基本的には同様である。調査はジョレンを用い、補助的に移植ゴテを使用した。出土遺物には各グリッド毎に1から連続する番号を与え、層位毎に遺物の出土状況・集合状態を把握しながら調査の進行を計った。



図6 先土器時代の調査区

2. 石器の出土層位

総計3000余点に及ぶ石器は上位部分で一部縄文時代遺物と混在して出土し、調査の対象となったX層(八崎軽石層)まで、最終的に遺物の出土しない層位は存在していない。石器はV a・VII層下位にそれぞれ遺物出土のピークが見られ、V a層にピークのある石器群を第I文化層の石器群(IV a～V b層出土石器)、VII層にピークのある石器群を第II文化層の石器群(VI～IX層出土石器)として扱えることができた。これらの石器群は層位区分された3つの層位にかけて出土しているが、石器は他の先土器時代遺跡同様ある一定の範囲に集中して出土し、その垂直分布もいわゆる「ヴィーナス曲線」を描いて出土していることが確認されている。

なお、群馬大学の新井房夫教授により、広域火山灰である「始良 Tn 火山灰」(AT)が、VI層下位(暗色帯上位層)に比定されることが明らかにされた。こうしたあり方は遺跡が所在する赤城山南麓一帯に共通して見られる現象で、一部成果として報告されている。一般に南麓ではATが純層では存在せず顕微鏡下の分析により最大値として示されるものである。これまで各人各様に扱われてきた累下の先土器時代石器群の相対的な位置づけが明らかになると思われる。調査は総計12000m²について実施され、大規模なものとなったが、良好な資料が抽出され、得られた成果も多い。

3. 第I文化層の調査

3-1 第I文化層の概要

雑群 第I文化層を構成する礫は総計771点が出土している。礫群は7ヶ所が認識され、いずれも石器ブロックと重複して分布している。各礫群とも100箇前後の礫より構成されている。

礫は小礫が上下差をもって出土しているが、他はV a層下位に安定した状態で出土し、出土状態からある構造を想定し得る可能性がある。用材は遺跡周辺に多く見られる在地石材である輝石安山岩がほと

んどで、他に砂岩2点が認められたに過ぎない。礫は円礫も認められたが、板状の歪角礫状のものも存在する。各礫群の形態は3～4m程の不整円形状を呈すが、2×4m程の範囲に長円形状に分布するものも見られる。礫の接合は基本的に礫群内で接合する傾向にある。礫群間における接合は比較的数量が少ないが、何らかの関係を見出そうとすれば独立的な5礫群を除いて、南北に2つのグループを指摘することが可能である。礫群を構成する礫のもつ属性は比較的均質で、礫群間に有意な差異を認めることはできなかった。

石器 第I文化層を構成する遺物総数は1637点で、うち石器は866点が出土している。石器ブロックは7ヶ所を確認し、6ブロックを除いて礫群と重複して分布している。部分的に八崎軽石層が見られない地点もあるが、遺跡及び周辺の地形は原形面を反映したものと理解され、図4に明らかな様に埋没谷が存在し、石器群は南北に長い台地が東側に突出する台地先端に分布すると言える。

石器群は一部縄文遺物と混在するがIV b層からV b層にかけて出土し、ほぼ同一の出土状況を示していた。生活面の認定に際し指標となる礫群はV a層下位に確認された。本文化層の石器組成は尖頭器・ナイフ形石器を主体とし、豊富な器種組成を示している。特徴的な石器として器体先端から櫛状剥離を施す一群の石器が存在し、ナイフ形石器と同一層序から出土している。こうした意味から、これらの石器の伴出例を増したとも言えるが、様々な作業段階を経た現在も明確に同時性を証明する根拠をもちえていない。石器製作状況を示す資料という視点に立てば、遺跡内で一連の工程の復元の可能な在地の石材である安山岩1を除いて、部分的な工程を示すものが多い。とりわけ硬質頁岩・珪質凝灰岩等の搬入石材は(素材剥片→石器器種)段階のものが多く、石核が見られないのはもとより、二次加工時に生じる破片が多く存在する。また調査時の所見ではQ-40G付近で、撃大程度の礫が出土しており、敲石に該当するものと思われた。その他に礫群よりこれに

表2 第1文化層の礫群

種類 礫群	出土位置①	総点数	石 材		残 存		状 態		総重量(kg)
			輝石安山岩	砂 岩	完 形	破 損	赤 化	非 赤 化	
1	R39～S39	86	86			86	84	2	14006.96
2	S40	93	93		4	89	86	7	12142.57
3	S40～S41	101	101		11	90	92	9	8191.53
4	S41～S42	87	87		2	85	74	13	5824.42
5	R42～R43	73	73		5	68	67	6	7789.34
6	R43～R44	70	68	2	1	69	70		6156.37
7	Q41～Q42	137	137		6	131	121	16	10201.97
礫 群 外		89	89		5	84	74	15	2196.94
合 計		736	734	2	34	702	668	68	66510.10

表3 第1文化層の石器ブロック

器種 ブロック名	尖頭器	台石	形器	ナイフ 形石器	彫器	刮器	器蓋	拭擦器	調整 用削片	使用 痕削片	石核	石核調 整削片	目的 的削片	削片	削片	砕片	合 計
1	1	1			7	1			1	1	1	1	2	26	21	66	129
2			1		6	1			2	3	1		11	114	30	169	338
3								1	1				1	14		7	24
4	1			1	1								3	34		8	47
5				1	2								2	10		8	23
6	1			7								3	10	22		16	59
7	1				3	1				2			1	57	18	147	230
ブロック外	1	1	1			1							2	2		8	16
合 計	4	2	11	19	4	1	4	6	2	4	32	279	69	429	666		

相当する資料が見られる他は全く出土しておらず、上述の削片剝離状況を説明するものとも思われる。

3-2 礫群と石器ブロック

台地東縁を中心に礫群・石器ブロック共に7ヶ所が検出された。これらは「石器群の平面的分布状況」から視覚的に把握されたもので、月見野・砂川遺跡で示された「ブロック」の概念によるものである。制約の多い先土器時代研究にとってブロックの概念

はある意味では有効であり、多用されている。

あらゆる分析の基礎となるブロックをブロックとして認識する過程の客観化の試みも見られるが、想定し得る厳密な意味での時間差をもつ石器群の存在を抽出する方法論の確立していないのが現状である。真に単位的なブロックを遺存した石器群から抽出することの意義は明白であり、ブロック概念の内包する問題は大きしなければならない。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

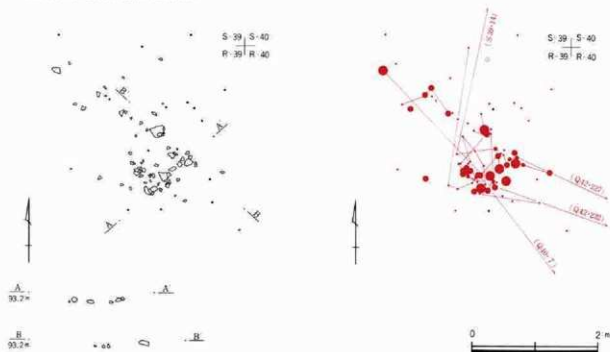


図7 第I文化層 1燧群の分布と接合関係

1燧群(図7)

台地東縁から30mほど入ったR-39Gに位置する。確認された7ヶ所の燧群の中で最も西側に位置し、石器1ブロックが重複して検出された。

燧群は長径3.5m、短径2.5mほどの不整形形状に分布し、周縁部に向うほど小燧が散漫に分布する傾向が見られる。小燧は石器同様に若干の高低差をもって出土しているが、拳大の燧を中心として一定のレベルでV a層下位に出土している。

燧群は統計86点の燧より構成されている。石材は在地系の「ヤマ石」と呼ばれる輝石安山岩で、遺跡周辺で容易に採集されるものである。出土した燧はいずれも欠損燧で、B型燧が全体の94%を占めている。構成燧のうち、多くは100g以下の小燧で全体の85%を占める。また、燧重量が3000gを越える巨大燧が燧集中部と接して出土している。広く平らな面を水平にして出土した状態や石器の分布との関係から、石器製作にかかわる遺物の可能性が考えられる。積極的な台石としての特徴を抽出し得なかったが同時に赤化の現象も認められなかった。

燧の接合は基本的には燧群との内で完結する例が多く見られるが、3・7燧群との間に接合例がある。3燧群とは10m、7燧群とは15m程の位置関係にある。他にQ-44Gに単独で出土した燧と35mを隔てて接合する例を含めて、接合例から何らかの意図を読みとることはできなかった。接合燧は割れ面を含めて赤化の現象が見られた。

本燧群は一定範囲の燧集中部を有しながらも、周辺は燧が散漫に分布する傾向が認められた。このような分布状況を示すものに後述する、2・7燧群があり、燧群が燧集中部よりなるものとは異なる。燧は一定のレベルで出土し、燧の分布は地形の傾斜とは反対の北面に広がって分布、出土している。このようなことから、燧群の分布が地形的要因から遺存したものでないことだけは明らかで、何らかの人為的行為の所産であるものと思われる。

3. 第1文化層の調査

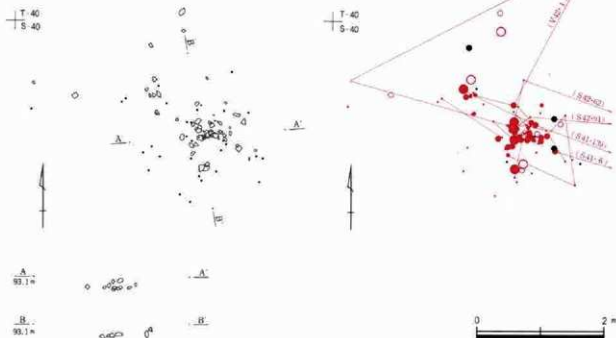


図8 第1文化層 2 礫群の分布と接合関係

2 礫群(図8)

S—40Gに検出された。40ラインに隣接する3ヶ所の礫群のうち、最も西側に位置する。石器2ブロックと重複して分布する。

礫群は長径3m、短径2.2m程の不整形形状の範囲に分布する。さらに、径1m程の範囲に礫の集中する部分が見られる。この礫集中部を構成する礫は比較的大形の礫が多くを占めるが、小形の礫も存在し、一概に大形礫より構成されているとも言えない。礫集中部の周縁には散漫に礫が分布する傾向が見られるが、比較的大形の礫も同時に分布する。出土した礫は小形のものが多く、これらは若干の高低差をもっているが、礫集中部では比較的安定した出土状況を示し、Va層下位に出土している。

礫群は総計93点の礫より構成されている。石材は輝石安山岩が使用されている。出土した礫は大半が欠損礫で、89点を数える。93点の出土礫のうち、7点を除いた他はすべて礫の赤化現象が認められた。構成礫のうち、800gを超える完形赤化礫も存在する

が、多くは50g以下の小礫で、約半数を占める。完形礫は4点であるが、200gほどのものが多く、欠損礫と比較した場合、完形礫=要求を満たすものとしての採集礫でないことは明らかである。

礫の接合は基本的には礫群内で完結する傾向が認められるが、3・4・6礫群との間に接合例がある。その他にT—41Gに単独で出土した礫と接合する例が確認されている。接合する礫の多くは割れ面を含めて赤化現象が認められた。

本礫群は一定範囲の礫集中部と周縁の散漫な礫の分布からなっている。分布域の東縁に小形の礫が分布する傾向が強く、しかも、赤化現象は見られない。出土状況から、礫が積み重ねられた状態を想定することも可能であるが、状況的には散逸した状態にあると言え、積極的な根拠に乏しい。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

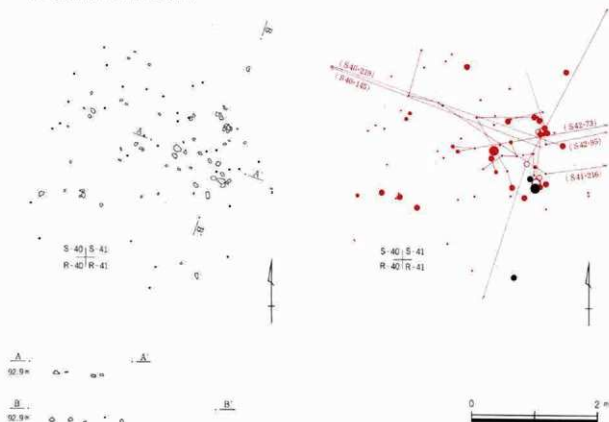


図9 第1文化層 3礫群の分布と接合関係

3礫群(図9)

S-41Gに検出された。Sラインに隣接して存在をする3ヶ所の礫群のうち、中央に位置する。隣接する2・4礫群とは4mほどの距離を測る。石器2ブロックと重複して分布する。礫群の東側の一部を縄文時代の5号土坑により、こわされている。

礫群は長さ3m、短径2mほどの不整形形状の範囲に分布する。礫群は比較的大形の数個の礫よりなる小礫から構成される可能性もあるが、全般的には散漫に分布する傾向にある。出土した礫は小礫が多く、若干の高低差をもって出土しているが、Va層下位に比較的安定した状態で出土している。

礫群は総計101点の礫より構成されている。石材は輝石安山岩が使用されている。出土した礫は大半が欠損礫で、90点を数える。出土礫のうち、9点を除いた他は、すべて赤化現象が見られた。また、700gを超える礫が存在するが、多くは50g以下の小礫で、

7割を占める。完形礫は11点である。1点300gを超えるものもあるが、多くは200gに満たない。

礫の接合は基本的には礫群内で完結する傾向が認められるが、2・4・7礫群との間に接合例がある。いずれも1点のみの部分的な接合で、礫の供給関係等明らかにすることはできなかった。

本礫群は東側の一部を土坑により破壊されているため、全体の規模、様相は明らかにし得なかった。しかし、現状からは全般に散漫な礫の分布状況を示しており、可能性として、礫群が比較的大形の礫数個からなる2、3の小群から構成されることが指摘される。この礫の小群間には接合関係を明らかに認めることができる。また、これらの小群と西側に散漫に分布する礫の間には接合関係が1例存在するだけである。また、100g以下の礫がこれら小群の西側に散漫に分布するが、隣接する礫群と複合する可能性が大きく、明らかにし得なかった。

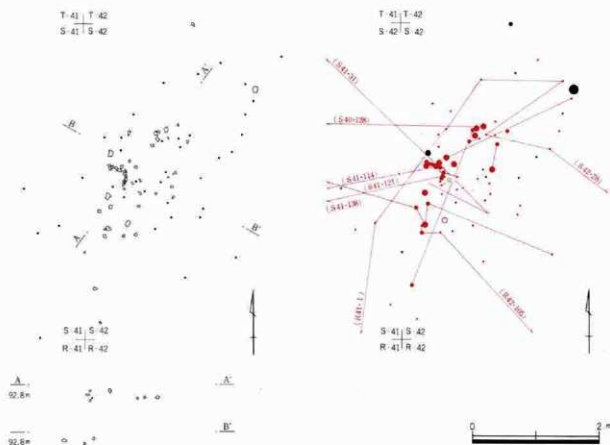


図10 第1文化層 4 礫群の分布と接合関係

4 礫群(図10)

S-42Gに位置する。Sラインに隣接して存在する3ヶ所の礫群のうち、最も東側に位置する。石器3ブロックが重複して分布している。

礫群の規模は長径3.8m、短径2mである。さらに径0.5mほどの範囲に礫の集中部がL字状に見られる。この礫集中部は100~200g程のB型礫を主体としたものである。また、礫の集中部から西側はほとんど礫の分布が見られないのに対して、東側には散漫な礫の分布が見られる。出土した礫は小礫が多く、若干の高低差をもって出土しているが、礫集中部では安定した出土状況を示し、V a層下位に出土している。

礫群は総計87点の礫から構成されている。石材は輝石安山岩を使用している。出土した礫は大半が破損礫で、85点を数える。出土礫のうち13点を除いて

すべて赤化現象が認められた。構成礫のうち、1000gを超える礫が周縁に認められるが、多くは小礫である。全体に小礫を中心とする礫群と言える。礫の接合は基本的には礫群内で完結する傾向が見られるが、3・5・6礫群間に接合例がある。その他に1・2・7礫群に囲まれ、明瞭な遺物の平面的集中を形成しないQ・R-40・41Gに出土した礫と接合する例も認められた。接合する多くは割れ面を含めて赤化現象が見られた。

本礫群はL字状に礫の検出された礫集中部と周縁の散漫な礫の分布から構成されていることが明らかとなった。同様な礫の分布状況を示すものとして5礫群がある。構成礫は小礫が主体を占めるが、礫集中部の西側にはほとんど出土せず、東側に多く分布することが指摘できる。このような状況を明瞭に説明することはできないが、少なくともこれらの小礫

II 先土器時代の遺物と遺物分布

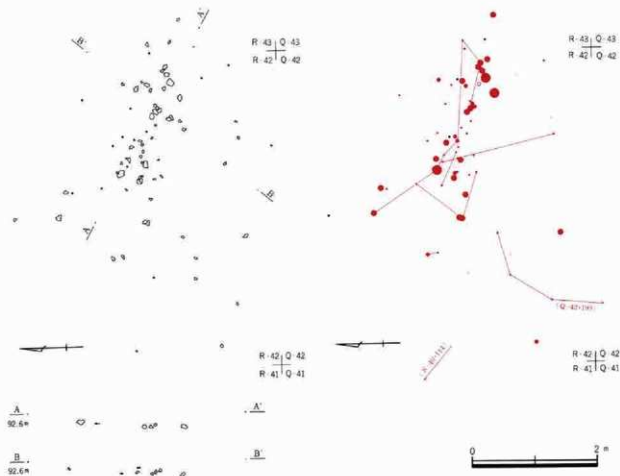


図11 第 I 文化層 5 礫群の分布と接合関係

は等高線に添って分布し、一概に自然的要因のみで理解することは困難である。L 字状に礫が検出されたことはそこに何らかの意図が反映された構造物を想定し得るが、現状で具体的に明らかにすることはできなかった。

5 礫群 (図11)

R-42G に位置する。隣接する 6・7 礫群とは 5 m 程の距離を隔てて検出された。石器 4 ブロックが重複して分布する。礫群は長径 4 m、短径 1.5 m 程の範囲に分布する。礫の分布は他と同様に礫の集中する部分と散漫な部分からなる。礫集中部は 100~300 g 程の礫を主体としており、比較的大形の礫の径 0.

8 m ほどの小群 2ヶ所から成っていると見ることが可能である。一方、散漫な礫の分布はこの礫集中部の周縁にあるが、東側には認められない。出土した礫は小礫が多く、若干の高低差をもっているが、多くは V a 層下位に出土している。

礫群は総計 73 点が出土している。石材は輝石安山岩が使用されている。出土した礫は大半が B 型の欠損礫で、完形礫はわずか 5 点が出土したのみである。構成礫のうち、1000 g を越える巨大礫は認められなかったが、200~300 g ほどの礫が多い。なお、R-42G から側縁に敲打痕をもつ磨石(赤化礫)が出土している。

礫の接合は基本的には礫群内で完結し、礫群間の接合はわずかに 1 例が認められるに過ぎない。見か

3. 第I文化層の調査

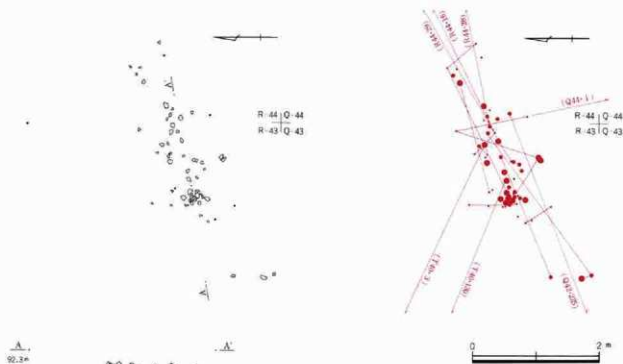


図12 第I文化層 6 礫群の分布と接合関係

け上、認識し得た2ヶ所の小群の間には接合する1例がある。接合する礫は割れ面を含み、赤化現象が認められた。

接合はこの1例を除いて礫群内で完結し、他の礫群と比べて独立的な性格が強い。

6 礫群(図12)

確認された礫群のなかで、最も東側の台地縁辺に近いR-43・44Gに位置する。石器5ブロックが重複して分布する。礫群は長径3m、短径1.5mの範囲に分布する。礫群は他と同様に礫の集中する部分と礫の散漫な部分からなる。礫集中部は礫群の西側を構成している。礫は大半が50~150gほどで、両者に相違する点は認められなかった。出土した礫は若干の高低差をもっているが、比較的安定した状態でV a層下位に出土している。

礫群は総計70点の礫より構成されている。確認した7ヶ所の礫群中最も少ない。石材は大半が輝石安

山岩であるが、2点のみ砂岩が使用されている。出土した礫は大半がB型の欠損礫であるが1点のみ完形礫が認められている。礫群を構成する礫70点はすべてに赤化現象が見られた。構成礫のうち、多くは100g以下の小礫であるが、他に圧倒的に多くを含めていた20g以下の小礫が15点とここでは極めて少ない存在となっている。また、500gを超える礫が存在しないこともひとつの特徴である。礫の接合は基本的には礫群内で接合するものが多く、13例が確認されているが、礫群間で接合するものも5例が確認されている。礫群内での接合は礫集中部内およびその周辺内の接合が主体を占め、さらに両者にわたる接合も認められる。礫群間の接合は2・4・7礫群間に認められ、とりわけ6・7礫群との間に密接な関係が認められる。

本礫群は一定範囲の礫集中部を有しながらも、その東側には散漫な礫の分布を認めることができる。また、礫群の分布は長・短径の比が2:1を示す楕円形状を呈し、5礫群と似ている。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

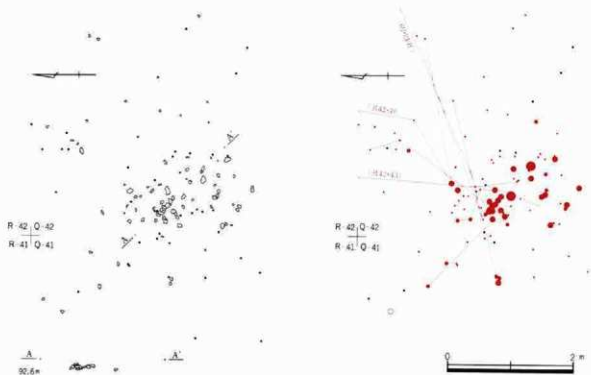


図13 第1文化層 7礫群の分布と接合関係

7礫群(図13)

Q-41・42Gに位置する。7ヶ所の礫群中、最も南側に検出され、石器7ブロックが重複して分布している。

礫群は長径4m、短径3.5m程の範囲に分布する。礫群は、200gほどのB型礫を主体とする径0.5mほどの礫の集中部と散漫に分布する周辺部から構成されている。礫集中部は「コ」の字状に比較的大形の礫が分布する。一方、周辺部は北側に小形の礫が、南側に比較的大形の礫が分布する傾向にある。出土した礫は小礫が多く、これらは若干の高低差をもって出土しているが、礫集中部では折り重なる様に安定した状態でV a層下位に出土している。

礫群は総計137点の礫より構成されている。石材は礫石安山岩が使用されている。出土した礫は6点を除いた他はすべて破損礫で、大半は赤化現象を認めることができた。構成礫の多くは100g以下の小礫で、全体の8割を占める。とりわけ20g以下の小礫は、60点が出土しており、圧倒的多数を占めている。

礫重量が1000gを越えるもの1点が周辺部より出土している。

礫の接合は礫群内で接合するものが多いが、他の礫群と接合関係にあるものも認められる。礫集中部と周辺部分との接合関係をはじめ、礫の集中部間、および周辺部と他の礫群間に接合関係が見られる。礫群間の接合は7例があり、1・3・5・6・7礫群、中でも6礫群とは3例の接合関係が見られた。

本礫群は認識した7ヶ所の礫群の中で、出土礫が最も多く、円形に近い分布状況を示していた。が、礫群は礫の集中部と散漫に礫の分布する周辺部からなり、1～4礫群と同様なあり方を示していた。「コ」の字状を呈する礫集中部から何らかの構造物を想定しうるが、具体的な根拠に乏しい。接合関係から見ると分布状況の異なる6礫群との接合関係が強く認められたが、重複して分布する石器ブロックのあり方の類似する1・2礫群とも接合関係が見られる点は注意されるべきことである。

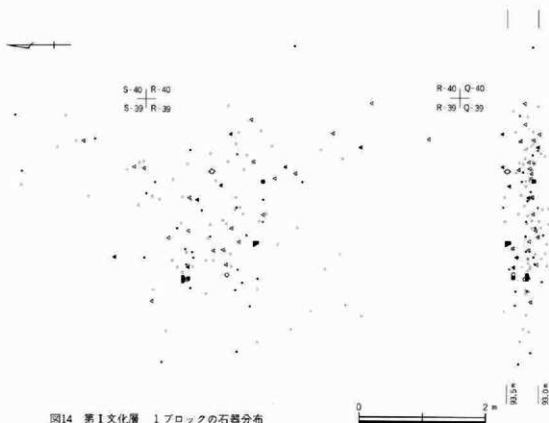


図14 第I文化層 1ブロックの石器分布

1ブロック(図14)

R・S-39Gに位置する。ブロックは長径6.5m、短径4.5m程の不整形形状に分布し、北西側で「風倒木址」と接している。石器はIVb層からVb層にかけて80cm程の巾をもって出土しているが、Va層中に最も多く出土している。1礫群が重複して分布している。

ブロックは総数130点の石器よりなる。影器と影器作出に伴うと考えられる削片を主体に、若干の尖頭器、使用痕ある削片が出土している。ブロックを構成する石器石材は在地石材と搬入石材の両者が見られる。器種組成の主体を占める影器と削片は1例を除き搬入石材を素材としており、各々が36%、30%を占める。両者が密接にかかわっていたことが理解され、他にブロックにも同様な傾向がみられる。さらに石材と石器の間に一定のかかわりを指摘することができる。ブロックを構成する安山岩・黒色頁岩の在地石材が一連の剥片剥離工程を示す剥片・砕片からなり定形石器がみられないのに対し、搬入石材

(硬質頁岩、珪質凝灰岩、珪質頁岩、黒曜石、チャート)は、定形石器と定形石器作出に伴う砕片と若干の削片から構成される。このような石器群の様相は他の石器ブロックにも見られ、石材と石器レベルでの質的類似性という観点で認識することができる。ブロックを構成する母岩別資料は可視的区分が不可能であった珪質凝灰岩を除いて18種類が確認されている。硬質頁岩1の受熱削片1点が認められる。

石器の接合は2ブロックと頻繁に接合する安山岩1の他に、7ブロックに珪質凝灰岩1例が接合する。安山岩1は5例が接合され、図示はしていないが、石核に接合するものも存在する。

本ブロックは器種組成及び石器石材の対応関係に一定のかかわりを認めることが可能で、様相の類似する他のブロックと有機的関連をもって存在していたものと思われる。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

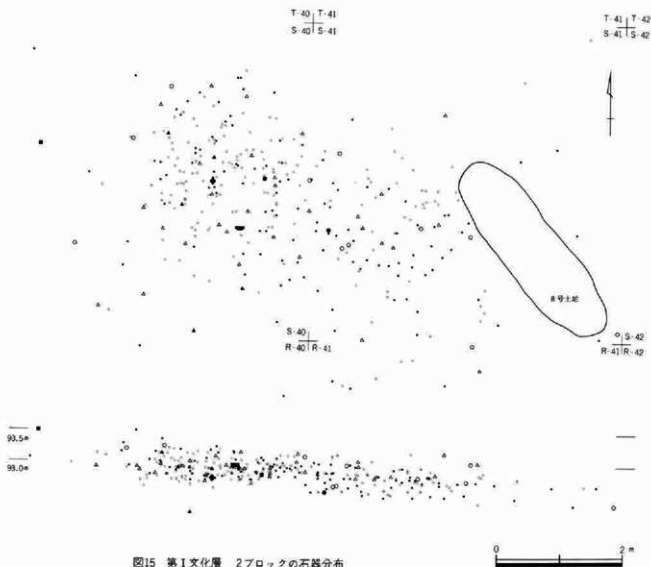


図15 第1文化層 2ブロックの石器分布

2ブロック(図15)

S-40・41Gに位置する。ブロックの西側を縄文期の土坑により覆われているが、現状で長径5.5m、短径3.6m程の不整形円形状に分布する。石器はIVb層からVb層にかけて、70cmの高低差をもって出土しているが、Va層中位に最も多く出土している。2・3種群と重複して分布している。

ブロックは総計338点の石器よりなり、彫器と彫器作出に伴う削片を主体に若干のナイフ形石器、削器からなる器種組成を示す。少なくとも23種類の母岩別資料によりなる。

石器の接合は21例が見られた。1ブロックと接合関係のある安山岩1を除いて基本的にはブロック内

での接合であるが、母岩別資料の分布はブロックが決して独立した存在でないことを示している。

本ブロックは見かけ上、2ヶ所の遺物集中部分からなる。このことは、ブロックが細分ないし重複している可能性を示すものと思われるが、黒色頁岩1がS-41Gに集中する程度で、いずれも明確なブロックを形成していない。現状でブロックが可視的分布を示す以上、あえて細分を行っていない。

本ブロックを構成する石器の器種組成及び石材の対応関係は石器1ブロックと類似した内容をもつものと思われる。すなわち、在地石材が一連の剥片剥離工程を示す一方で、搬入石材による石器素材の作出過程が欠如している点に注意される。

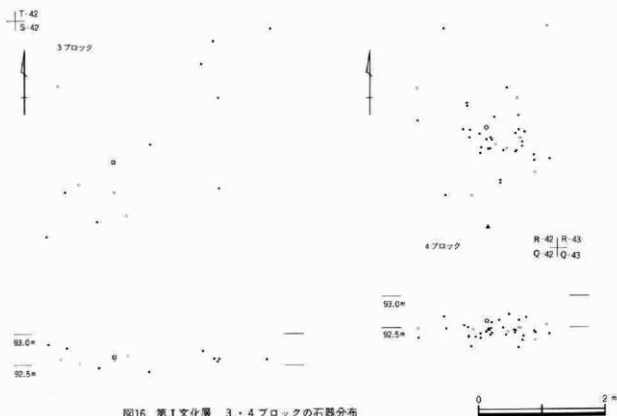


図16 第1文化層 3・4ブロックの石器分布

3ブロック(図16)

S-42Gに位置する。ブロックは直径5m、短径3m程の不整形形状に分布し、全体に散漫に分布する傾向が見られる。石器はIVb層からVb層にかけて60cm程の高低差をもって出土したが、Va層中位に最も多く出土している。4礫群と重複して分布している。

ブロックは統計24点の石器よりなり、揉籠器、目的的剥片各1点が出土している。他に剥片15、碎片7点が出土しているが、3～5ブロックを除く他のブロックと比較して異なる様相を呈している。構成する母岩別資料は9種類が認められた。

石器の接合は2例が見られ、いずれもブロック間(2+3、3+7ブロック)の接合である。これらは安山岩2、珩質凝灰岩に分類される資料で、同一の母岩を共有するブロックの同時性は言うまでもなく、これらのブロックが相互に補完的役割を担っていたものと思われる。

4ブロック(図16)

R-42Gに位置する。5・6・7ブロックと各々2～3mの距離を隔てて隣接している。ブロックは直径3.2m、短径2.2m程の不整形形状に分布する。全般に石器はIVb層からVb層にかけて、70cm程の高低差をもって出土している。5礫群と重複して分布している。

ブロックは統計45点の石器よりなり、彫器、目的的剥片が主な器種組成となっている。石器器種に見る様相は3・5ブロックの様相と近似する内容となっている。ブロックを構成する母岩別資料は13種類が認められ、安山岩2を除いた他はすべて資料1、2点からなる。

石器の接合は安山岩2がブロック内で接合するのみで、ブロック間の接合関係も見られない。

本ブロックは3・5ブロックと比較的類似する内容をもつが、遺物の分布状況は3・5ブロックが散漫に分布するのに対して、比較的集中する点でやや異なるものである。

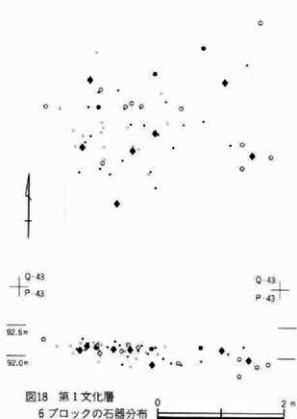


5ブロック(図17)

R-43・44Gに位置する。確認されたブロックの中で最も東側に位置する。ブロックは長径3.6m、短径2.4m程の不整形形状に分布し、全般に散漫に分布する傾向が認められる。石器はIV b層からV b層にかけて70cm程の高低差をもって出土しており、V a層中位に最も多く出土している。6礫群が重複して分布している。

ブロックは総計23点の石器よりなり、ナイフ形石器、彫器、目的的剥片が出土している。他に剥片、砕片が出土しており、このように少数の剥片、砕片と特定の石器から構成される傾向のあるブロックのあり方は3・4ブロックと共通し、他のブロックとは対照的なあり方を示すものとして理解される。ブロックを構成する母岩別資料は10種類が認められ、安山岩3、砂岩が若干多く見られる他はいずれも1、2点からなる。

石器の接合はいずれもブロック間(2・6・7ブロック)との接合である。



6ブロック(図18)

Q-43Gに位置する。ブロックは長径3m、短径2m程の不整形形状に分布する。石器はIV b層からV b層にかけて出土しているが、V a層中位に最も多く出土している。他の石器ブロックでは礫群と重複して分布するのに対して、6ブロックのみ礫群との重複は見られなかった。

ブロックは総計59点の石器よりなり、黒曜石製のナイフ形石器を主体とする。尖頭器1点が主な器種組成となる。同一の母岩別資料である黒色頁岩製の剥片、砕片が出土している。ブロックを構成する母岩別資料は7種類が認められる。

石器の接合は基本的にはブロック内で接合するが、1例R-44G単独出土のチャート製剥片との間に接合関係が認められる。

本ブロックは二創縁加工のナイフ形石器を主体とするもので、ブロックを構成する器種組成上、他のブロックとは異なる様相を示すものと扱えられる。

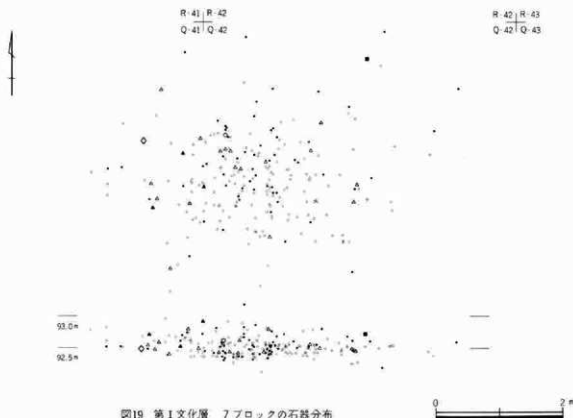


図19 第I文化層 7ブロックの石器分布

7ブロック(図19)

Q-41・42Gに位置する。7ヶ所の石器ブロックのうち最も両側に検出され、ブロックは長径3.5m、短径2.5m程の不整形形状に分布する。比較的集中度の高い分布状況を示す。石器はIVb層からVb層上位にかけて出土しているが、Va層中位に最も多く出土している。7礫群が重複して分布している。

ブロックは総計230点の石器よりなる。彫器と彫器作出に伴う削片を主体に若干の尖頭器、削器、目的的削片が器種組成として加わる。石器石材は多様性に富み、母岩別資料は20種類が確認されている。これらの母岩別資料の分布はチャートの分布を除いて集中して出土する傾向にある。1・2ブロックと母岩を共有するものが多いが、安山岩1の分布はわずかに2点が出土したのみである。出土した石器は特定石器と特定石器作出時に生じるであろう砕片が主体を占める。黒曜石15点、硬質頁岩3点の受熱削片が認められる。

石器の接合は7例が確認された。接合は基本的に

はブロック内の接合であるが、他のブロック、との接合も多く認められる。可視的区分が不可能であった珪質凝灰岩の接合が、1+7ブロック、3+7ブロック間に認められたのをはじめ、安山岩3が5+7ブロック間で接合する。また、接合はしていないが、7ブロックに出土した黒曜石3は2ブロックから出土した黒曜石製削片、6ブロックから出土した黒曜石製尖頭器と同一の母岩である。

本ブロックは構成する石器器種、母岩別資料のあり方等、1・2ブロックに類似する内容を示している。在地石材は顕著に認められず内容は不明であるが、搬入石材は1・2ブロック間に母岩を共有し、ブロック内での石器素材である削片作出工程の欠如が指摘される。さらに石器の接合例はブロック間にも認められ、こうしたブロックのあり方はブロックの性格を反映したものであると言える。

3-3 第1文化層の石器

尖頭器(図20)

4点が出土している。IVa層上面で採集された1点(2)の他、1・6・7の3ヶ所のブロックからの出土である。石器石材はヴァラエティーに富み、黒曜石2点、珪質凝灰岩1点、チャート1点で構成される。黒曜石の2点は母岩を遡るが、7ブロックから出土した多量の碎片は1(6ブロック出土)と同一の母岩である。

1は比較的小形の木葉形尖頭器である。断面形は概ね凸レンズ状を呈す。器体の最大厚は中央よりやや右側にあり、先端部はわずかにねじれる傾向にある。調整加工は丁寧で、器体の中央付近および裏面の左側縁に未加工部分を残す。いずれも押圧剥離手法によるものと思われ、器体先端部の作出にとりわけ製作者の意が注がれている。黒曜石製。6ブロック出土。同一の母岩より作出された他の石器は、ブロックに剥片1点、碎片2点が、7ブロックに碎片73点が認められる。出土資料から遺跡内で製作された他の石器を想定するには無理があり、7ブロックに出土した多量の碎片は尖頭器あるいは削片作出に伴うものと理解されるが、母岩別資料の分類からはどちらも特定することはできなかった。

2はIVa層上面での表採資料である。1とは母岩を遡え、器体の下半を欠損するが、調整加工のあり方は極めて類似するものと思われる。石器素材は横長の不定形削片を用い、剥離面を構成する剥離の方向は同一である。断面形は概ね凸レンズ状を呈す。調整加工は浅い平坦な剥離を呈する周縁加工に特徴づけられる。先端部はやや下方にねじれるが、表裏とも丁寧に調整加工が施されている。

3は珪質凝灰岩製の尖頭器である。調整加工は部分的に階段状の剥離が見られるが、全般に丁寧なものとなっている。断面形は概ね凸レンズ状を呈すが基部近くのやや左に寄った部分に石器の最大厚をもつ。石器の作出は先端から左側縁にむけて2条の種状剥離を施すことによって作出されている。先端に微細な刃こぼれが見られる。

4はチャート製の尖頭器である。石器形状は木葉形を呈するものである。断面形は台形状を呈している。調整加工は表面の周縁部のみ施されるもので、他のものとは様相を違えるが、こうしたあり方は彫器a類と相通じるもので、石器がこれらと同一の基盤に作出されたものであることを示している。

以上が出土した4点の尖頭器の概要である。これらは各々石器製作上の観点から2分して把えることができる。石器素材は目的的に量産されたものか必ずしも明らかでないが、1点を除いて石器の最大厚が中央から左右どちらかに片寄っていることからみて、いずれも横長の不定形削片が主体に用いられている。器体の整形はいずれも周辺加工が施され、削片の形状を良好に残すもの(4)も存在する。ナイフ形石器のそれとは明らかに異なる。このように共通する点が認められる一方で、さらに最も重要な機能部作出に丁寧な平坦剥離によって先端部のみパイフェイス状に仕上げるもの(1・2)と先端部から左側縁に向けて器体を斜めに載り切ように種状剥離を施すもの(3・4)とがある。いずれも石器製作上共通する要素が認められるが、ここに両者の決定的な相違を見ることができ、後者の尖頭器(3・4)は後述する彫器に共通する技術基盤により作出されたものとして把えることができる。

台形石器(図20-5, 6)

2点が出土している。いずれも幾何学的な形状を呈している。石器製作上の技術基盤となるプランティングは顕著に見られない点で躊躇される。

5は石器1ブロックから出土したもので「石刃」に近い縦長削片を素材とするものである。両端はいずれも削片の両端を折り取られ、右側縁および基部に微細な加工痕が認められる。刃部と見られる部分に連続する微細な使用痕が認められる。硬質頁岩製。

6はブロック外(V-38G)から出土したもので、他に同一の母岩は存在しない。両側縁部とも加工痕は認められず、折断面をそのまま残している。刃部とみられる部分に連続する微細な使用痕が認められる。チャート製。

3. 第I文化層の調査

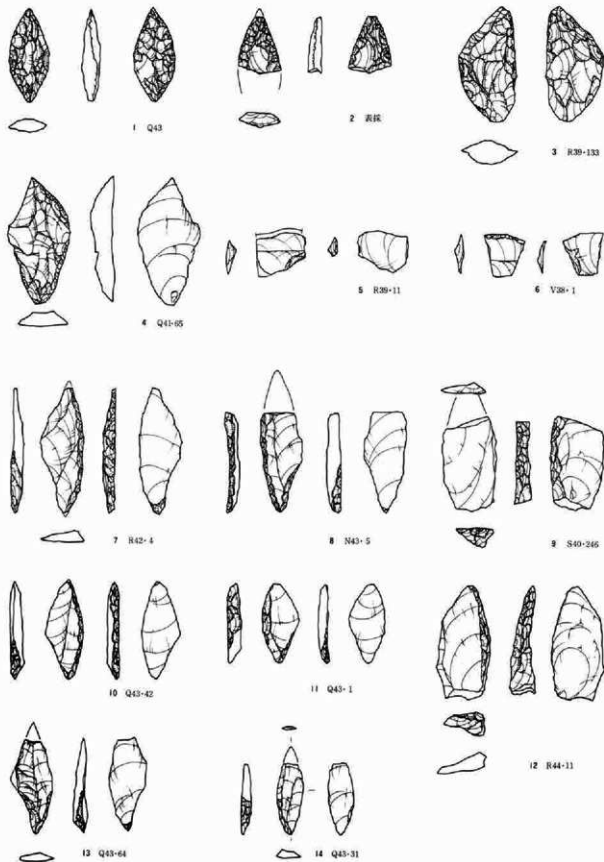


図20 第I文化層の石器(1)



II 先土器時代の遺物と遺物分布

ナイフ形石器(図20)

総計10点(うち、1点は基部破片、未掲載)が出土している。これらの石器の出土位置は礫群を伴わない石器6ブロックに7点が見られ、そのうち6点が搬入品で、極めて特徴のあるブロックと扱えられる。他に石器2・5ブロックから各1点が、ブロック外に1点が出土している。石器石材は黒色頁岩8点、安山岩2点である。

7は幅広い縦長剥片を素材とするもので、先端部をわずかに欠損する。左側縁の中央付近の欠損は調査時のものである。調整加工は丁寧で、刃部は器体の最大長の $\frac{1}{2}$ 程である。石器基部は調整加工により基部側の左側縁は内湾するものとなっており、全体の形状は左側にねじれている。石器素材の打面部と石器基部は一致する。黒色頁岩製、6ブロック出土。

8は比較的整った縦長剥片を素材とするものである。器体の上半を欠損し、全体の形状は不明であるが、出土した石器のうち最も大形なものと思われる。推定される最大長は6cmである。調整加工は丁寧で二側縁に施される。刃部は器体の最大長の $\frac{1}{2}$ より大である。石器基部は調整加工により突出気味で、基部側の右側縁は内湾している。裏面基部加工がわずかに施されている。石器素材の打面部と石器基部は一致する。黒色頁岩製。

9は打面調整の施された幅広い縦長剥片を素材とするものである。器体の上半を欠損し、全体の形状は不明であるが、器体の最大長は5.5cm程である。調整加工は丁寧で施されるが、打面部を除去することなく、石器表面から裏面にむけて一側縁に施されている。安山岩製。2ブロック出土。

10は比較的整った縦長の剥片を素材とするものである。比較的小形であるが、典型的なものとして扱えることができる。調整加工は丁寧で、二側縁に施される。刃部は器体の最大長 $\frac{1}{2}$ よりわずかに長い。石器基部は調整加工により突出気味で、基部側の左側縁はわずかに内湾している。裏面基部加工は見られず、石器基部は石器素材である剥片の先端部に一致する。黒色頁岩製。6ブロック出土。

11は比較的整った縦長剥片を素材とするものである。比較的小形であるが、典型的なものとして扱えることができる。調整加工は丁寧で、二側縁加工の7・8・10・13と同様なものとして扱えられるが、左側縁の基部側には調整加工は施されていない。刃部は器体の最大長の $\frac{1}{2}$ 程である。石器基部は直線的で、裏面基部加工は見られず、石器基部は石器素材である剥片の先端部に一致する。黒色頁岩製。6ブロック出土。

12は打面調整の施された縦長の剥片を素材とするものである。調整加工は丁寧で施されるが、この打面を除去することなく、石器の表裏両方向から一側縁に施されている。安山岩製。5ブロック出土。

13は幅広い縦長剥片を素材とするもので、先端部を欠損する。左側縁中央付近の欠損は調査時のものである。調整加工は丁寧で、二側縁に施される。刃部は器体の最大長の $\frac{1}{2}$ 程である。石器基部は調整加工により突出気味で、基部側の左側縁は内湾している。平坦な剝離による裏面基部加工がわずかに施れ、石器素材の打面部と石器基部は一致する。黒色頁岩製。6ブロック出土。

14は比較的小形の縦長剥片を素材とするもので、先端部を欠損する。調整加工は左側縁の基部に近い部分に施されている。裏面基部加工は見られない。石器素材の打面部と石器基部は一致する。黒色頁岩製。6ブロック出土。

図21-1は幅広い縦長剥片を素材とするものである。剥片の端部は「し」字状を呈し、両設する打面の一方をとりこんでしまっているものと思われる。調整加工は基部および先端部に施され、先端部の調整加工は粗く一部鋸歯状を呈している。こうした素材の用い方は一般的ではないと思われるが、肥厚した剥片端部を石器基部として利用したものと思われる。黒色頁岩製。6ブロック出土。

出土したナイフ形石器は形態的にヴァラエティーをもったもので、素材と調整加工に一定のあり方を認めることができる。

3. 第1文化層の調査

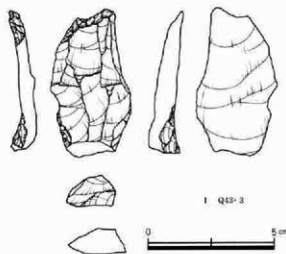


図21 第1文化層の石器(2)

彫器(図22-1~10, 図23-1~8)

総計19点が出土している。3・6ブロックを除いた各ブロックより出土しており、文化層を構成する石器群の中で主体となる石器器種である。ブロック毎に見ると各々個性的なあり方を示すと同時に、相互に密接にかかわるものと思われる。

1は打面調整のある縦長剥片を素材とする。調整加工は右側縁に平坦な剥離が施され、先端部から左側縁に向けて、種状剥離が施される。チャート製。1ブロック出土。

2は幅広い縦長剥片を素材とする。石器形状は五角形状を呈し、調整加工は先端部およびそれに対向する側縁に施され、さらに先端部から左側縁に向けて、種状剥離が施される。チャート製。5ブロック出土。

3は幅広い縦長剥片を素材とする。調整加工は側縁全体に及び、先端部に凹状の打面作出後、左側縁に向けて、種状剥離を施している。硬質頁岩製。2ブロック出土。

4は幅広い縦長剥片を素材とする。調整加工は石器の表面全面に及び、面的加工が施されている。機能部を先端部から左側縁に向けて、種状剥離を施すことにより作出し、その端部には、微細な調整剥離が見られる。珪質凝灰岩製。1ブロック出土。

5は比較的大形な削片の2次利用器種として作出

されたものである。機能部を先端部の打面作出後、右側縁に向けて作出している。珪質凝灰岩製。4ブロック出土。

6は幅広い縦長の剥片を素材とし、素材の打面は除去されている。先端部から左側縁に種状剥離2条を施すもので、その端部には微細な調整痕が見られる。チャート製。5ブロック出土。

7は横長の不定形剥片を素材とし、素材の打面は除去されている。先端部から左側縁に向けて種状剥離を施し、その端部には微細な調整痕が見られる。この種状剥離は先端部で打点部を中心にはじけた状態になっている。硬質頁岩製。1ブロック出土。

8は幅広い縦長剥片を素材とする。先端部から左側縁に種状剥離2条を施すものでその端部には微細な調整痕が見られる。硬質頁岩製。1ブロック出土。

9は幅広い縦長剥片を素材とする。調整加工は裏面側では平坦剥離が施され、打面部を除去する。機能部は両側縁部2ヶ所に作出され、左側縁に施された種状剥離端部には微細な調整痕が見られるのに対し、右側縁に作出された機能部にはこの微細な調整痕は見られない。安山岩製。1ブロック出土。

10は幅広い縦長剥片を素材とし、先端部から左側縁に向けて種状剥離を施すもので、その端部には微細な調整痕が施される。珪質凝灰岩製。1ブロック出土。

図23-1は比較的整った縦長剥片を素材とし3ヶ所に機能部をもつものである。機能部作出にあたっては特別に打面を作出することはない。チャート製。2ブロック出土。

2は比較的整った縦長剥片を素材とし、剥片端部に彫刻刀打面及び機能部を作出している。硬質頁岩製。2ブロック出土。

3は縦長剥片、横位折断面剥片を素材とする。剥片端部に彫刻刀打面および機能部を作出している。硬質頁岩製。2ブロック出土。

4は横位の折断面剥片を素材とし、この折断面を打面として機能部が作出されたものである。この折断面から石器表面及び彫刻刀面に微細な調整痕が施さ

II 先土器時代の遺物と遺物分布

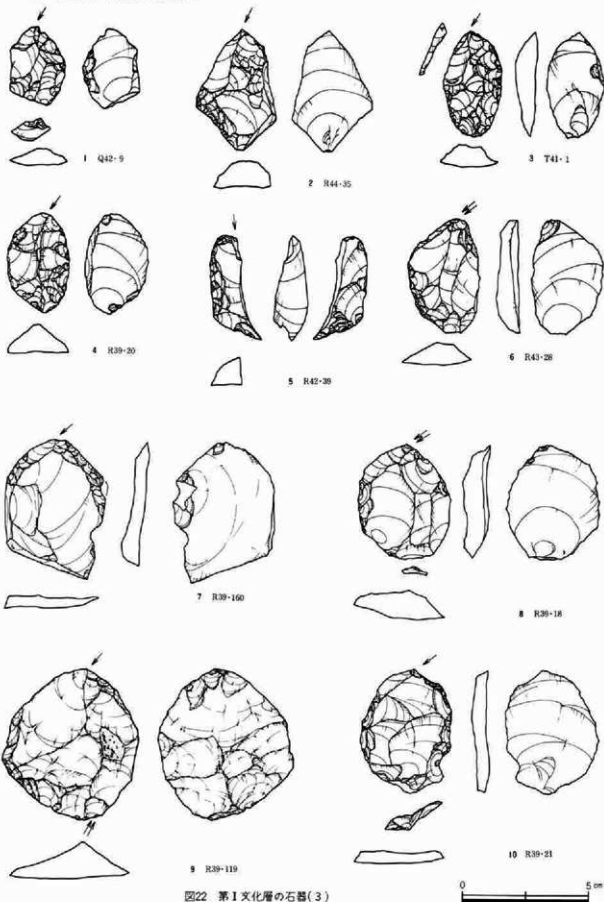


図22 第I文化層の石器(3)

3. 第1文化層の調査

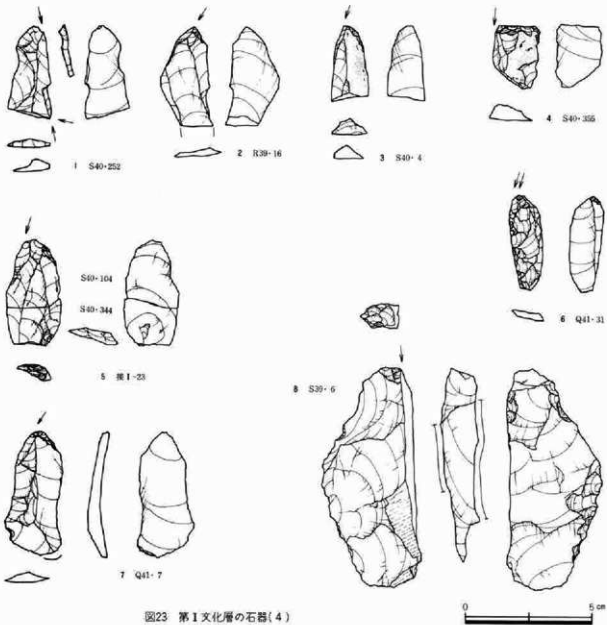


図23 第1文化層の石器(4)

れる。硬質頁岩製。2ブロック出土。

図23—5は調整打面をもつ縦長剥片を素材とする。剥片先端部に彫刻刀打面を作出後、先端部から左側縁に機能部が作出されている。ブロック内で器体中央部で折れた2点が接合。安山岩製。2ブロック出土。

6は比較的大形な削片の2次利用器種として作出されたものである。裏面先端部に微細な調整加工を施すことにより打面作出後、先端部から右側縁にむけて機能部を作出している。硬質頁岩製。7ブロック出土。

7は比較的整った縦長剥片を素材とし、剥片の打面部側に彫刻刀打面及び機能部を作出している。硬質頁岩製。7ブロック出土。

8は縦長の不定形削片を素材とし、剥片打面部を打面として機能部を作出している。機能部は幅広で両側縁とも微細な刃こぼれが見られる。剥片の主要剥離面側右側縁に調整加工が施される。石器群全体の製作意欲の強さからすれば、副次的に作出された削片形状を利用した可能性もあるが、機能部は明らかに最終的に作出されている。チャート製。1ブロック出土。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

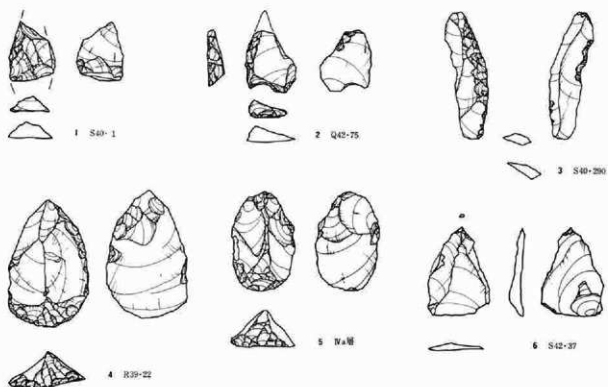


図24 第I文化層の石器(5)

検出された彫器は、全体に丸味をもった一群(図22-1~10)と細身の一群(図23-1~3・5・7)が認められ、彫器は石器形状の異なる2形態から構成されている。これらの彫器に見られる刃部角度は形態間で異なるものではなく、器体に施された調整加工も素材である剥片の周縁に施されるもので、形状を大きく変えるものではない。したがって、石器の形態差が機能差を示すとは言えず、後述する剥片剥離手法に起因する現象として捉えることが可能と思われる。一部に面的な調整加工の施されるものも見られるが、石器群の技術基盤からすれば、これもその中に消化してしまうものと言える。

その他の石器(図24-1~6)

挿器2点、削器3点、揉雑器1点の計6点が出土している。これらの中で、同一形態を示す挿器は大小の差こそあるが、同一の石器製作基盤上で作出されたもので、安定した器種として石器群組成するものと思われる。揉雑器も剥片形状を機能部にとり込

んだものであるが、該期石器群にあっては一般的である。一方、3点の削器は欠損のため不明な1点を除いて2点とも他の器種より再生されたものであり、そのあり方は石器群の周辺的なあり方を示しているものと思われる。

1は縦長の剥片を素材とするものである。上・下両端を欠損し、全体の形状は不明である。調整加工は左側縁に面的に施される。形状・調整加工は図22-4に類似するが、不明な点が多い。珪質凝灰岩製、2ブロック出土。

2は幅広い縦長剥片を素材とする凹刃削器である。器体上端を欠損する。器体折断後、微細な調整加工を施すことにより刃部を作出している。左側縁に見られる調整加工及び右側縁に見られる形状からナイフ形石器の再加工例と思われる。チャート製。7ブロック出土。

3は比較的大形な削片を2次利用した凹刃削器である。硬質頁岩製。2ブロック出土。

4は比較的大形の縦長剥片を素材とする典型的な

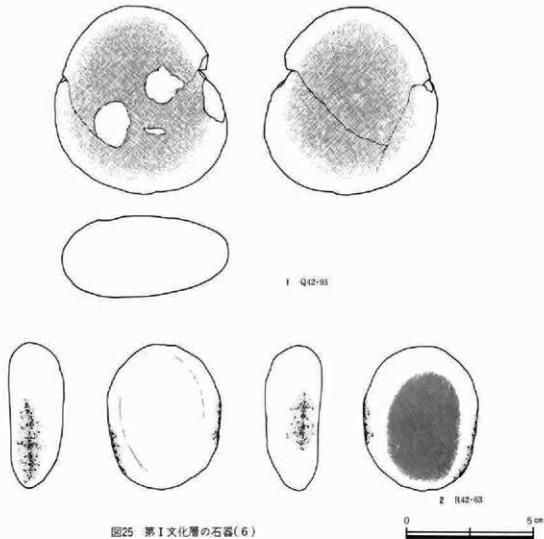


図25 第I文化層の石器(6)

撻器である。(器体の整形は右側縁を主体に施され、素材の打面は平坦な剝離により除去されている。)刃部の形状は弧状を呈す。刃部の作出は部分的に縦横状の剝離が見られ、微細な剝離により丁寧に作出されている。「傾斜角」はわずかに右傾する。珪質凝灰岩製。1ブロック出土。

5はブロック外の出土であるが、比較的小形である点を除いて4と同一の形態を示すものである。刃部の作出は微細な調整によるが、縦横状の剝離は見られない。「傾斜角」は左傾する。硬質頁岩製。

6は不定形な縦長の剥片を素材とする撻器である。機能部は剥片端部の形状をとり込んだもので微細な剝離により作出されている。硬質頁岩製。3ブロック出土。

磨石(図25-1・2)

2点が出土している。礫群から抽出されたものでいずれも赤化現象が見られる。

1は礫集中部より0.6m程離れて出土したもので礫重量1963.5gを測る巨大礫である。礫の表皮は火熱により部分的に剝落・ひび割れが生じている。礫の表裏とも磨面があることから、磨石として再利用されたものと思われる。輝石安山岩製。7礫群出土。

2は礫集中部より出土したもので、礫重量765.0gを測る個平礫である。礫表皮には赤化現象で認められる。礫の表裏とも磨減が著しく、側縁部には打痕を認めることができる。多目的に用いられたものと思われる。磨石として、再利用されたものである。輝石安山岩製。4礫群出土。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

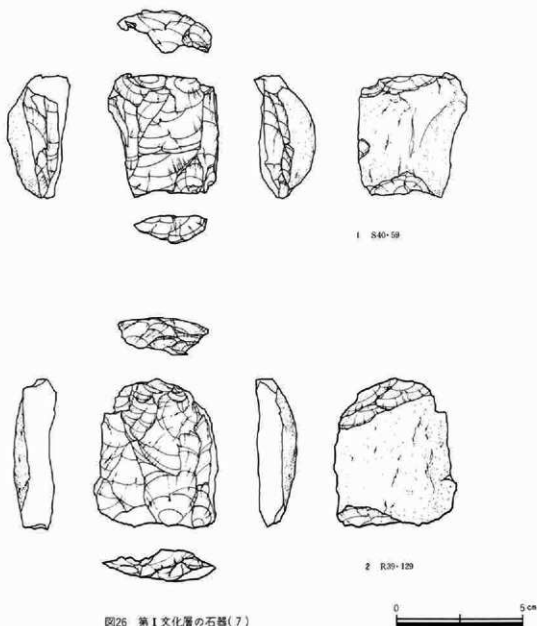


図26 第I文化層の石器(7)

石核(図26-1・2)

2点が出土している。出土した866点の石器は剥片剥離工程を復元するに十分な事例に乏しく、剥片剥離工程は必ずしも明らかにし得ていない。多様な石器石材が見られるなかにあつて各石材毎の剥片剥離工程は明らかでないが、安山岩について比較的良好な資料が認められ、明示することが可能な状態となっている。

1は比較的小形で、裏面に自然面を大きく残す石核である。打面は上・下両端に設定されている。上

端の打面にはわずかに打面調整が施されるが、下端の打面は未調整となっている。剥片剥離は上端から最終的に施され、下端からの剥離は左側縁に見られるのみである。石核の側縁調整は見られない。図示はしていないが、2枚の剥片が接合する。安山岩1製。2ブロック出土。

2は1と同様な石核形状を呈すが、わずかに大きい。剥片剥離は上端から最終的に施されるが、下端からの剥離も良好に観察される。図示していないが剥片2枚が接合する。安山岩1製。1ブロック出土。

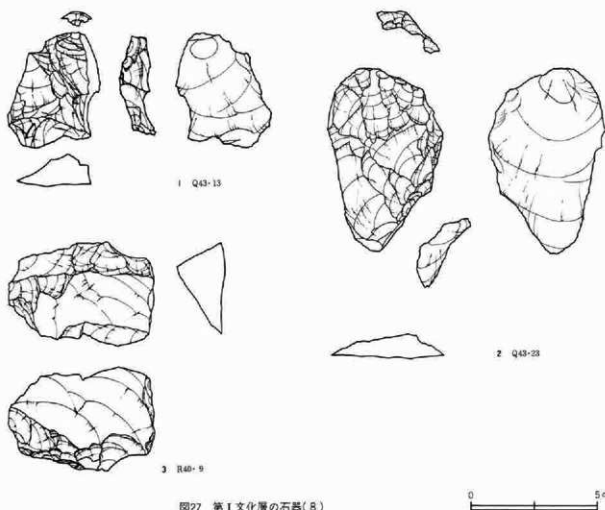


図27 第I文化層の石器(8)

2点とも同一の石核形状を呈し、同一の剥片剥離基盤上にあることは明らかである。いずれも下端の打面は線状となっており、上端の打面もわずかな平坦面であることから、石核の最終的な段階を示すものと思われる。

出土した2点の石核から想定される剥片剥離工程は2点の石核が同一の母岩であることから比較的大形原石を分割することにより開始されるものと思われる。若干の石核調整を経たのちに、両設の打面が設定され、剥片剥離が展開されたものと思われる。遺存する石核形状から想定される打面調整は必要に応じて行われた程度のものであり、調整として扱えられるものと思われる。

石核調整剥片(図27-1~3)

総計3点が出土している。素材剥片に見られる剥離面と90°異なる方向から剥離されている。出土した剥片は同一方向あるいは180°異なる方向から剥離されたものが圧倒的である。90°異なる剥離面を剥片にとりこむものはわずかで、常にこの種の剥片が存在するとは考えられず、剥片剥離の初期段階・石核調整時に作出するものと思われる。

1・2とも素材剥片に見られる剥離面と90°異なる方向から剥離されたもので、側縁に旧打面の一部が認められる。黒色頁岩製。

3は剥離面が不明確であるが、稜付きの剥片の可能性が高い。打面は剥片剥離にはじめてしまっている。安山岩1製。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

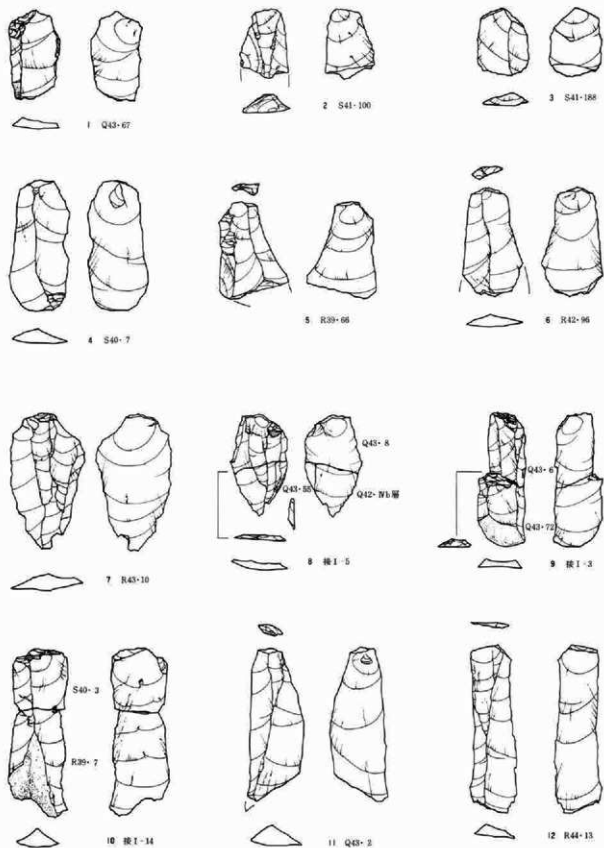


図28 第1文化層の石器(9)

3. 第I文化層の調査

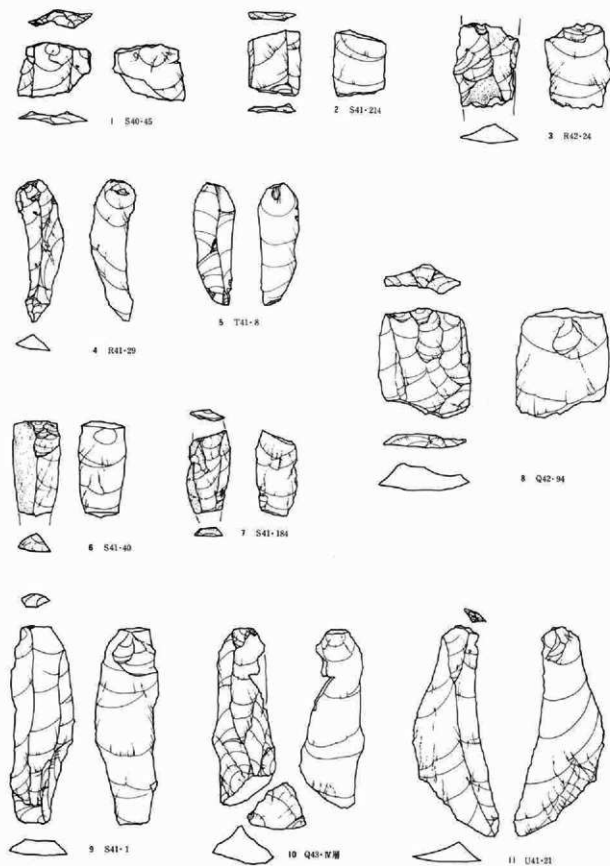


図29 第I文化層の石器(10)



II 先土器時代の遺物と遺物分布

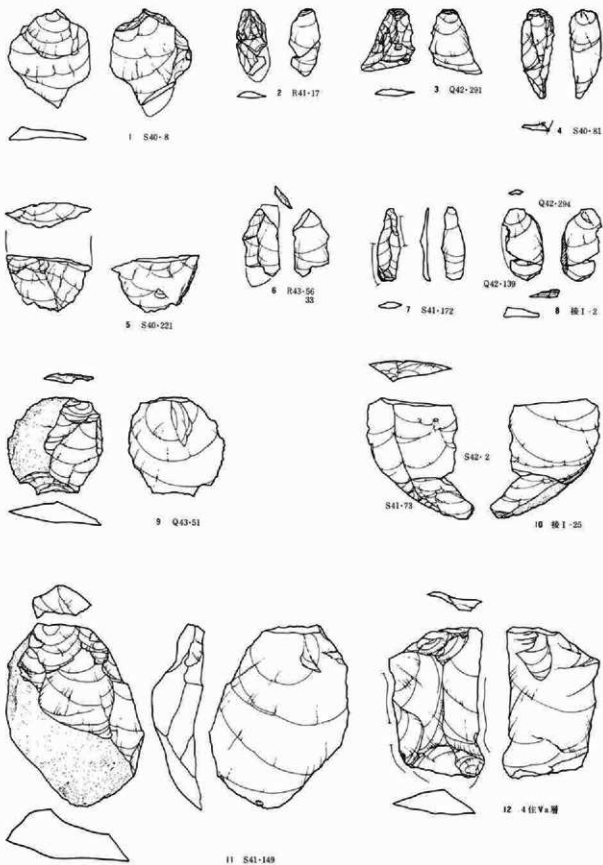


図30 第I文化層の石器(11)



剥片(図28~30)

総計866点の石器から構成される石器群に剥片は316点が出土しており、全体の36.7%を占めている。これらの中には様々なレベルの剥片が存在し、すべてについて説明することは困難である。とりわけ、一部の安山岩には不規則に割れる傾向が見られ、判然としない場合が多い。石器群を構成する主要な器種に用いられた剥片は剥片形状をあまり変えることなく用いられた「形状保持」的なものと「形状修正」的に用いられたものが認められ、2種類が存在したと思われる。これらの剥片が作出された剥片剥離工程については詳細に後述するが、一応同一の母岩から作出し得たと思われる。現状で石器製作者が目的とした石器素材(目的剥片)がどのようなものであったかを形状から画一的に扱うことは不可能である。目的とする剥片は最終的な機能形態である石器と合理的に整合性をもって存在したものであり、たとえばナイフ形石器の形態上の変化に見られるように漸時その関係は変動したものである。したがって、ある単一の石器群における目的剥片とは石器素材(製作意欲が強い石器群の主要な器種組成となる石器の素材)として用いられた剥片の形状を認識したうえで整合性をもって把握されなければならない。こうした前提を立てて剥片類の分析を行ったが、上述したように判然としないものも多く、石器群を説明するに十分な資料を提示し得ていないかもしれない。接合資料と合わせて石器群を構成する剥片にどのようなものがあつたかを認識すべきものと思われる。

図28・29は比較的形の整ったもので、両側縁の平行するものである。これらの中には、いわゆる「石刃」に近い形状を呈するものも認められる。素材に見られる剥離面は主要剥離面の方向と一致するものが多いが、90°異なる剥離面が認められるもの・両設打面の存在を示す180°異なる剥離面が認められるもの等が見られる。石器石材は安山岩・黒色頁岩が大半を占め、わずかに1点(図29-5)のみ硬質頁岩を素材としている。打面調整・頭部調整は認められるも

のと認められないものが存在し、ききに石核の項で述べたように、剥片剥離時に必要に応じてこれらの作業が行われたことを裏づけるものとなっている。これらの中には、明らかに折断されていると思われるものが存在している。作出された剥片は3~8cmのものが多く見られた。

図30-1・5・8~11は幅広の縦長剥片である。剥片の形状はヴァラエティーに富み、表皮が多く残るところから剥片剥離の初期段階に作出されたものと思われる。概して、石核の調整に主眼が置かれるが、稀に比較的形の整った剥片を石器素材として用いている。石器石材は安山岩・黒色頁岩である。

2~4、6~8は小形の縦長剥片である。石器の細部加工時に生じる3を除いて、いずれも剥片剥離時に生じる剥片である。3は剥片端部に、7は剥片側縁部に微細な刃こぼれが認められる。石器石材は安山岩のほか、硬質頁岩、珪質凝灰岩である。

削片A(図31-1~28)

総計66点が出土している。出土した削片の形状・剥離面の状況はヴァラエティーに富むが、いくつかに分類することができる。削片は尖頭器及び彫器と相互に補完する関係にあるが、一部十分に理解し得ないものも存在する。削片は典型的には彫刻刀面作出時に生成されるもので、石器素材を斜めに切り切るように剥離されたものである。石器石材は珪質凝灰岩、硬質頁岩、安山岩が多く見られるほかわずかに、珪質頁岩、黒曜石が存在する。これらは1・2・7ブロックから出土したものがほとんどである。

1~4、23~26の8点は石器表裏のいずれか一部に連続的に(「ブランティング」状の)微細な調整加工を施すものである。この微細な調整加工は最終剥離面である種状剥離面に施されるのが一般的であるが、1・24は素材表面側に施される。この種の剥片は断面形が平行四辺形状を呈するものがほとんどで第2回以降の種状剥離によって作出されたものと思われる。8は削片としての性状は備えているが他の

II 先土器時代の遺物と遺物分布

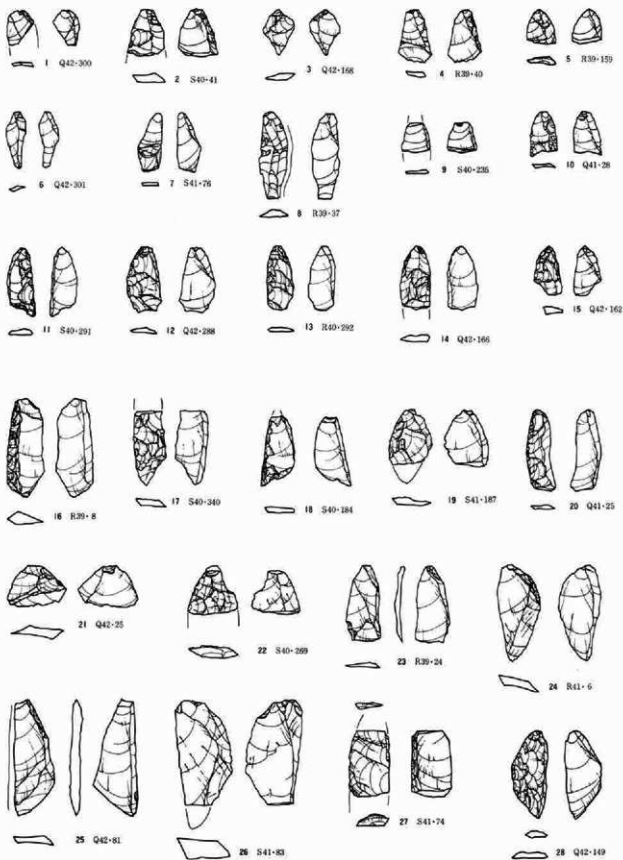


図31 第1文化層の石器(12)



多くに見られる調整加工が施されていない。機能形態を決定する最終的な段階で作出される削片はおおまかな形状が調整加工により限定されることが一般的であり、この種の削片も存在するか否か不明である。21は横長の不定形なもので、削片としての性状は備えているものの、「細部加工削片」として把えるべきかもしれない。

11～15・7・19・22・27・28の10点は平坦剥離により面的加工を施されたものである。上半を欠損する17、下半を欠損する22、上下両端を欠損する27の他は完形である。

16・18・20の3点は、平坦剥離による調整加工が施されるが、その加工は素材の周縁に限られるものである。

削片B(図32-1～3)

総計3点が出土している。削片Bは彫刻刀面作出に伴って生成するものと思われるが、石器素材に対してはほぼ直角に剥離されている点で削片Aとは異なる。出土した3点の削片はいずれも側縁に調整加工が施され、出土した形態から想定される削片の形状に対して、それを上回る削片のヴァリエーションが存在する。

1は左側縁に微細な調整加工が施されるものである。削片は石器素材に対して、わずかに内側に入り込むが、ほぼ直角に剥離されている。点状の打面が認められる。チャート製。2ブロック出土。

2は左側縁に微細な調整加工が施されるものである。削片は石器素材に対してほぼ直角に剥離されている。点状の打面が認められる。硬質頁岩製。2ブロック出土。

3は表裏とも調整加工が施されるものである。削片は石器素材に対してほぼ直角に剥離され、「ファースト・スボール」に類似する形態を示す。打面を欠損する。珪質頁岩製。2ブロック出土。

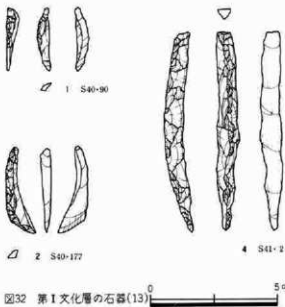


図32 第I文化層の石器(13)

3-4 第I文化層の接合資料

出土した861点の中で、45例120点の接合関係が認められた。いずれも4・5点の接合例が多く、体系的に削片剥離工程の復元を可能にする事例は得られなかった。搬入石材に細部加工削片等の接合例が、また在地石材にわずかながら削片剥離工程を窺うことのできる接合例が見られる。

接合資料1-31(図33)

石器2+5ブロック間で接合する。作出された削片は側縁に自然面を大きく残し、断面形が楔状を呈す。削片剥離作業は同一の方向から行なわれる。打面調整が顕著に認められ、3枚の削片の作出時における打面の高さはすべて異なっている。接合資料の示す作業段階は「目的削片」の剥離段階に相当するものと思われる。側縁に打痕が認められ、本来は1枚の削片であると思われる。

接合資料と同一の母岩から2点のナイフ形石器が作出されている。ナイフ形石器はいずれも削片の側縁にプランティングが施されたもので断面形は同様に「楔状」を呈している。接合した3枚の削片は側縁に自然面を取り込むことで、ナイフ形石器と同様の機能を果たしたものと考えられる。楔状を呈す削片形状を作出する意図が反映された接合資料

II 先土器時代の遺物と遺物分布

は、より高次化した剥片剥離体系の中に位置付けられると思われる。安山岩 1 製。

接合資料 I-13(図33)

石器 6 ブロック内で接合する。剥片の表面に自然面を残している。剥片剥離作業は同一方向から行なわれるが、素材の剥離面に 90°異なる剥離面が見られる。打面調整が施され、打点の高さも一定で定形的な剥片が作出される。接合資料の示す作業段階は石核調整を経た後の目的剥片剥離の初期段階の状況を示すものと思われる。黒色頁岩 3 製。

接合資料 I-19(図34)

石器 2 + 3 ブロック間で接合する。作出された剥片は一部に自然面を残す。剥片は分割され不明であるが、同一の打面から剥離されたものと思われる。未調整打面・作業段階の初期様相を示すと思われるが目的とする剥片を作出する意図は十分に窺え、石核調整を顕著に伴うものではない 3。安山岩 3 製。

接合資料 I-18(図34)

石器 5 + 7 ブロック間で接合する。作出された剥片の一部に自然面を残す。いずれの剥片も節理面を打面としており、同一の方向から剥離されているが、素材を形成する剥離面は異なる方向から剥離されている。剥片剥離作業の初期の様相を占めると思われる。安山岩 4 製。

接合資料 I-11(図34)

石器 5 + 7 ブロック間で接合する。作出された剥片は幅広く、下端に設定された打面の観察から 5 枚以上の剥片が剥離され、剥片剥離作業面が中膨みになった段階で、上端の打面へ剥離作業を移行している。頭部調整は見られないが、若干の打面調整が施される。剥片剥離作業がかなりの度合で進行した段階のものと思われ、方形状の石核が想定される。安山岩 3 製。

接合資料 I-33(図35)

石器 2 ブロック内で接合する。作出された剥片は自然面を大きく残すものが多く、不定形である。剥片は横位に折断されたものや、剥離時に縦位に分割してしまったものが見られる。頭部調整および打面

調整は施されない。

接合資料 I-22(図36)

石器 1 + 2 ブロック間で接合する。作出された剥片は自然面を大きく残すものが多く、不定形である。打面調整は施されない。剥片剥離作業は一定方向から行なわれるが、目的剥片を作出している様相は認められない。作業段階の初期様相を示すと思われる。安山岩 1 製。

接合資料 I-34(図36)

石器 2 ブロック内の接合である。作出された剥片は自然面を大きく残す。剥片の形状は幅広く、不定形である。打面は未調整な打面である。目的剥片を作出する意図は窺われず、剥片剥離作業の初期の様相を示すと思われる。黒色頁岩 1 製。

接合資料 I-21(図37)

石器 4 ブロック内で接合する。作出された剥片はいずれも自然面を多く残し、不定形である。打面は未調整なものが多いが、若干の打面調整が施されるものも認められる。剥片剥離作業の初期の様相を示すと思われる。安山岩 2 製。

接合資料 I-40(図38)

石器 4 ブロック内で接合する。作出された剥片は自然面を多く残し、不定形なものが多い。打面は未調整であるが、打面の再生が顕著に認められる。剥片剥離の初期の様相を示すと思われる。安山岩 2 製。

接合資料 I-21・40 は同一の母岩であり、同一ブロックから出土したものである。石器群の中に、同一母岩を石器素材とする資料は見られない。石材は粗粒であり、作出される石器器種は限定されると思われ、代表的なものとして「石斧」等をあげることができる。しかし、接合した剥片はもとより、同一の母岩と考えられる剥片には石斧作出時に伴う形状を示すものは出土していない。現状では、これらを明確に位置付けることは困難である。

3. 第I文化層の調査

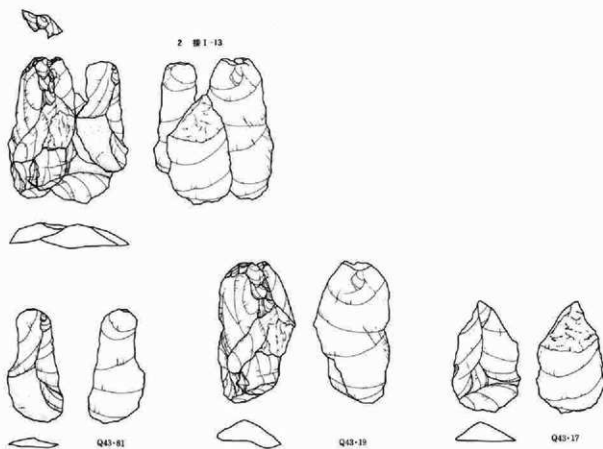
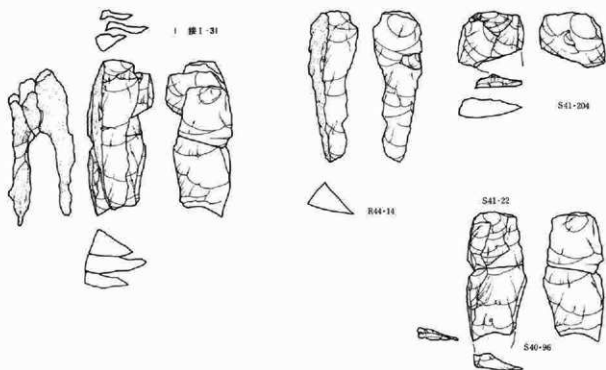


図33 第I文化層の接合資料(1)



II 先土器時代の遺物と遺物分布

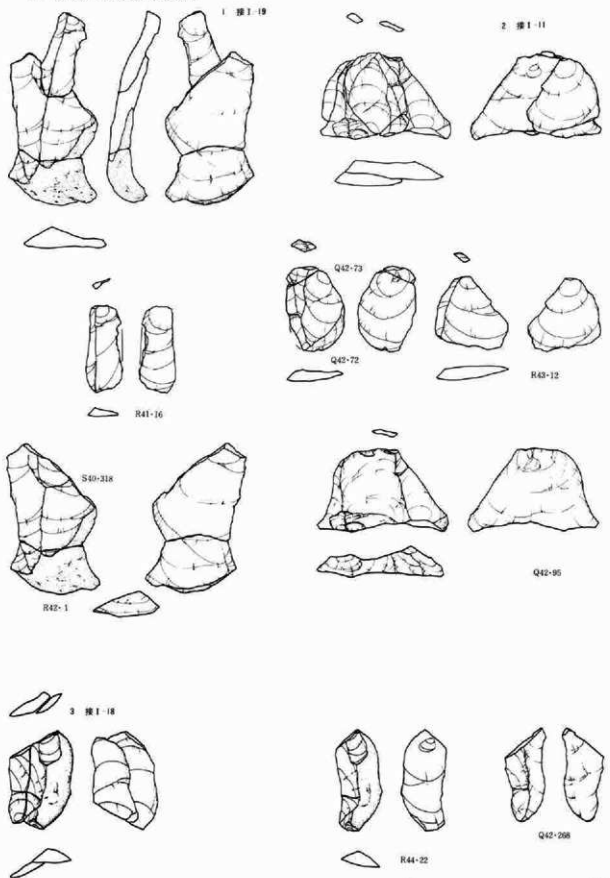


図34 第I文化層の接合資料(2)

3. 第I文化層の調査

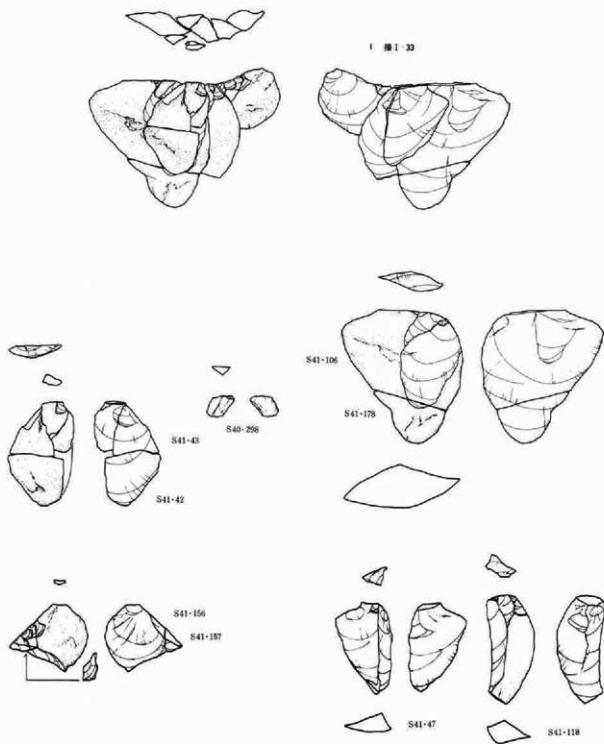


図35 第I文化層の接合資料(3)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

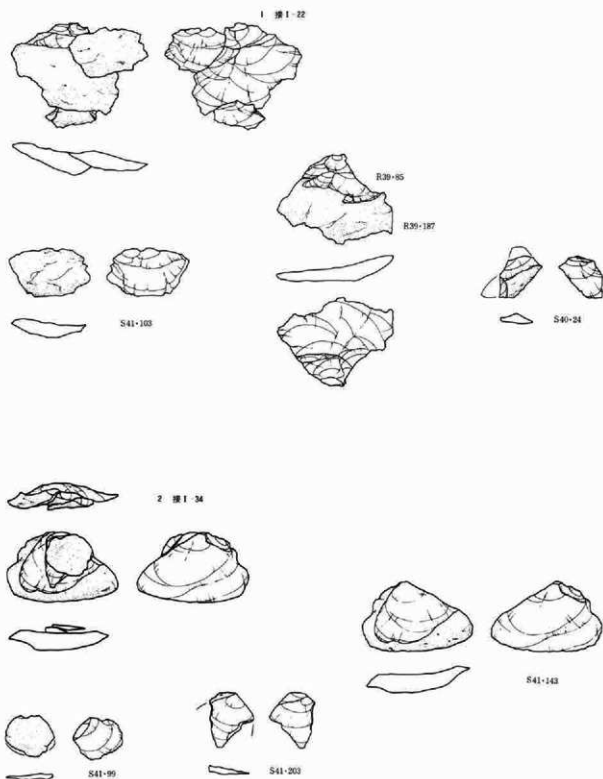


図36 第I文化層の接合資料(4)

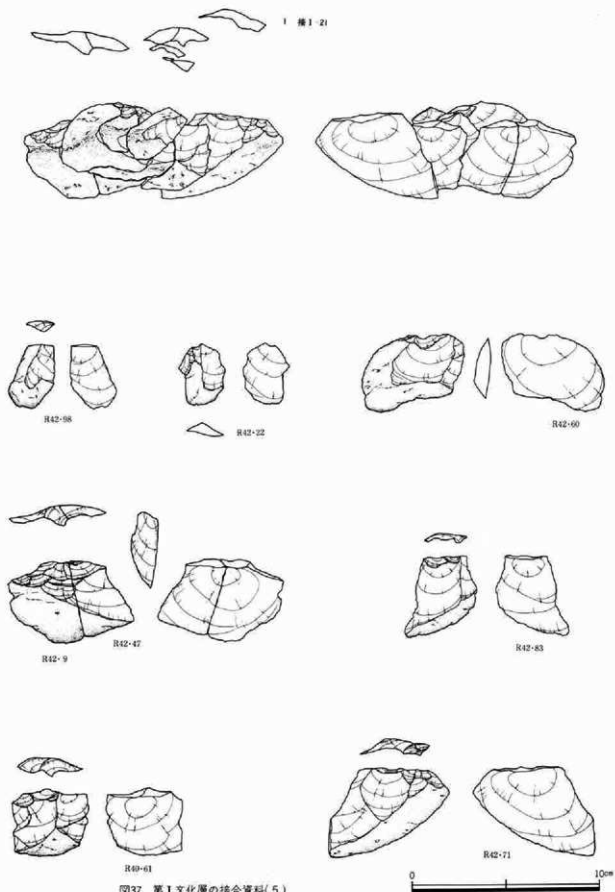


図37 第1文化層の接合資料(5)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

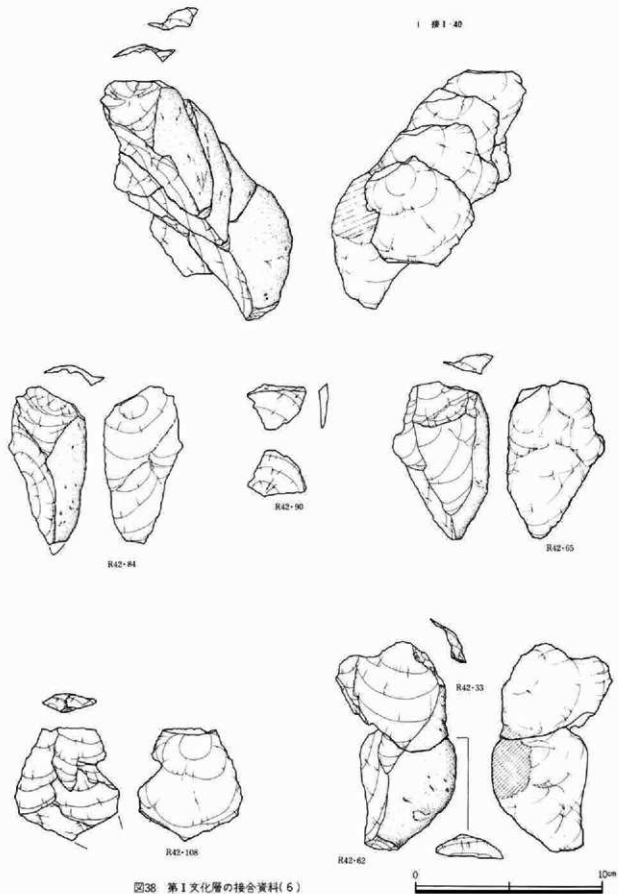


図38 第1文化層の接合資料(6)

3. 第1文化層の調査

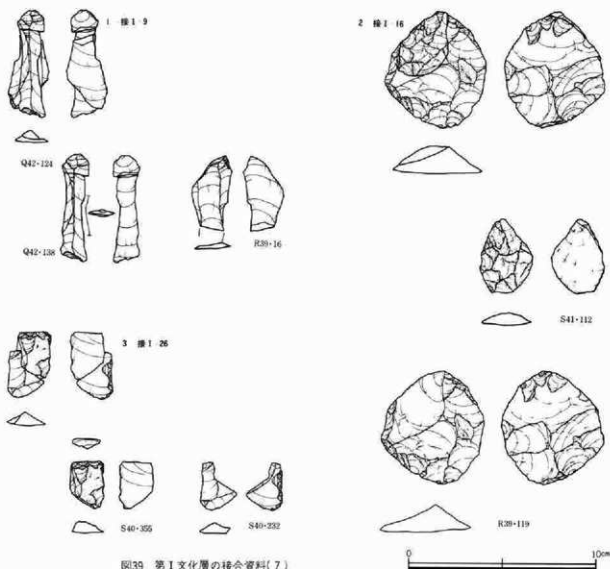


図39 第1文化層の接合資料(7)

接合資料1-9(図39)

目的製削片1点と影器1点の総計3点からなる接合例である。接合資料と同一の母岩別資料は安定した出土状況を示すが、石核の出土はない。削片は一定の方向から剥離されている。いずれの削片も上半を折り取られて用いられている。石器1+7ブロック間での接合例。珪質凝灰岩製。

接合資料1-26(図39)

影器1点と削片1点の総計2点からなる接合例である。接合資料と同一の母岩別資料は安定した出土状況を示すが、石核の出土はない。S40・355はⅦ層出土で73cmのレベル差をもって、出土したものである。S40・232は頭部を欠損し、裏面・右側縁に細部

加工が施されるが、これが削片の2次利用を示すものかあるいは影器自体が削片の2次利用を示すものか明らかでない。石器2ブロック内での接合例。硬質頁岩2製。

接合資料1-16(図39)

影器1点と削片1点の総計2点からなる接合例である。接合資料と同一の母岩別資料は安定した出土状況を示し、削片剥離工程の一部を明らかにし得る状況にある2点が接合した状態から影器刀面作出にあたって、特別な打面は作出されていない。石器素材は一部に自然面を残す幅広い削片であり、削片剥離の初期段階に作出されたものと思われる。石器1+2ブロック間での接合例。安山岩1製。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

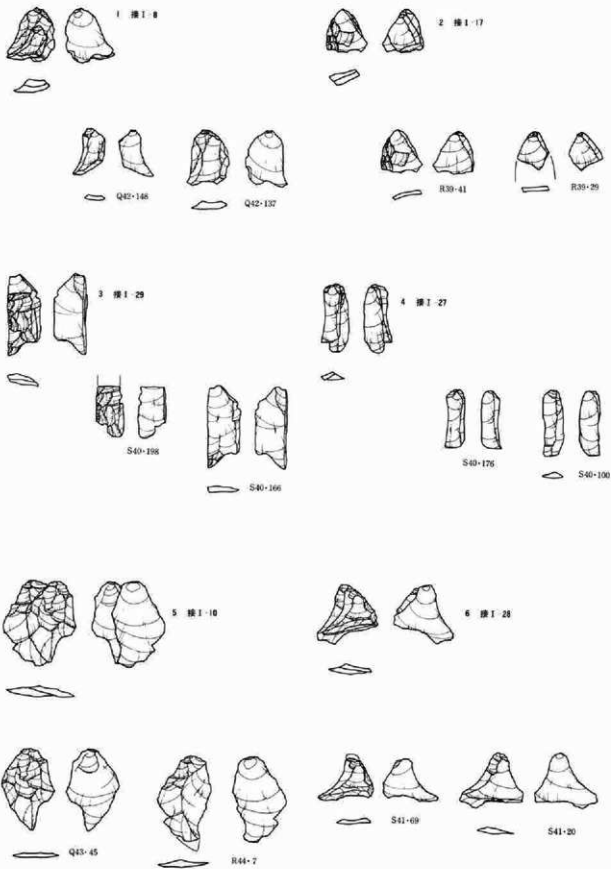


図40 第I文化層の接合資料(8)



3. 第I文化層の調査

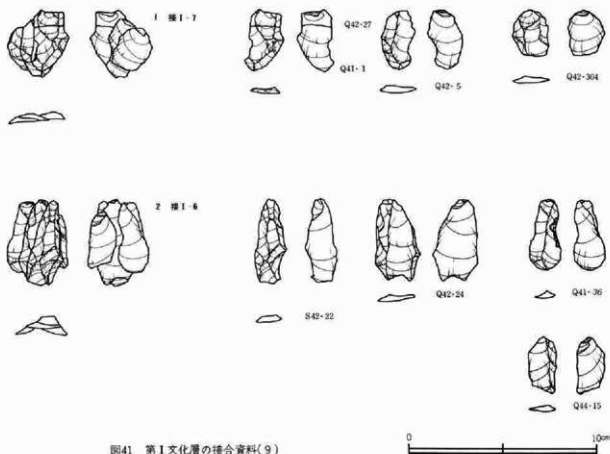


図41 第I文化層の接合資料(9)

接合資料1-8(図40)

石器作出過程における素材の細部調整段階に見られるもの。剥片の断面形は大きく内側に入り込む。7ブロック内で接合。硬質頁岩1製。

接合資料1-17(図40)

2点とも「削片」として把握されるものである。彫刻刀面作出により生じたものと思われる。石器1ブロック内で接合。

接合資料1-29(図40)

2点とも「削片」として把握されるものである。S40-198は上半を欠損。彫刻刀面作出より生じたもの。石器2ブロック内で接合。硬質頁岩2製。

接合資料1-27(図40)

ともに「削片」とすることのできる性状を備えている。剥片に見られる特徴から第2・3回目の彫刻刀面作出時に作出されたものと思われる。石器2ブロック内で接合。珪質凝灰岩製。

接合資料1-10(図40)

剥片剥離過程における素材作出時段階のものと思われる。剥片はともに縦長小形の剥片である。石器5+6ブロック間で接合。チャート5製。

接合資料1-28(図40)

接合資料1-8同様、石器の細部調整段階に見られるもの。剥片の形状は扇状を呈し、剥片端部に使用痕が見られる。石器2ブロック内で接合。硬質頁岩2製。

接合資料1-7(図41)

剥片は小形で不定形である。いずれの打面もはじめて不明な点が多いが、剥片の形状により石器作出における細部調整段階に見られるものかもしれない。7ブロック内で接合。珪質凝灰岩製。

接合資料1-6(図41)

剥片はいずれも細部調整時に作出されるものと思われるが、Q41-36「削片」と同様の状況を呈しているが、必ずしも明らかにし得なかった。石器3・7ブロック内で接合。珪質頁岩製。

3-5 母岩別資料の分布

第I文化層を構成する石器群は総数866点の石器よりなり、7ヶ所の石器ブロックを形成することが理解された。これらの石器ブロックは一部さらに細分して考えることも可能であるが、ブロックが可視的な集中として存在する以上敢えて細分を行なわなかった。石器組成は豊富で石器石材も多様に富み検出された石器群は、40種類の母岩別資料よりなることが抽出された。出土した石器は全般的な傾向として安山岩等の在地石材と黒曜石等の搬入石材とに大別される。前者が遺跡内で一連の剥片剥離工程が展開されているのに対し、後者は定形石器そのものの搬入に見られるように素材である剥片の剥離工程が欠如しており、出土した破片の形状から石器作出過程(調整加工時)に関わる様相を示すものが多く存在している。

現在、母岩別資料の分析は遺跡の構造的把握にとって必要不可欠なものとなっており、同時に、石器の同時性を明示する最大の指標となるものである。こうした観点から、ここでは破片にいたるまでできるかぎりの分類を行なっている。しかし、一部には分類の困難な場合が多く、とりわけ破片に至っては除外していることが多い。こうした諸々の制約条件を前提としてはいるが、抽出された石器群はブロックを構成する石器組成や石器石材が比較的明確に把握されたこと、さらに面的調査が可能であったため単位的な石器群が抽出されたこと等々により、比較的良好に母岩別資料の分類を行なうことができた。

安山岩1の分布(付図4) 出土した石器製作上の基盤となった剥片剥離工程を復元することの可能な唯一の資料である。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、5ヶ所の石器ブロックに分布している。総計221点が出土しており、全体の25.6%を占める。各ブロック毎に安山岩1の占める割合は1ブロックで総計129点中23点、2ブロックで338点中175点、3ブロックで24点中7点、5ブロックで23点中2点、7

ブロックで230点中2点で、ブロック外に4点が出土し、圧倒的に1・2ブロックに集中している。安山岩の1を素材としてナイフ形石器2点、彫器1点が主な器種として作出されている。各ブロック毎の器種組成は豊富な器種で組成する1・2ブロックを除いて少量の剥片・破片から組成するブロックが多い。5ブロックに出土したナイフ形石器は破片とともに出土したもので、通例に従えば製品の「搬入」として扱えられる。1・2ブロックと5ブロックは石器製作空間と使用空間の関係にあると思われる。

安山岩2の分布(付図4) 総計36点が出土している。これらは4ブロック(R-42G)に集中して出土しており、他のブロックには分布が見られない。極めて完結的なあり方を示している。4ブロックに重複する5遺群が他の遺群と接合関係のほとんど見られないことと何らかの関係を示すものと思われる。母岩別資料の内訳は剥片29点、破片7点である。明らかに石器製作上の規範にのっとって剥片剥離作業が行われているにもかかわらず、安山岩2を素材として作出された石器器種は出土していない。接合例は2例15点を確認している。

安山岩3の分布(付図4) 総計32点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、6ヶ所の石器ブロックに分布している。各ブロック毎に安山岩3の占める割合は1ブロックでは総計129点中1点、2ブロックでは338点中5点、3ブロックでは24点中2点、4ブロックでは47点中1点、5ブロックでは23点中5ブロック、7ブロックでは230点中17点で、ブロック外に1点が出土している。安山岩3を素材として、遺跡内で剥片剥離が行なわれたものと思われ、目的剥片5点が出土している。定形的な石器器種は出土していない。接合例は5例16点が確認され、基本的にはブロック内で接合するが2+3、5+7ブロック間で接合関係が認められている。**その他の安山岩(付図4)** 総計12点が出土している。これらの中には接合関係のある明らかに同一の母岩が存在する。いずれも遺跡内で剥片剥離を行った痕跡は認められないが、形状の整わない例も多く

全てを搬入品として理解することもできない。1点のみブロック外に出土したほか、4ヶ所の石器ブロックに分布している。

黒色頁岩1の分布(付図5) 総計24点が出土している。S-40・41Gに検出された石器2ブロックに集中して出土している。黒色頁岩1を素材として作出された定形石器は見られず、目的制片1点、制片18点、砕片5点からなる。ブロック外から出出した2点(目的制片1点を含む)は通例のように、「搬出」として扱えることはできず、その性格は明らかでない。接合例は2例11点を確認しているが、いずれもブロック内での接合である。

黒色頁岩2の分布(付図5) 総計8点が出土している。R-39Gに検出された石器1ブロックに集中して出出したほか、S-41・Q-42Gに各1点が出土している。黒色頁岩2を素材として作出された定形石器は見られず、制片7点、砕片1点からなる。ブロック外から出出した2点についてはその性格を明らかにし得なかった。接合例は見られない。

黒色頁岩3の分布 総計56点が出土している。Q-43Gに検出された石器6ブロックに集中して出出したほか、Q-42・R-43・S-40Gに出土している。黒色頁岩3を素材として遺跡内で制片12点、調整制片3点、制片22点、砕片18点が出土している。石核は出していない。6ブロックから出出した48点(目的制片3点を含む)は通例「ブロック外搬出」として扱えられるものであるが、その性格は明らかでない。接合例は3例8点を確認しているが、いずれもブロック内での接合である。

黒色頁岩4の分布(付図5) 総計2点が出土している。R-43・44Gに検出された石器5ブロックに出土している。いずれもいわゆる「目的制片」であり、単独出土に近い状況を示す。搬入されたものである可能性が高い。接合例は認められない。

その他の黒色頁岩(付図5) 総計8点が出土している。これらは同一の母岩を素材とするものも認められる定形石器(ナイフ形石器)であり、遺跡内で製作

されたものとは思われない。他遺跡(他地点)からの搬入品である。Q-43Gに検出された石器6ブロックに集中して出土しているが、他に、N-43Gに1点出している。

黒曜石1の分布(付図6) R-42Gからの単独出出である。制片の両端を折断したかのような形状を呈す。半透明で、縞状の模様が入り明らかに他と異なるが、出土石器が単独に機能するものではなく、混入である可能性もある。

黒曜石2の分布 石器2ブロック(S-41G)に分布する。制片1点、砕片2点からなり、1点は受熱制片である。黒味が強いもので他とは明らかに異なるが、その性格等明らかにし得なかった。

黒曜石3の分布 総計77点が出土している。7ブロック(Q-42G)に集中して出出した。ほかにR-39・S-41Gに3点(削片1点、制片2点)が出土している。尖頭器1点、削片1点、砕片75点からなり、尖頭器は6ブロック(Q-43G)からナイフ形石器とともに出出したもので明らかに「搬入品」と扱えられるものである。したがって、多量の砕片が出出した7ブロックが尖頭器(6ブロック)あるいは削片(2ブロック)の作出に関わる場所であると言えるが、砕片(7ブロック)が生じた背景については尖頭器・削片いずれの作出にともなうのか特定することはできなかった。

硬質頁岩1の分布(付図7) 総計53点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、3ヶ所の石器ブロックに多く分布している。各ブロック毎に硬質頁岩の占める割合は、1ブロックで総計129点中9点、2ブロックで338点中20点、3ブロックで24点中2点、4ブロックで47点中1点、7ブロックで230点中20点、ブロック外に1点が出土している。硬質頁岩1を素材として形器を主体に作出されたと思われる。ブロック毎に見られる組成は形器と形器作出に伴うと考えられる削片が主体で1ブロックがやや豊富な器種から組成するが、各ブロックと

II 先土器時代の遺物と遺物分布

も比較的均質な組成を示している。7ブロックに受熱剥片7点が見られる。接合例は2例4点が認められるが、いずれもブロック内の接合である。

硬質頁岩2の分布(付図8) 総計31点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、3ヶ所の石器ブロックに分布している。各ブロック毎に硬質頁岩2の占める割合は1ブロックで総計129点中4点、2ブロックで338点中22点、7ブロックで230点中1点である。硬質頁岩2を素材として彫器を主体に作出されたと思われる。ブロック毎に見られる組成は彫器作出に伴う削片と若干の剥片、砕片からなる。削片と対応関係にあると考えられる彫器は各ブロックとも出土していない。石器1・2・7ブロックは類似する内容をもつものと言えるが、ここでは7ブロックからの出土が1点であり、不明である。少なくとも1・2ブロックについては比較的均質な内容を示している。接合例はいずれも2ブロック内での接合で、2例4点が認められる。

珪質凝灰岩1の分布(付図8) 総計24点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、2ヶ所の石器ブロックに集中して分布するほか、R-40~42Gに数点が出土している。各グリッド毎に珪質凝灰岩1の占める割合は1ブロックで総計129点中7点、2ブロックで338点中13点、4ブロックで47点中2点、7ブロックで230点中1点で、ブロック外に1点が出土している。珪質凝灰岩1を素材として尖頭器1点、彫器3点が主な器種として作出されている。各ブロック毎の器種組成は、7ブロックを除いて比較的均質で、1・2ブロックとも彫器と彫器作出に伴う削片と若干の砕削片等からなっている。4ブロックに出土した彫器および削片は通例に従えば、「ブロック外搬出」と言うことになるか。接合例は認められない。

その他の珪質凝灰岩(付図8) 特徴的な珪質凝灰岩1(24点)を除いたほかは母岩別に分けることが困難であった。出土石器に表われた微妙な岩相の特徴により分類を試みたが、明確に集中する傾向も窺えず、

付図8のような分布状況を示すに留まるものであった。こうした状況が石器ブロックの遺存した背景となることも十分予想し得るものであったが、危険性を伴うため敢えて細分は行わなかった。各ブロック毎に見られた珪質凝灰岩の占める割合は、1ブロックで総計129点中42点、2ブロックで338点中2点、6ブロックで58点中1点、7ブロックで230点中88点で、ブロック外に2点が出土している。珪質凝灰岩を素材として彫器4点、播器1点が主な器種として作出されている。各ブロック毎の器種組成は比較的均質で彫器と彫器作出に伴うと思われる削片を主体に多量の砕片からなるが、3・4ブロックには若干の削片、砕片が見られるだけで定形的な石器は出土していない。接合は3例10点が認められ、基本的には7ブロック内で接合するが、他に1+7、3+7ブロック間に接合が認められた。

チャート1の分布(付図9) 総計5点が出土している。集中して出土する傾向は窺われず、1点のみ大形の彫器が1ブロックから出土した。他の4点はいずれもブロック外出土で、これらに明瞭な関係を見出すことはできなかった。

チャート2の分布(付図9) 1点のみ出土している。4号住居址東壁より採集されたもので、先土器時代石器群の存在が確定的となった資料である。石器群が検出された台地縁辺より50m程奥に入った台地中央部に検出された。

チャート3の分布(付図9) 1点が出土している。R-42G(4ブロック)に単独で出土したもので、石器の調整加工時に生じる調整削片である。

チャート4の分布(付図9) 総計2点が出土している。1点は1ブロック出土の削片で、1点は削片端部に使用痕が見られる。

チャート5の分布(付図9) 総計3点が出土している。このうち2点に接合関係が認められている。搬入された可能性が高い。

チャート6の分布(付図9) 総計33点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、1・

2・7ブロックに集中して分布する傾向にあるが、ブロック毎にチャート6の占める割合は1ブロックでは総計129点中6点、2ブロックでは338点中5点、3ブロックでは24点中2点、4ブロックでは47点中1点、5ブロックでは23点中2点、7ブロックでは230点中8点で、ブロック外に1点が出土している。チャート6を素材として彫器3点が主な器種として作出されている。各ブロック毎の器種組成は様相の異なりを指摘し得る。すなわち、彫器削片・剥片・砕片からなる石器製作空間的なあり方を示す1・2・7ブロック、彫器2点が出土した石器使用空間、数点の剥片等からなる3・4ブロックとして類型化できる。接合例はない。

チャート7の分布(付図9) 総計10点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち1・2ブロックに分布する。各ブロック毎にチャート7の占める割合は1ブロックでは総計129点中3点、2ブロックでは338点中7点で、他のブロックには分布しない。チャート7を素材として作出された定形石器は見られず少量の削片、剥片、砕片から組成する。接合例はない。

チャート8の分布(付図9) 総計25点が出土している。確認された7ヶ所の石器ブロックのうち、1・2・7ブロックに分布する。各ブロック毎にチャート8の占める割合は1ブロックでは総計129点中13点、2ブロックでは338点中8点、7ブロックでは230点中4点で、ブロック外には分布しない。チャート8を素材として、尖頭器、彫器、削器各1点が作出されている。各ブロック毎の器種組成は比較的均質なものとなっているが、若干の削片、剥片、砕片等からなる石器製作(調整加工)址的空間を示す1・2ブロックと尖頭器・彫器・削器等からなる石器使用空間を示す7ブロックという相違が見られる。

チャート9の分布(付図9) 総計2点が出土している。いずれも1ブロックから出土したもので剥片・砕片各1点が出土している。

チャート10の分布(付図9) 総計3点が、2・7ブロックより出土している。削片2点、剥片1点からな

る。遺跡内に同一の母岩と思われる石器器種は存在しない。

チャート11の分布(付図9) 1点が出土している。Q-42G(7ブロック)に出土したもので側縁に使用痕が見られる。

チャート12の分布(付図9) 1点が出土している。Q-42G(7ブロック)単独に出土している。

その他のチャート(付図9) 総計2例3点が出土している。いずれも搬入されたものと思われ、遺跡内で剥片剥離を行なった痕跡が認められない。1点はブロック外(V-38G)に出土した台形石器で、他の2点は7ブロックに出土した使用痕ある剥片である。

砂岩の分布(付図10) 総計9点が出土している。石器5ブロックに集中しているほかQ-42Gに2点が出土していた。同一の母岩を素材として作出された石器は未検出である。

珪質頁岩の分布(付図10) 総計10点が出土している。これらは比較的均質な内容を示す1・2・7ブロックより出土しているが、集中して出土する傾向は見られない。さらに母岩別の分類(1~4)が可能である。削片2点、砕片8点からなる。

流紋岩の分布(付図10) 総計2点が出土している。いずれも石器ブロック内の出土であるが、同一の母岩2を素材として作出された石器は未検出である。

凝灰岩(付図11) 総計4点が出土している。いずれも1ブロックに集中して分布する。削片2点、砕片2点からなる。同一の母岩を素材として作出された石器は未検出である。

片岩の分布(付図11) 総計2点が出土している。R-39、Q-42Gに各1点が分布する。同一の母岩を素材として作出された石器は未検出である。

玢岩の分布(付図11) 1点が出土している。R-39Gに分布している。同一の母岩を素材として作出された石器は未検出である。

3-6 第1文化層の構造分析

1. 剥片剥離技術

出土した866点の石器群を支えた剥片剥離工程を示す資料は必ずしも良好に検出されなかった。接合作業によって得られた多くは剥片剥離工程の一部を示すにとどまり、一母岩別資料にすべての工程を見出すことはできない。石器群は40種類の母岩別資料により構成されるが、このうち全体の4%を占める母岩別資料である安山岩1に比較的良好に剥片剥離工程を窺うことができる。ここでは良好に剥片剥離工程の復元の可能な安山岩1を中心に他の母岩別資料と合せて遺存した石器群を支えた剥片剥離工程の実態を明らかにすることを目的とする。

安山岩1に分類された資料は総計213点で、石器1・2ブロックを中心に出土している。接合資料I-22・31(図36・33)のほか、石核(図26)、剥片(図27~30)、及び石器器種としてのナイフ形石器・彫器・目的剥片を主な分析の対象とする。

剥片剥離の初期的様相 剥片剥離の初期に作出される剥片の多くは自然面を大きく残す一群の剥片として典型的に現象する。自然面の有無は別として総じて大形で幅広い剥片が多く作出され、剥片剥離工程の初期的様相を示す。剥片剥離の初期に作出された剥片の多くは剥片を構成する剥離面の剥離方向と一致する方向に剥離される。接合資料I-33(安山岩1)のほか、I-16・18・19・22・23・34等が初期的様相を示す剥片剥離工程に相当する。剥片剥離工程の初期的様相を示す剥片を素材として作出された石器器種は必ずしも多くを認めることはできないが、典型的な事例として部分的に礫表皮を残す彫器(図22・9)を指摘することができる。同様な形状を示す多くの彫器が作出しており、幅広い剥片を石器素材とすることで共通するが、多くは礫表皮を残さない。剥片剥離工程の初期に作出される典型的な剥片は礫表皮を大きく残し、幅広いことを特徴とするが、概して石器素材として用いられることは少ない。

剥片剥離工程の展開 剥片剥離工程がどのように展開したかを明確に示す資料は良好に得られていないが、2点の石核を中心に剥片剥離工程の展開を想定することが可能である。石核は形状から残核として遺跡内に放棄されたもので、最終的な剥片剥離工程時の状況を示す。上下両端に両設する平坦な剥離面を打面として剥片剥離作業が展開し、剥片剥離作業は作業面を変更することなく、左右に打撃点を移動しながら後退するように進行する。作業面が中膨みになる状態を打面を、移設することによって回避している。基本的には平坦な剥離面を打面として剥片剥離が進行するが、打面角を一定に保つ目的で部分的な打面の調整が施される。明らかな打面再生剥片が認められず、これらの作業に先立って大きく打面を再生する作業が行われたかは不明である。以上のように剥片剥離工程の展開を2点の石核から把握することが可能であるが、こうした状況は接合資料I-31及び剥片にも看取される。この接合資料は側

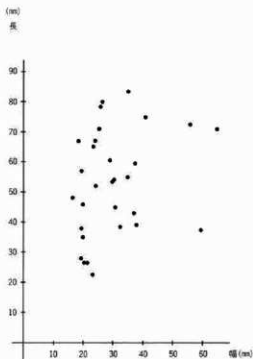


図42 目的剥片の長幅比

面に燧表皮を大きく残すが、比較的形状の整った縦長の剥片3点よりなる。剥片に打面の調整が顕著で、いずれも異なる打面より剥離されている。一方、安山岩1を母岩とする剥片の形状はバラエティーに富み、目的剥片に例をとれば、3～8cmの範囲(図42)に分布する。剥片は明確に集中域を形成せず、素材剥片として許容される範囲において連続的に剥離され、明確な打面再生剥片が存在しないことも整合性をもって理解される。剥片剥離工程の展開するなかで得られた剥片は形状の整った剥片がナイフ形石器や彫器b類の素材として用いられていることは明らかであるが、石器群の主体となる彫器a類の素材となった幅広の剥片がどのような段階で作出されるのかは検証する資料が得られなかった。

石器群に認められる剥片剥離工程の特徴は一部に不明確な要素を含むが、効率的な石核の消費に求められる。具体的には剥片剥離作業面に対して鋭角に設定された打面及び石核の側面整形を要しない剥片剥離作業面のあり方に集約される。形状の整った縦長の剥片(目的剥片A)の作出と同様にやや幅広に過ぎる剥片(目的剥片B)をも石器素材に取り込む剥片の効率的消費に見られるように、石器群を支えた剥片剥離技術は石器群の構造的な変化と密接にかかわると評価される。

2. 出土した石器群

出土した総計866点の石器群は7カ所の石器ブロックを形成することが理解された。石器群はバラエティーをもった器種組成を示し、とりわけ桶状剥離によって尖頭器・彫器(a・b類)を作出しており、男女倉技法と同一の系譜に位置づけられる。

尖頭器 総計4点が出土している。これらは2分して把えることが可能であるが、機能部の作出を除いて共通する部分も多い。

a類 木葉形状を呈する尖頭器である。機能部は表裏とも平坦な剥離により丁寧に作出される。器体に施される調整加工はより面的である。

b類 わずかに肩の張る尖頭器である。機能部は器体の先端から左側縁にむけて桶状剥離を施すことにより作出される。器体に施される調整加工は両面加工によるもの、片面・周縁加工によるものが認められる。

出土した4点の尖頭器は機能部の作出において明らかに相違し、a類の尖頭器はb類の尖頭器に比べてわずかに小形で、しかも、機能部は完成された状態を示すことから互いに独立した石器器種として把えられる。出土した4点の尖頭器はさらに細分が可能である。素材となった剥片の形状と調整加工は相互に密接な関係にあり、各々が許容される範囲内で器種に反映したものと理解される。分類された尖頭器は、機能部の作出こそ異なるが、同様な視点で同様な分類項目が各々に設定されるべきと思われる。

ナイフ形石器 総計10点が出土している。ナイフ形石器は中・小形例を主体とし、形態から3分して把えることが可能である。a・c類に黒色頁岩が、b類に安山岩が用いられる。

a類 二側縁にブランティングの施される一群。6点が出土しており、ナイフ形石器の主体を占める。(図20-7・8・10・11・13)

b類 一側縁にブランティングの施される一群。2点が出土している。(図20-9・12)

c類 先端部及び基部にブランティングの施される一群。(図20-14、図21-1)

ナイフ形石器a類は6点が出土している。器体長は3～6cmを計り、個体間で異なるが、器体幅は1.5cm程で各個体とも限定される状態にある。11のブランティングは全周せず、菱形を呈す器体の対向する二辺に限ってブランティングが施される。他の5点は「側刃縁」を凹状に作出する傾向が強く認められ、裏面基部加工は素材剥片の打面部分が器体の基部側に位置する個体に施される。ナイフ形石器b類は2点が出土している。器体長4.5～6cmを計るが、器体幅は2.5cm程で、各個体とも限定された状態にあり、a類に近い。遺跡内で同一の母岩より作出された縦長

II 先土器時代の遺物と遺物分布

の剥片を石器素材とし作出する点で他と異なる。ナイフ形石器c類は2点が出土している。不明確な部分が多いが、ブランディングは剥片の形状を大きく変えるものではなく、形状はバラエティーに富む。

出土した10点のナイフ形石器は形態上3分して扱えられるが、a類のナイフ形石器は量的に最も安定して存在する。出土状態・石器石材からa・c類は強く結び付き、b類は孤立した状態にある。同様な状況は同一の母岩より作出される器種構成にも認められ、b類のナイフ形石器と同一の母岩別資料に彫器・削片が顕著に存在するのに対して、遺跡内で剥片剥離を経て作出されたa・c類と同一の母岩別資料に彫器・削片は全く存在しない。これらは同一の層位から同一の状態に出土したナイフ形石器ではあるが、a・c類のナイフ形石器とb類のナイフ形石器は背景の異なる二つの石器群を別々に構成する可能性が極めて強いと思われる。

彫器 総計18点が出土している。これらは種別剥離によって機能部を作出することで共通するが、尖頭

器b類とともに石器群にあって構造的に理解される存在である。彫器は4分して扱えられ、a・b類の彫器が主体を占める。

a類 石器の形状は円形を基調とする。機能部は器体の先端より左側縁にむけて作出される。調整加工は(1)面的に調整の施されるもの、(2)周縁調整の施されるもの、(3)部分調整の施されるものが見られる。(図22-1~4、6~10)

b類 素材となった縦長の剥片をほぼそのまま用いる細身の一類である。機能部は器体の先端より左側縁にむけて作出される。調整加工は機能部作出のための打面として器体の先端に部分的に施される。(図23-1~3、5、7)

c類 素材となった剥片の打面部あるいは折断面を打面として機能部を作出する一群である。(図23-4・8)

d類 削片を二次的に利用して機能部を作出する一群である。機能部は器体の先端から右側縁にむけて作出される。(図22-5、図23-6)

素材剥片の形状： 両側縁の平行する形状の整っ

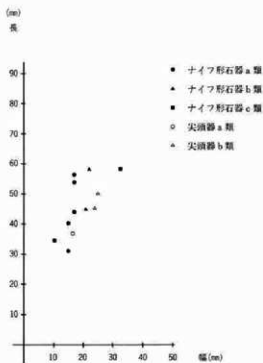


図43 尖頭器・ナイフ形石器の長幅比

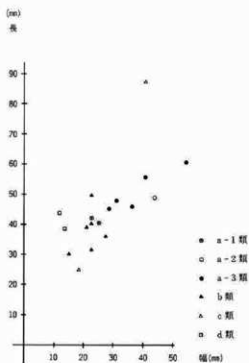


図44 彫器の長幅比

た縦長の剥片(目的剥片A)及び幅広い縦長の剥片(目的剥片B)が石器素材として用いられる。これらは一連の剥片剥離工程上に得られ、目的剥片Aにはb・c類の彫器が、目的剥片Bにa類の彫器が対応する傾向が強く認識される。

調整加工：(1)面的加工、(2)周縁加工、(3)部分加工によるが、これらは尖頭器b類を含め、分類したa～d類の彫器の調整加工に「形状修正」的な性格は窺われず、作出する石器形状に応じた素材の選択が行われている。これらの調整加工は基本的に片面に限定して施される。a類の彫器はプランティング状の調整加工により凹状に打面を作出することが多い。

機能部：基本的には素材となった剥片の先端左側縁側に機能部は作出される。a類の彫器は機能部が槌状剥離により作出され、槌状剥離により生じた剥離面の端部はさらに微細な剥離により整えられる。また、機能部は1条から2、3条の槌状剥離により成るが、複数条が施される場合は第2回以後の槌状剥離は概して小規模で、機能部の再生というよ

りも機能部の整形として理解される。b類の彫器はa類とはほぼ同様な状況を示すが、槌状剥離によって作出された剥離面を直接に機能部とする。機能部は器体に直角に作出される一群と斜めに載ち切るように作出される一群から構成される。前者がb・c類に、後者がa・d類に多く認められるが、確実に分化した状態になく、形態間にわたって存在する。したがって、形態差が機能差を示すとは断定し得ない状況にある。

彫刻刀面と削片：彫刻刀面と削片の形状は対応する関係にあり、相互に補完する。図45・46は彫器の機能部及び削片の最終剥離面を水平に置いた場合の長幅比であるが、基本的には両者の長幅比は相互に対応する関係を示している。

削片 総計69点が出土している。これらの削片の認定にあたっては出土した石器群に最も近いと思われる茨城県細原遺跡(文献70)での認定基準に従い、同様の分析を行った。削片は以下のように細分して扱われた。

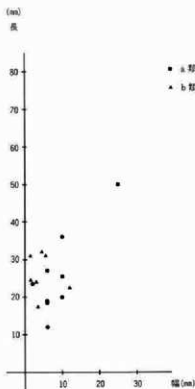


図45 彫器機能部の長幅比

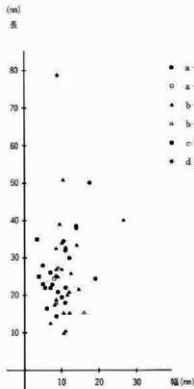


図46 削片の長幅比

II 先土器時代の遺物と遺物分布

- a類 器体を斜めに載ち切るように作出され、側縁に調整加工の認められない一群の削片。左側縁に位置する一群(a-1類)と右側縁に位置する一群(a-2類)に細分される。これらは彫器b類に対応する削片及び第2回以後作出される削片として理解される。
- b類 器体を斜めに載ち切るように作出され、側縁に調整加工の認められる一群の削片。左側縁に位置する一群(b-1類)と右側縁に位置する一群(b-2類)に細分される。
- c類 器体に直交して作出され、側縁に調整加工の認められた左側縁に位置する一群の削片。
- d類 器体に直交して作出され、両面に調整加工の認められた左側縁に位置する一群の削片。

削片の形状： 長さ7.8~1.0cm、幅2.7~0.3cmと幅をもつが、多くは長さ4.0~1.5cm、幅1.5~0.5cmの範囲に集中し、なかでもb-1類に細分される削片は良好に集中する。彫器及び削片は互いに対応する関係にあることが図45・46から明らかに読み取ることができる。

削片の折れ： 34点に欠損が認められた。全体の50%にあたり高い頻度を示すが、23点は削片の端部を欠く1cmに満たない欠損である。削片は明らかに二次的に利用されるが、概して大形の削片に限られ、青森県大平山元遺跡(文献104)で指摘された意図的存在として削片を評価することはできない。

削片利用の石器： 削片を素材として作出された石器は3例(彫器2点、挿入削器1点)が出土し、使用痕の認められる削片3点を含め、現状で6点が認められる。

削片は基本的には彫器と対応する関係にあるが、右側縁に位置する削片が存在することから出土した「左刃」の彫器の他に「右刃」の彫器の存在が予想されると同時に、削片の2次的利用は副次的存在であることが理解される。

その他の石器 削・挿器4点、揉雑器1点、調整痕ある石器4点、使用痕ある石器6点が出土している。これらは各ブロックに均質に組成せず、1・2・7ブロックに片寄って組成する傾向が強い。挿器2点は同一の形態を示し系統的に作出されるが、他の挿入削器及び揉雑器は他器種を再利用したもので、挿器と対照的な存在である。こうしたあり方は調整痕・使用痕ある削片と同様な存在であり、石器群を客体的に構成するものである。他に磨石(敷石)が存在するが、いずれも赤化現象が見られ、少なくとも機能を停止した段階にあり、明確に存在していない。

3. 礫群とその構造

礫群は、一般に、武蔵野台地では立川ローム層下部に出現することが確認され、概括的な成果が報告されている。一方、群馬県下で検出された礫群の報告例は3遺跡に過ぎず、資料の蓄積自体が十分でないので礫群の分析は今後に待つところが大きい。そのなかで岩宿遺跡の出土状況は不明であるが層位的に検証された武井遺跡検出の礫群および他の先土器時代遺跡調査例から一般に、A・T下で不安定ながら小規模の礫群が見られ徐々に定着していく様相が認められ、基本的にはこれまでの成果に矛盾するものではないと思われる。

本遺跡から検出された7ヶ所の礫群はいずれも石器ブロックに重複している。礫群は「調理用施設」として扱われているが、石器ブロックと礫群が重複して存在する理由について必ずしも明らかにし得なかったし、これまでこうした関係について積極的に言及されたこともない。礫群のもつ諸属性をすべて網羅しているとは思えないが、遺跡の構造を理解するための一つの過程として礫群や石器ブロックが重複する意味を他の調査例と同様なレベルで比較検討する必要があると痛感される。

形状と分布 7ヶ所の礫群はいずれも、礫集中部と礫の散漫に分布する周辺部から構成されている。これらは3～4m程の不整形形状に分布する一群と2～4m程の長円形状に分布する一群が見られた。礫集中部を構成する礫は比較的大形な礫が多く見られ、図面上で「L字状」あるいは「コの字状」に配列されるものが認められるが調査時の印象に乏しい。何らかの構築物を想定するには困難である。

分類 出土した736個の礫は形状、赤化の有無により8種類に分類することができる。各々の占める割合は表4に示す通りで、B類に分類された礫が全体の8割程で圧倒的多数を占める。D・E・F類が不安定な存在であるのに対し、非赤化破損礫G・H類は比較的少ないが、各礫群に安定して存在する。

形状と重量 各礫群とも、100個程の礫により構成される。基本的に200g未満では負の相関曲線に近い状況の重量分布を示し、20g未満の礫が40%前後を占め圧倒的に多く見られる。礫重量が1000gを越える巨大礫も存在するが、これらには他の使用目的があったものと思われる。多くは1000g未満の礫で構成される。各礫群とも完形礫の示す重量はバラエティーに富むが、2～300g程度の礫が多く採集されたものと思われる。

表4 礫の赤化状態

ブロック	A	B	C	D	E	F	G	H	合計
1	0	81	1	2	0	0	2	0	86
2	3	65	16	0	2	1	4	2	93
3	10	69	12	1	0	1	7	1	101
4	2	61	9	2	0	0	6	7	87
5	5	54	8	0	0	0	5	1	73
6	1	67	1	1	0	0	0	0	70
7	4	109	4	3	1	2	10	4	137
ブロック	3	61	10	0	0	2	5	8	89
	28	567	61	9	3	6	39	23	736

注 A～Hの分類は、別冊P1凡例7参照

石材 2点を除いてすべて遺跡周辺に容易に採集される在地石材である輝石安山岩が用いられている。

接合関係 基本的には、各礫群とも礫群内での接合であるが、礫群の示す諸層性に共通する点が多く、相互に有機的な関係があったものと推察される。こうした状況を説明するものとして、礫群間の接合関係が存在するものと思われるが、現状で、礫の動態は必ずしも明らかにし得ていない。7基の礫群のうち、独立的な5礫群を除いて、南群(1・5・7)と北群(2・3・4)に強く接合関係が見られるが、これらの関係と石器ブロックのあり方は必ずしも整合性をもったものではない。礫の分布状況および接合状況から礫群は想定される使用状況下に遺存したというよりも二次的移動を含む使用後の状況を示すものと思われる。

その他 出土礫には明確に赤化・タール状の付着物の見られるものもわずかながら存在し、礫群の成因等を明らかに示唆する資料も得られている。

まとめ 検出された7基の礫群は、100個程の礫によって構成され、礫群間に接合関係の認められる相互に有機的な結び付きを想定しうるものである。出土礫の示す諸層性は上述したように、各礫群とも比較的均質な内容を示している。一部に構造的な礫の出土状況を窺えるものも見られたが、休場遺跡を代表事例とする石囲い戸とは礫の出土状況は異なり、礫群の下部構造の一部として理解しておくのが妥当である。出土礫は角礫の稜部がわずかに丸味をもつものが多く、接合後も「円礫」に復元されるものはわずかであった。一部判断に苦しんだが、垂円礫に近いものとして理解されるものと思われる。出土礫と同様な形状をもつ礫は付近の独立丘陵の崖錐に丘陵構成礫として存在している。一方、出土礫の中には円礫も存在し、したがって、現状では礫採集地を周辺の崖錐と河川の両者を想定しておく。また、輝石安山岩はその生成過程で表面等が酸化するため赤化礫に似た状況を示すことも注意される。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

4. ブロックとその構造

「ブロック」は石器群の可視的な集合状態を示す。この時点では、一定の範囲に集中して出土する点で有意性は認められるが、これ以上の意味は持たない。母岩別資料の認識は石器群の同時性の検証及び構造認識を経て集団レベルの動態にまで止まらざる基本的な分析として理解される。埼玉県砂川遺跡で示された石器群の分析手法は遺跡を構造的に、石器群を動的に把握することを可能とし、研究史上の画期として評価される。しかし現状では認識し得ない石器群の重複する場合や石器群が明瞭な単位を示さず分布する場合同時性を検証する指標、最小の単位的な存在としての母岩別資料の完全な把握に限界のあることも指摘される。

遺跡の構造的な理解に至る過程に一定の限界も存在するが、こうした問題点を踏えつつ想定された静岡県寺分遺跡、富山県野沢遺跡では集落の復元が試みられている。こうした試みは評価されるが、現状では遺跡各単位を対象とする分析にとどまりこれを集成・分析し、類型化する作業は今後に残された課題であり、模索されている状況である。ブロックが明確な時空概念上に設定されていない以上、石器群の同時性は常に検討されるべきである。

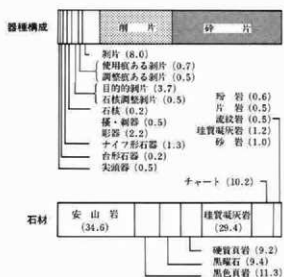


図47 第I文化層の器種構成と石材

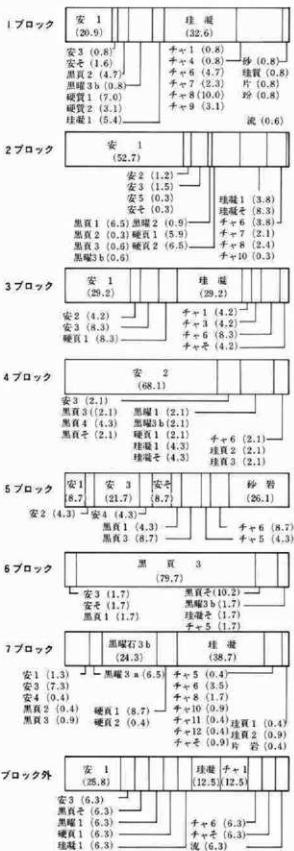


図48 第I文化層のブロック別石材分布

3. 第1文化層の調査

本遺跡でも良好な状態で石器群が検出されているにもかかわらず、十分に分析し得ていない。ここでは現状で得られた成果を示すにとどまるが、今後さらに検討したいと考えている。

a 石器と石材

第1文化層と構成する石器群は豊富な石器器種が

認められ、同時にこれらは多種多様な石器石材から作出されている(図47~49)。比較的容易に採集されると思われる安山岩1~4は全体の劣程を占めるに過ぎず、黒曜石をはじめ硬質頁岩・珪質凝灰岩・チャート等広範な地域に石器石材を求めている。こうした状況は必ずしもすべてが同質の内容を示すと

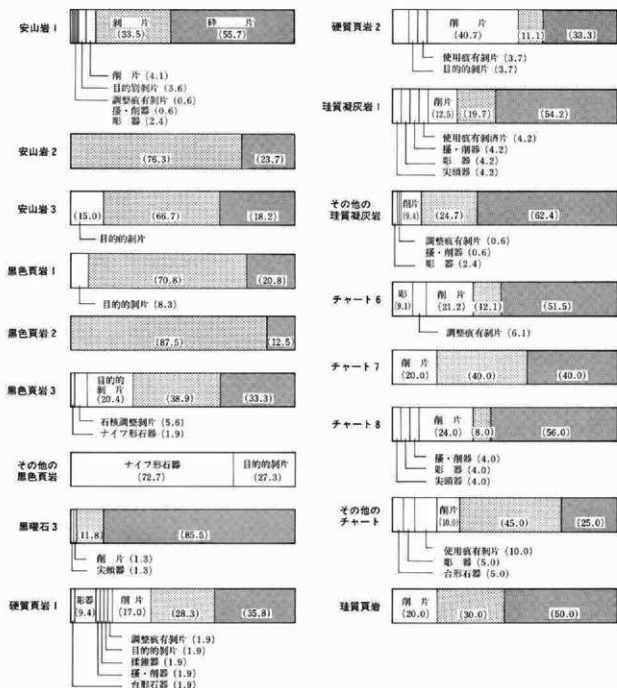


図49 第1文化層の母岩別器種構成

II 先石器時代の遺物と遺物分布

限らず、遺跡・石器群に異なって現象することと思われ、稲田氏の指摘するような状態(文献91)が存在した可能性が強い。検出された石器群は石器石材の種別にかかわらず等質に石器が作出されると同時に等質にブロックに組成する。石器群から理解される石器製作工程上に占める状態は母岩別資料間で黒曜石をはじめとする一群に石核が認められず、遺跡内に剥片剥離が行われた痕跡さえ乏しいが、在地石材である安山岩は遺跡内に連続した状態で石器製作工程が遺存する。安山岩・黒色頁岩は遺跡内に良好に剥片剥離工程の存在が認められるのに対して、硬質頁岩・珪質凝灰岩・チャート等の剥片剥離工程の存在は不明確な状態にあり、こうした状況は母岩別の器種構成(図49)に明らかである。黒色頁岩を石器素材としてナイフ形石器1点が作出されたに過ぎず、石器群に特徴的な種状剥離によって作出された石器器種は出土していない。種状剥離によって作出された石器器種及び存在の想定可能な削片は黒色頁岩1~4を除く他の母岩別資料すべてに存在し、石器石材と石器器種は独立した状態になく、石器石材にかかわらず等質に作出されたと思われる。

b 母岩別資料の分布と接合関係

石器群は40種類に及ぶ母岩別資料から構成され、7ヶ所の石器ブロックを形成することが理解された。これらの母岩別資料は石器製作工程上、必ずしも均質な内容を示しておらず、類型化して理解することができる。すなわち、以下のように理解することが可能である。

- 1 遺跡内に一連の石器製作工程が存在する(安山岩1、黒色頁岩3)
- 2 遺跡内に石器製作工程のうち剥片剥離工程のみ存在する(安山岩2・3、黒色頁岩1・2、砂岩)
- 3 剥片剥離工程の存在は明確に確認されないが、遺跡内で特定の石器が製作された(黒曜石、硬質頁岩1・2、珪質凝灰岩1他、チャート6・7・8)
- 4 遺跡外で作出された後に、遺跡内へ特定の石器が搬入された(黒色頁岩他、チャート)

それでは、このように工程上類型化された母岩別

資料がどのようにブロックを構成するであろうか。母岩別資料の分布図(付図4~11)に明らかのように、これらの中には複数の石器ブロックにわたって存在する母岩別資料の一群と、単一ブロックに存在する一群に大別して理解される。

1 複数のブロックにわたって存在する母岩別資料

- 安山岩1……(1・2・3・5・7)
3……(2・5・7-1・3・4・6)
硬質頁岩1……(1・2・7-3・4)
2……(1・2-7)
チャート6……(1・2・7-3・4・5)
7……(1・2)
8……(1・2・7)
珪質凝灰岩1……(1・2-4・7)
他……(1・2・3・7-4・6)

2 ほぼ単一のブロックに存在する母岩別資料

- 安山岩2……4 黒曜石3……7
黒色頁岩1……2 砂岩……5
2……1 黒色頁岩他……6

(1・2・3・5・7)は各母岩別資料の数が、1・2ブロックに多く、3・5・7ブロックに少ないことを示している。

石器群は安山岩1~3、黒色頁岩1~3を除いて、遺跡内で剥片剥離の行われた痕跡に乏しいためブロック間にわたる接合関係の認められる資料に乏しいが、10例程が確認されている。具体的には安山岩1(1+2、2+3、2+5)、安山岩3(5+7)、珪質凝灰岩(1+7、3+7)に接合関係が認められる。これらは安山岩を主体とした接合資料であって石器1・2ブロック間で頻りに接合し、相互に密接にかかわることの証左に過ぎず、ナイフ形石器(安山岩1)、目的剥片(安山岩3)等が出土し、同時に接合関係も認められる2+5ブロック、5+7ブロックのように人為行動として明確に意図を読み取ることのできる状況に乏しい。母岩別資料の分布についても同様で、特定の石器が他地点に出土する場合より剥片・砕片が出土する場合が多く、判然としない。意図的に搬入・搬出される場合及び二次的要因で搬入・搬出される場合のほか、自然営力に基づ

く場合あるいはこれらが錯綜する場合が想定される。これらは居住期間が長期にわたるほど、あるいは利用頻度が高いほど錯綜した状態を示すものと考えられ慎重に判定されなければならない。本遺跡の場合、具体的にはブロックと重複して礫群が存在することから礫の移動に伴って混入する場合も想定しなくてはならない。

母岩別資料および接合関係から、7ヶ所の石器ブロックを形成する石器群は以下のように理解することが可能である。

- I ブロック間にわたって分布する複数個体の母岩別資料よりなる石器ブロック1・2・7ブロック
 - II ブロック間にわたって分布する複数個体の母岩別資料が10点未満である1母岩別資料よりなる石器ブロック……………3・4・5ブロック
 - III 単一の石器ブロックのみ分布する1母岩別資料と兼入石器よりなる石器ブロック……………6ブロック
- 以上のように石器群は大きく三群に理解されたが、これらは独立した状態で存在したのではなく、ブロック間の接合あるいは母岩別資料の共有に示されるように、相互に補完する存在として理解される。

c 石器ブロックと器種組成

第1文化層を構成する石器群は豊富な器種組成を示すが、これらは器種間に強く結び付き組み合わせが認められ、7ヶ所の石器ブロックに組成することが理解される。図50・51に明らかなように、石器1・2・5・7ブロックは比較的同質な器種組成を示す。なかでも1-7ブロック(尖頭器b類、彫器a・b類)、2-5ブロック(ナイフ形石器b類、彫器a・b類)により強い類似性が認められる。一方、これらは母岩別資料の分析から明らかなように互いに類似するとともに、また、互いに相違する内容を示す。これらは互いに形状の整った縦長の剥片(目的剥片A)及び削片を組成する点で同一の石器製作技術上に遺存するが、細分された彫器はブロックに片寄って存在する傾向が指摘される。彫器a類は1・5ブロックに、彫器b類は2・7ブロックに主体を占めている。こうした状況は特徴的な現象で、各石器ブロッ

クの果たした機能に密接にかかわるものと思われる。したがって、1-7ブロック及び2-5ブロックの単位的な石器群の存在は、各ブロックが相互に補完して機能した可能性が高いと言える。一方、母岩別資料の分析においても孤立した状態にあった6ブロックは、尖頭器a類とナイフ形石器a・c類の組み合わせせからなり、器種組成の点においても他の石器ブロックとは異なる内容を示している。

以上のように石器ブロックと器種組成の関係は把握することができた。それでは7ヶ所の石器ブロックのうち、明確に把握することのできなかった石器3・4ブロックはどのように評価されるのであろうか。「母岩別資料の分布と接合関係」の項で明らかなように、3ブロックは総計24点からなる小規模なブロックであり、4ブロックも総計45点からなる小規模なブロックである。先に明らかにされた「母岩別資料と接合関係」からは5ブロックと同様に扱われたが、組成する器種が異なるだけである。したがって、2-5ブロックとの同様な関係が1・7ブロックとの間に想定される可能性も否定できず、むしろブロックが単独で存在することが稀である点からは1・7ブロックを補完する役割を担ったとすることが妥当である。

d 母岩別資料と器種組成

次に視点を変えて確認された40種類に及ぶ母岩別資料からどのような石器が作出されているだろうか。図52-54に明らかなように各々の母岩別資料が石器製作工程上占める状態が異なるため、各々の母岩別資料の示す器種組成も同様に異なっている。母岩別資料と器種構成は以下のようにとらえることができる。

- ① 目的剥片+特定の石器+削片(安山岩1)
- ② 目的剥片+石器(黒色頁岩3)
- ③ 目的剥片+削片(チャート7)
- ④ 特定の石器+削片(黒曜石3、硬質頁岩1・2、珪質凝灰岩1・他、チャート6・8)
- ⑤ 目的剥片(安2・3・4、黒色頁岩1・4、チャート2)

II 先土器時代の遺物と遺物分布



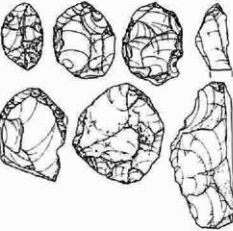




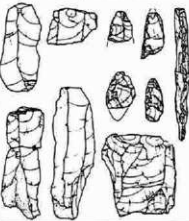



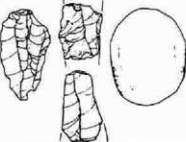



	尖頭器	ナイフ形石器	形器	削・掻器	その他の石器
1 ブロック					
2 ブロック					
3 ブロック					
4 ブロック					
5 ブロック					

図50 石器ブロックと器種構成(1)

3. 第1文化層の調査

- ⑥ 特定の石器（黒色頁岩他、黒曜石1）
- ⑦ 刮片（珪質頁岩1・3）
- ⑧ 刮片+砕片（安山岩2、黒色頁岩2、チャート4・5・9・10・11・12）

遺跡内での石器製作工程を示す安山岩1を除いて他の母岩別資料は部分的な様相を示すにすぎないが、遺存した石器群はいずれも素材刮片の形状を大きく変えることなく作出されるため、素材となった刮片の形状を十分に想定することが可能である。こうし

た視点に立って母岩別資料と器種組成を検討すると、安山岩1と同様な状態が硬質頁岩1、その他の珪質凝灰岩、チャート6・8に認められ、石器群が安山岩1と同様な技術基盤に作出されることが理解される。母岩によって作出される石器器種が異なる場合が多いが、本遺跡出土石器群にあっては母岩別資料にかかわらず、同様に石器器種を作出しており、これらが同一の基盤上にあることを示している。


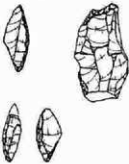
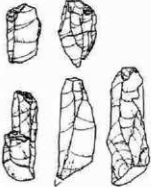



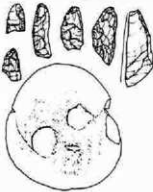



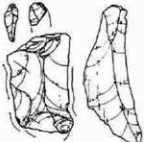
	尖頭器	ナイフ形石器	形器	削・掻器	その他の石器
6 ブ ロ ク ク					
7 ブ ロ ク ク					
ブ ロ ク ク 外					

図51 石器ブロックと器種構成(2)

II 先土器時代の遺物と遺物分布



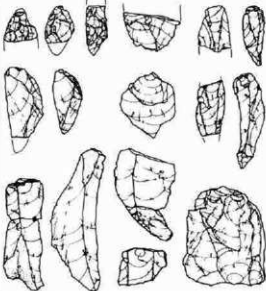
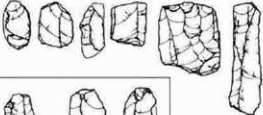

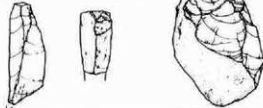

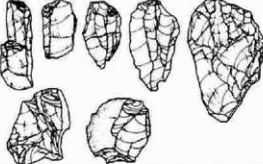
	尖頭器	ナイフ形石器	形 器	削片器	その他の石器
安山岩 1					
安山岩 3					
その他の安山岩					
黒色頁岩 1					
黒色頁岩 3					

図52 母岩と器種構成(1)

3. 第I文化層の調査


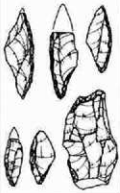





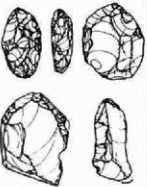

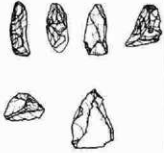

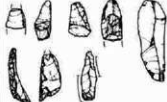




	尖頭器	ナイフ形石器	形 器	削・掻器	その他の石器
黒色頁岩 4					
その他の黒色頁岩					
黒曜石 1					
黒曜石 3 b					
硬質頁岩 1					
硬質頁岩 2					
硬質凝灰岩 1					

図53 母岩と器種構成(2)

II 先土器時代の遺物と遺物分布





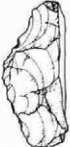
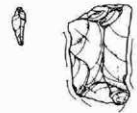








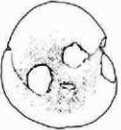

	尖頭器	ナイフ形石器	彫器	刮削器	その他の石器
その他の埋蔵場灰層					
チャート					
チャート6					
チャート7					
チャート8					
その他					

図54 母岩と器種構成(3)

5. 礫群と石器ブロック

確認された7ヶ所の石器ブロックは母岩別資料の分布、ブロックと器種組成・母岩別資料と器種組成の観点から有意ある単位4群が抽出された。

I群…2-5ブロック II群…1-3 or 4ブロック

III群…7-3 or 4ブロック IV群…6ブロック

これらのうちで、I～III群を構成する石器群(尖頭器b類・彫器)は槌状刻離により機能部を作出する点で極めて構造的な存在であり、IV群を構成する石器群(尖頭器a類・ナイフ形石器a・c類)と質的に対応

する存在であり、互いに独立した石器群であることが予想された。a類に分類される尖頭器(図20-1)と削片(図30-27)は同一の母岩に分類され、I～IV群は同一の石器群として認識せざるを得ないが、あわせて母岩別資料の同定作業の限界もふまえなければならぬ。一方、確認された7ヶ所の礫群はいずれもブロックに重複して検出され、比較的均質な内容を示すことが理解された。礫群はすでに指摘したように以下に理解される。

分布状況：①径3, 4m程の不整形形状に分布

……1・2・3・4・7礫群

②2×4m程の長円形状に分布

……………5・6礫群

接合状況：①1-6-7礫群(南群)

②2-3-4礫群(北群)

③5礫群

礫群はいずれもブロックに重複して分布するわけであるが、石器群の分析から抽出された4群とどのような関係に理解されるであろうか。

I群 2-5ブロック………2・3-6礫群

II群 1-3 or 4ブロック

……………1-4 or 5礫群

III群 7-3 or 4ブロック

……………7-4 or 5礫群

IV群 6ブロック………(対応する礫群なし)

分布状況の似る5・6礫群はいずれも石器群が散漫に分布するブロックに重複し注意されるが、現象面の指摘にとどまる。

現在、認識される単位集団が一定の期間を経て残す痕跡は限定された状況にあり、現状では石器・礫群・配石等に情報を求めざるを得ない。集団の残す単一的構造を示すと考えられる砂川遺跡F地点出土の石器群(文獻67)を例にとれば、比較的良好に石器群が集中して出土するブロック2ヶ所(F₁・F₂ブロック)と石器群が散漫に出土するブロック1ヶ所(F₃ブロック)より石器群が形成されていることが理解される。石器群の分布状態は異なるが、同様な状態はA地点にも存在することが報告書の記述から

理解される。砂川遺跡F地点およびA地点から検出された石器群が時間的に並行関係にあるにしても、また、前後関係にあるにしても各地点の石器群は同様な構造をもって検出されている。こうした視点に立って下触牛伏遺跡に距離的にも近い御正作遺跡・武井遺跡(第II文化層)出土石器群と比較・検討の結果、類型化も可能な状態を示すことが理解される(文獻68・93)。

御正作遺跡： 総計2602点の石器群に伴って礫群が1ヶ所検出されている。礫群は東西に分布する遺物集中部の中央より南側に寄った地点に検出され、付近には散漫な状態で石器群が分布する。

武井遺跡： 総計4803点の石器群に伴って礫群が4ヶ所検出されている。石器群の可視的分布は長径20m・短径10mの範囲を越え、礫群が「時間差をもって存在した可能性の方が強い。」と指摘されたように、石器群は単一的な石器群の複合化した状態が想定される。

御正作遺跡例は砂川例に、武井遺跡例は牛伏例に近い様相を示す。が、この見解は現象面の一部において成り立ち、相違する部分がむしろ多く、牛伏遺跡出土の礫群が頻繁に接合し、礫群間に密接なかわりが想定されるのに対して、武井遺跡出土の礫群は独立的な存在であり、何らかの相違が背景として想定される。

遺跡が構造的に存在することはこれまで多くが指摘するところであり、石器群の分析をとうして類型化・概念化も計られているが、石器群の分析をとうして得られる情報は複雑で、個性的で、今だ類型化・概念化は困難な状況にあり、課題である。

註1 遺跡を理解するにあたって加工具のあり方に視点を求めることは評価される。御正作遺跡で出土した加工具は、石器群の周辺の存在であるが、完形の尖頭器は2・3点にすぎず、石器群の大半は遺跡外へ持ち去られた可能性もあり、遺存した加工具のみから普遍的に解釈することはできない。

6. 第I文化層石器群の位置づけ

これまで示した様に石器群は部分的に不明確な要素は残るが、単一的な四群よりなることが理解された。単一的な四群はほぼ同一の出土状態を示すが、

II 先土器時代の遺物と遺物分布

これらのうち、I～III群は器種組成上等質な内容を示す。I～III群に組成する石器群は同一の技術基盤上に存在し、櫛状剥離を施すことにより作出される。これらは母岩別資料の分析によって同一の母岩より形器 a・b 類(安山岩 1: 図22-9、図23-5、硬質頁岩 1: 図22-3・8、図23-6)が作出され、石器形状に応じた素材剥片の選択が認められる。石器群を支えた剥片剥離技術は明らかでないが、比較的良好に剥片剥離技術を明らかにし得た安山岩 1 に典型的に示され、効率的な剥片の消費に特徴づけられる。従って、石器群(I～III群)は同一の剥片剥離技術に支えられ、同一の技術基盤上に多種多様な石器器種が作出されると言える。

出土した石器群は各々機能差をもって組成し、石器群を組織的に構成するが、同一の技術基盤上に作出され、出土した石器群と同様に評価される石器群として長野県男女倉遺跡出土の石器群が指摘できる。男女倉遺跡出土石器群は森島稔氏によって男女倉技法(文献69)として体系化がなされ、東日本を中心とする各地に同様な石器群の存在(文献70)が指摘されている。出土した石器群並びに男女倉遺跡出土の石器群は同一の系統上に扱えられるが、石器群の構造上その様相は異なる。男女倉遺跡出土石器群は異なる二種類の剥片剥離技術よりなり「男女倉技法」により作出される一群の石器群は剥片剥離技術を含め構造的に扱えられるのに対し、多種多様な牛伏遺跡出土石器群が同一の剥片剥離技術に支えられる状態とは異なると理解される。石器群が櫛状剥離により機能部を作出しかつ組織的に存在するという観点では出土した石器群は茨城県細原遺跡出土石器群(文献70)に類例を求めることができ、これらは技術史的発展の過程に存在すると言える。

「男女倉技法」の提唱以来、同様な技術基盤に作出される石器群は広範に認められ複雑な様相を示すが、層位的出土の豊富な地域での実態を踏まえることでより明確に扱える。武蔵野台地では調布市城山遺跡IV中(文献71)に、下総台地では富里村東内野遺跡・印旛郡一の台遺跡・印西市木刈峠遺跡軟質ロ

ーム層中(文献72・73・74)に、相模野台地では大和市下九沢山谷遺跡・深見諏訪山遺跡・月見野遺跡群・座間市栗原中丸遺跡 B 1(文献75・76・77・106)に類例がみられる。これらのなかで、出土資料の豊富な相模野台地では尖頭器石器群(a 類)の変遷(文献79・80)が比較的容易に扱えられる。概ね、その変遷は「砂川型刃器技法」に支えられる石器群に単独に近い状態で尖頭器の組成する段階、形状のパラエティに近づく尖頭器の組成する段階、画一的な尖頭器の組成する段階として扱えられ、石器製作は伝統的な剥片剥離技術のなかに同化される状態が理解される。一方、櫛状剥離を施すことにより作出される尖頭器はいずれも B 1 中に出土するが、深見諏訪山遺跡出土石器群を除いて石器群に客体的に組成する。これらは層位的に比較限定された状態に出土し組成するが、相模原市長久保遺跡 B 0 下部より採集された「東内野型尖頭器」の存在(文献81)は尖頭器石器群の変遷を知るうえで注意すべき資料である。

出土した石器群は単位的な四群よりなるが、器種組成上 I～III群・IV群は母岩別資料を共有することなく、機能的見地より各々が対等な状態に扱えられる。これらはいずれも同一の出土状態を示し、出土した石器群の背景が問われよう。IV群に組成する石器群はいわゆる「茂呂系石器群」として扱えられ、現状では、相模野台地に牛伏遺跡で出土した石器群と同様に扱えられる石器群は相模野IV期後半の石器群に対比される。現状では、相模野IV期石器群の様相から尖頭器(a 類)は尖頭器(b 類)のパラエティとして扱えられる可能性が強いが、尖頭器石器群(a・b 類)は互いに同様な変遷をたどることが予想され、組織的に作出される男女倉遺跡出土石器群・齊一的に作出される東内野遺跡出土石器群は技術史的見地から下輪牛伏遺跡出土石器群より後出の、より完成度の高い状態と言えよう。

出土した石器群は上述のように構造的・技術史的に扱えられるが、力量不足から十分に意を尽くしえなかった。検討すべき多くを課題として後日明らかにしたい。

4. 第II文化層の調査

4-1 第II文化層の概要

第II文化層を構成する遺物総数は2037点が出土している。石器群は一部で第I文化層を構成する石器群と重複して分布し、そうした意味では石器群の立地状況は第I文化層の石器群と同様で、南北に長い台地が東側に若干突出した部分に立地するものと扱えられる。調査区の南端に近いJ~L-38G以東では明確に暗色帯(VII・VIII層)が認められず、粘土化した状態となっていた。これはJライン及び37ラインに設定したトレンチの土層観察によりX層(HP)が欠如する部分に現象することが明らかとなった。すなわち、現地形旧地形とともに基本的に原形面を反映したものであるが、これは旧来存在した埋没谷の形成する過程を示していると考えられる。

第II文化層の石器は図109に見られるように径50m程度の範囲に各々の石器ブロックが集合して環状を呈して検出された。必ずしも、調査区全体をカバーした調査とは言えないが、設定したトレンチから得られた情報では単位的な石器群を扱えられたと思われる。石器群は明確な集中部を示しながらも相互に接し、連続と環状に分布する。これらは大別15ヶ所、細分26ヶ所の石器ブロックからなるが、明確に可視的な遺物集中としてのブロックを把握し得なかった。先土器時代石器群研究の基本的単位であるブロックを明確にし得ないということは出土した石器群の分析にあたり、分析視点が微妙に振れる結果となり、石器群を完全に消化できていない状態となっている。

出土した石器群は全体の94%を安山岩が占めるが、他に緑泥片岩、チャート、凝灰岩、黒曜石等がわずかに見られる。こうしたあり方は赤城山麓一帯のBP(板鼻褐色軽石層)下位に位置する石器群にあっては一般的なものと思われ、上位の石器群が豊富な石材から構成されるのと対照的である。石器群は多量の剥片、砕片が出土し、総計1894点で全体の約93%を占めている。器種組成は比較的単純で、ナ

イフ形石器、基部・側縁部整形石器、局部磨製石斧を主体に若干の掻器、彫器が出土している。

出土した石器群の示準石器的な器種となっているナイフ形石鐮及び基部・側縁部整形石器は同一の石器群を構成するものである。これらの石器の平面的分布は極めて特徴的で、ナイフ形石器は遺跡内に搬入されたもので、同様に搬入された縦長剥片とともに一ヶ所(15ブロック)に集中して出土している。一方、基部・側縁部整形石器は3点が集中する(14ブロック)のみで、多くは環状に分布する2・4・7・8ブロックに出土している。層位的見解より岩宿・和田遺跡出土石器群が相互に補充する関係にあり、両者は同一の空間上に位置付けられることを出土した石器群は示していると思われる。本書で基部・側縁部整形石器とした石器は県下にくつつかの遺跡で出土例が見られる。同様な石器は全国的に広く分布し多少の様相が異なる点もあるが、同一の技術基盤に立つ石器群として扱えられる可能性がある。和田遺跡から出土した石器群はこの一部に該当する。

敲石は総計して21個が出土している。の中には1000gを超える1例が含まれる。一般的に1000gを超える礫が敲石として用いられることは稀である。ほかに出土した敲石は石器製作址の様相の強い外縁に確認されたブロックに伴出するというより、中央部により多くが出土している。形状(礫重量)からこれらの敲石には大中小のヴァラエティーが認められ、形状差が石器製作上の作業段階に応じて用いられたとするのが妥当であると思われるが、出土状況からは根拠に乏しい。

「配石」は計3点が出土している。一般に「配石」は礫重量が1000gを超える非焼成礫であるとされるが、1点(10点からなる接合例)、第I文化層から出土した礫群と同様の割れの見られる礫が出土している。これらは同一ブロック内に出土したものであるが、集中した出土状況は示さない。「配石」として同一に扱う点で問題はあるが、敲石とした中に1000gを超えるものが存在し、「配石」・「敲石」とも出土礫として扱えることも必要かもしれない。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

表5 第II文化層ブロック別器種組成

器種 ブロック	ナイフ 形石器	側縁整 形石器	編 器	形 器	目的的 削 片	調整痕 有削片	使用痕 有削片	局部磨 製石種	石片磨 製削片	削 片	敲 石	石 板	剥 片	砕 片	合 計
1											4 (7)	1	118	75	194
2 a						2					1	1	61	67	130
b											3	7	27	39	
c											2	20	17	39	
d											1 (2)	7	43	27	79
3				1							1	2	19	11	34
4 a			1				1					2	33	37	74
b							1						11	12	24
c					1						1	6	55	41	104
d		2											40	40	82
5											1 (3)	1	23	28	53 (3)
6												2	9	3	14
7 a					1				2			1	37	18	59
b												1	11	12	24
c					1								21	7	29
d												1	30	16	47
e		2				1							58	44	105
f								1 (7)	1			1	55	64	127
8 a					1						1	4	80	62	148
b					1						1	18	4	24	24
c								1	5		1	27	19	55	55
d		2									1	9	4	15	15
9		1	1		2							1	11	4	20
10												1	16	7	24
11								1				2	24	15	42
12								1				1	14	25	41
13					2	1			1		1	1	59	60	125
14	1	2										2	48	11	64
15 a	2				8						3		25	9	47
b	5				7			1	4		2	2	28	16	63
c	1				1			1	1		1	1	36	17	56
d	1				5			1	7		2		7	1	24
e	1				4				1				6	3	15
ブロック外		1		1	1							2	28	3	36
合 計	11	11	2	2	35	4	2	6	22	1		50	1087	806	2039

敲石の欄の4(7)は4例7点を表す。

4-2 石器ブロック

第II文化層を構成する石器は総計2039点がVI層からVIII層にかけて出土している。一部「ブロック」として明確に区分し得るものも見られるが、多くは集中部を形成するにもかかわらず、石器ブロックが相

互に接した状態に遺存しているため、すべてを明確に区分し得ない状況となっている。ここでは一応、鈴木忠司氏が「寺谷遺跡」で用いた方法により石器ブロックの区分を行ったが明確さに欠けるため様々な矛盾を内包するものと思われる。結果的に本

書の分析では大別15ヶ所、細別26ヶ所に及ぶ石器ブロックを認めることとなった。

石器群は概ね直径50m程の範囲に遺状にめぐる。中央付近に「敲石」「配石」等の存在が見られるほか、局部磨製石斧・搬入石器等の特徴的な石器の出土する地点と、石器が全く出土しない地点が認められた。地点により異なる石器が片寄って存在することも指摘できる。遺存した石器群は決して単純にすべてを残しているわけではないが、様々な背景としての人の動きを示唆するものとなっている。

5ブロック(図55)

Q・R-33Gを中心に6グリッドに分布する。台地縁辺から60m程内側に入った33・34ラインで確認された5ヶ所の石器ブロックのうち、最も北側に位置する。ブロックは長径7.5m、短径2.5m程の長円形状に分布する。石器はVI層からVIII層にかけて40cm程の幅をもって出土している。VII層下位に最も多く出土している。ブロックは総数55点の石器よりなり石核1点、裂片23点、砕片28点、敲石1例3点から構成

されている。ブロックは散漫に分布する傾向にあるが、R-33Gの中央以東の敲石を中心とした裂片・砕片の集中部と、以西の分布域に細分が可能であるかもしれない。母岩別資料の分布は安山岩4が42点と圧倒的に多くを占め他に安山岩7が2点、安山岩8が1点、網雲母片岩2点、頁岩・安山岩2が5点からなる。石器の資料接合は3例7点がブロック内で接合している。

6ブロック(図55)

R・S-34Gに分布する。明確な分布域を示し、ブロックは長径3.2m、短径1.0m長円形状に分布する。石器はVI層からVIII層にかけて30cm程の幅をもって出土しているが、VII層下位に最も多く出土している。ブロックは総計14点の石器よりなり、石核2点、裂片9点、砕片3点から構成されている。

母岩別資料の分布は安山岩4が3点、安山岩7が2点、安山岩8が3点、その他の安山岩が4点、チャート1が2点からなる。石器の接合資料は2例5点がみられ、1例は9ブロックと接合関係にある。

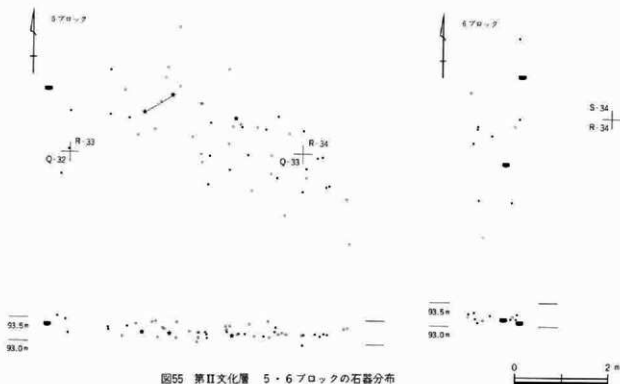


図55 第II文化層 5・6ブロックの石器分布

II 先土器時代の遺物と遺物分布

9ブロック(図56)

N-41Gを中心に3グリットに分布する。台地縁辺に近い40・41ラインで確認された3ヶ所の石器ブロックのうち、最も南側に検出された。ブロックは長径4m、短径1.5m程の範囲に長円形状に分布する。石器はVI層からVIII層にかけて40cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。

ブロックは総計20点の石器よりなり、側縁部整形石器1点、搔器1点、石核1点、剥片13点、砕片4点で構成されている。側縁部整形石器は黒曜石製で他地点から搬入されたものと思われる。ブロックを構成する母岩別資料は安山岩が4が4点、安山岩7が1点、その他の安山岩が12点、黒曜石2が1点、チャート1が2点で、少なくとも5種類の母岩別資料が認められる。

石器の接合はブロック内で接合するもの1例2点、2C+9+10ブロック間で接合するもの1例4点を確認している。

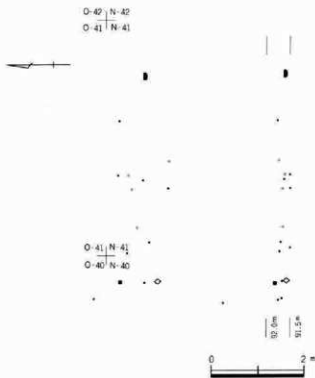


図56 第II文化層 9ブロックの石器分布

10ブロック(図57)

N・0-37Gを中心グリットに分布する。環状に分布する石器ブロックのほぼ中央に位置する。石器ブロックは散漫な状態で検出されたが比較的明確にブロックを把握することができた。ブロックは長径4m、短径5m程の範囲に長円形状に分布する。石器はVI層からVII層にかけて40cm程の高低差をもって出土したが、VII層に最も多く出土している。

ブロックは総計24点の石器よりなり、石核1点、剥片16点、砕片7点で構成されている。ブロックを構成する母岩別資料は安山岩7が4点、その他の安山岩が20点で、少なくとも2種類の母岩別資料が確認されている。

石器の接合はブロック内で接合する2例5点のほか、1+10、2C+9+10ブロック間で接合する2例15点を確認されている。

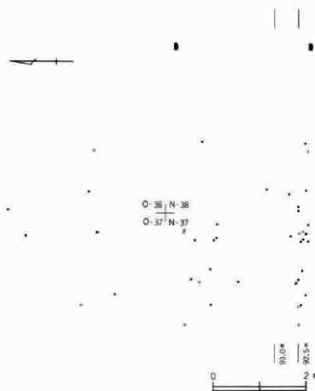


図57 第II文化層 10ブロックの石器分布

11ブロック(図58)

S-35Gに分布する。Sラインに確認された4ヶ所の石器ブロックのうち、最も西側に検出された。ブロックは長径5m、短径3m程の範囲に不整形形状に集中して分布し、比較的容易にブロックを把握することができた。石器はVI層からVIII層にかけて40cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。

ブロックは総計42点の石器よりなり、局部磨製石斧1点、接合関係のある石核1例2点、剥片24点、砕片15点で構成されている。局部磨製石斧は石器ブロックのほぼ中央に出土している。ブロックを構成する母岩別資料は安山岩7が14点、安山岩8が6点その他の安山岩が20点、絹雲母片岩1点、石炭片岩1点で、少なくとも5種類を確認している。

石器の接合はブロック内で接合する3例6点の他6+11、11+15aブロック間に4例17点を確認されており、15aブロックとの間に密接な関係をもつと思われる。

12ブロック(図58)

S-36・37Gに分布する。Sラインに確認された4ヶ所の石器ブロックの中央付近に検出された。ブロックは長径4m、短径2m程の範囲に不整形形状に集中して分布し、比較的容易にブロックを把握することができた。石器はVI層からVIII層にかけて60cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位からVIII層上位に最も多く出土している。

ブロックは総計41点の石器よりなり、局部磨製石斧1点、石核1点、剥片14点、砕片25点で構成されている。局部磨製石斧は石器ブロックの周縁に単独で出土している。ブロックを構成する母岩別資料は安山岩3が1点、その他の安山岩39点、絹雲母片岩1点で、少なくとも4種類を確認している。

石器の接合はブロック内で接合する1例2点のほか、2a+12ブロック間に40mの距離を隔てて確認されている。

ブロックの規模および、石器組成など11ブロックと近似する内容を示すが、母岩別資料接合関係は必ずしも近似するものとなっていない。

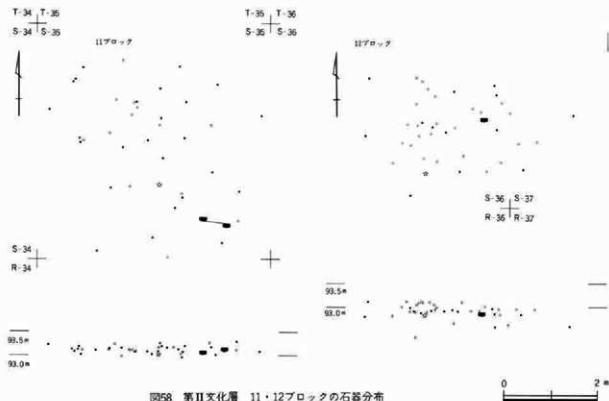


図58 第II文化層 11・12ブロックの石器分布

II 先土器時代の遺物と遺物分布

13ブロック(図59)

S-37・38Gに分布する。Sラインで確認された4ヶ所の石器ブロックの中央付近に検出された。ブロックは長径6m、短径4m程の範囲に不整形形状に分布する。石器はVI層からVIII層にかけて70cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位からVIII層上位に最も多く出土している。

ブロックは総計125点からなり、局部磨製石斧刃部砕片1点、調整痕ある剥片1点、石核1点、目的的剥片2点、敲石1点、剥片59点、砕片60点で構成されている。ブロックを構成する母岩別資料は安山岩2が15点、安山岩4が2点、安山岩6・7が各1点、凝灰岩1が6点、チャート2が1点、その他の安山岩97点、網雲母片岩2点が出土している。8種類を確認している。石器の接合は基本的にはブロック内で接合するが、7a+13、13+14、13+15ブロック間に接合関係が認められる。8例25点が接合する。



図59 第II文化層 13ブロックの石器分布

14ブロック(図60)

Q・R-38Gを中心に4グリットに分布する。ブロックは長径6m、短径5m程の範囲に不整形形状に分布する。石器はVI層からVII層にかけて70cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位からVIII層上位に最も多く出土している。

ブロックは総計64点からなり、ナイフ形石器1点、側縁整形石器2点、石核2点、剥片48点、砕片11点で構成されている。ブロックを構成する母岩別資料は比較的単純で安山岩7が1点、網雲母片岩3点、その他の安山岩60点で、少なくとも3種類を確認している。石器の接合は、13+14、4a+14+15aブロック間に認められている。4例9点が接合する。

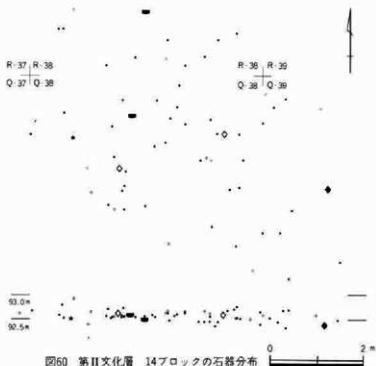


図60 第II文化層 14ブロックの石器分布

8ブロック(図61)

石器の集中部は4ヶ所程明らかに認められるが、相互に近接するため区分し得なかった。石器はO・P Q-40・41Gを中心に9ブロックに区分する。

〔8aブロック〕P・Q-40・41Gに位置し、総計148点が出土する。ブロックは目的制片1点のほか、石核、敲石、剥片、砕片で構成される。石器の接合は基本的にはブロック内で接合するが、7f+8b+15Cブロック間に接合関係が認められる。

〔8bブロック〕P-40・41Gに位置し、総計24点が出土する。ブロックは、目的制片1点のほか、

石核、剥片、砕片で、構成される。8a+8b間に接合関係が認められる。

〔8cブロック〕O・P-41Gに位置し、総計55点が出土する。ブロックは側縁整形石器2点、局部磨製石斧1点の他、石核、剥片、砕片から構成される。8c+13ブロック間に接合関係が見られる。

〔8dブロック〕O-39・40Gに位置し、総計15点が出土する。ブロックは側縁整形石器1点のほか敲石、剥片、砕片から構成される。石器の接合は認められない。

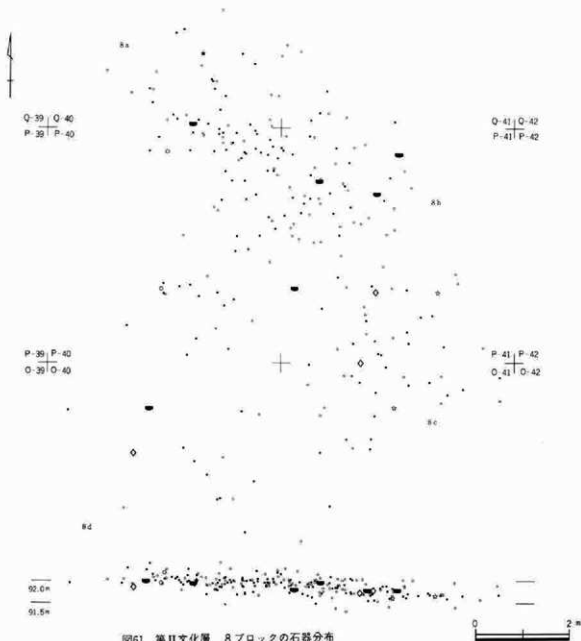


図61 第II文化層 8ブロックの石器分布

II 先土器時代の遺物と遺物分布

1 ブロック(図62)

環状に分布する石器群の東南部、Mラインに確認された石器ブロックのうち、最も東側に位置する。L・M-38・39・40Gの6ヶ所のグリッドに検出された。石器ブロックは単純に近い状態で検出され、比較的容易にブロックを把握することができた。ブロックは直径10m、短径6m程の範囲に不整形形状に分布する。石器の出土状況は基本的には他の石器ブロックと同様で、VII層下位からVIII層上位に最も安定した状態で出土している。が、ブロックに重複して4点の石器がIVb層から出土している。これらに接合関係は認められず、出土石器も剥片、碎片であり必ずしも明らかにし得なかったが、石器表面に認められる風化の状態、IVb層出土石器とVII層出土石器の接合例が他にも認められることから一応本ブロッ

クに含めておいた。

ブロックは石核1点、剥片118点、碎片75点、敲石4例7点で構成されており、定形化した石器は出土していない。敲石はいずれも欠損し、1例を除いて形状等明らかでないが、700gを越える大形のもの100~200g程の小形のものがあり、大小のヴァラエティーをもっている。ブロックを構成する母岩別資料は安山岩4が22点、その他の安山岩176点、絹雲母片岩3点、安山岩5が1点、砂岩1点、凝灰岩1点で、少なくとも6種類を確認している。

石器の接合は基本的にはブロック内で接合するが1+2d、1+3、1+10ブロック間でも接合する。16例60点が接合する。

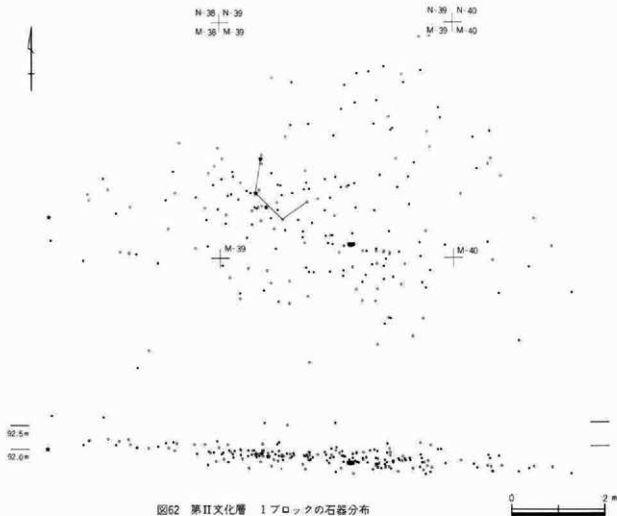


図62 第II文化層 1ブロックの石器分布

3ブロック(図63)

M-33・34・35Gの3グリットに分布する。Mラインに確認された石器ブロックのうち、最も西側に検出された。ブロックは一部で2aブロックと接しており、比較的散漫な状態で、長さ5m、短径2m程の範囲に長円形状に分布する。石器はVI層からVII層にかけて50cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。ブロックは、彫器1点、削片1点、接合関係のある石核2点、剥片19点、碎片11点で構成され、総計34点が出土している。ブロックは少なくとも6種類の母岩別資料から構成され、安山岩3が2点、安山岩4が2点、安山岩6が11点、チャート1が8点、凝灰岩3が1点で、その他に分類し得なかった安山岩が12点出土している。接合は基本的にはブロック内で接合するが、1+3ブロック間に1例接合関係が認められた。4例12点が接合する。

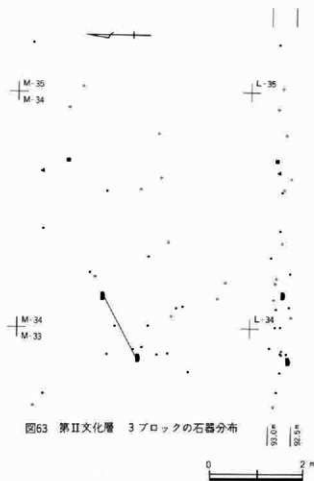


図63 第II文化層 3ブロックの石器分布

7ブロック(図64)

石器の集中部は3ヶ所程明らかに認められるが、相互に近接するため明確に区分し得なかった。石器はS-39、R-40、Q-41Gを中心に9グリットに分布する。いずれもVI層からVII層にかけて80cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。ブロックはS-39Gを中心に位置する。

群は8m程の範囲に中央付近に遺物の空白部をもって分布する。石器の出土状況からさらに4ヶ所の小群からなる。R-40Gに位置する一群および、Q-41Gに位置する一群は比較的良好に集中して分布する。

[7aブロック] S-39Gに位置し、総計59点が出土している。ブロックは磨製石斧2点、石核1点、目的的削片1点、剥片37点、碎片18点で構成されている。接合は基本的にはブロック内で接合するが、7a+7b、7a+7c、7a+7b+7c+13ブロック間に接合関係が認められる。4例23点が接合。

[7bブロック] S-39-40Gに位置し、総計24点が出土している。ブロックは石核1点、剥片11点、碎片12点で構成されている。石器の接合は7a+7b+7d間に1例3点が認められる。

[7cブロック] R・S-38・39Gに位置し、総計29点が出土している。ブロックは目的的削片1点、剥片21点、碎片7点で構成されている。石器の接合はブロック間で接合し、7a+7c、7b+7c、7a+7b+7c+13、7c+15bブロック間に接合関係が認められる。4例22点が接合する。

[7dブロック] R・S-39Gに位置し、総計47点が出土している。ブロックは石核1点、剥片30点、碎片16点で構成されている。石器は基本的にはブロック内で接合するが、7c+7d、7d+7eブロック間に接合関係が認められる。3例9点が接合する。

[7eブロック] R-40Gに位置し、総計105点が出土している。ブロックは割線整形石器2点、加工痕ある削片1点、剥片58点、碎片44点で構成されている。石器の接合はブロック間で接合し、7d+7e、7e+7f間に接合関係が認められる。6例14点が

II 先土器時代の遺物と遺物分布

接合する。

〔7fブロック〕Q・R-40・41Gに位置し、総計127点が出土している。ブロックは磨製石斧1点、石核1点、敲石6点、剥片55点、砕片64点で構成されている。石器の接合はブロック間で接合し、2c+2d+7f、4a+7f、7e+7f、7f+14、7f+8a+8b間に接合関係が認められる。6例16点が接合する。

2ブロック(図65)

石器の集中部は4ヶ所程明らかに認められるが、相互に近接するため明確に区分し得なかった。石器はL-34~38Gを中心に10グリットに分布する。いずれもVI層からVIII層にかけて75cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。ブロックは長径6m、短径5m程の不整形形状に分布する一群(a・d)とこれに挟まれるように直径4m、短径2m程の長円形状に分布する一群(b・c)が検出されている。

〔2aブロック〕L-34-35Gに位置し、総計130点が出土している。ブロックは、石核1点、敲石1点、剥片61点、砕片67点で構成されている。基本的にはブロック内で接合するが、2a+2b、2a+12ブロック間で各1例が接合する。9例21点が接合する。

〔2bブロック〕L-35-36Gに位置し、総計39点が出土している。ブロックは加工痕ある剥片2点、石核3点(うち2点が接合する)、剥片7点、砕片27点で構成されている。接合は基本的にはブロック内で接合するが、2a+2b、2b+2cブロック間で各1例が接合する。4例14点が接合する。

〔2cブロック〕L-36Gに位置し、総計39点が出土している。ブロックは石核2点、剥片20点、砕片17点で構成されている。接合は基本的にはブロック内で接合するが、2b+2c、2c+9+10ブロック間で各1例が接合する。4例11点が接合する。

〔2dブロック〕L-37Gに位置し、総計79点が出土している。ブロックは石核7点(うち3点が接合する)、剥片43点、砕片27点のほかに、敲石1例2点が

出土している。接合は基本的にはブロック内で接合するが、2d+7eブロック間で1例接合する。4例17点が接合する。

4ブロック(図66)

石器の集中部4ヶ所が認められる。これらは相互に近接して存在するため明確に区分し得なかった。石器は最も台地中央に奥まった33ラインに検出され6グリットに分布する。ブロックは4m程の範囲に比較的良好に集中して出土した。いずれもVI層からVIII層にかけて70cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。

〔4aブロック〕P・Q-32-33Gに位置し、総計74点が出土している。ブロックは搔器1点、使用痕ある剥片1点、石核2点、剥片33点、砕片37点で構成される。

〔4bブロック〕P-33Gに位置し、総計24点が出土している。ブロックは使用痕ある剥片1点、剥片11点、砕片12点で構成される。

〔4cブロック〕O-33Gに位置し、総計104点が出土している。ブロックは石核6点、目的剥片1点、敲石1点、剥片55点、砕片41点で構成される。

〔4dブロック〕N-33Gに位置し、総計82点が出土している。ブロックは側縁整形石器2点、剥片40点、砕片40点が出土している。

15ブロック(図67)

石器の集中部は5ヶ所程明らかに認められるが、相互に近接するため明確に区分し得なかった。石器はQ-36Gを中心に9グリットに分布する。ブロックは他の地点から搬入されたと思われる局部磨製石斧、ナイフ形石器、目的剥片をはじめ、配石等外縁の石器ブロックに見られない状況を呈している。いずれもVI層からVIII層にかけて60cm程の高低差をもって出土したが、VII層下位に最も多く出土している。ブロックはいずれも径5m程の範囲に分布する。

〔15aブロック〕総計47点が出土している。ブロックはナイフ形石器2点、目的剥片8点、剥片25点

4. 第II文化層の調査

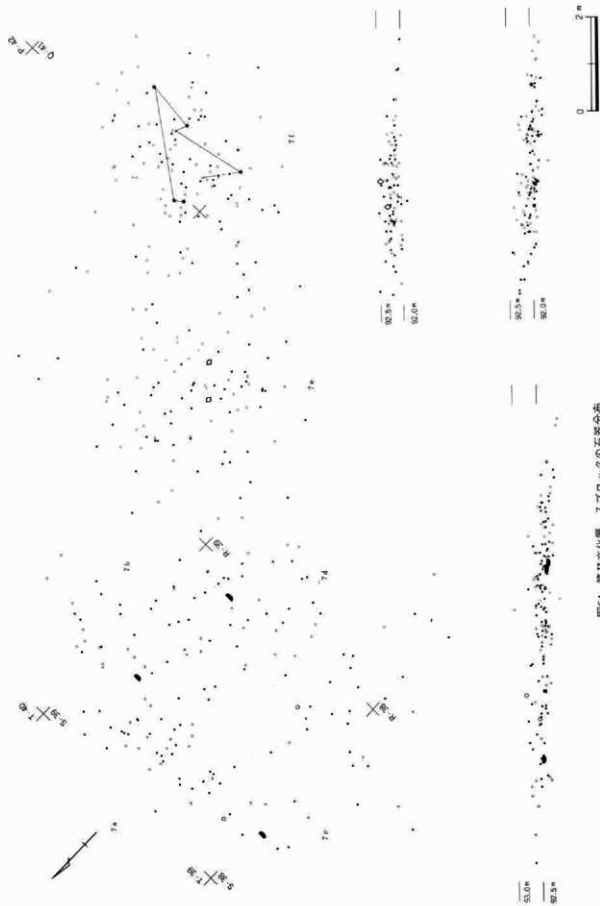


図54 第II文化層 7ブロックの石器分布

II 先土器時代の遺物と遺物分布

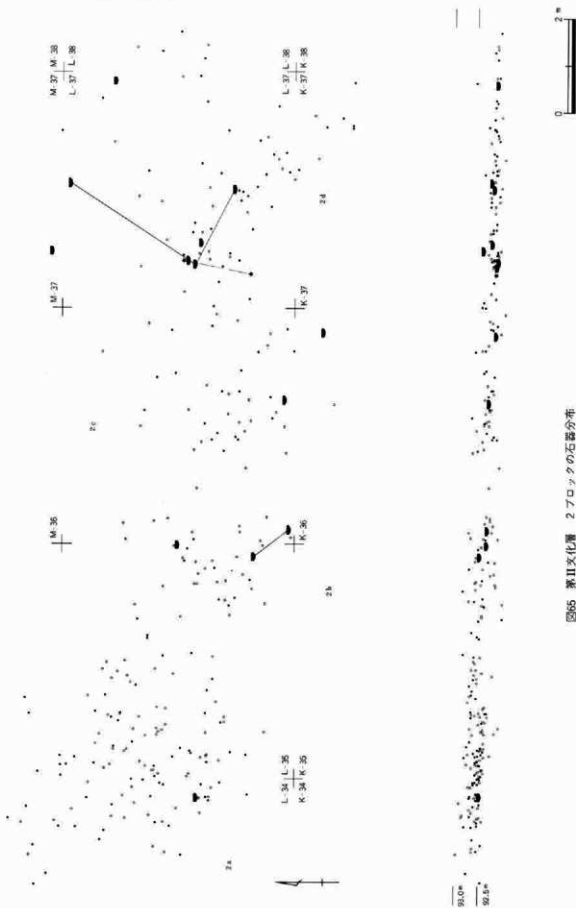


図65 第II文化層 2プロットの石器分布

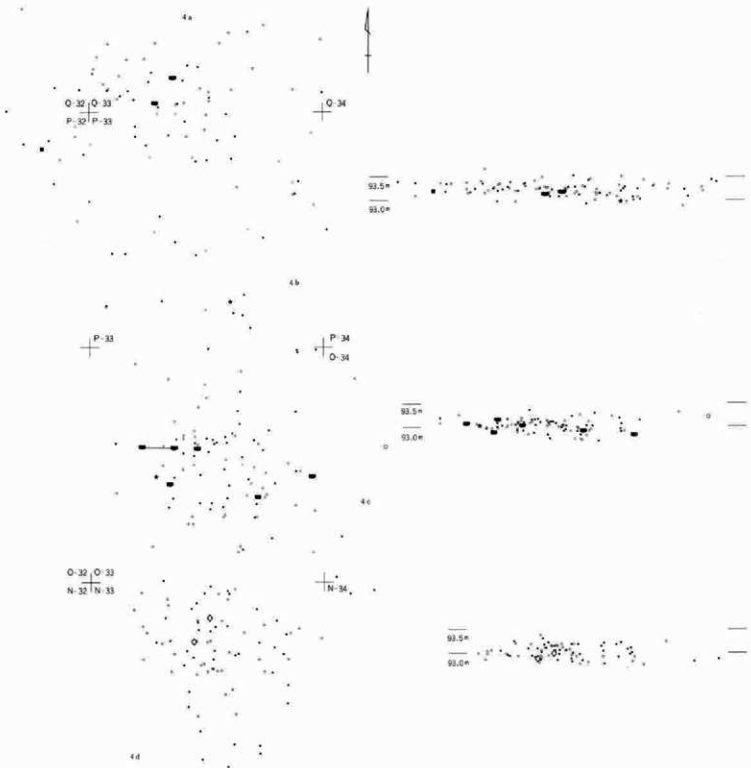


図66 第II文化層 4ブロックの石器分布

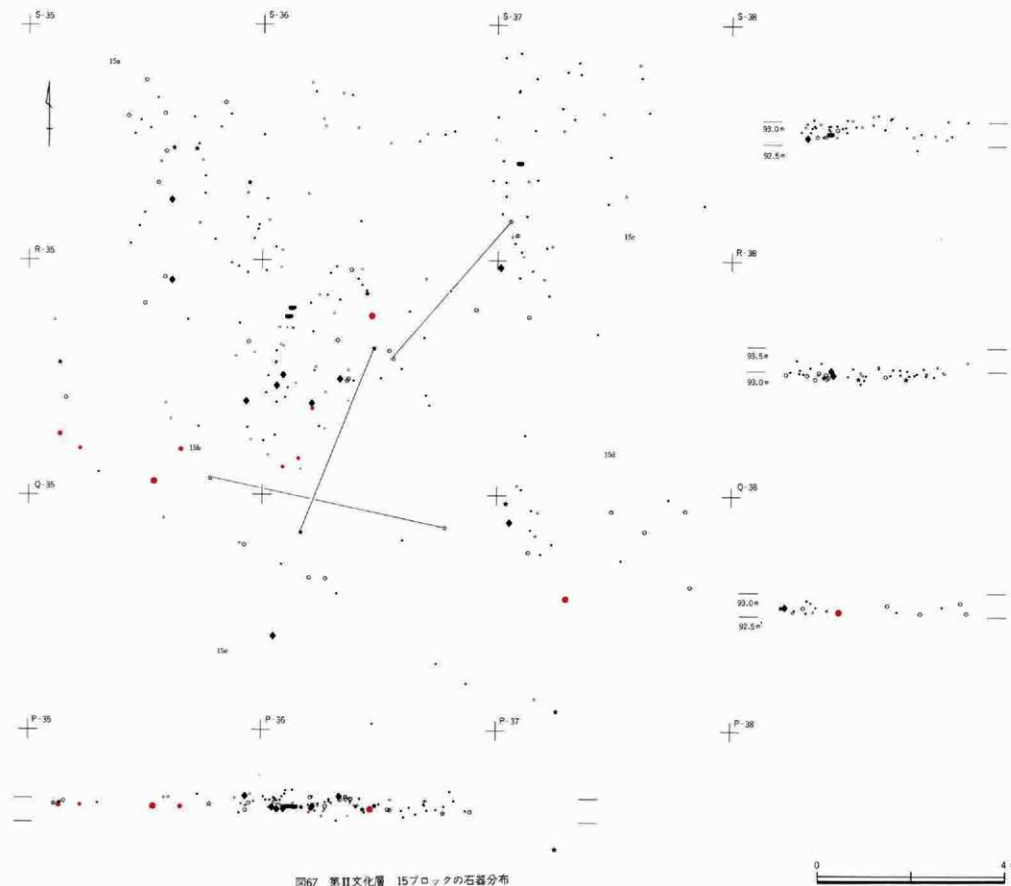


図67 第II文化層 15ブロックの石器分布

砕片9点のほか敲石3点で構成されている。石器の接合は11+15a、11+15a+15bブロック間に接合関係が認められる。5例30点が接合する。

[15bブロック] 総計65点が出土している。ブロックは局部磨製石斧1点、同再生剥片4点、ナイフ形石器5点、石核1点、目的的剥片7点、敲石2点、剥片29点、砕片16点で構成されている。石器の接合は基本的にはブロック内で接合するが、7c+15b、11+15a+15b、15b+15e、15b+15e+15dブロック間に接合関係が認められる。7例35点が接合[15cブロック] 総計58点が出土している。ブロックは局部磨製石斧1点、同再生剥片1点、ナイフ形石器1点、石核1点、目的的剥片1点、剥片36点、砕片17点で構成されている。石器の接合は基本的にはブロック内で接合するが、8c+15c、15b+15c+15dブロック間に接合関係が認められる。3例10点が接合する。

[15dブロック] 総計24点が出土している。ブロックは局部磨製石斧1点、同再生剥片7点、ナイフ形石器1点、目的的剥片5点、敲石2点、剥片7点、砕片1点で構成されている。石器の接合はブロック内で接合する1例3点のほか、15b+15c+15dブロック間に接合関係が認められる。2例6点が接合。

[15eブロック] 総計15点が出土している。ブロックはナイフ形石器1点、局部磨製石斧再生剥片1点、目的的剥片4点、剥片6点、砕片3点で構成される。石器の接合は15b+15eブロック間に接合関係が認められる。1例4点が接合する。

4-3 第II文化層の石器

ナイフ形石器(図68・69)

総計7点が出土している。安山岩製の1点(図69-5)を除いて、遺跡内に搬入されたと思われる黒色頁岩および凝灰岩を素材としている。ナイフ形石器は先端部に調整加工を施す例(図68-5、図69-1)も認められるが、基本的には、石器基部に調整加工を施し、剥片形状を大きく変化させることなく用いることが多い。

1は先端部を欠損するため全体の形状は不明であるが、比較的形の整った縦長の剥片を素材とすると思われる。全体に風化が著しく、また石器表面にヒビ割れが生じ火熱を受けた可能性もあり、剥離面の観察は困難となっている。剥片は平坦な剥離面を打面として作出されている。基部側の両側縁にわずかに調整加工を施し、打面を除去することなく用いている。黒色頁岩製。15bブロック出土。

2は先端部を節理面で欠損するが、比較的形の整った縦長の剥片を素材とすると思われる。剥片は平坦な剥離面を打面として作出されている。剥片頭部および基部側の両側縁に微細な調整加工を施し、打面を除去することなく用いている。剥片頭部に見られる調整加工は丁家で、通常言われるように剥片剥離時に施される調整とは異なる可能性がある。安山岩製であるが同一の母岩は遺跡内には見られず、搬入されたと思われる。15aブロック出土。

3は比較的形の整った縦長剥片を素材とする。全体に風化が著しく剥離面等の観察が困難であるが、剥片は平坦な剥離面を打面として作出されている。左側縁に微細な調整加工が施される。器体の先端部に調整加工は施されないが、他の剥離面を良好に取り込むことで機能部が確保されたものと思われる。凝灰岩製であるが同一の母岩は遺跡内に見られず、搬入されたと思われる。15dブロック出土。

4は比較的形の整った縦長の剥片を素材とすると思われる。剥片は平坦な剥離面を打面として作出されている。基部側の両側縁に微細な調整加工を施し、打面を除去することなく用いている。器体先端部に調整加工は施されないが、他の剥離面を良好に取り込むことで機能部が確保されたものと思われる。黒色頁岩製。15bブロック出土。

5は形の整った長大な縦長剥片を素材とし、先端部にわずかに調整加工が施される。石器は3分割されて出土しているが、分割して用いられたか否か明らかにし得なかった。打面調整、頭部調整は見られない。出土したナイフ形石器の大半が長さ6cm程度でほぼ同一の形状を呈するのに対して、極めて大形

4. 第II文化層の調査

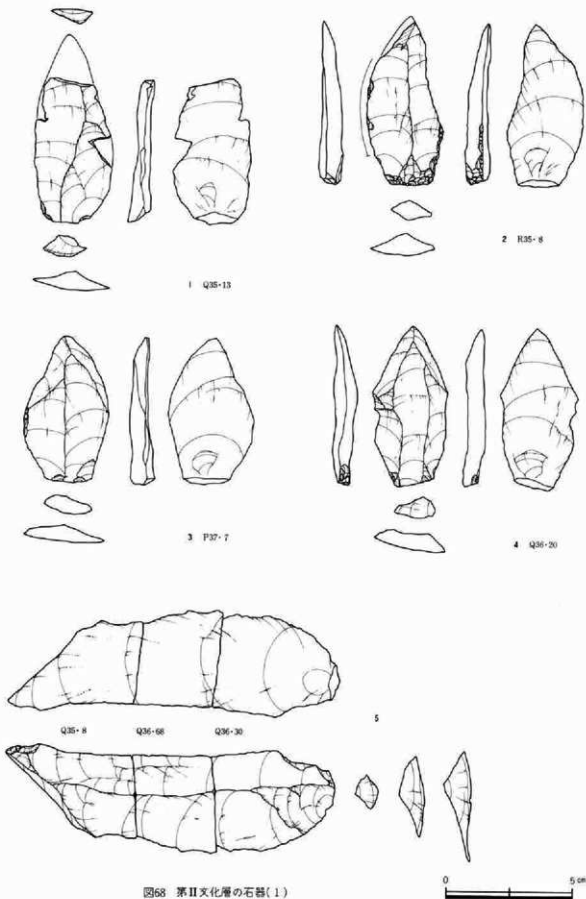


図68 第II文化層の石器(1)

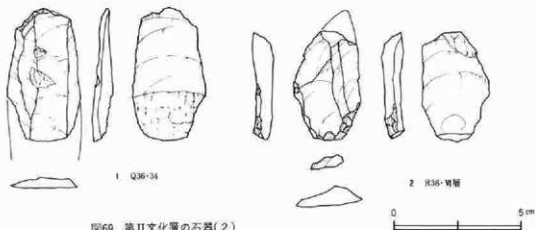


図69 第II文化層の石器(2)

である。器体の先端部は他の剥離面を良好に取り込むことで機能部が確保されている点では他の事例と共通する。安山岩製。15bブロック出土。

図69-1は火熱により器体の下半を欠損するため全体の形状は不明であるが、比較的形の整った縦長剥片を素材とすると思われる。器体の先端部に微細な調整加工が施される。先端部の多くが尖る傾向にあるのに対して、丸味をもちや形状は他と異なるとも言える。黒色頁岩製。15bブロック出土。

2は器体上半を調整時に欠損しているため全体の形状は不明であるが、比較的形の整った縦長剥片を素材とすると思われる。剥片は平坦な剥離面を打面として作出され、基部側の両側縁に微細な調整加工が施される。打面調整、頭部調整は見られない。ブロック内で目的剥片と接合するが、他と同様に嵌り込まれたと思われる。受熱剥片。黒色頁岩製。15bブロック出土。

基部・側縁部整形石器(図70)

総計7点が出土している。石器石材は黒曜石製の1点を除いて、すべて安山岩を素材とする。ナイフ形石器の多くが黒色頁岩製でいずれも環状に配列する石器ブロックの内側に検出された同一のブロック(15b・d)から出土し、大半が「搬入品」であると見られるのに対し、基部・側縁部整形石器は14ブロックから出土した3点(図2・4・7)を除いたほかは、環状に配列する石器ブロック(2・4・7ブロック)から出土している。

1は不純物を多く混入する特徴的な黒曜石を素材とする。素材となった剥片の形状は不明であるが、左側縁に折断面に似た古い剥離面ないし節理面が見られる。全体の形状は台形状となっている。調整加工は右側縁を中心に平坦な剥離が施され、打面部を除去している。石器の機能部は剥片の打面部に直角に交わる側縁に見られる。黒曜石製。ブロック外(K-38G)出土。

2は先端が尖る幅広の縦長剥片を素材とすると思われる。素材となった剥片の打面部は除去され、この打面側の両側縁を表裏とも平坦な調整加工を施すことにより作出されている。栃木県磯山遺跡で「ペン先形のナイフ形石器」と呼称されたものと同一である。安山岩製。14ブロック出土。

3は横長の剥片を素材とすると思われる。左右両側縁とも折断面が見られ、基部側の両側縁の表裏とも平坦な剥離が施される。全体の形状は台形状となっている。素材となった剥片の打面部はこの折断および平坦な剥離により除去されている。刃部形状は調査時の欠損のため不明であるが、直刃に近いものと思われる。安山岩製。8cブロック出土。

4は先端が尖る幅広の縦長剥片を素材とすると思われる。素材となった剥片は平坦な剥離面を打面として作出され、裏面・基部側の両側縁に平坦な剥離が施されるが、打面部は除去されない。2と同一の範疇で扱えられる。安山岩製。14ブロック出土。

5は横長の剥片を素材とすると思われる。右側縁に折断面が認められ、素材剥片の打面部は折断によ

II 先土器時代の遺物と遺物分布

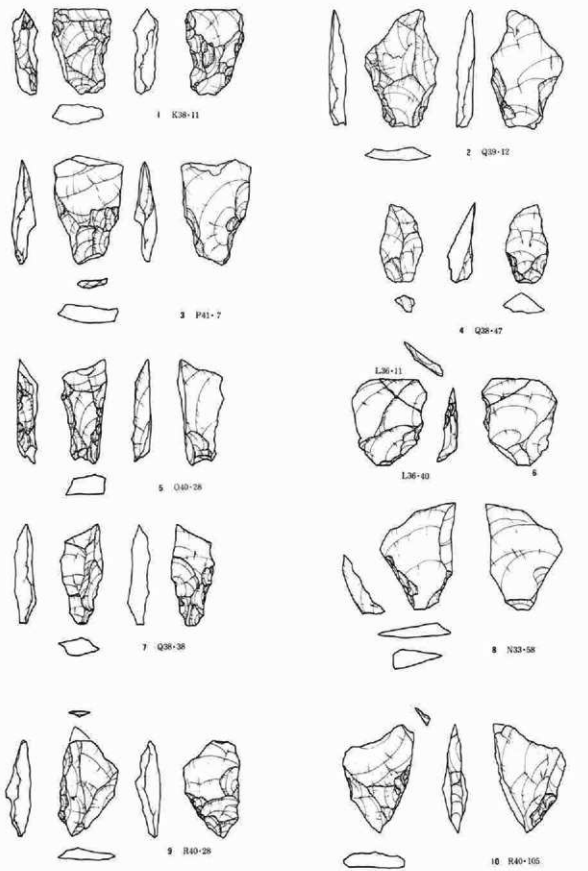


図70 第II文化層の石器(3)

り除去されている。全体の形状は切出状となっている。調整加工は左側縁にプランティング状の粗い調整加工が施され、右側縁に折断面を打面とする浅い平坦な剥離が施される。刃部は器体長軸に対して、左斜刃となっている。安山岩製。8cブロック出土。

6は横長の不定形剥片を素材とするもので、全体の形状は台形状となるが、刃部を部分的に欠損する。素材剥片を構成する剥離面は剥片剥離方向と一致する。調整加工は右側縁を折断後、微細に施される。刃部は器体長軸に対して、直刃状となっている。安山岩製。2b+2cブロック間で接合する。

7は縦長の剥片を素材とするもので、左右両側縁に平坦な剥離が施される。全体の形状は切出状となっている。刃部は器体の長軸に対して左斜刃となっている。器体の調整加工は表→裏の順で表裏とも施され、素材剥片の打面はこれらにより除去されている。安山岩製。14ブロック出土。

8は接合により素材剥片の形状を把握できる唯一のもの(図100参照)である。剥片の形状は横長の不定形なもので、剥片長軸は剥片打面に対して一方に片寄っている。石器は縦位に折断した後に、基部側の両側縁に調整加工が施される。器体に施されたこの調整加工は左側縁の折断面を打面として浅い平坦な剥離が施され、右側縁は粗い剥離が施される。刃部は器体の長軸に対して左斜刃となっている。安山岩製。4ブロック出土。

9は縦長の剥片を素材とし、器体の基部に近い両側縁に平坦な剥離を施すものである。先端部を一部欠損し、器体の長軸に対して右斜刃となっている。調整加工は一部側縁に施されるが、裏面側の加工が主体となっている。素材剥片の打面はこの調整加工により除去されている。安山岩製。7eブロック出土。

10は平坦な剥離面を打面として作出された横長の不定形剥片を素材とする。先端部を一部欠損するが、刃部形状は器体の長軸に対して、左斜刃となっている。右側縁は剥片の折断面を打面として浅い平坦な剥離を施し、左側縁は裏面側に剥片の打面部と表面側の平坦な剥離が整合性をもった状態に取り込まれ

ている。安山岩製。7eブロック出土。

局部磨製石斧(図71~73)

石斧は石斧再加工時に生じる調整剥片を加えて10個体20点が出土し、形状を復元できる石斧は7個体である。これらの中には、再加工の意図は見られるが途中で放棄したものも含まれ、彼らは一般に想像されるよりも多くの石斧を保有したと思われる。これらは1点を除いて石器群の中核的地点と見られる5ヶ所の石器ブロックより出土し、各ブロックを構成する重要な石器器種として存在したと思われる。

図71-1は刃部を欠損し、全体の形状は不明である。石材の性状に則して得られた板状の大形剥片を素材とする。全体の形状は楕円形状を呈し、右側縁には意識的な研ぎ出しによって作出された平坦面が認められる。調整加工は器体の周縁に限って施される。表裏面とも明らかに研磨痕が見られる。現状で105.68gを測る。緑泥片岩製。15cブロック出土。

2は局部磨製石斧の再加工時の状況を示す接合例である。石斧は長幅比が2:1を示す比較的幅広で長大なものと推定される。石斧使用により刃部中央付近から左側縁に向けて折れてしまっている。左右対称なものとして石斧作出時の形状を推定すれば、かなり長大なものになるが、出土した再生剥片が接合しない1点を含めて4点であり、石斧作出時の形状は明らかでない。比較的薄手の板状剥片を素材として用い、調整加工は素材の周縁に限って施されるが、素材の分割面を右側縁としている。刃部は片刃・直刃状となっており、表・裏面とも研磨の単位が明らかにし得ない程度丁寧に研磨が施される。緑泥片岩製。8cブロック出土。

図72-1は平坦な自然面を両側縁とする局部磨製石斧である。板状の剥片を素材とし、調整加工はほとんど施されない。刃部は典型的な片刃・円刃で、研磨の単位がほとんど見られないほど丁寧に刃部を作出している。器体中央部で欠損する。欠損後折れ面を打面として、若干の再生を行った痕跡が認められる。シルト岩製。15d+15eブロック間で接合。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

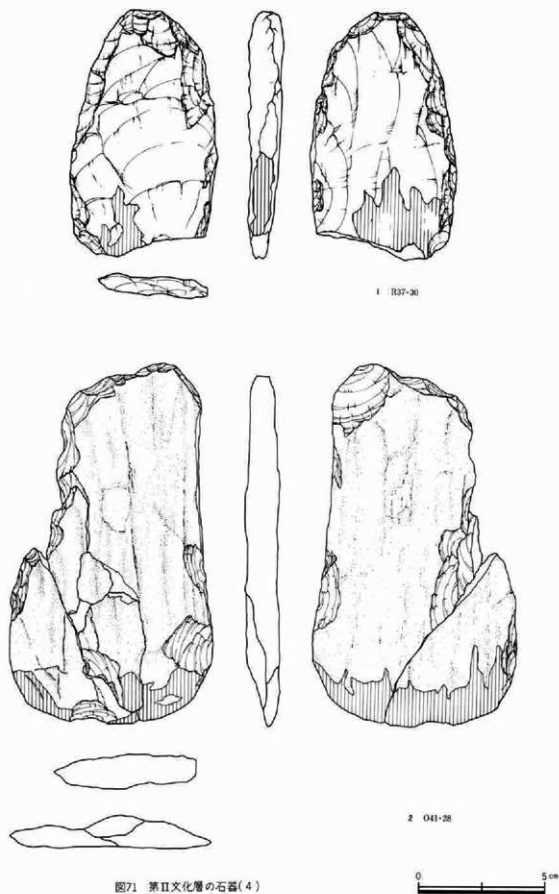


図71 第II文化層の石器(4)

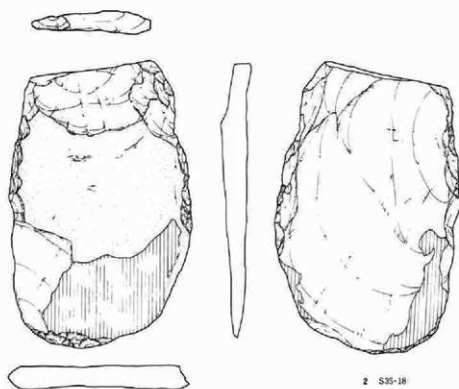
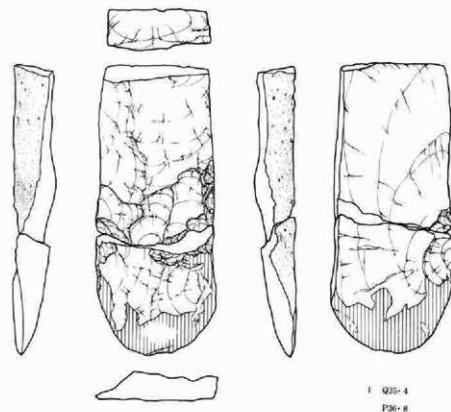


図72 第II文化層の石器(5)



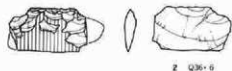
II 先土器時代の遺物と遺物分布



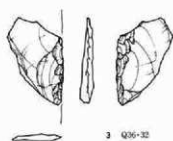
1 Q36-2



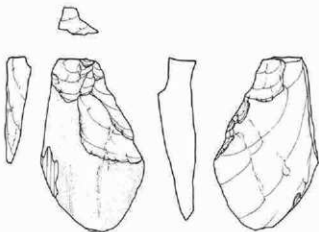
4 S39-73



2 Q36-6



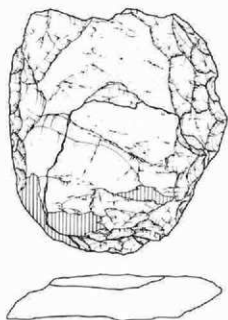
3 Q36-32



5 S36-8



6 S37-2



7 Q36-1

図73 第II文化層の石器(6)



2は石器表面に自然面を大きく残す、大形の不定形剥片を素材とする。石器頭部は分割により形状の規定を行っている。調整加工は素材の側縁に限って施される。刃部は表・裏面ともわずかに研磨痕が認められるだけであるが、意識的な研磨として扱えることができる。刃部はわずかに偏刃状となっている。石墨片岩製。11ブロック出土。

図73-5は小形で他の局部磨製石斧と石材も異なるが、側縁に平坦な分割面をもつことや一部に磨滅痕の見られることから同一の石器器種として認定した。他の局部磨製石斧と同様に横長の剥片を素材とし、石器表面側の一部に施される。この調整剥片はいずれも分割面から施されており、図72-1に見られるように欠損後、再加工されたものとも思われる。刃部は円刃状であるが、鋭角に突出気味である。安山岩製であるが、同一の母岩は遺跡内に見られない12ブロック出土。

6は局部磨製石斧の刃部破片である。欠損のため

全体の形状は不明であるが、片刃・直刃の刃部となっている。黒色頁岩製。13ブロック出土。

7は総計4点からなる接合資料である。右側縁の形状に比べて左側縁は比較的良好に整っている。本例は石斧の再加工例と見られ、裏面を中心に再加工されたものと思われる。研磨痕は左側縁に部分的に認められるが、研磨の単位が認められない程丁寧に研磨が施される。刃部は直刃状に近い形状である。

図73-1~3は石斧再加工時に生じる調整剥片である。1・2とも剥片の一部に研磨痕が見られる刃部調整剥片である。3は研磨痕が見られず、一応、石斧の側縁調整剥片と扱えることができる。1は黒色頁岩。2・3は黒色頁岩製で同一の母岩と思われる。いずれも15bブロックの出土である。

4は剥片端部にわずかに磨滅痕の見られるものである。石器表面に自然面を大きく残し、石斧の刃部の可能性もあるが、断面形が大きく内湾するため断定できない。ここでは剥片端部に磨滅痕を有するも

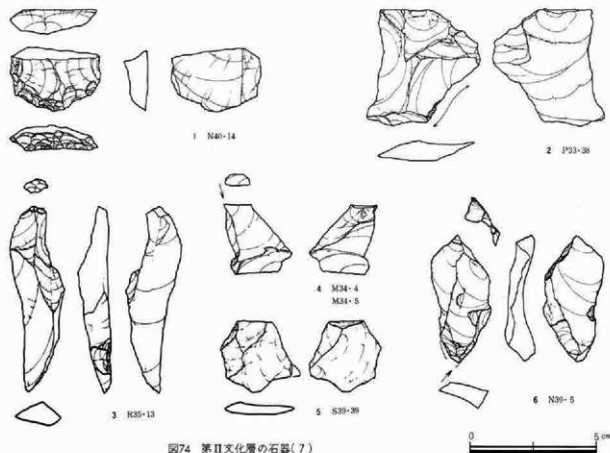


図74 第II文化層の石器(7)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

のとして理解しておく。同一の母岩である剥片が2点出土しており、いずれも剥片端部に摩擦痕が見られる。安山岩製。7 a ブロック出土。

その他の石器(図74)

搔器1点、彫器1点、調整痕ある剥片3点、使用痕ある剥片1点を図示した。調整痕及び使用痕ある剥片は他に3点が確認されている。出土した石器の大半が安山岩で、微細な使用痕等の観察が困難である点を考慮しても全体に占める割合は稀少である。

図74-1は縦長剥片を素材とし、剥片端部に機能部を作出した搔器である。石器の上半を欠損するため全体の形状は不明であるが、比較的整った形状を推定できる。調整加工は比較的丁寧であるが、縦溝状の刻痕は見られず、典型的な事例に比べてやや粗い。安山岩製。9 ブロック出土。

2は不定形な縦長剥片を素材とする。剥片は平坦な剥離面を打面として作出される。剥片に見られる剥離面は剥片の剥離方向と異なり、頻りに打面を移動している。剥片の右側縁に連続的に使用痕が見られる。チャート製で同一の母岩より作出された剥片が1点出土している。4 a ブロック出土。

3は縦長の剥片を素材とする調整痕ある石器。先端部に近い左側縁に連続する調整加工を施す。調整加工は「ブランディング」状で、部分加工のナイフ形石器である可能性も否定できない。安山岩製。15 a ブロック出土。

4は素材剥片の打面部を彫刻刀加撃面として作出された彫器である。剥片は横長の不定形なもので、剥片に見られる剥離面は剥片の剥離方向とは180°異なる。ブロック内で削片と接合する。チャート製。3 ブロック出土。

5は横長の不定形剥片を素材とし、基部側の右側縁にわずかに調整加工を施す。五角形状の形状を呈す。一応、加工痕のある石器としたが、基部・側縁部整形石器の範疇で扱えられる可能性がある。素材となった剥片は平坦な剥離面を打面として作出されたと思われる。安山岩製。7 c ブロック出土。

6は黒曜石製の調整痕のある石器である。一部に自然面を大きく残し、剥片はこの自然面を打面として作出されている。剥片端部は調査時の欠損が見られ明らかでないが、彫刻刀面が形成されている可能性がある。左側縁に微細な使用痕が認められる。

石核(図75～77)

総計49点が出土している。これらの石核は比較的大形の盤状剥片を石核素材とし、同一の原石から複数個作出されたものが圧倒的に多く、分割による場合、原石をそのまま用いる場合等ヴァラエティーに富み、原石の形状に則して盤状の石核素材を得ている。石器群を支えた剥片剥離については必ずしも明らかでなく、すべてを正當に評価し得ていない。ここでは接合しない石核を図示した。

図75-1は比較的厚い盤状の剥片を素材とする柱状を呈す石核である。剥片剥離は正面側を打面として、幅広の小形剥片を作出した後に、この作業面を打面として正面で最終剥離が行なわれている。最終剥離により幅広の剥片を作出する。石核は最終的に分割されて放棄されたと思われる。安山岩製。8 ブロック出土。

2は不定形剥片を素材とする。剥片の側縁を打面とする。剥離痕が正面に認められる。最終的には作業面を下面の平坦面に移動して剥片剥離作業を試みたが一撃で2つに分割してしまい、そのまま放棄されたものと思われる。左側縁に部分的に調整加工が施され、また微細な刃こぼれも認められることから他の用途に用いられた可能性がある。チャート製。3 ブロック出土。

3は盤状剥片を素材とする円盤状の石核である。剥片剥離作業はまず石核素材となった剥片の裏面側で行なわれる。次にこの作業面を打面として正面側で剥片剥離を行っている。この剥片剥離は正面側を全周するものではなく、裏面側の作業面と同様に一部に限って行なわれる。安山岩製。3 ブロック出土。

4は平坦な剥離面を打面として作出された大形の剥片を素材とする石核である。このような断面船底

4. 第II文化層の調査

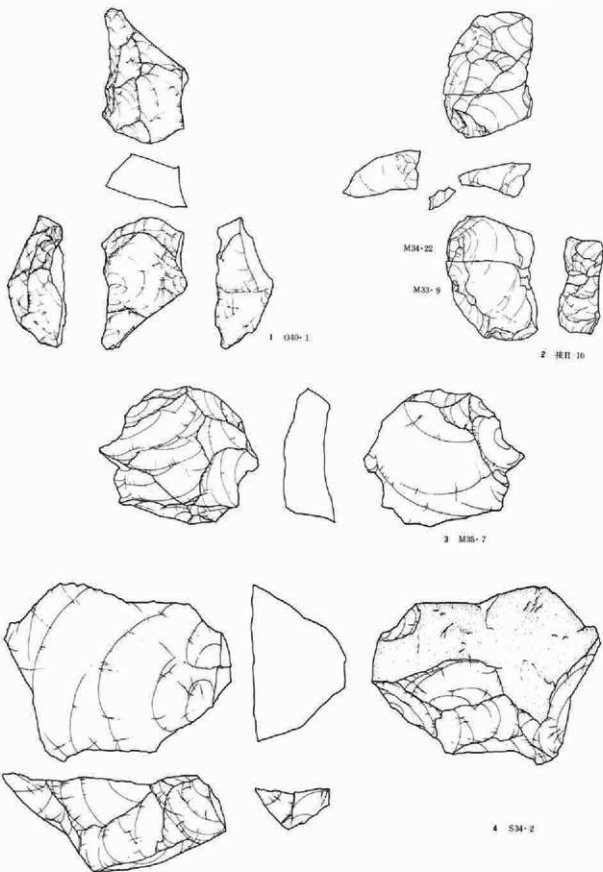


図75 第II文化層の石器(8)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

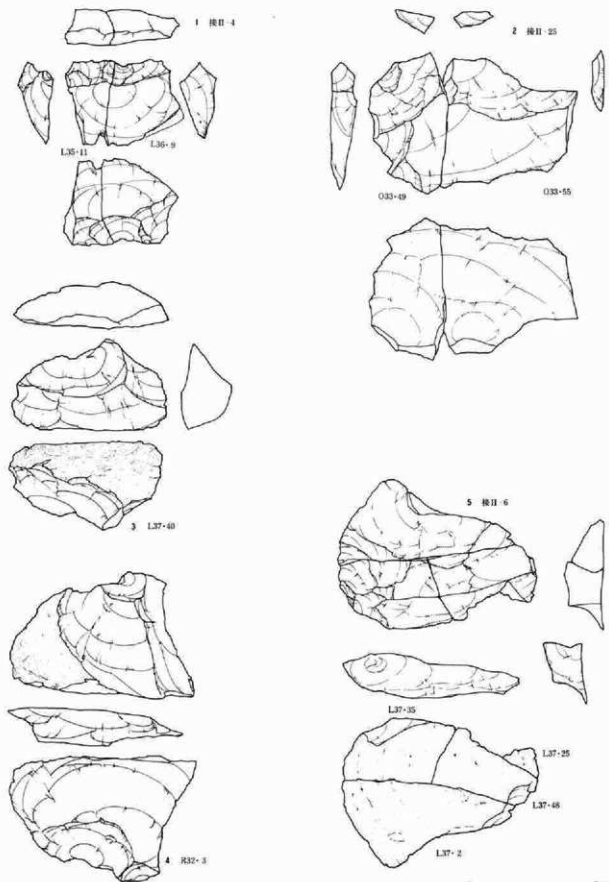
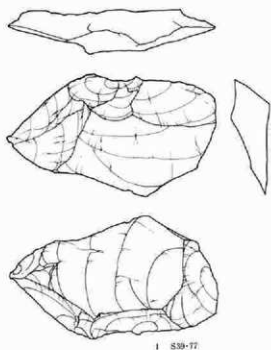
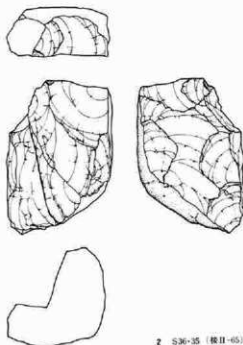


図76 第II文化層の石器(9)

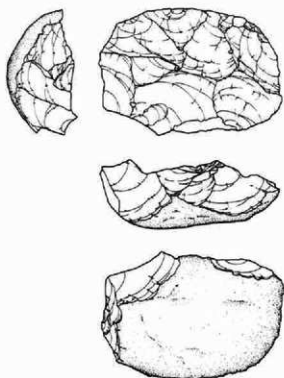
4. 第II文化層の調査



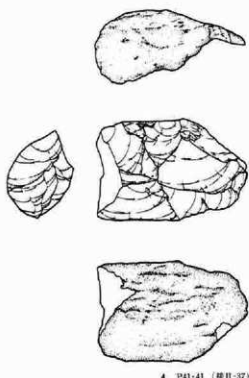
1 S30-77



2 S36-35 (標II-65)



3 O33-89 (標II-26)



4 P41-41 (標II-37)

図77 第II文化層の石器(10)



II 先土器時代の遺物と遺物分布

状を呈し平坦な剥離面をもつ形状の素材は、平坦な剥離面を打面として剥片剥離が進行し、最終的には円盤状の石核形状を呈すと思われる。安山岩製。6ブロック出土。

図76-1は大形の不定形剥片を素材とする石核である。剥片剥離作業面は断面楔状を呈す石核素材である剥片の打面側に設定される。剥片剥離は剥片の表面側→裏面側の順で進行する。石核は3分割されるが、この分割が意味するところは不明である。うち2点が接合している。作出された剥片は幅広く不定形であると思われるが、さらに剥離が進めば石核素材の平坦面の一部を剥片端部に取り込んだものとなる。安山岩製。2 a + 2 bブロック間で接合する。

2は大形の不定形剥片であるが、石核素材となるものと思われる。剥片は中央付近で分割されてしまっている。安山岩製。4 cブロック出土。

3は小形で、裏面に大きく自然面を残す不定形剥片を素材とする石核である。剥片剥離作業は裏面の平坦な剥離面を打面として進行すると思われる。安山岩製。2 dブロック出土。

4は一部に自然面を残す不定形剥片を素材とする石核である。剥片端部に分割面が認められる。剥片剥離作業は裏面側の自然面を打面として行なわれる。安山岩製。5ブロック出土。

5は裏面に大きく自然面を残す不定形剥片を素材とする石核である。剥片剥離作業は裏面の自然面を打面として行なわれる。石核は最終的に分割され放棄されたものと思われる。安山岩製。2 dブロック出土。

図77-1は大形の不定形剥片を素材とする石核である。剥片剥離作業面は石核素材である剥片の打面側に設定され、表面→裏面の順で進行する。作出された剥片は剥片端部に石核素材の平坦面を取り込んで作出されたと思われる。安山岩製。7 dブロック出土。

2は一部に大きく自然面を残す石核である。分割線を石核素材としたと思われる。剥片剥離の最終段階に近いもので、最終剥離面は自然面を打面とし

て剥離される。最終剥離は石核の内側に入り込んでしまったため石核を放棄したと思われる。安山岩製。12ブロック出土。

3は裏面に大きく自然面を残す石核で、分割線を石核素材とするものである。剥片剥離は一部、裏面側でも行なわれるが、基本的に剥片剥離は自然面を打面として全周するように正面側で行なわれる。安山岩製。4 cブロック出土。

4は裏面に大きく自然面を残す石核で、分割線を素材とするものである。剥片剥離は自然面を打面として同一の方向から正面側を作業面として行なわれる。安山岩製。8ブロック出土。

剥片(図78~81)

総計2039点の石器から構成される石器群に剥片は1086点が出土し、砕片(806点)と合すると全体の94%を占める。圧倒的に安山岩を石器石材として用いており、安山岩自体がもつ性状から剥片の理解が十分にできない。これは安山岩にダメージを内包・反映する傾向が強く表出することに起因するものと思われ、とりわけ剥片の折断については明らかに剥片の折断が行なわれているにもかかわらず分析を困難なものとしている。

石器群の「目的剥片とは、何なるものか」ということについては3-3剥片の項で述べたが、第II文化層を構成する石器群の目的剥片は比較的良好に形状の整った石刃状の縦長剥片の一群と基部・側縁部整形石器の素材となった剥片(加撃方向に対して、剥片長軸がある一定の角度をもつように作出される。)の一群が想定される。前者は比較的容易に抽出が可能であったが、後者については剥片形状を大きく変えて石器を作出するため、また石器素材としての剥片の選択が広く行なわれているため抽出が困難であった。

図78・79は比較的整形の整った縦長の剥片である。これらは1点(図78-4)を除いていずれも環状に配列する石器ブロックの内側に位置する15ブロックから出土している。15 aブロックで5点、15 bブロッ

4. 第II文化層の調査

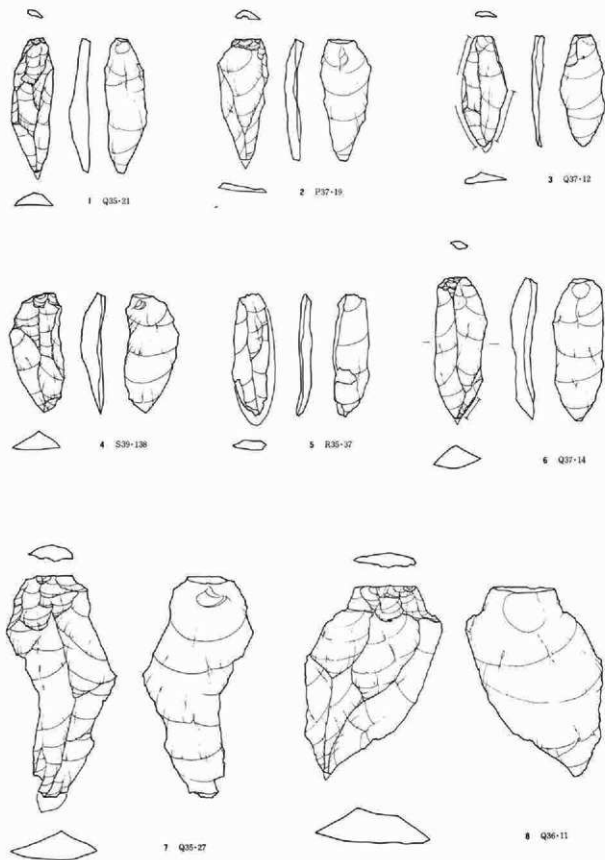


図78 第II文化層の石器(11)



II 先土器時代の遺物と遺物分布

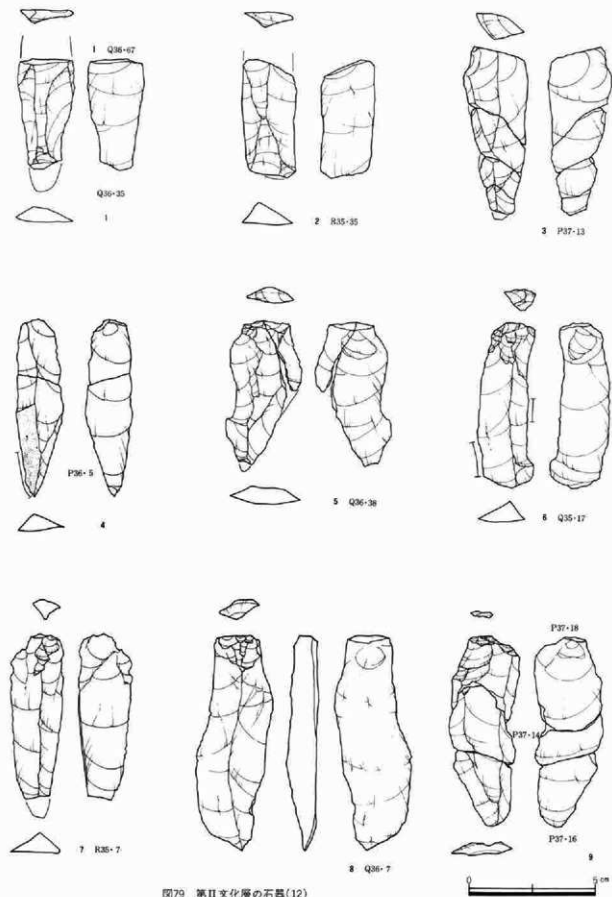


図79 第II文化層の石器(12)

4. 第II文化層の調査

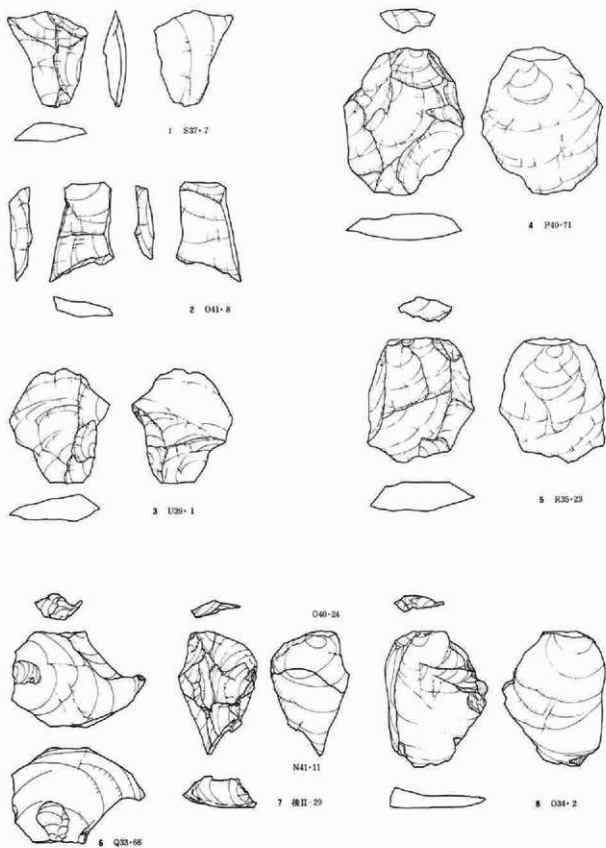


図80 第II文化層の石器(13)



II 先土器時代の遺物と遺物分布

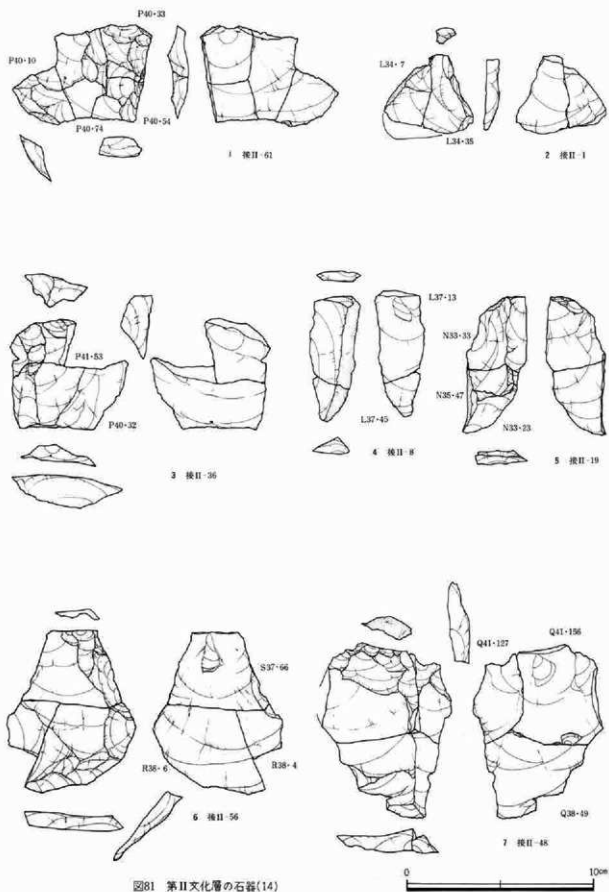


図81 第II文化層の石器(14)

クで4点、15cブロックで2点、15dブロックで3点、15eブロックで2点が出土している。剥片は5cm前後の小形の一群と8cm前後の大形の一群が出土しており、剥片端部が尖るものが多い。いずれも平坦な剝離面を打面として作出されている。剥片を構成する剝離面は主要剝離面の方向と一致するものが多い。一部には、ナイフ形石器先端部と同様の機能を果たしたと思われるもの(図77-3・6等)が見られ、他の剝離面を良好に剥片端部に取り込む。石器石材は安山岩・凝灰岩・黒色頁岩が見られるが、大半は挿入品と思われる。

図80は出土した剥片のうち、石器素材となり得る剥片を中心とする。

図80-1~3はいずれも基部・側縁部整形石器の素材剥片と思われる。剥片は縦位あるいは横位に折り取られ、調整加工を施せばよいだけである。3は裏面基部に粗い調整加工が施され、側縁部整形石器としてもよい。4は剥片を構成する剝離面が求心的な

剝離面からなる幅広い剥片である。石器群に稀な存在であり、剥片に対応する石器器種は不明である。接II-55(図91)に見られる剥片と同様に作出されたものと思われる。安山岩製。8ブロック出土。

5は4と類似した形状を示すが剥片に見られる剝離面は主要剝離面と同一の方向を示す。剥片は平坦な剝離面から作出されている。安山岩製。15aブロック出土。

6~8はチャート製の不定形な剥片である。いずれも遺跡内で剥片剝離が行なわれたと思われる。1・3は4ブロック出土、2は9ブロックの出土である。

図81はいわゆる「折断剥片」である。基本的に剥片は縦位あるいは横位に折断されると思われる。折断は作出された剥片の形状により異って用いられる。小形の横長剥片に縦位の折断が、小形の縦長剥片に横位の折断が用いられる傾向が強い。また、大形の剥片には縦位・横位の折断が併用されるが、これは交点に力点が集中することが多く、縦位・横位

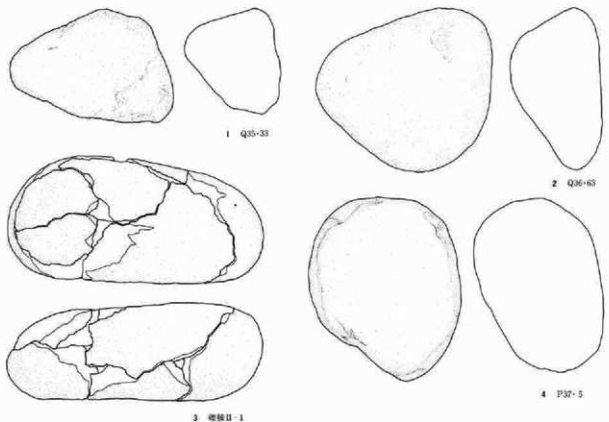


図82 第II文化層の石器(15)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

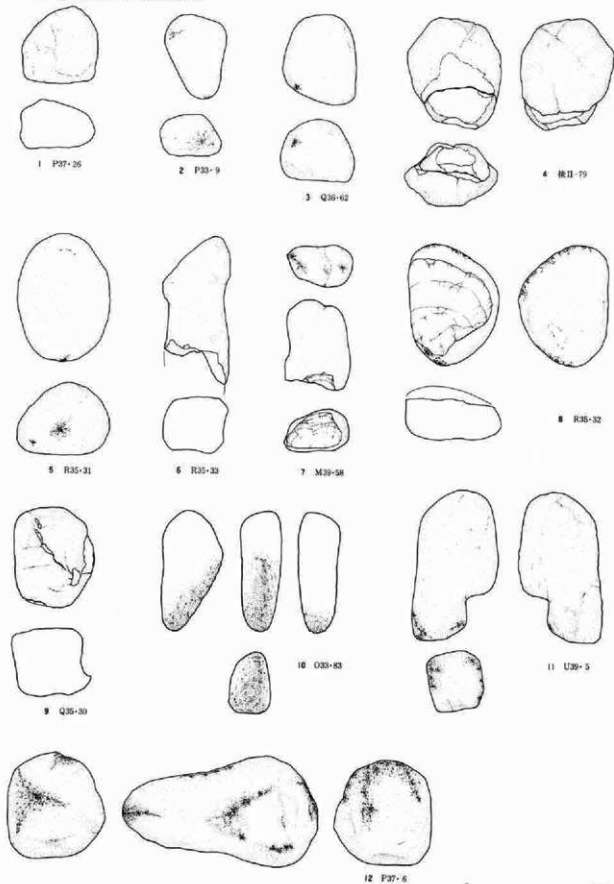


図83 第II文化層の石器(16)



4. 第II文化層の調査

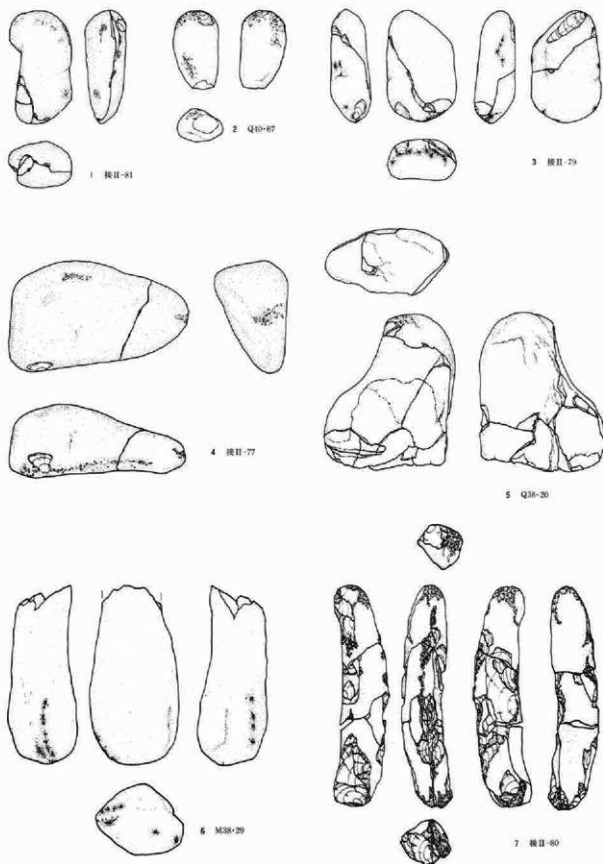


図84 第II文化層の石器(17)



4. 第II文化層の調査

の折断が個々に用いられるのではなく、同時に現象するものと思われる。

図100-2の接合例に見られるように石器群には明らかに折断手法が存在する。現状で剥片の折断について明らかにし得ず、「折れ」を意図的であるか否かを明確な根拠のもとに提示する必要があると思われる。

配石(図82)

第II文化層を構成する2039点の石器は概ね環状に分布する。礫重量が1000gを越える、いわゆる「配石」は石器群が北側で大きく内側に突出する地点で検出された。配石礫は総計4点が出土しており、いずれもVII層下位からVIII層上位に安定した状態で単独に出土している。多くは遺跡周辺に多く見られる輝石安山岩を用材としている。1は珩岩を用材とし、1050gを測る。他の3点が1700~2200g程であるのに対して軽量である。敲石に見られる打痕は観察されないが、石材及びその性状は敲石とした多くに共通すると思われる。明確に打痕の認められる図83-12、が1000gを越える礫重量をもつことや目的に応じた石材選択を考慮すれば、配石と敲石の区別は明確でない。出土状況はもとより総合的に判断されるべきである。3はQ-35・36G(15ブロック)に孤を描くようにして検出された総計202点が接合したので、礫重量は現状で2154.2gを測る。焼成を受けた痕跡は全く見られないが、破損状況は第I文化層の礫群と同様に周辺に受熱剥片が出土することより「火処」としての間接的状況を示している。

敲石(図83・84)

総計19点が出土している。出土した敲石はヴァラエティーに富み、棒状あるいは円礫に近い形状を示す。敲石は大形(500g以上)、中形(250~500g)、小形(250g以下)の3群として扱えられ、これらは石器製作工程の段階に応じて選択され、各群に分類される敲石がセットになって機能したものである。図83-12は、1283gを計る大形礫を石器素材とし、敲石一般からすると大形に過ぎる。礫の端部および周

縁に明瞭な打痕が認められる。これらの敲石は全体の半数近くが15ブロックに出土しており、必ずしも石器製作場に出土するとは限らないようである。15ブロックは局部磨製石斧および搬入石器等が出土したブロックで、石器群の中核的存在を占めるが、15ブロックに出土した敲石は欠損例は見られるものの未だ機能を十分に果し得る状態である。これに対して外縁に出土する敲石の大半は欠損し、機能を停止した状態を示すものと思われる。原則的に敲石は遺跡の周辺で採集、補充されたものと思われるが、石器群の出土状況全般から集団に敲石そのものを保有する意識が強く、保有した瞬間から他の主要器種と同様な意識のもとに存在した可能性を指示できよう。

4-4 第II文化層の接合資料

出土した石器と2039点の中で、81例289点の接合関係が認められた。4、5点の剥片が接合する事例が多く見られるが、10点を越える剥片および石核の接合事例も見られる。石器群を支えた剥片剥離工程はいくつかのヴァラエティーをもって存在することは明らかで、作出された剥片は一定の規則性をもって作出されていると言え、剥片剥離に見られるヴァラエティーも原石の形状によるものと思われる。

接合資料II-39(図85)

剥片2点、石核1点の総計3点が接合する。作出された剥片は、一定の形状を示してはいないが、同一の平坦な剥離面を打面として剥離されている。いずれも石核の下面を剥片末端に取り込んだかたちになっている。剥片を構成する剥離面は90°異なる方向の剥離面が認められ、打面転移を伴うことが理解される。石核は角柱状を呈し、下端には斜めの大きな剥離面が認められる。剥片剥離は打面転移を伴い順次展開すると思われるが、最終的に剥片剥離作業が行われた正面に対し下端に見られる斜めの剥離面は整合性(剥片端部を広く作出)をもって作用していない。8a+8cブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-40(図85)

総計3点の剥片からなる接合資料で石器4a+7

4. 第II文化層の調査

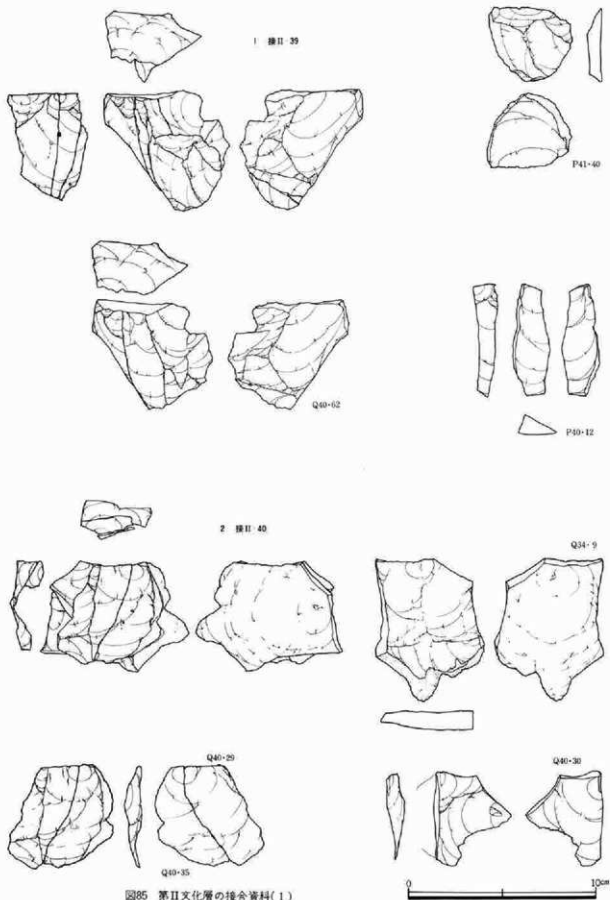


図85 第II文化層の接合資料(1)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

fブロック間で接合する。作出された剥片はいずれも平坦な剥離面を打面として剥離されており、2点は縦位に折れている。剥片の形状は比較的幅広い縦長剥片となっている。最終的に作出された剥片は90°異なる方向から剥離されており、打面転移を伴うと思われる。剥片剥離に際して剥片の頭部調整は施されない。安山岩4製。

接合資料II-69(図86)

総計6点の剥片からなる接合資料で、石器7f+13ブロック間で接合する。剥片剥離は1~3枚の剥片作出を単位に正面および上面を作業面としてくり返し行なわれている。作出された剥片はいずれも平坦な剥離面を打面として剥離されている。剥片の形状は比較的幅広い縦長剥片となっており、2点は縦位に折れている。剥片剥離に際して頭部調整は施されない。安山岩2製。

接合資料II-60(図86)

総計2点の剥片からなる接合資料で石器7e+7fブロック間で接合する。作出された剥片はいずれも平坦な剥離面を打面として剥離されている。剥片の形状は比較的整った縦長剥片となっており、1点は剥片端部に石核底面の一部を取り込んで剥離され、平行する両側縁が得られている。他の1点は横位に折断されている。剥片を構成する剥離面はいずれも同一の方向からの剥離で、連続的に剥片剥離作業が進行したことを示している。剥片剥離に際して頭部調整は施されない。安山岩製。

接合資料II-51(図87)

剥片2点、石核1点の総計3点で接合する。作出された剥片は一定の形状を示さず、剥片の側縁部に同一の平坦な剥離面を取り込んでいる。剥片剥離の打面は異なっており、打面の転移を伴うと思われる。石核は平坦な剥離面を打面とし、剥片剥離が進行するが、最終的に剥離された石核裏面の剥離によって石核形状を損なってしまったために放棄されたものと思われる。6ブロック内で接合する。安山岩製。

接合資料II-5(図87)

4点の剥片からなる接合資料で、石器2d+8ブ

ロック間で接合する。作出された剥片はいずれも礫面を打面として剥離されている。剥片の形状は比較的整った横長の剥片となっている。剥片は盤状の大形剥片を素材とし、打点を石核底面に対し、ほぼ水平に移動する。その結果、剥片端部に石核底面の一部を取り込んだ横長の剥片が連続的に作出されたと思われる。剥片剥離に際して打面調整、頭部調整は施されない。盤状剥片を石核素材として剥片剥離が進行する手法は石器群に普遍的に見られる。打点が石核を全周あるいは後退するなど剥片剥離のヴァリエーションが認められるが、接合資料II-5は石核の一方から直線的に後退するものと思われる。安山岩製。

接合資料II-53(図88)

剥片4点、分割された石核2点の総計6点で接合する。作出された剥片は礫面および分割面を打面として交互に剥離されている。剥片の形状は小形で一定の形状を示さないが、いずれも剥片端部に石核素材の平坦面を取り込もうとする意図が窺われる。剥片剥離作業面は石核の左・右2ヶ所に認められるが、石核の分割との前後関係は不明である。石核は縦長の大型剥片を石核素材とし、一部に礫面を残す。石核は3ヶ所で分割されており、剥片剥離はこの礫面および分割面を打面として進行したと思われる。石器13+14ブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-42(図88)

剥片1点、石核1点の総計2点で接合する。作出された剥片は少なくとも4点が剥離され、いずれも礫面を打面としている。剥片の形状は内側に大きく入り込み、不定形な横長の剥片で、剥片端部に石核底面の一部を取り込んだものとなっている。石核は礫面を大きく残す大型剥片を素材としており、剥片剥離は素材となった剥片の側縁に限って行なわれる。4aブロック内で接合する。安山岩4製。

接合資料II-2(図89)

剥片2点、石核1点の総計3点で接合する。作出された剥片はいずれも平坦な剥離面を打面として剥離されている。剥片は一定の形状を示さないが、い

4. 第II文化層の調査

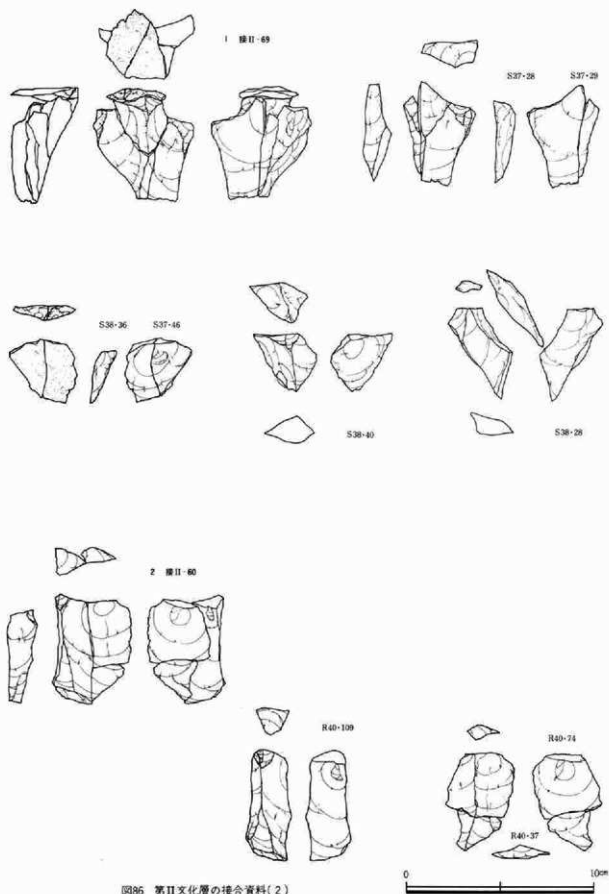


図96 第II文化層の接合資料(2)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

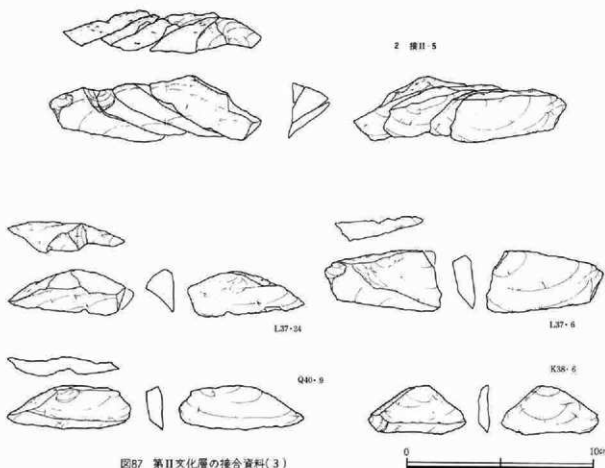
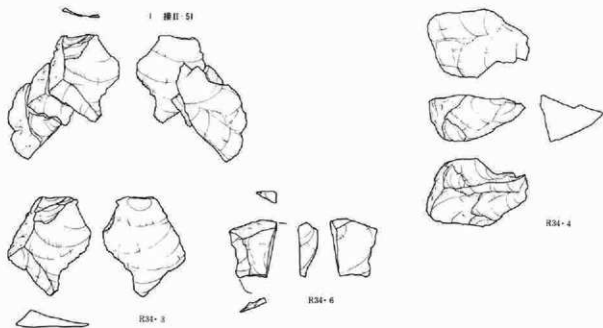


図87 第II文化層の接合資料(3)

4. 第II文化層の調査

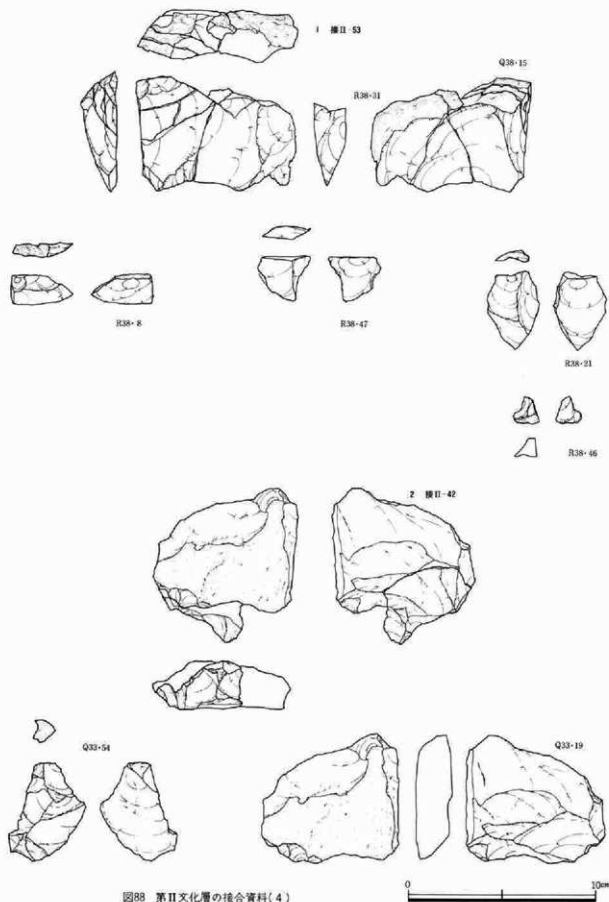


図88 第II文化層の接合資料(4)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

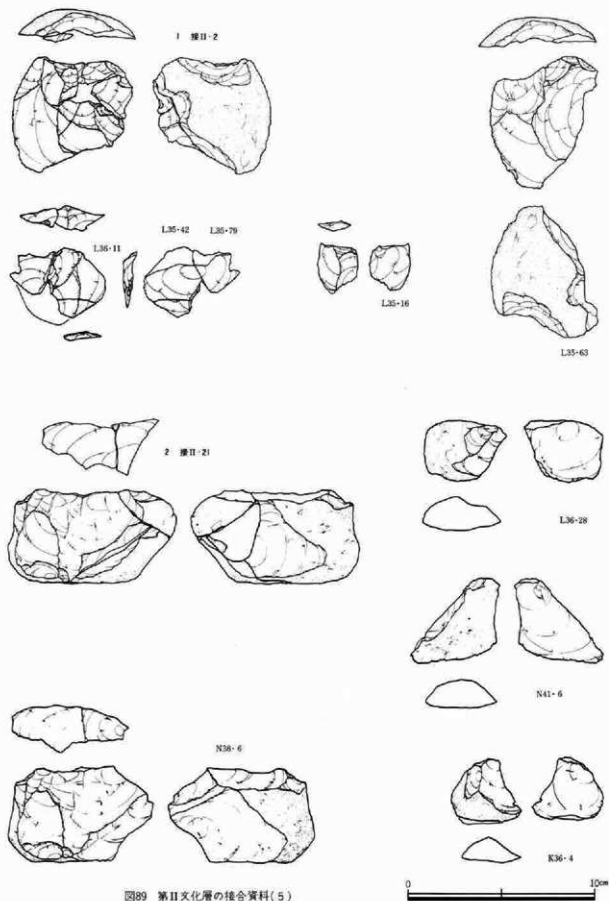


図89 第II文化層の接合資料(5)

いずれも剥片端部に石核素材となった大形剥片の平坦な剥離面を取り込んでいる。このうち1点は縦位および横位に折断されている。石核は礫面を大きく残す大形剥片を素材としており、剥片剥離はこの礫面を除去したのち、平坦な剥離面を打面として打面側から交差するように展開したものとと思われる。石器2a+2bブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-21(図89)

剥片3点、石核1点の総計4点で接合する。作出された剥片は、いずれも平坦な剥離面を打面として剥離されている。剥片は一定の形状を示さず、大きく礫面を残す。石核は拳大ほどの小礫を素材として用いる。剥片剥離は打面作出後、この平坦な剥離面を打面として行なわれている。接合した3点は一方に片寄っており、打面作出のための剥離による可能性が高い。最終的な剥離は裏面に認められ、礫面を大きく残す幅広い剥片が剥離されている。石器2c+9+10ブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-16(図90)

剥片8点、石核1点の総計9点で接合する。作出された剥片は比較的平坦な礫面を打面として剥離されている。剥片は比較的形状の整った横長剥片となっており、多くは縦位に折断されている。石核は円盤状を呈し、礫の頂部を断ち切った盤状の大形剥片を石核素材とし、平坦な礫面を打面としている。剥片剥離は石核素材となった盤状の大形剥片の打面部を中心に右回りに展開したものとと思われる。剥片剥離に際し、特別な打面作出は見られない。剥片はいずれも1ブロック内の出土であるが、石核は2dブロックに出土している。石器1+2dブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-44(図91)

総計2点の石核からなる接合資料で、石器15bブロック内で接合する。いずれも礫面を大きく残している。剥片剥離は礫面あるいは平坦な剥離面を打面としており、比較的形状の整った均質な剥片が作出されたと思われる。安山岩製。

接合資料II-55(図91)

剥片2点、石核1点の総計3点で接合する。作出された剥片は平坦な剥離面を打面として剥離されている。作出された剥片は比較的形状の整った縦長の剥片も存在するが、多くは不定形な剥片である。最終的に剥離された剥片は若干の頭部調整が施された後に剥離されている。石核は盤状の大形剥片を素材とするものと思われ、概ね、求心的な剥離面に被覆される。作出された剥片は小形で不定形なものと思われるが、最終剥離面が石核の中央部を大きく切って認められる。石核に接合する剥片は最終的に行なわれた剥片剥離時に瞬時に得られたと思われ、具体的には、石核下端に台石等の存在が想定される。石器7e+15cブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-74(図92・93)

総計13点からなる接合資料で、石器15aブロックを中心に出土している。作出された剥片はいずれも礫面を打面として剥離されており、盤状の大形剥片を素材とする石核から作出されたと思われる。剥片は比較的形状の整った均質な剥片が連続的に剥離されたと思われるが、多くは縦位に折断されている。剥片剥離は石核素材となった盤状の大形剥片の周縁をめぐるように展開したものとと思われる。接合資料II-74をはじめとして同16・44・55等は石器群に主体的に存在する剥片剥離手法であり、特徴的な存在として位置するものである。作出される剥片は剥片端部に石核素材となった剥片の平坦面を一部取り込み打面部に対して平行あるいは一方に片寄って斜行する剥片が意図的に作出されており、多くは縦位に折断されている。11+14+15a+15bブロック間で接合する。安山岩7製。

接合資料II-71(94・95)

総計18点からなる接合資料で、石器7aブロックを中心に接合する。比較的大形の円礫を分割して石核素材としている。作出された剥片は剥離面を打面として作出されている。剥片は一定の形状を示さず、様々な形状の剥片が剥離されている。分割面は2ヶ所に認められており、分割後の剥片剥離は必ずしも明らかにし得なかったが、分割面を打面として比較

II 先土器時代の遺物と遺物分布

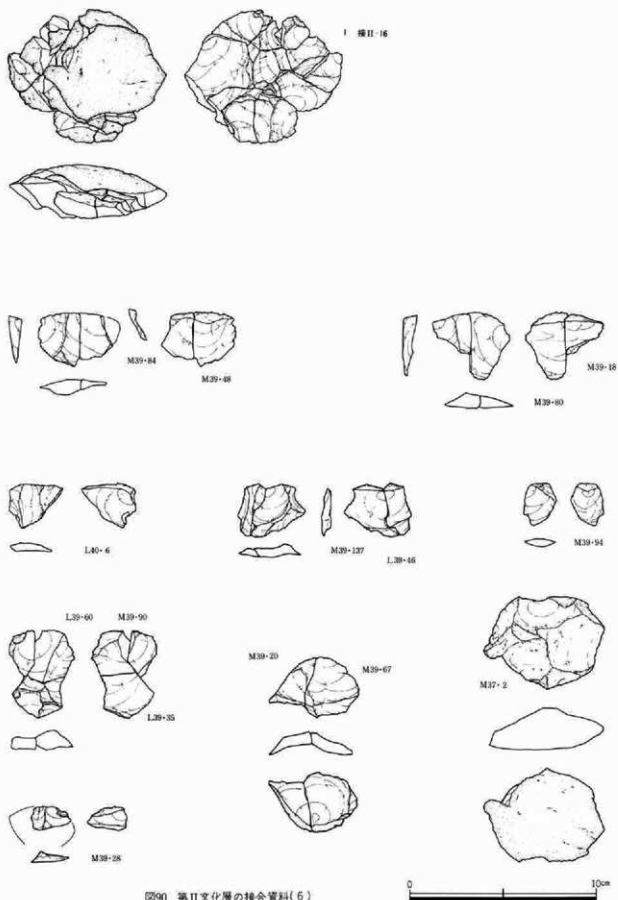


図90 第II文化層の検出資料(6)

4. 第II文化層の調査

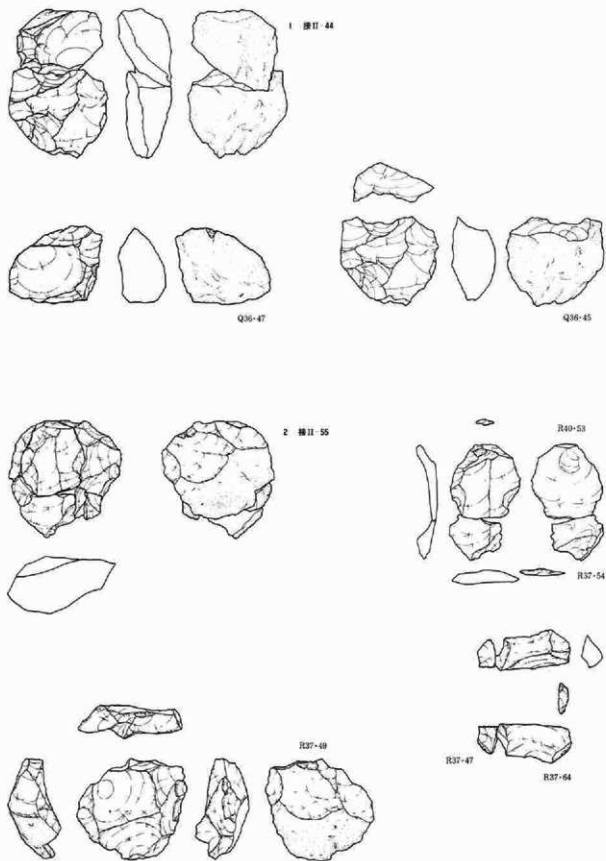


図91 第II文化層の接合資料(7)

0 10cm

II 先土器時代の遺物と遺物分布

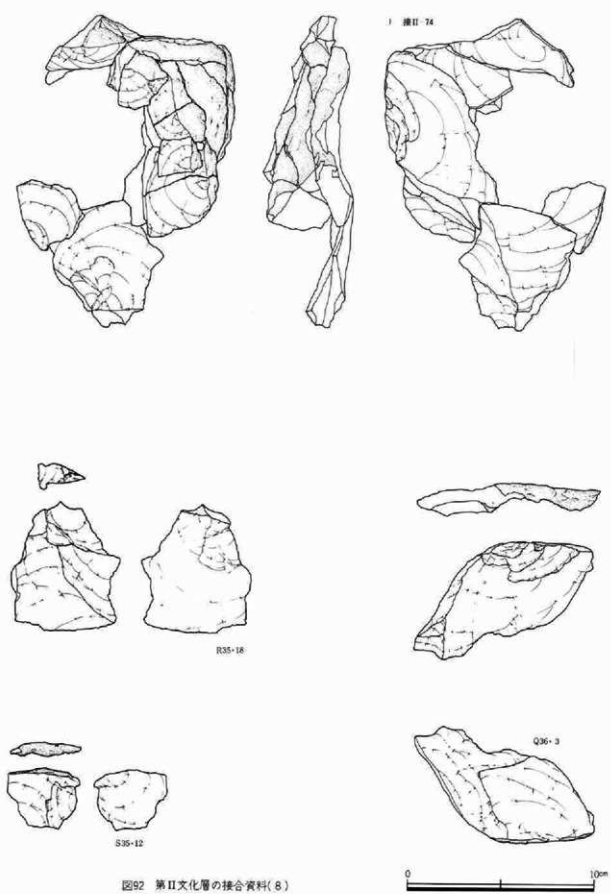


図92 第II文化層の接合資料(8)

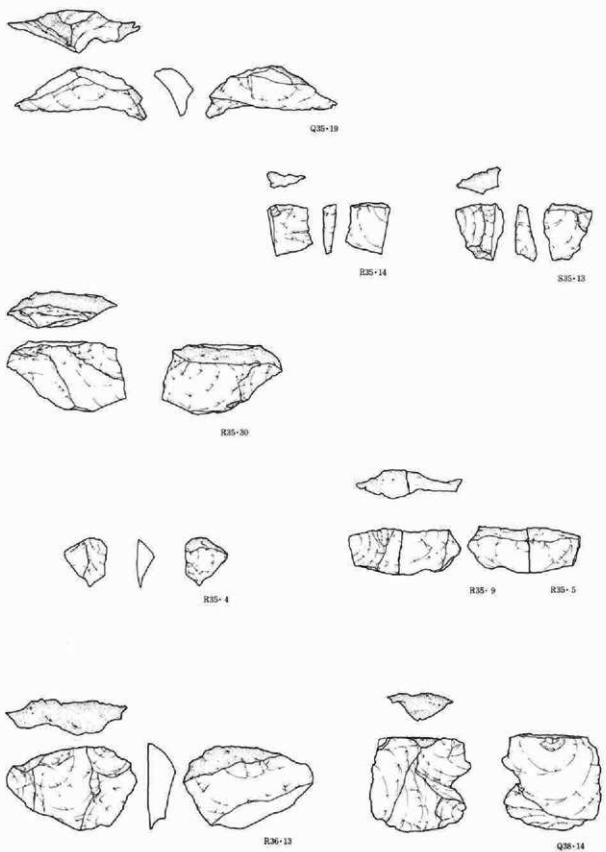


図93 第II文化層の接合資料(9)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

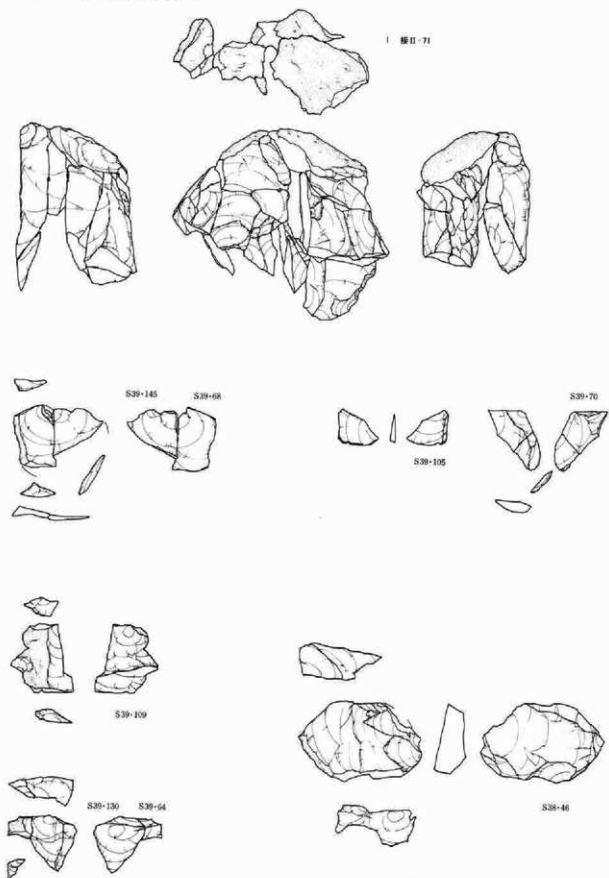


図94 第II文化層の接合資料(10)



4. 第II文化層の調査

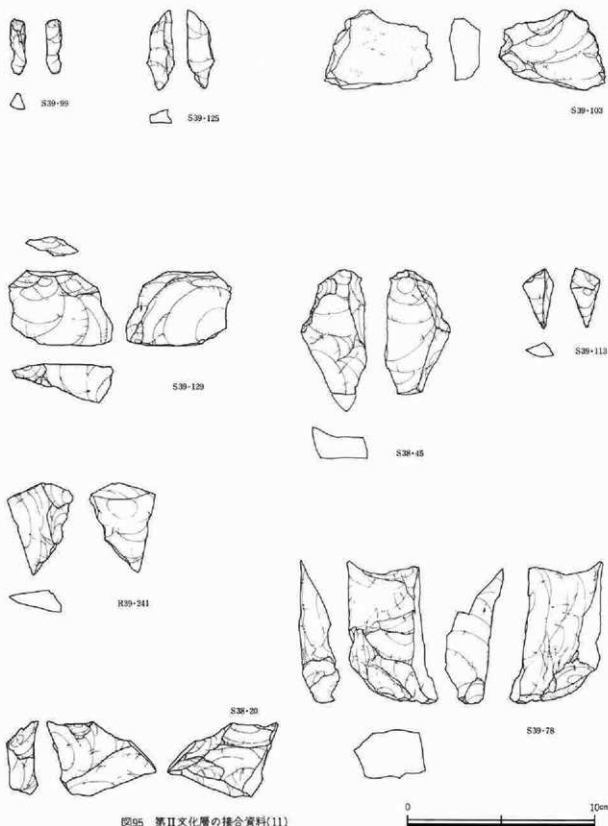
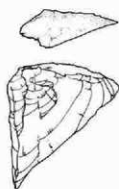
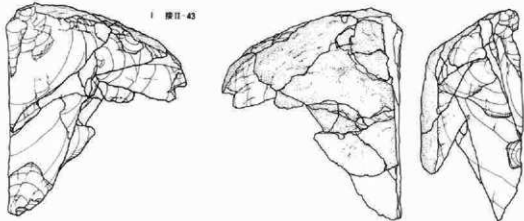


図95 第II文化層の接合資料(11)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

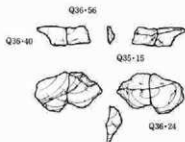
I 図11-43



R35-16



Q35-50



Q35-56

Q35-40

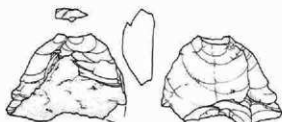
Q35-15

Q35-24



Q35-28

Q35-66



Q35-19



Q35-65



Q35-39

図96 第II文化層の接合資料(12)



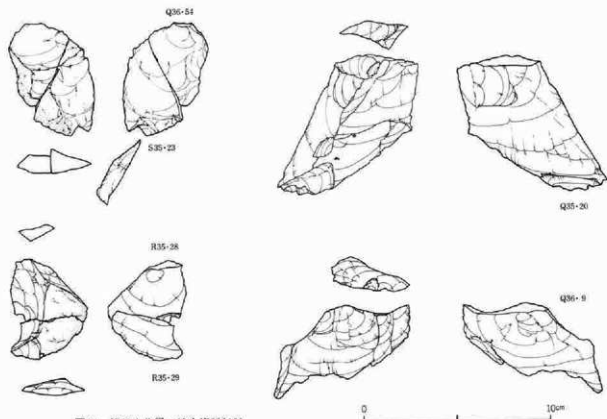


図97 第II文化層の接合資料(13)

的大形の剥片を作出している。作出されたこれらの剥片を石核素材としてさらに剥片剥離を試みる例もわずかに存在するようである。石器7a+7bブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-43(図96・97)

総計16点からなる接合資料で、15bブロックを中心に出土している。作出された剥片は分割面・平坦な剥離面あるいは礫面を打面として剥離されており、分割線を石核素材としている。剥片は大形で、一定の形状を示さず、不定形である。Q36-19は剥片端部で数点の剥片が作出されており、多くは石核素材としての剥片と位置づけることも可能である。11+15a+15bブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-15(図98)

総計8点の剥片からなる接合資料である。比較的大形の円礫から得られた1/2分割線を石核素材とすると思われる。作出された剥片は平坦な剥離面あるいは分割面を打面として剥離されている。平坦な剥離面を打面とする剥片3点は一定の形状を示さないが、剥片端部に石核の平坦な剥離面の一部を取り込

んでいる。分割面を打面とする剥片5点の剥離順は必ずしも明らかではないが、分割面を打面としてM39-77と他の剥片に大きく分割されたと思われる。以下、この分割面および平坦な剥離面を打面とする剥片剥離が進行している。剥片は一定の形状を示さず、大きく礫面を残す。全般に剥片剥離は当初、剥片端部に平坦面を取り込む意図に展開しているが、打面転移後、その意図を明確に反映していない。最終的に作出された2点は目的的に剥離された剥片であるが、小形で石器素材となり得ず、放棄されたものと思われる。石器1+10ブロック間で接合する。安山岩製。

接合資料II-27(図99)

剥片4点、石核1点の総計5点で接合する。作出された剥片は礫面あるいは平坦な剥離面を打面として剥離されている。剥片は一定の形状を示さないが剥片端部に平坦な剥離面を取り込む意図が認められる。石核は1/2分割線を石核素材としたもので、剥片剥離は部分的に打面を作出するが、概ね礫面を打面として求心的に行なわれている。石器4cブロック内

II 先土器時代の遺物と遺物分布

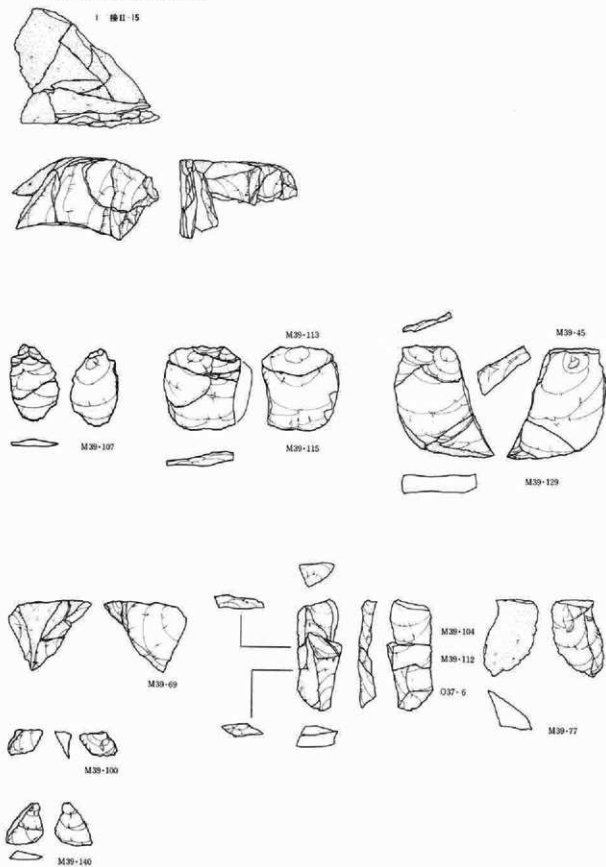


図98 第II文化層の接合資料(14)

4. 第II文化層の調査

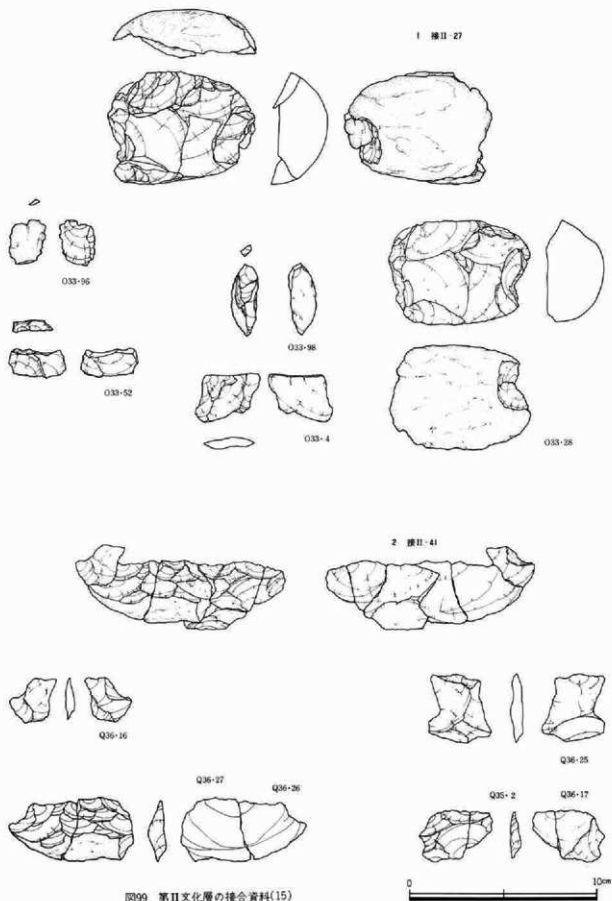


図99 第II文化層の接合資料(15)

II 先土器時代の遺物と遺物分布

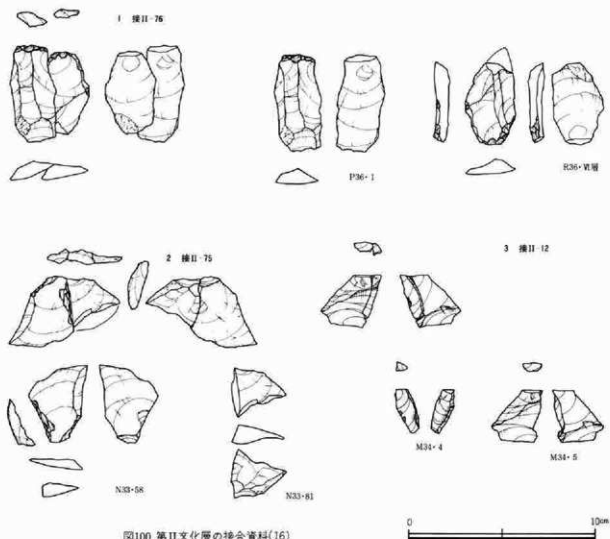


図100 第II文化層の接合資料(16)

で接合する。安山岩製。

接合資料II-41(図99)

総計4点の剥片からなる接合資料である。作出された剥片は明確に打面が認められない。剥片は一定の形状は示さないが、剥片剥離は一定方向から行なわれており、対向する剥離面を一部取り込んだものとなっている。石材が粗粒で作出される石器器種も「石斧」等に限定されると思われるが、石器群の中に同一の母岩を石器素材とする資料は見られない。石器15b+15eブロック間で接合する。安山岩1製。

接合資料II-76(図100)

ナイフ形石器1点、縦長剥片1点の総計2点からなる接合資料である。ナイフ形石器は先端部を欠損するため全体の形状は不明であるが、他のナイフ形

石器の事例から、剥片の形状を大きく変えることなく石器として作出されたと思われる。同一の母岩・同様な剥片剥離の段階に剥離された剥片であるにもかかわらず、剥片の形状による素材の選択が行なわれたものと思われる。遺跡内に搬入された可能性が高い。15eブロック内で接合する。黒色頁岩製。

接合資料II-75(図100)

折断剥片1点、側縁部整形石器1点総計2点からなる接合資料である。平坦な剥離面を打面として作出された横長の不定形剥片となっている。剥片は打面部に器体の最大厚をもつ断面楔状を呈するもので、剥片を構成する剥離面は平坦な分割面あるいは剥片面であり、剥片長軸は剥片剥離方向に対して傾斜する。側縁部整形石器は作出された剥片を打点部

で縦位に折断し、石器素材としている。本接合例は石器群を支えた主要器種である基部・側縁部整形石器の素材剥片から石器器種への過程を明確に示すものと言える。剥片を折断するという手法は作出された剥片を石器素材として選択する場合、剥片の選択を大きく広げるものとして存在し、石器の量産が可能となったものと思われる。安山岩製。

接合資料II-12(図100)

彫器1点、削片1点からなる接合資料である。横長の剥片を石器素材とし剥片の打面部分を彫刻刀面作出のための打面としている。石器3ブロック内で接合する。チャート1製。

4-5 母岩別資料の分布

第I文化層を構成する石器群は総数2039点の石器よりなり、概ね、15ヶ所に及ぶ石器ブロックを構成することが理解された。多くは明確に区分し得ない程連綿と出土し、最終的には単位的な石器ブロックは30ヶ所を越えることが予想される。出土した2039点の石器群は少なくとも28種類の母岩別資料よりなることが抽出された。石器群の大半が周辺地域で容易に採集される原石(安山岩)を素材としているが、全体の5%前後は片岩・黒曜石等、付近で採集することのできない原石を素材としている。全体を占める量は少ないが、石器群を占める石材のヴァラエティーに関しては第I文化層の石器群と遜色のないものと言える。安山岩のうち、明確に分類し得た母岩は全体の20%弱で、大半は分離することができなかった。したがって、石器群の同時性、動態等を把握する上で大きな制約となっている。分類し得た母岩の多くは一部を除いて1%に満たない数量で、全体として数多くの母岩別資料よりなることが予想される。

片岩系石材の分布

片岩系石器は少なくとも4種類の母岩別資料からなる。これらは局部磨製石斧の石器素材として用いられているもので、先土器時代石器群にあつては稀

少な事例であると思われるが、石材産地に近い地域では縄文時代以後、普遍的に用いられている。

緑泥片岩1の分布(付図14) 総計5点が出土している。このうち4点が接合関係が認められる。出土した5点は石斧再生剥片3点を含み石斧の再加工が試みられているが、打斧形状と接合状態からさらに多くの再生剥片の存在が想定される。現状ではブロック内でのすべての石斧再生作業を認めることは不可能であるが、他地点での再生作業を介在して理解することが妥当であるか検討を要すると言える。8ブロックに出土。

緑泥片岩2の分布(付図14) 15cブロックに単独で出土した石斧である。刃部を欠損するが、未検出である。

緑泥片岩3の分布(付図14) 総計11点が出土している。15dブロックに集中して9点、15b・cブロックに各1点が出土している。このうち、4点が接合関係が認められる。11点は石斧再生剥片10点を含むもので、石斧の再加工が試みられたと思われるが、緑泥片岩1と同様にさらに多くの再生剥片の存在が予想される。

石墨片岩の分布(付図14)

石器11ブロックに単独で出土した石斧である。遺跡内に同一の母岩から作出された石器器種は検出されていない。

その他の片岩系石器の分布(付図14) いわゆる「網雲母片岩」と呼ばれるもので、総計42点が出土している。片岩系石器は一ヶ所に集中して出土するが他のこれらは、調査区全般にわたって出土しており、一定の出土傾向を窺うことはできない。また、出土した42点のほとんどに観察されるが、多くは表面に風化を認めることができ、小礫が石材の性状によって分割されたかのような状況を示している。これらを石器素材として作出された石器器種は未検出であり現状で網雲母片岩の小片を石器素材とする石器器種を想定することも困難である。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

黒曜石の分布

総計4点が出土している。いずれもブロックに単独で出土している。黒曜石は2種類の母岩別資料よりなり、いずれも石器群に孤立した存在である。

黒曜石1の分布(付図15) 彫器(図74-6)1点がN-39Gに単独で出土している。

黒曜石2の分布(付図15) 総計3点が出土している。側縁部整形石器1点、碎片2点からなる。これらは複数の石器ブロックに単独で出土している。

黒色頁岩の分布

総計17点が出土している。これらは2ヶ所に集中し、相互に母岩が異なる。いずれも器種として独立した存在で、遺跡内に剥片剥離工程を想定する同一の母岩別資料は認められない。他地点からの搬入された可能性が高い。

黒色頁岩1の分布(付図15) 総計2点が出土している。使用痕ある剥片1点、碎片1点からなり、いずれも4aブロックに出土。

その他の黒色頁岩の分布(付図15) 総計15点が出土している。環状にめぐる石器分布が内側に突出する15ブロックに集中する。15ブロックは配石、敲石等の礫、局部磨製石斧、ナイフ形石器等の生産具の遍在性とあいまって、第II文化層を構成する石器群の中で中核的な存在であると思われるが、搬入されたと思われる黒色頁岩製の定形化した石器の存在もブロックを評価する一つの要素になっている。

流紋岩の分布(付図15)

15eブロックに単独で出土している。石器表面の発泡を特徴とする礫片であるが、遺存した背景を明らかにし得なかった。

砂岩(付図15)

15cブロックに単独で出土している。細片で明らかにし得ないが、敲石の一部を構成する礫片の可能性はある。

凝灰岩の分布

総計16点が出土している。これらは少なくとも3種類の母岩よりなる。

凝灰岩1の分布(付図16) 総計10点が出土している。R-37~39Gに集中するほか、2点がS-35Gに分布する。検出されなかったが、遺跡内で一定の剥片剥離作業が展開したと思われる。2例5点が接合する。

その他の凝灰岩の分布(付図16) 総計6点が出土している。いずれもブロックに単独で出土し、独立した存在である。15ブロックに出土した4点はナイフ形石器、縦長剥片で、いずれも独立した石器器種である。他地点からの搬入である。

チャートの分布

総計21点が出土している。これらは2種類の母岩よりなり、複数の石器ブロックに分布する。

チャート1の分布(付図16) 総計19点が出土している。これらは5ヶ所の石器ブロックに分布するが大半が3・4aブロックに集中する。資料により色調に多様性が見られる。明確ではないが、彫器1点、使用痕ある剥片1点がわずかながら存在する。

チャート2の分布(付図16) 総計2点が出土している。剥片1点、碎片1点で、ブロックに単独に出土している。

安山岩の分布

安山岩は1891点が出土したが、明確に母岩別に区分し得たのは全体の20%程度で、大半は不明である。

安山岩1の分布(付図17) 明確に母岩別に区分された。総計15点が出土し、3点が接合する。Q-35・36Gに集中して出土し、ブロック内で完結する。母岩は粒度が粗く、石斧の存在を暗示する。

安山岩2の分布(付図17) 明確に母岩別に区分された。総計17点が出土し、7点が接合する。S-37・38Gに集中して出土し、ブロック内で完結する。

安山岩3の分布(付図17) 総計5点が出土している。これらは3ヶ所の石器ブロックに分布するが、

相互のブロック間に有意な関係を把握されなかった。

安山岩4の分布(付図17) 明確に母岩別に区分された。総計171点が出土している。これらは15ヶ所に分布し、大半の石器ブロックに見られる。11例29点が接合するが、これらは基本的にはブロック内で接合し、ブロック間の接合は一部を除いて稀である。出土資料数および推定される原石の規模からは複数の母岩を想定することはできない。こうした現象がブロック間の関係を規定し、ブロックは相互に強く結びつくと理解される。安山岩4の分布は環状部にいくつもの集中部を形成し、石器群の中核的存在である15ブロックには、散漫に分布する点が指摘され、石器群の遺存した背景を示すものとして理解される。

安山岩5の分布(付図17) 明確に母岩別に区分された。総計9点が出土し、3点が接合する。S-39-40Gに集中して出土し、ブロック内で完結する。

安山岩6の分布(付図17) 明確に母岩別に区分された。総計31点が出土している。これらは複数の石器ブロックに分布する。3例18点が接合するが、これらは基本的にはブロック内で接合し、ブロック間の接合は一部を除いて稀である。相互のブロック間に有意な関係を想定し得るが、明確に把握されなかった。

安山岩7の分布(付図17) 総計61点が出土している。これらはR・S-35、O・P-41Gに集中して出土するほか、複数の石器ブロックに分布する。

安山岩8の分布(付図17) 総計13点が出土している。これらはR・S-34、S-35Gに集中して出土する。

その他の安山岩の分布(付図17) 母岩別資料に区分し得ず、ブロック間の母岩の共有関係についてはほとんど明らかにし得なかった。総計1566点が出土し、全体の80%程を占め、接合関係も見られるが、これらは基本的にはブロック内あるいは近接するブロック間での接合が圧倒的である。一部に30mを越える距離を隔てて接合し、石器群全体が有意な関係のもとに遺存したことを暗示している。

4-6 ローム層の逆転現象(図101・102)

第II文化層を構成する石器群(2039点)は見かけ上、径50m程の環状にめぐっている。ローム層の逆転はこの環状に分布する石器群を外周するように6ヶ所に検出された。このうち、I-36Gに確認されたもの(section 3-a・b)は、ローム層の逆転としては典型例であるがIV層中に形成されたもので時期的にやや新しく本項では除外しておきたい。他の5ヶ所の逆転現象は埋設土の堆積状態及び完掘状態等共通する点が多くみられ、同一の現象として理解することが可能である。このうち2ヶ所には石器ブロックとの重複関係が認められ、石器群の出土状況から逆転層形成時の相違を想定することが可能である。

土層の堆積 ローム層の逆転現象の典型的な土層堆積は認められなかった。これはグリット単位に調査を進行させたため、必ずしも良好に土層観察面を設定し得なかったことや平面的調査を十分に行ない得なかったことに起因すると思われる。基本的にグリットに沿って設定した土層断面の観察によれば、V層(BP)及びVI層の自然流入土により埋設されている。完掘した2例はVII層・VIII層の混土層を取り囲むようにV層(BP)がリング状に確認された。

完掘状態 5例中2例を完掘した。ともにVIII層上面の確認である。いずれも長径5m、短径4m程の不整形円形状を呈し、周辺あるいは一部が溝状に深く落ちこむ。土層断面での観察に終始した地点でも部分的に周辺が深く落ちこむのを確認している。これらは規模3～6m程でヴァラエティがみられるが、完掘したものと同様なものとして理解できる。

遺物の出土状態 調査区内の6ヶ所にローム層の逆転が認められたが、1ヶ所を除いて石器ブロックに重複することなく検出されている。石器ブロックと重複する地点(図102-2)では、Vb・VI層が通常の堆積状態を示し、石器群は二次的移動を示すことなく、他と同様の出土状態を示していた。他の5ヶ所のローム逆転部の土層の堆積はVb・VI層の攪拌された状態を示しており対象的である。石器群が、ローム逆転部と重複することなく、検出されてい

II 先土器時代の遺物と遺物分布

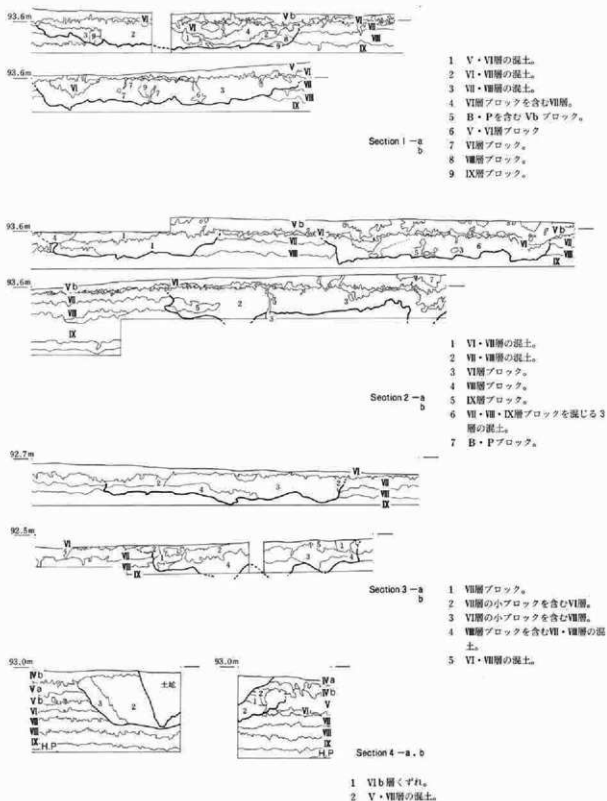


図101 ローム層の逆転現象(1)

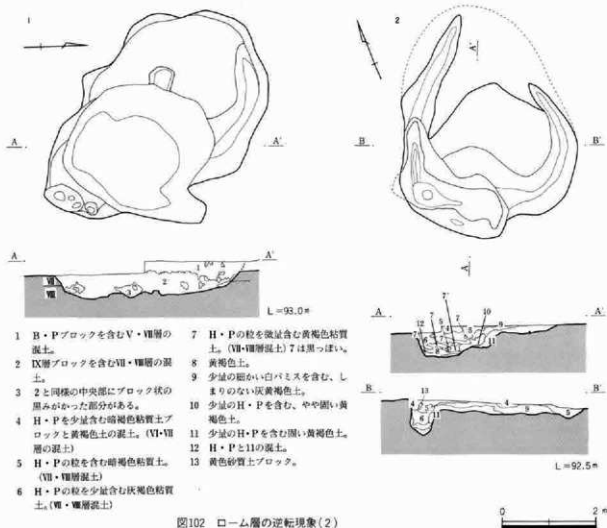


図102 ローム層の逆転現象(2)

- 1 B・Pブロックを含むV・VII層の混土。
- 2 IX層ブロックを含むVII・VIII層の混土。
- 3 2と同様の中央部にブロック状の黒みがあった部分がある。
- 4 H・Pを少量含む暗褐色粘質土ブロックと黄褐色土の混土。(VI・VII層の混土)
- 5 H・Pの粒を含む暗褐色粘質土。(VII・VIII層混土)
- 6 H・Pの粒を少量含む灰褐色粘質土。(VII・VIII層混土)
- 7 H・Pの粒を微量含む黄褐色粘質土。(VII・VIII層混土) 7は黒っぽい。
- 8 黄褐色土。
- 9 少量の細かい白バミスを含む、しまりのない灰黄褐色土。
- 10 少量のH・Pを含む、やや固い黄褐色土。
- 11 少量のH・Pを含む固い黄褐色土。
- 12 H・Pと11の混土。
- 13 黄色砂質土ブロック。

ることは注意される。

ローム層の逆転現象は勝保沢中ノ山遺跡(文献82)に典型的な事例が確認され、同様な事例として東京都多聞寺前遺跡、鹿児島県上場遺跡例を類似するものとして既に指摘した^(注1)。その後、東京都下山遺跡の報告(文献84)の中にも、同様なローム層の逆転現象の存在を知り、典型的な事例として加わることが明らかとなった。報告者も指摘するように本例は視覚的により明確な隙層をまきこんで形成されたもので不十分な部分も見られるが、ローム層の逆転現象を十分に示している。

下触牛伏遺跡で検出された事例は形状において北海道増田遺跡例(文献86)に類似する。報告者はこの

現象を ice-wedge による土壌擾乱とし、同様な事例が北海道間村・拓殖遺跡等に存在することを指摘している^(注2)。下触牛伏遺跡例も同様に位置づけられる可能性もあるが、平面的な確認状態や土層の埋没状態等に不明な部分が多く、即断できない。

ローム層の逆転現象は多様性に富むが、平面的な確認状態及び土層の埋没状態に斉性を見出すことが可能であり、この逆転現象がいわゆる「風倒木^(注3)痕」と同様に解釈することができる。

注1 岩崎泰一1985(文献83)

注2 加藤晋平・鶴丸澄明198(文献85)

注3 飯登 健1974(文献87)

4-5 第II文化層の構造分析

1. 剥片剥離技術

出土した2039点の石器群は少なくとも28種類の母岩別資料よりなる。これらの多くは安山岩を石器素材とするが、母岩別資料に分類することは困難で、母岩別資料を単位とする剥片剥離工程は明らかにし得なかった。また総計2039点の石器群に接合資料は81例が得られているが、原石の状態に復元される資料は認められず、多くは大形の盤状剥片を石核素材とし、原石（円礫）より盤状の石核素材を作出する工程を経た後に剥片剥離が展開すると言える。したがって、石器群を支えた剥片剥離工程は接合資料II-71(図94-1)に代表されるように「原石の分割」という手法を介在することが理解され、剥片剥離工程は以下のように想定される。

- ①原石→分割→石核素材の作出→剥片剥離
- ②原石→分割→剥片剥離
- ③原石→剥片剥離

石核素材の作出 出土した石核及び接合作業によって得られた接合資料から、多くは大形の盤状剥片を石核素材とすることが理解された。接合資料に原石にまで復元される資料は見られないが、接合資料II-43・44・71及び2・4・6・15・16等に明らかのように原石は分割され、大形の盤状剥片が石核素材として作出されている。これらは原石の形状に則して展開したものと思われるが、剥片剥離工程①～③に明らかのように石核素材の作出が石器素材となる剥片の剥離に先立って行われたと言うことでなく、ある段階では、石核素材・石器素材の作出が並行して展開したものと思われる。

素材剥片の作出 接合資料に見られるように大形の盤状剥片を石核とする多くは求心的に剥片剥離工程の展開する剥片剥離a類・石核に形成された平坦な剥離面を大きく、あるいは、一部

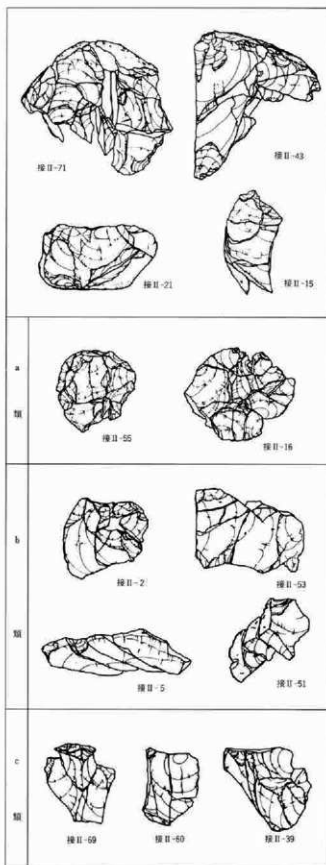


図103 石核素材とその形状

を剥片端部に取り込むよう剥片剥離工程の展開する剥片剥離b類に2分して把えられる。剥片剥離a類は半月状の石核を素材とし、自然面あるいは平坦な剥離面を打面として求心的な剥片剥離が展開する。剥片剥離b類は大形の盤状石核を素材とし、剥片剥離作業は盤状石核の片側に設定される事例(図76-2・4・5)と盤状剥片の両側に設定される事例(図76-1・3)が認められる。剥片剥離作業は厚みのある盤状剥片の打面側を中心に左右に打点を移動しながら後退する。石器群の主体となる「基部・側縁部整形石器」は素材剥片を折断することにより剥片形状を大きく変えるが、容易に素材剥片の形状を想定することが可能であり、「基部・側縁部整形石器」a・b類が剥片剥離b類に、「基部・側縁部整形石器」c類が剥片剥離a類に各々対応する関係にあり、各々の目的的剥片として把えられる。このように剥片剥離a・b類は器種レベルにおいても整合性をもって把えられるが、同時に剥片剥離a類の剥片剥離工程の初期に作出される剥片及び剥片剥離b類の剥片剥離工程に作出される剥片は同様な形状を示すことも指摘される。一方、剥片剥離c類は打面転移を伴い縦長剥片を連続的に作出し、必ずしも明確な存在とはいえないが石核形状は直方体状(柱状)を呈す。同一の母岩別資料(安山岩4)にナイフ形石器(図68-5)、加工痕ある石器(図74-3)、縦長剥片(図77-4・6)、接合資料II-40(図85)が認められる。

石器群を支えた剥片剥離技術は同一の母岩別資料(安山岩4)に剥片剥離b・c類(接合資料II-40・42)認められ、同一の原石に剥片剥離a・b・c類の存在(図105)が想定された。剥片剥離a・b類に「基部・側縁部整形石器」が、必ずしも明らかでなく検証し得なかったが、剥片剥離c類にナイフ形石器が対応する。現状で、剥片剥離a・b類により作出される目的的剥片を明確に認識することは困難であるが、素材剥片の作出が数枚で終了する点や原石から数多くの石核素材を作出することから上述したように剥片に平坦な剥離面を取り込むことに重点が置かれる剥片剥離技術として評価することができる。

2. 出土した石器群

第II文化層を構成する石器群は豊富な器種組成を示すが、これらはナイフ形石器・「基部・側縁部整形石器」・局部磨製石斧を主体とすることが理解された。以下に出土した石器群の各々について把え得た事実を記す。

ナイフ形石器 統計7点が出土している。これらは1点(図68-5)を除いて長さ5.25~7.5cm、幅3.15~3.45cmを測る。いずれも器体のほぼ中央に石器最大幅を有し、均質な石器形状を呈す。これらのうち、3点が石器先端部を欠損し、全体の石器形状は明らかでないが、石器基部側の側縁部及び石器先端部に微細な調整加工が施され、素材となった剥片形状を大きく変えることなく用いている。素材剥片の形状を知ることの可能な3点(図68-3・4・5)はいずれも剥片端部に他の剥離面を良好に取り込むこ

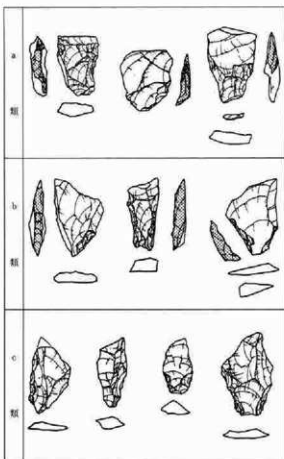


図104 素材剥片と石器の形状

II 先土器時代の遺物と遺物分布

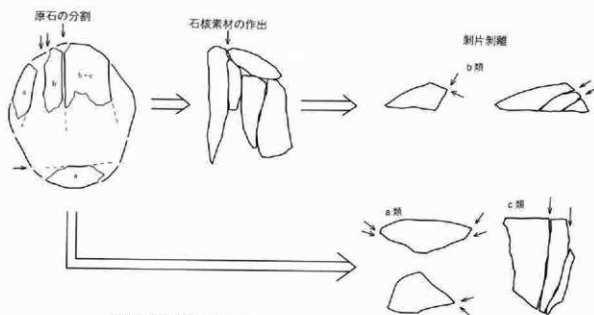


図105 剥片剥離工程の復元

とで調整加工を施すことなく機能部を確保している。ナイフ形石器はいずれも石器群が現状に分布し、北側で内側に突出する15ブロックに出土しており、また、1点を除いていずれも遺跡内に搬入されており、石器群から抽出された剥片剥離技術上から作出されるかどうか必ずしも明らかにし得なかった。現状では、これらを石器群から切り離した状態で理解することは困難であった。

基部・側縁部整形石器 総計10点が出土している。いずれも同一の基盤上に作出されるが、形態上のバラエティーが認められ細分される。

- a類 器体の長軸に対して機能部(刃部)が直交し、全体の形状が台形状を呈す一群。(図70-1・3・6)
- b類 器体の長軸にたいして機能部(刃部)が斜行し、全体の形状が切出状を呈す一群。(図70-5・8・9・10)
- c類 器体の長軸と剥片の長軸が一致し、機能部は剥片形状を要することなく存在する。全体の形状は「ペン先」状を呈す一群。(図70-2・

4・7)

出土した10点の基部・側縁部整形石器は形態上3分して扱えられるが、同時に、これらは相違する幾つかの点を指摘することができる。

素材剥片の形状： 石器素材となった剥片は縦長剥片及び横長剥片の両者が存在する。a・b類に分類された7点は1点(図70-8)を除き横長剥片を石器素材として用いる。剥片長軸と器体長軸は直交する関係にあり、この点においては、「切出形石器」・「台形様石器」と同様である。b類の1点(図70-8)及びc類に分類された3点は縦長剥片を石器素材として用いる。これらの石器素材は剥片剥離技術のなかで明らかのように縦長剥片については剥片剥離a・c類に分類された原石の分割工程を経て得られた石核を素材として、横長剥片については剥片剥離a・b類に分類された大形の盤状剥片を石核素材として主体的に作出されたと思われる。a・b類に見られるように石器の形状決定が折断手法によるため石器素材となった剥片の選択はより柔軟な状況にあったと思われる。

整形加工： 折断手法と平坦剥離による。横長剥

片を石器素材とする場合は必ず折断手法が用いられ、これにより大きく剥片形状を変えらる。さらに、平坦剥離による調整加工を施すことにより石器が作出される。一部、「ブランディング」に近い調整加工が施されるが、やや粗く様相が異なる。縦長剥片を石器素材とする場合は打面側の両側縁に平坦剥離(裏面基部加工)が施されることが多い。

欠損：10例中3例に欠損が認められる。いずれも石器先端部を欠き、機能部が石器先端部にあることを示している。

「基部・側縁部整形石器」は形態上3分して扱えられる。a・b類が「側縁部整形石器」に、c類が「基部整形石器」に対応する。これらの石器に施される調整加工はいわゆる「ブランディング」の状態とは異なり、平坦剥離に近い手法でより面的に施される。a類は「台形石器」に、b類は「切出形石器」により近い形状を呈す。「台形石器」・「切出形石器」はすでに指摘されているようにナイフ形石器と共通する要素が多く看取され、同時に、同一の石器群を構成することが知られており、「ブランディング・ツール」の一種として評価される。一方、「基部・側縁部整形石器」は素材となった剥片の用い方、折断手法による石器の形状決定、機能部の作出など共通する要素が認められるが、調整加工が平坦剥離手法でより面的に施される点で「台形石器」・「切出形石器」と異なる。「基部・側縁部整形石器」はナイフ形石器と同一の石器群を構成することが石器群の分析から理解されるが、「基部・側縁部整形石器」とナイフ形石器の関係は「切出形石器」とナイフ形石器の関係ほど明確にし得ない状況にある。

このように「側縁部整形石器」(a・b類)は折断手法及び平坦剥離手法によって、「基部整形石器」(c類)は裏面基部の平坦剥離によって石器が作出されている。裏面基部加工は先土器時代において石器加工技術としては客体的な存在であり、同時に、普遍的に認められる石器加工技術であるが、出土したこれらの石器は平坦剥離手法及び裏面基部加工によって作出される点で特徴的な存在となっている。以下、

本遺跡出土の10点と同一の技術上に作出されたと思われる事例について概観する。

群馬県和田遺跡(文献88)・栃木県磯山遺跡(文献89)に類例が見られる。和田遺跡では7点が出土している。4分して記述されるが、b・c類を主体にa類を組成し、剥片剥離技術上の特徴から牛伏遺跡出土石器に類似する様相を示す。磯山遺跡では1点が出土している。縦長剥片素材のナイフ形石器を主体にc類に分類される1点が組成する。ほかに県下の二遺跡で同様な形態を示す石器が出土している。東京都多聞寺前遺跡(文献90)IX層でc類に分類される1点が細部加工剥片として報告されているほか、熊本県曲野遺跡では折断手法と平坦剥離により作出される石器群の存在(文献103)が指摘されている。

これらはいずれもA・T下に出土する石器群に抽出され、ナイフ形石器文化の前半にあって特徴的に存在する。これらは「台形石器」・「切出形石器」と形態上近い存在であり、少なくとも地域的に特徴的に存在する。また、「基部・側縁部整形石器」は形態上3分され、機能的に分化した状態にあることを示しており、こうした状態はナイフ形石器の形態差と同質の内容を示すと思われる。このように「基部・側縁部整形石器」は石器群の構造の変質をもって、「台形石器」・「切出形石器」への変遷(ナイフ形石器文化への同化)を示すのかもしれない。現状では、「基部・側縁部整形石器」及び「ナイフ形石器」は同一の石器群を構成するが、両者の関係は明らかにし得なかった。層位的出土例の豊富な南関東地方でもA・T下のVI・IX・X層に牛伏遺跡と同様な盤状剥片を石核素材とする剥片剥離技術(文献92)、平坦剥離、裏面基部加工の存在、東京都下里本邑遺跡・高井戸東遺跡等に石器形状の類似する「切出形石器」が認められるものの両者の関係は明らかにし得ず、「基部・側縁部整形石器」は比較的古い様相を示すと思われるが、現状では、両者は併存する状況にある。

局部磨製石斧 総計6点が出土している。これらのほかに刃部破片1点、石斧再生剥片3点が出土し

II 先土器時代の遺物と遺物分布

ており、少なくとも9点の局部磨製石斧が遺跡内に存在したことになる。出土した石斧6点のうち刃部形状の明らかなる点は小田氏の分類(文献94)に従えば、平刃3点、円刃1点、斜刃1点となり、いずれの刃部も片刃状を呈している。これらの局部磨製石斧は緑泥片岩・石炭片岩等石材性状を利用して得られた大形剥片を石器素材としており、石器の平面形に対する石器最大厚は1.05~1.55cmであり、全体に薄手となっている。また、石器側縁部は図71-1・2、図72-1・2、図73-5に見られるように平坦面を特徴的に有す。とりわけ、図71-1の右側縁部には研磨による平坦面が作出されているほどである。これらはいずれもナイフ形石器、基部・側縁部整形石器、縦長剥片(目的剥片)のいずれかとブロックに伴出する傾向が指摘される。

本遺跡では、2039点の石器・剥片類が20ヶ所を越えるブロックを構成することが理解されたが、これらは必ずしも単位的な生活跡(居住・火処・石器製作跡)を示しているとはいえず、むしろ継続的な居住の結果遺存したものと思われる。想定される10点を越える局部磨製石斧の存在をして彼らが保有したであろう局部磨製石斧の数量を限定して把えることは困難であるが、存在の確認された9点の局部磨製石斧のうち、3点の局部磨製石斧には執拗なほどの石斧再生作業が試みられており、石器群に占める局部磨製石斧の比重の大きさと重要性が窺える。

その他の石器 第II文化層を構成する石器群はナイフ形石器・「基部・側縁部整形石器」・局部磨製石斧を主体として、いずれも1、2点の出土であるが若干の搔器・彫器・加工痕ある石器・使用痕ある石器を組成することが理解された。加工痕・使用痕ある石器は総計4点の出土であり、石器群に占める割合は低い。また、安山岩を石器素材とする加工痕・使用痕ある石器の占める割合はさらに低く、これらが「地点的消費」性の強い石器(定形化した石器が石器製作者と共に移動するのに対して、遺跡内で使用・遺棄される)として理解されることと相反する。こ

の点に関しては明らかにし得なかった。一方、搔器は典型的にスクレイパー・エッジが形成され、定形化した存在として評価されるが、彫器は定形化した存在として評価することは困難である。

これらの石器は石器群に体系的に組成することが理解されるが、多くは遺跡内に搬入された石器である。「地点消費性の高い石器」としての加工痕・使用痕ある石器に与えられる評価は妥当性があるが、本遺跡では上述したような状況であり、結論を保留したい。

3. ブロックとその構造

第II文化層を構成する石器群は直径50m程度の特徴的な分布状況を示し環状に検出された。「集落の全貌」を把え得る数少ない明らかな調査事例として評価される。これらは隔年学的には大過なく同一視し得るが、単位的集団の動態等より微視的なレベルでの分析を要す。出土した石器群の多くは安山岩を用い、同一母岩の同定作業は困難であり、石器群を評価するうえで大きな制約となっている。

a 石器と石材

出土した総計2039点の石器群は周辺地域で比較的容易に採集される安山岩を主体とし、ほかに黒色頁岩・黒曜石・緑泥片岩・チャート等(図106)が見られる。石器群は比較的多様な石材からなるが、剥片剥離工程の明らかな安山岩を除き黒色頁岩・黒曜石・緑泥片岩・チャートは搬入石材であり、剥片剥離工程は明らかにし得なかった。在地系石材(安山岩)が主体を占める点で赤城山麓に立地し、「暗色帯」に出土する他の石器群と同様な様相を示しており、上部ローム層中より出土する石器群とは異なる様相を呈している。

b 母岩別資料の分布と接合関係

石器群は28種類に及ぶ母岩別資料から構成され、15箇所(遺跡)の石器ブロックを形成することが理解された。母岩別資料は一部を除いて明らかでなく、母岩別資料毎に石器製作工程上に把え得ず、また、第I文化層を構成する石器群について行った分析と同

様々な観点で石器群を明らかにし得なかったが、石器群は様々な観点から互いに強く結び付く存在であることが想定された。

明らかに遺跡内に搬入された緑泥片岩1～3・石炭片岩・絹雲母片岩・黒色頁岩・黒曜石・流紋岩・砂岩(付図14・15)のうち、石器器種との対応関係の明らかでない絹雲母片岩・流紋岩・砂岩を除き母岩別資料の分布、あるいは、形態学的に一定の状態(ナイフ形石器、「基部・側縁部整形石器」と局部磨製石斧の分布及び安山岩製・黒曜石製「基部・側縁部整形石器」の存在)が指摘される。一方、明らかに母岩別資料に分類された凝灰岩1～3・チャート1～2の分布(付図16)は複数の石器ブロックにわたって分布しており、こうした状態は母岩別資料の分類の可能であった一部の安山岩(付図17)についても認められる。

石器群の多くは石器製作址の様相を示すにもかかわらず、母岩別資料の分類が困難なこともあって、母岩別資料を単位とする石器製作工程を明らかにし得る接合資料を抽出し得なかった。接合資料は81例289点が得られ、これらは基本的にブロック内、あるいは、隣接するブロック間で接合する。数十mの距離を隔てて接合する接合資料も認められ、石器群の同時性を示すと考えられるが、現状では、具体的に

ブロックを母岩別資料の共有関係をもって評価して示すことは困難である。

c 石器ブロックと器種組成

第II文化層を構成する石器群はナイフ形石器・「基部・側縁部整形石器」・局部磨製石斧を主体として組成することが理解された。「基部・側縁部整形石器」は特徴的ないくつかの手法により作出され、ナイフ形石器同様器種の分化現象が認められ、独立した石器器種として存在する。ナイフ形石器、「基部・側縁部整形石器」は局部磨製石斧と同一の石器ブロックより組成出土し、ナイフ形石器は石器15ブロックに、「基部・側縁部整形石器」は石器群が環状に廻る地点(石器2・4・7・8・14ブロック)に出土し、ナイフ形石器及び「基部・側縁部整形石器」が互いに同一の石器ブロックに組成することはない(図107参照)。こうした状態はナイフ形石器及び「基部・側縁部整形石器」に時間差、あるいは、系統差を示唆するとも思われるが、現状では、ナイフ形石器・局部磨製石斧の分布状態(必ずしも原位置を示しているとは限らない)が、生活址の様相を示しており、ナイフ形石器及び「基部・側縁部整形石器」は石器群に共に組成すると言える。ブロックと器種の関係及び接合関係により石器群は図107のように概念的に扱えられ各々が特徴的に分布し、各地点の機能的分掌と石器群の遺存した背景を示すと思われる。ナイフ形石器と局部磨製石斧の組成する石器15b～eブロック、「基部・側縁部整形石器」と局部磨製石斧の組成する石器7・8ブロック、石器11・15a、13・14ブロック及び接合関係により強く結び付く2a～2dブロック、4a～4dブロック等いくつかのブロック群に扱えることができる。すなわち、「基部・側縁部整形石器」と局部磨製石斧の組成及び、ナイフ形石器と局部磨製石斧の組成に示される石器製作址の様相を併せ持つ単位的石器群の存在(7・8・11・13・14・15aブロック)、ナイフ形石器・局部磨製石斧・縦長削片等主要生産具の存在、搬入石材、受熱削片及び礫、配石、敲石の組成に示される生活址の様相を示す単位的石器群の存在(15

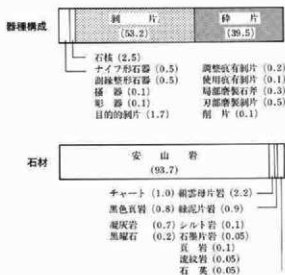


図106 第II文化層の器種構成と石材

II 先土器時代の遺物と遺物分布

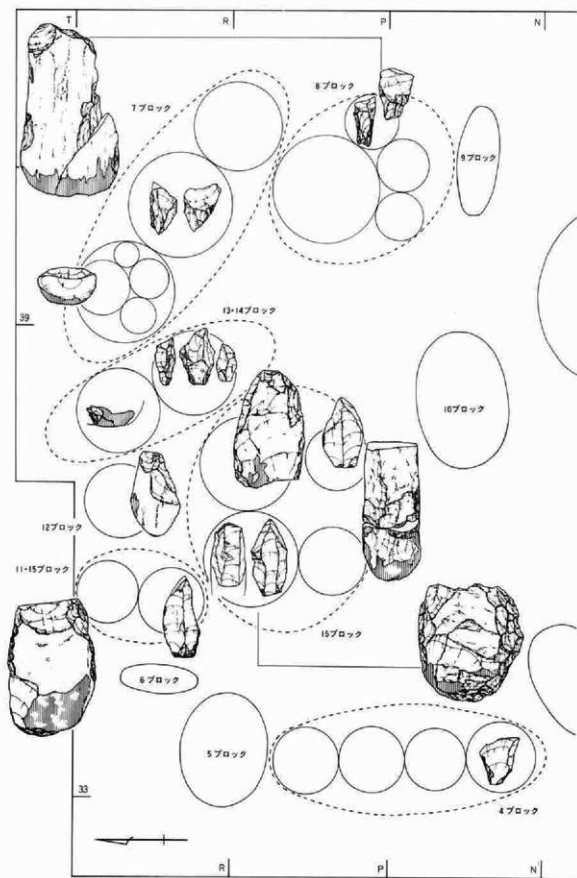
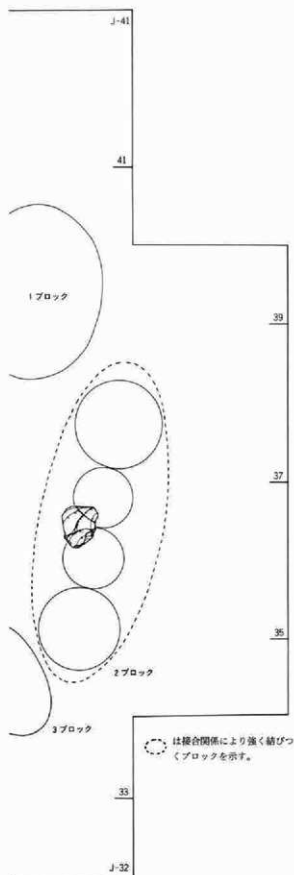


図107 ブロックと器種組成



c・dブロック)が抽出された。

4. 第II文化層の石器群の位置づけ

第II文化層を構成する石器群は総計2039点が出土し、これらは直径50m程の範囲に、15ヶ所の石器ブロックを形成して環状に分布して検出され、これらはナイフ形石器、「基部・側縁部整形石器」、局部磨製石斧を主体として他に若干の掻器、彫器、加工痕ある石器、使用痕ある石器を組成することが理解された。一般に、石器群はある一定の範囲に集中して出土する。と同時に、これらは湧水の見られるノッチ部、あるいは、地形に沿って弧状に分布して出土することが多いが、「環状に分布して出土した」として報告された事例はない。従って、この特徴的な環状に分布する石器群は構造的に明らかにされるべきではあるが、不明確な要素も多く今後の課題である。

石器群はナイフ形石器、「基部・側縁部整形石器」、局部磨製石斧を主体に出土したが、これらのうち、ナイフ形石器、「基部・側縁部整形石器」は以下の理由で石器群に組成、共存すると判断される。ナイフ形石器の多くは搬入石器であり、母岩別資料の観点から「基部・側縁部整形石器」との同時性を検証する資料は得られなかった。また、「基部・側縁部整形石器」は折断手法及び平坦剝離・裏面基部の平坦剝離によって作出され、形態的に分化した状態にある点でナイフ形石器との共存に疑問がもたれる。しかし、ナイフ形石器に伴う他の石器群の存在は現状では認められず、これらが単独で存在する十分な説明が見つからないこと、同一形態の局部磨製石斧をいずれも伴うこと、ナイフ形石器(図68-5)・「基部・側縁部整形石器」の素材剥片は剥片剝離工程の分析から同一の剥片剝離工程に共存することが想定されること等からナイフ形石器及び「基部・側縁部整形石器」は石器群に組成、共存すると思われる。

石器群は15ヶ所の石器ブロックを形成して検出されたが、これらは各々特徴的な器種組成を示して存在する。2039点に及ぶ石器群の母岩別資料の分類は以下のように扱えられる。

II 先土器時代の遺物と遺物分布

① ナイフ形石器及び局部磨製石斧の組成する石器15b～eブロック

② 「基部・側縁部整形石器」及び局部磨製石斧の組成する石器7・8ブロック

さらに各々のブロックが石核・剝片・砕片を一樣に組成し、ブロック間の接合関係を考慮すれば、

③ ①と同様な組成を示す石器11・15aブロック

④ ②と同様な組成を示す石器13・14ブロック

⑤ 「基部・側縁部整形石器」の組成する石器2・4ブロック

が①②に相当するブロック群として抽出される。

これらは相互に接合関係が認められ石器群の同時性を示すと同時に各々が補完的に機能したと思われるが、その実態は明らかにし得なかった。各ブロックとも石核・剝片・砕片からなる等質な内容を示し、わずかに、受熱剝片・礫の存在から火処を中心とする生活址の存在が想定されるに過ぎない。石器群が複数の単位石器群より構成されるとともに比較的長く継続的に生活が営まれた様相を示すにもかかわらず、ここで得られた石器群のこうした状態が集落構造の普遍性を示すか特異性を示すかは今後資料の集積を要す。

これまで示したように石器群は部分的に不明確な要素を払拭し得ないが、ほぼ同一の石器群を構成すると思われ、石器群の出土状況からVII層下位あるいはVII層上位の暗色帯中に石器群の本来的な層序が求められる。牛伏遺跡出土石器群と同様な石器組成を示す石器群は公表された周辺地域の先土器時代遺跡に認められないが、近年調査された二・三の石器群中に「基部・側縁部整形石器」と同様な形態の石器を確認しており、少なくとも、地域に特徴的な存在としての感触を深めている。「基部・側縁部整形石器」は折断手法・平坦剝離手法及び裏面基部加工により特徴的に作出され、同様な技術基盤上^{註3}に作出された石器の組成する石器群として栃木県磯山遺跡・東京都多聞寺前遺跡(文献90)、技術的に類似する石器群として東京都高井戸東遺跡(文献94)・同下里木邑遺跡(文献95)出土石器群が指摘された。そのほかにも同

様な石器群が九州地方(文献103)にも存在するとき、これらが汎日本的に存在することが予想されるが、A・T降下以前の中間地域の石器群は立野が原型ナイフ形石器に代表される小形のナイフ形石器が主体を占めており、現状では、明確に対比し得ない。さらに、牛伏遺跡出土石器群はVI層からVIII層にわたって出土しており、その出土状況は必ずしもA・T降下期を大きく遡る印象に乏しく、また、県内の出土資料にはI期の石器群(文献105)が同一の遺跡内に相対的な上下関係をもってその変遷が把握されておらず、不確定要素を多く抱えている。

しかし、牛伏遺跡出土石器群に大形の盤状剝片を石核素材とする特徴的な剝片剝離技術は南関東地方ではVII層からIX層段階に普遍的に存在し(文献92)、また、「基部・側縁部整形石器」^{註3}は南関東地方ではIX層段階に類例が認められ、検証すべき事項は多く存在するが、牛伏遺跡出土石器群はこれらに対比される蓋然性が高いことを指摘しておきたい。

註1 出土した局部磨製石斧は輪軸までの再生使用が試みられており、その重要性を窺うことができる。こうした状態は石斧の重要性ばかりでなく、継続的居住が背景として考えられるのではないかと。

註2 出土状態及び層序の観察から岩宿遺跡・和田遺跡出土石器群の相対的な上下差の指摘(文献89)もされるが、牛伏遺跡出土石器群の出土状態は両者が同様な層序に出土すると見える。

註3 調査は芹沢民介氏及び鈴木直史・原田節命により4地点で実施されており、「基部・側縁部整形石器」は芹沢氏の調査地点で出土している。ナイフ形石器、磨製石器、磨製石器、磨製石器、磨製石器のほかにc型を主体にa・b型の「基部・側縁部整形石器」が組成する。石核はA～Dの4形態が存在し、剝片の分析からA～C石核が主体を占める。牛伏遺跡で特徴的な盤状剝片を素材とする石核はD型がこれに相当し、牛伏遺跡出土石器群と同様な石器組成を示している。

註4 このほかにも岩手県大台野遺跡II b文化層II群の石器群(文献105)が類似するものとして指摘することが可能である。

註5 「基部・側縁部整形石器」は構造的実質をもって切出形石器・台形石器への変遷(ナイフ形石器文化への同化)を示すと思われる。現状では、その変遷を示す良好な石器群は認められないが、両者の石器群は同一の系統上に包摂するにたる形態上の類似性が認められる。しかし、これらの石器群に認められる形態上のバリエーションを整合性をもって理解することは困難であり、ここでは特徴的な手法により作出され同一の技術基盤上に包摂される一群の石器として「基部・側縁部整形石器」(a～c型)と呼称した。

T-28

N-28

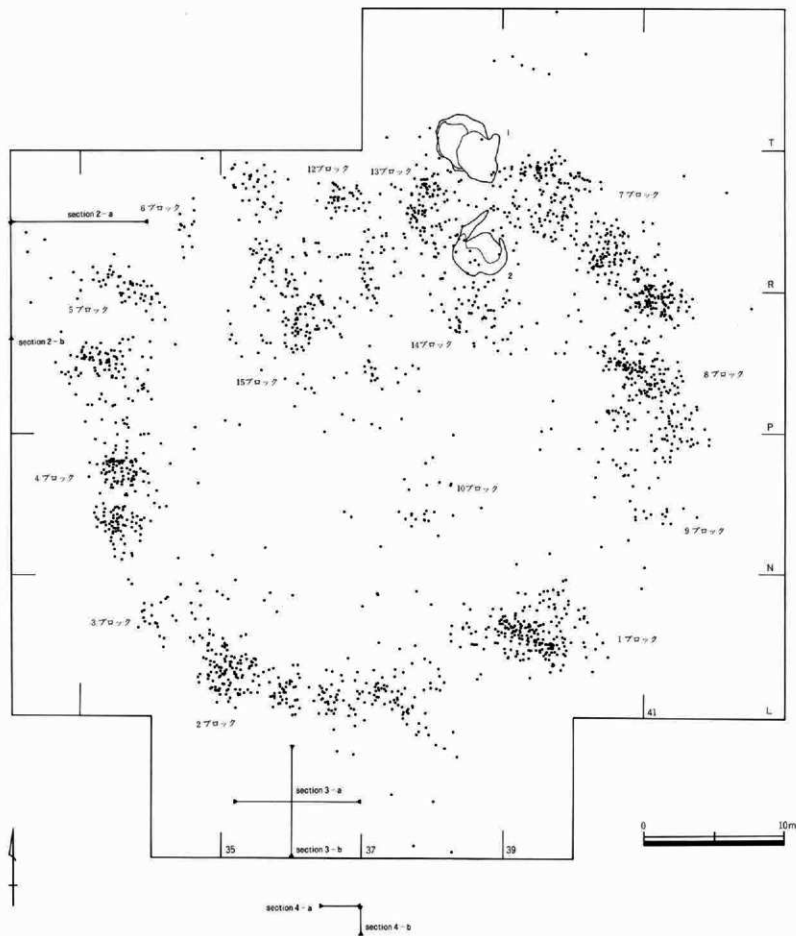
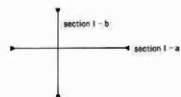


図108 第II文化層の石器分布とルーム逆転層の位置

III 縄文時代の遺構と遺物

1. 概 要

縄文時代の遺構は、竪穴住居3軒、陥し穴状の土壇25基、用途不明の土壇18基、集石3基が検出された。各遺構の確認は、基本的にIV a 層のソフトローム上面で行なったが、遺構内の埋設土とIV a 層とが類似しているために、遺構の確認が困難であった。このことから、調査の最終段階で幅1.5m、深さ30~50cmのトレンチを任意に設定してハードローム(V層)上面まで掘り下げ、再度遺構検出を行なった。このトレンチ調査で検出された1軒の住居址や23基の土壇については、残存壁高が低くなっている。各遺構の時期は、3軒の竪穴住居のうちの1軒は前期踏碁b~c式期に比定されるが、他の2軒は不明である。また、陥し穴状の土壇や集石の時期は不明であるが、平面形が円形の土壇については、踏碁b~c式期に比定されるものが多い。

全体的な遺構の分布は、東側の沖積地に近接するに従って濃くなる傾向にあるが、その中でも陥し穴状の土壇は各形態ごとにまとまり、地形に即して弧状に展開している。

この他に、遺構外からの出土遺物として、草創期や前期の土器・石器があり、これらの遺物は全てソフトローム上層のIV a 層中に含まれていた。

2. 住 居 址

13 A 号 住 居

位 置 H-34~35グリット

発掘区の南東隅に位置している。

重 複 13B号住居の北側の壁面を共有するように重複しているが、本住居は13B号住居に先行する。

形 状 13B号住居との重複によって周壁の不明な部分もあるが、1辺が約4.4mの円形に近い隅丸方形

を呈する。

埋 土 ソフトロームに類似した灰褐色土が上位に堆積し、黒色土および黒褐色土は下位に堆積するという特徴を有する。

炉 住居中央部に位置する。床面を長径61×短径45cm、深さ9cmに掘りこぼめた炉であり、壁面がわずかに焼土化している。

周 溝 断続的であるが、周壁に沿って幅10~20cm、深さ3~11cmの規模でめぐっている。

床 面 2段の掘り込みをもち、周壁際は中央部に比べて30cm程度高くなる。中央部は、住居の外形とほぼ相似形を呈した一辺3.2mの隅丸方形に掘り込まれ、ソフトローム上面からの深さは約1.2mを計る。特に堅い面は無く、北東から南西側へ向って約10cmほど低くなる。

柱 穴 住居の対角線上に4本の支柱穴($P_1 \sim P_4$)と、周壁際の1段高い部分に約50本の支柱穴が検出された。支柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1: 22 \times 25$ cm、 $P_2: 20 \times 30$ cm、 $P_3: 25 \times 48$ cm、 $P_4: 19 \times 26$ cmである。その心々間の距離は、 $P_1 \sim P_2: 2.1$ m、 $P_3 \sim P_2: 2.15$ m、 $P_3 \sim P_4: 2.4$ m、 $P_4 \sim P_1: 2.2$ mを計る。支柱穴は径15cm、深さ10cm前後を計るものが多い。

貯蔵穴 貯蔵穴であるか否かは断定できないが、東隅に径約70cm、深さ45cmの土壇が存在し、地内にはロームブロックを含んだ暗褐色土が堆積している。

出土遺物 2・7・13・23の土器片や凹石が床面に密着していた他は、全て埋土中より出土した。

1・9・12・13・23は半截竹管状工具による平行沈線文、2・3・5はいわゆる浮線文、6・10・11は連続爪形文によってそれぞれ文様構成されるが、2・8~11は上記文様の施文前にRL縄文が施文される。4は横位の低い隆帯上に刻み目を施す。14・17~21は、縄文以外の文様が不明であるが、縄文原体は14・19・20が

III 縄文時代の遺構と遺物

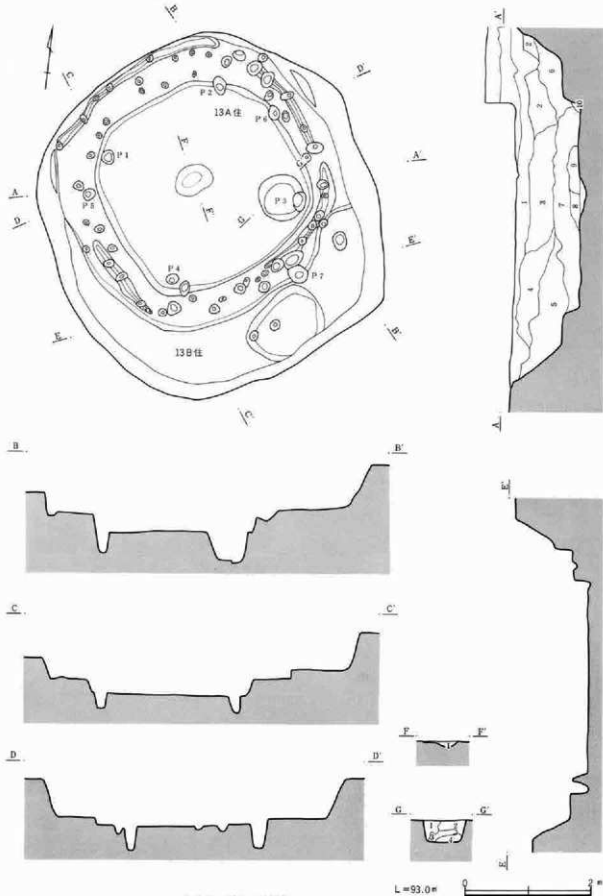


図109 13A・B号住居

- ▶**炉**
1層 暗褐色土 白色バミスを混入する
- ▶**土壇**
1層 暗褐色土 黄色ローム土(V層)をブロック状に混入し、しまりはやや弱い。
2層 暗褐色土 やや暗い色調を呈する。
3層 暗褐色土 黒みの強い土質でロームブロックを混入する。
4層 暗褐色土 粘性が強い。ローム粒子・ブロックを混入。
- ▶**住居**
1層 灰褐色土 白色粒子をかなり多く含んだ土。
2層 暗褐色土 白色粒子を多量に含んだ土。
3層 黒褐色土 2層に類する。黒色土を多く含む。
4層 暗褐色土 2層に類する。
5層 灰褐色土 1層に類するが、白色粒子を多く含む。
6層 褐色土 白色粒子を多量に含んだ土。
7層 灰褐色土 少量の軽石を含んだしまりのない土。
8層 灰褐色土 7層に類するが色調はやや暗い。
9層 黒色土 かなり多くの白色粒子を含む。
10層 褐色土 7層に類しハードロームブロック混。

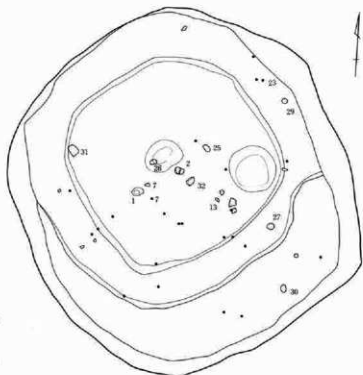


図110 13A・B号住居の遺物出土位置

0 2 m

R L、17・18がR L + 結節、21は前々段反転のR Lである。15・16・22は同一個体の破片であり、14号土壇の4とも同一個体である。口唇部に竹管状工具による刺突が加えられ、以下にL R 縄文が施文される。24はハマグリなどの腹縁による波状貝殻文が施される。2～11は諸磯b式、1・12・13・23は諸磯c式、15・16・22・24は諸磯c式併行に比定される。

25～29は集合打痕による凹穴や敲打痕をもつ凹石であり、表・裏には磨面が認められる。30・31は磨石である。32は石皿の破片で、裏面には欠損前に施された雑揉み状の凹穴が認められる。また、火熱を受けており、表面の一部に煤状炭化物が付着する。

備考 出土土器は諸磯b・c式が混在しており、本住居の明確な時期を決定することは困難であるが、胴下半部の形状をとどめる1の土器を重視するならば、諸磯c式期に位置づけられよう。

13 B 号 住 居

位置 H-34～35グリッド

13A号住居と同一位置にある。

重複 北側で13A号住居と、南側で34号土壇と重複するが、土壇との先後関係は確認できなかった。

形状 13A号住居と類似した隅丸方形を呈し、1辺が約5.4mを計る。

埋土 13A号住居や古墳時代住居との重複によって埋土の大半が失われており、その詳細は不明であるが、南側の残存部分には暗褐色土が堆積している。

炉 不明。

周溝 なし。

床面 南側の壁面より、約1mの範囲しか残存していないが、ロームを57～65cm掘り込んで床面としている。特に堅固な面は検出されていない。

柱穴 住居の対角線上より若干ずれた位置に、4本の柱穴が確認された。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₃:20×25cm、P₄:22×25cm、P₇:29×42cm、P₈:23×35cmである。その心々間の距離は、P₃～P₄:3.2m、P₄～P₇:2.6m、P₇～P₈:2.1m、P₄～P₈:2.3mを計る。柱穴内には、総まりのない黒褐色土が堆積している。

III 縄文時代の遺構と遺物

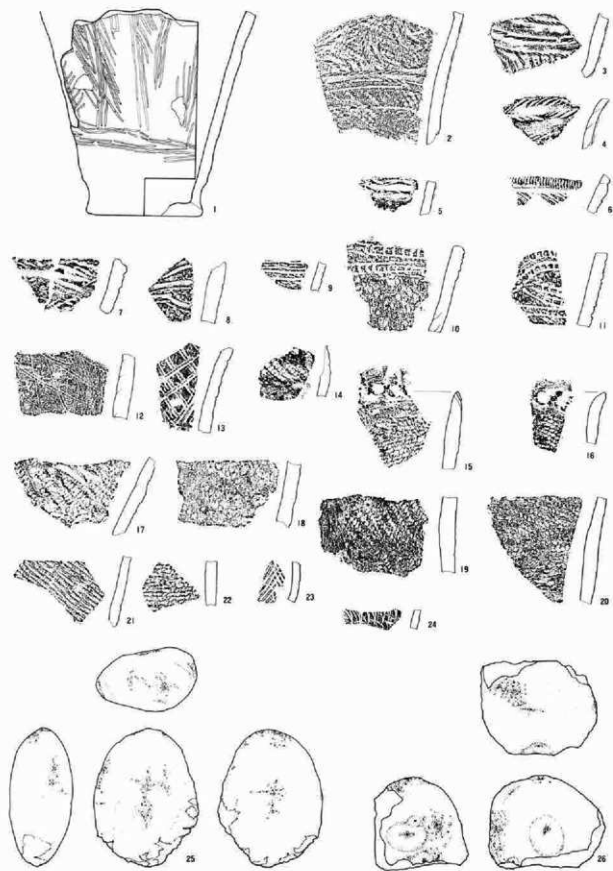


図111 13号住居の出土遺物(1)

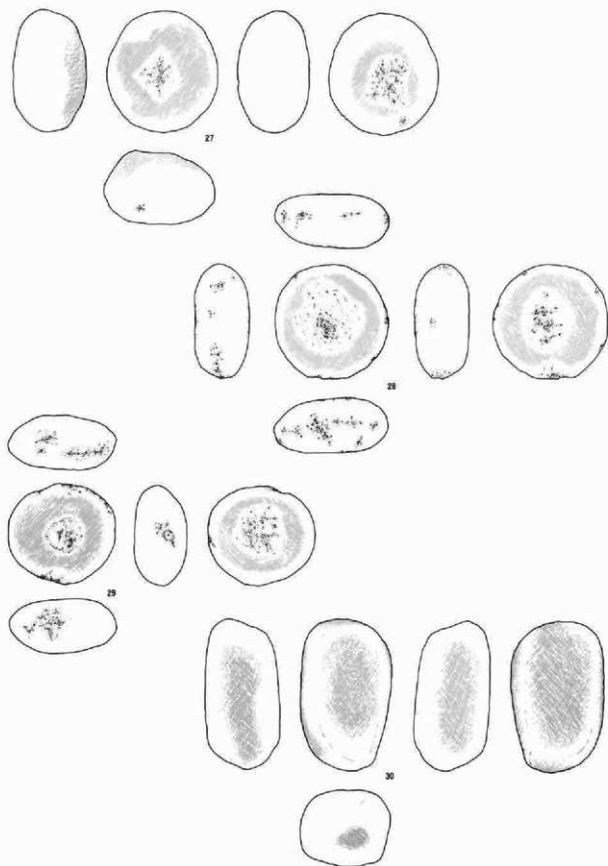


図112 13号住居の出土遺物(2)



III 縄文時代の遺構と遺物

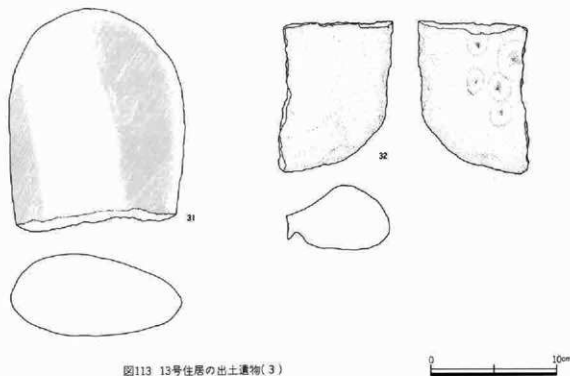


図113 13号住居の出土遺物(3)

遺物 床面上より、磨石(30)1点と調整剥片数点
が出土したのみである。30は表・裏を含め、ほぼ全面
にわたって磨面が認められる。

備考 南壁に接して、長径123×短径85cm、深さ20
cmほどの落ち込みが存在するが、本住居との先後関
係および性格等については不明である。

15号住居

位置 C-25~26グリッド

発掘区の北中央部に位置している。

重複 55・57号土壌によって、住居中央部と北東隅
を切られている。

形状 若干歪んでいるが、一辺約3.4mの隅丸方形
を呈する。壁高は、ハードルーム上面より21~35cm
を計る。

埋土 ソフトルームに類似した褐色土やハード
ルーム混りの褐色土が堆積している。

炉 不明。 **周溝** なし。

床面 壁際から中央部に向けて緩やかに傾斜し、
10cm前後の高低差が見られる。特に堅固な面は認め

られない。

柱穴 住居の対角線上よりややずれた位置に、4
本の主柱穴が検出された。P₁の柱穴に2本のピット
が接しているが、55号土壌との重複により、その詳
細は不明である。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁：
38×16cm、P₂：25×8cm、P₃：25×60cm、P₄：23×
35cmである。また、その心々間の距離は、P₁~P₂：
1.2m、P₂~P₃：1.6m、P₃~P₄：1.4m、P₄~P₁：1.
5mを計る。

遺物 埋没土中より、4点の石器が出土したのみ
である。1は短冊形の打製石斧である。体部中央で
斜めに折れているが、割れ部分に細部加工を施さず
に再利用しており、先端に対こぼれ状の使用痕が認
められる。左側縁部にも、再調整加工を施してい
る。2は縦長の不定形剥片を素材とした石匙であり、
周縁に細かい調整加工を施している。3は凹基無茎
鎌である。側縁および基部に微細な加工が施され、
基部はU状に深く抉れている。4は横長の不定形削
片を素材とした削器である。打面部に粗い調整加
工を施し、剥片の端部を刃部としている。刃部には、
微細な刃こぼれ状の使用痕が認められる。

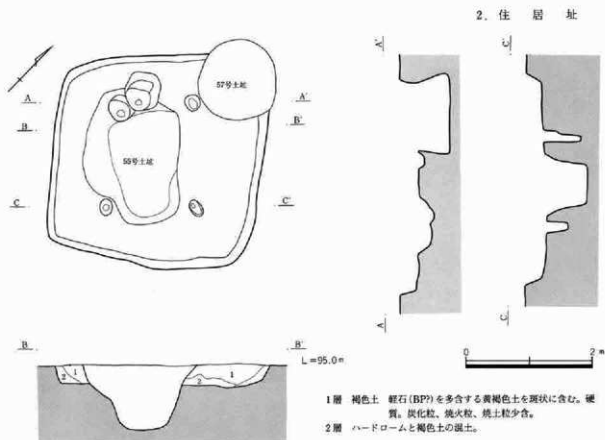
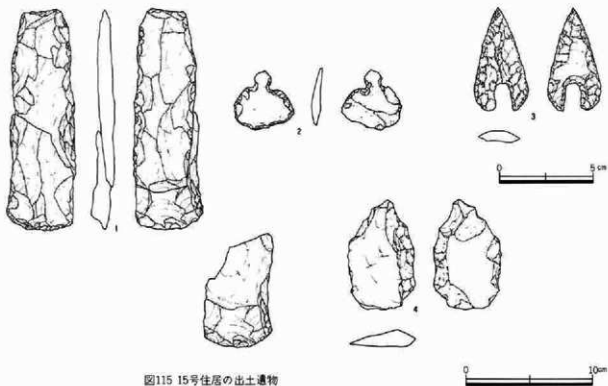


図 15号住居



3. 土 壇

土壇内の埋没土層の観察や伴出遺物より、縄文時代に位置づけられる土壇は、43基を数える。これらの土壇を形態別に分類すると、I～III類に分けることができるが、その中には控猟用の陥し穴と判断される土壇と、用途不明の土壇が存在する。ここでは陥し穴としての土壇を中心にその概略を述べる。なお、先述したように26・33・40・43・45・52・54・55・57・58号土壇については、ソフトローム上面での確認が困難であったために、ハードローム(V層)上面まで30～50cm掘り下げて確認しており、幅や深さに関してはその点を考慮する必要がある。

I類 開口部の長軸が3～4mに対して、短軸が1m前後という極めて細長い溝状の土壇であり、8基が本類に属する。底面の短軸は5～10cmと狭く、短軸での断面形はV字形を呈している。深さは1.5～2.0mを計り、両側の壁面がオーバーハングする特徴を有する。先土器時代調査とのからみから断ち割り調査を実施していないため、底面におけるピットの有無は確認できなかった。土壇内にはソフトロームに類似した褐色土ないし暗褐色土が自然堆積しており、下位にゆくにつれて締まりが弱くなる。いずれの土壇からも土器等の伴出遺物が全く検出されておらず、所属する時期は不明である。

I類土壇の分布は、標高93mと94～95mの2地点に集中しており、その長軸線が等高線と直交するような状態で配置されるときも、地形に即して弧状に展開している。

II類 上面での形状が楕円形あるいは隅丸方形状を呈するものであるが、底面に複数個の小ピットを有するものと持たないものとが認められる。前者には、16基が存在する。上面での長軸は1.5～3.3m、短軸は0.7～1.4mであり、深さが1m前後を計る。短軸の断面形は、開口部から中位にかけて約45～60°の勾配で徐々にその幅を狭め、底部付近の壁面は垂直に近い状態となる。底面の小ピットは、長軸に沿って直線的に並ぶものと散在するもの(16号土壇)とが

認められる。前者では、径20cm、深さ30cm前後のピットが2～4個並ぶが、後者の場合は径10cm、深さ20cm前後のピットが10個余り散在する。ピット内の埋没土から、棒杭等の痕跡を確認することはできなかったが、前者はピット内に棒を立ててその周囲を埋めるのに対し、後者は棒をそのまま打ち込んでいるものと思われる。底面にピットをもたない34・58号土壇は、用途不明である。II類の陥し穴土壇の分布は、標高91.5～93mと95～95.5mの2地点に分かれ、前地点でI類と1部重なる。その配置や地形との関係は、I類とほぼ同様のあり方をしている。

III類 開口部の平面形が円形のものであり、16基が本類に属する。規模は径1～1.5m、深、50～70cmを計る。各土壇の用途は明確でないが、壁面がオーバーハングする30・31・46・57号土壇は、貯蔵穴の可能性もある。また、底面に径5～10cmのピットを多数有する18号土壇は、陥し穴と考えられる。III類土壇の分布は、前期の13号住居や15号住居の周辺に散在しており、土器等の出土遺物も前期諸磯b・c式期を主体としていることから、住居と密接な関連性をもつと想定される。

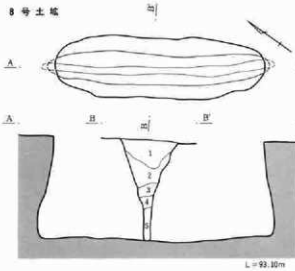
以下、主な出土遺物の説明を加えると、14号土壇の埋没土中位層より出土した4の土器は、口唇上に竹管状工具による刺突が加えられ、更に耳状の突起が貼付されている。口縁から底部にかけてはL・R縄文が斜位に施文され、内面には貝殻条痕文が施文されている。諸磯c式併行と思われる。

19・24・53号土壇の埋没土中より打製石斧が出土しているが、いずれも欠損している。19号土壇の1は体部上・下端を、同2および24号土壇1・53号土壇1は体部下を欠損する。各石斧の両側縁には、微細な調整加工が施されている。

I・II類の陥し穴状の土壇についてはその所属時期が不明であり、それらの土壇が相互にどのような関係をもつのかも明らかではない。しかし、その分布をみると、各形態ごとに2単位のみをもち、傾向があり、少なくとも同一形態・同一単位の陥し穴群は、同一時期の所産である可能性が高い。

3. 土 坑

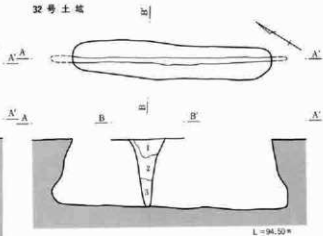
8号土坑



- 1層 暗褐色土 白色バミスを多く混入。少量の炭化物を混入する。
- 2層 褐色土 白色バミスを少量混入。色調は1層より明るい。
- 3層 暗褐色土 白色バミスを少量混入。
- 4層 褐色土 ローム粒子を主体とし、しまりは弱い。
- 5層 暗褐色土 ローム(V・VII層)をブロック状に混入する。

L=92.10m

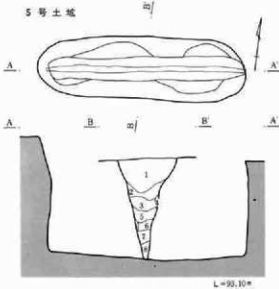
32号土坑



- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入する。しまりは強い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を混入する。粘性に富む。
- 3層 茶褐色土 ローム(VII層)土を主体とする。粘性に富む。

L=94.50*

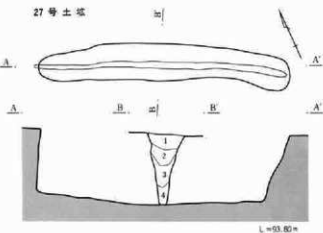
5号土坑



- 1層 暗褐色土 ローム粒子・白色バミスを少量混入する。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入する。しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を混入。色調は2層より暗い。
- 4層 黄褐色土 ローム層の崩落土。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入する。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入する。
- 7層 黄褐色土 ローム粒子を主体とする。しまりは弱い。
- 8層 暗褐色土 ローム土(VII層)を多く混入する。

L=93.10*

27号土坑



- 1層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入。粘性は強い。
- 2層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入。粘性は弱い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子をブロック状を混入する。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入する。粘性に富む。

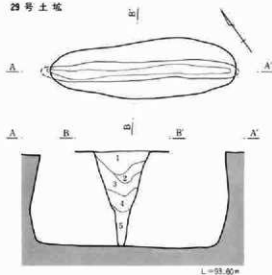
L=93.80*

図116 I類の土坑(1)



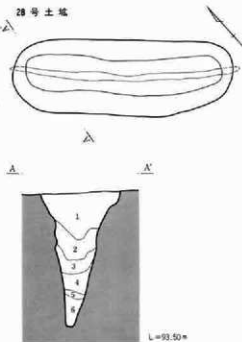
III 縄文時代の遺構と遺物

29号土坑



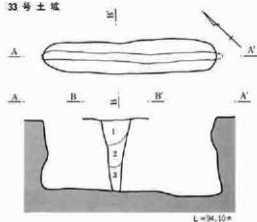
- 1層 黒褐色土 白色バミスを混入する。しまりは強い。
- 2層 黒褐色土 ロームブロックを混入する。しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 白色バミスを少量混入する。
- 4層 暗褐色土 色調は3層より暗い。粘性に富み、しまりは弱。
- 5層 茶褐色土 ローム(VII層)土を主体とする。粘性に富む。

28号土坑



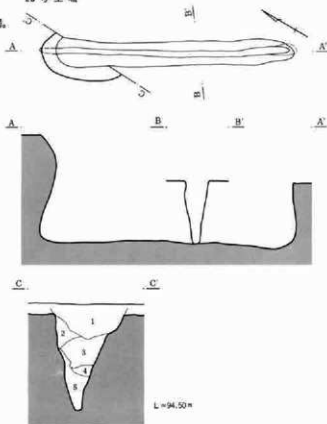
- 1層 暗褐色土 白色バミスを多く混入する。炭化粒を含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を主体とする。しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入する。
- 4層 暗褐色土 ロームブロックを混入する。しまりは弱い。
- 5層 暗褐色土 色調は4層より暗い。粘性に富み、しまりは弱。
- 6層 暗褐色土 ローム(VII層)土を主体とする。粘性に富む。

33号土坑



- 1層 黒褐色土 白色バミスを混入する。しまりは強い。
- 2層 暗褐色土 ローム(VII層)土をブロック状に混入。粘性に富。
- 3層 茶褐色土 ローム(VII層)土を主体とする。粘性に富む。

26号土坑

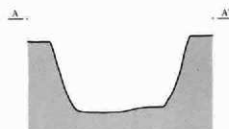
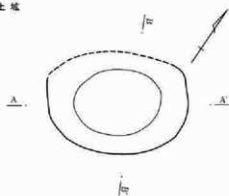


- 1層 黒色土 白色バミスを多く混入。炭化粒を含む。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子をブロック状に混入する。しまり強。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子をブロック状に多く混入する。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを主体とする。しまり弱。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを主体とする。粘性に富。

図117 1類の土坑(2)



34号土塚



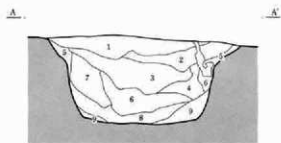
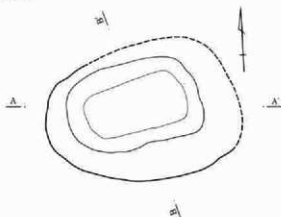
B B



L=93.00m

- 1層 暗褐色土 白色バミスを混入する。粘性は弱い。
- 2層 暗褐色土 白色バミスを混入する。
- 3層 黒褐色土 白色バミスを混入する。炭化粒含む。
- 4層 暗褐色土 色調は2層に近似的。炭化粒含む。
- 5層 暗褐色土 ロームブロックを多く混入する。
- 6層 暗褐色土 白色バミスを混入する。
- 7層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

58号土塚



B B



L=93.20m

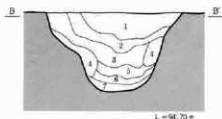
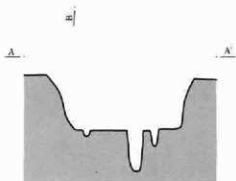
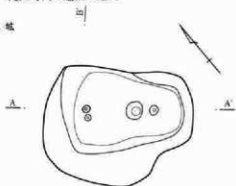
- 1層 黒褐色土 白色細バミスを含む黒色土小塊を含む。
- 2層 黒色土 細かい白色バミスを含む。
- 3層 黒色土 灰黄色粘土小ブロックを斑状に混じる。
- 4層 黒色土 2層に似るが、灰褐色土塊が多い。
- 5層 ソフトロームブロック
- 6層 暗褐色土 白色バミス・黄色土小ブロックを含む。
- 7層 灰褐色土 ローム粒を含む。
- 8層 灰黄色土 ローム粒子を少量含む。
- 9層 灰色土 軟質。

図116 II類の土塚(1)



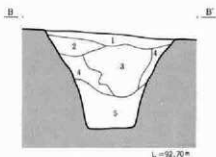
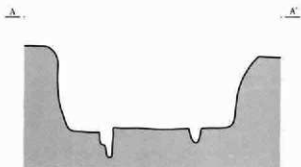
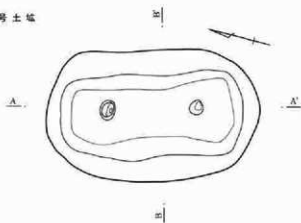
III 縄文時代の遺構と遺物

55号土城



- 1層 黒褐色土 黄褐色土を斑状に少含する。硬質。
- 2層 黄褐色土と黒褐色土のブロック状混土。硬質。
- 3層 黄褐色土と褐色土のブロック状混土。硬質。
- 4層 ハードロームと黒褐色土のブロック状混土。硬質。
- 5層 褐色土 黄褐色土を少含する。軟質。
- 6層 褐色土 軟質。
- 7層 暗色部と6層の混土。軟質。

12号土城



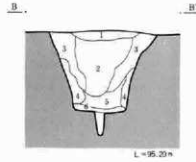
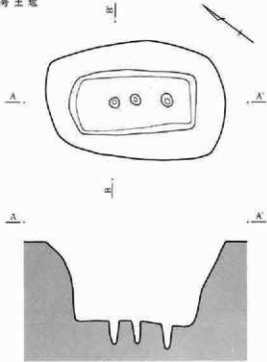
- 1層 暗褐色土 白色バミスを多く混入。しまり弱。
- 2層 暗褐色土 色調は1層より暗く、しまり有り。
- 3層 黒褐色土 白色バミスを多く混入。炭化粒含。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入。
- 5層 褐色土 ローム粒子・炭化粒を混入。

図119 II類の土城(2)



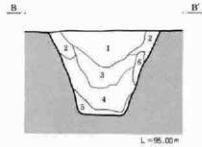
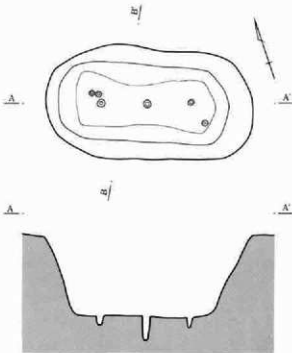
3. 土 壇

45号土壇



- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。しまり有。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入。
- 5層 暗褐色土 色調は3層より明るい。
- 6層 茶褐色土 ローム(Ⅷ層)を主体とする。

48号土壇



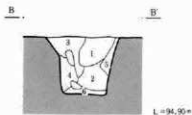
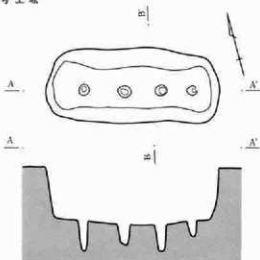
- 1層 褐色土 ロームブロックを斑状に多含する。
- 2層 硬質、軟質のロームブロックと褐色土の混土。
- 3層 2層と同質。黒みが多い。
- 4層 ソフトロームと硬質ロームの混土。軟質。
- 5層 暗色層とソフトロームの混土。軟質。
- 6層 硬質ロームブロック (BP 含)

図120 II類の土壇(3)



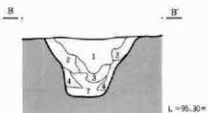
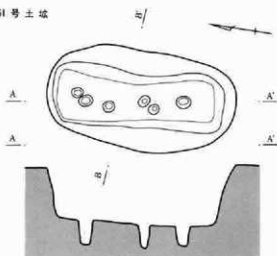
III 縄文時代の遺構と遺物

43号土壇



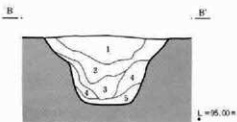
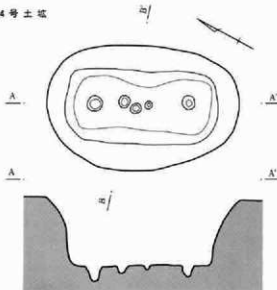
- 1層 褐色土 ソフトロームブロックを含む。
- 2層 褐色土 ソフトロームブロックを含む。黒みが強い。
- 3層 褐色土 硬質ロームブロックを含む。
- 4層 ロームブロック（壁面のくずれ）。
- 5層 ソフトロームと褐色土の混土。
- 6層 暗色帯とソフトロームの混土。

51号土壇



- 1層 黄灰色土と黒褐色土の混土。硬質。
- 2層 1層とソフトロームブロック混土。
- 3層 灰褐色土と黄灰色土のブロック混土。軟質。
- 4層 ソフトローム。
- 5層 黄灰色土とロームブロックの混土。軟質。

54号土壇



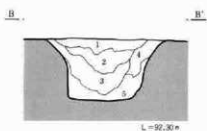
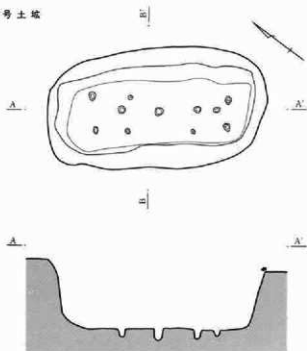
- 1層 褐色土 灰黄色土を斑状に多含する。硬質。
- 2層 褐色土 ソフトロームを斑状に多含する。硬質。
- 3層 ソフトローム・ハードローム・褐色土の混土。軟質。
- 4層 ソフトローム・ハードロームの混土。硬質。
- 5層 黄灰褐色土。軟質。

図121 II類の土壇(4)



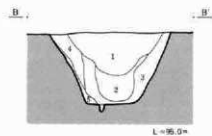
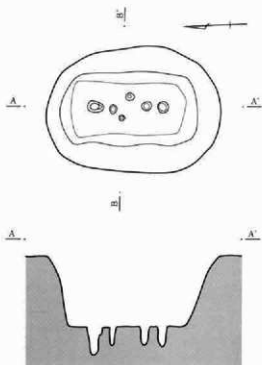
3. 土 塚

16号土塚



- 1層 暗褐色土 白色バミスを混入。炭化粒含む。
- 2層 黒褐色土 白色バミスを混入。炭化粒含む。
- 3層 黒褐色土 ロームブロックを多く混入する。
- 4層 褐色土 ローム粒子を主体とし、粘性富。
- 5層 黄褐色土 しまりがある。

40号土塚



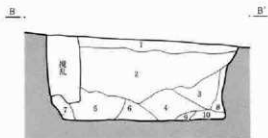
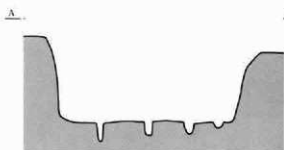
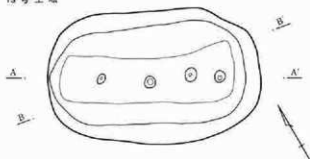
- 1層 暗褐色土 白色バミスを混入する。しまりは強い。
- 2層 暗褐色土 白色バミスを混入する。色調は1層より明。
- 3層 暗褐色土 白色バミスを混入する。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子ブロックを多く混入。粘性は弱。
- 5層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

図122 II類の土塚(5)



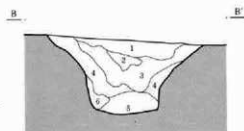
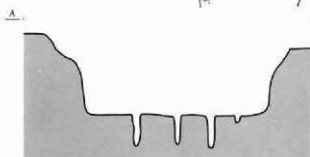
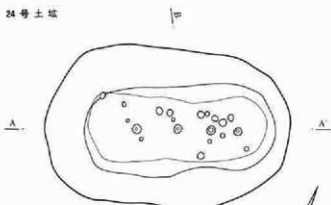
III 縄文時代の遺構と遺物

13号土坑



- 1層 暗褐色土 白色パミスを多く混入。しまりは弱い。
- 2層 暗褐色土 白色パミスを多く混入。色調は1層より暗い。
- 3層 暗褐色土 白色パミス・ロームブロックを少量混入する。
- 4層 暗褐色土 白色パミスを混入。色調は2層に類する。
- 5層 褐色土 ロームブロックを多く混入する。炭化物含む。
- 6層 暗褐色土 白色パミスを混入。しまりは弱く、粘性に富む。
- 7層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。しまりは弱く粘性に富む。
- 9層 暗褐色土 ローム(VI層)土を主体とする。
- 10層 黒褐色土 ロームブロックを混入。炭化粒子を多く含む。

24号土坑

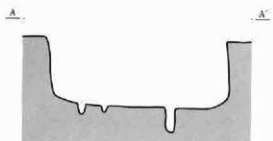


- 1層 黒褐色土 白色パミスを多く混入する。炭化粒含む。
- 2層 黒褐色土 色調は1層より暗い。
- 3層 黒褐色土 白色パミス、ブロックを多く混入する。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を多量に混入する。粘性に乏しく、しまりは弱い。
- 5層 黒褐色土 あまりしまりはないが、やや粘性のある土。白色粒子は多いが炭化物・VII層の小ブロックを少量含む。
- 6層 黄褐色土 ハードロームの崩落土と思われる。

図123 II類の土坑(6)



21・22号土塚



15号土塚

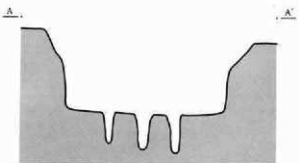
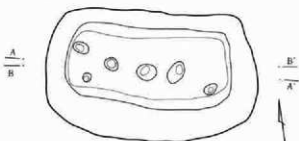
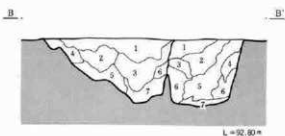


図124 II類の土塚(7)

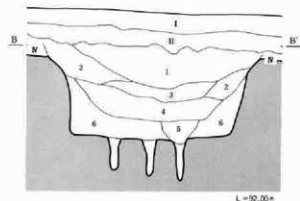


▶21土塚

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。色調は1層より暗い。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子を多く混入。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入。しまり強。
- 5層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。粘性・しまり強。
- 6層 暗褐色土 ロームブロックを混入。しまりは強い。
- 7層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。粘性に富む。

▶22土塚

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。
- 2層 黒褐色土 ローム粒子を多く混入。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。色調は1層より暗い。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを主体とする。剥落土。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入。粘性・しまり強。
- 6層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを主体とする。
- 7層 暗褐色土 ローム(VII類)土を主体とする。粘性に富む。



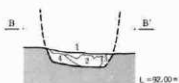
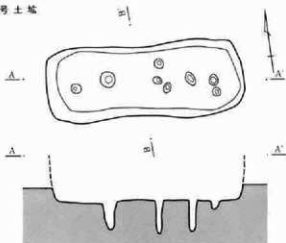
I層 耕作土

- II層 黒褐色土 白色バミスとローム粒子を多量に含む。
- IV層 黄褐色土 しまりがない。
- 1層 茶褐色土 少量の白色バミスと2層の小ブロックを含む。
- 2層 灰褐色土 しまりがない。
- 3層 茶褐色土 白色バミスを多く含む。しまりがない。
- 4層 黒褐色土 ロームブロックとしまりのある白色バミスを含む。
- 5層 黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 6層 灰褐色土 ローム小ブロックを含む。しまりがない。



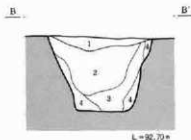
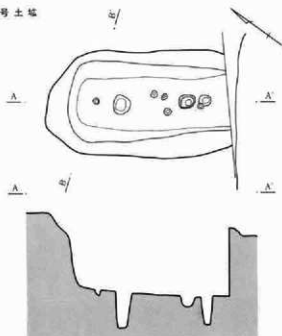
III 縄文時代の遺構と遺物

25号土坑



- 1層 暗褐色土 白色バミスを多く混入。
- 2層 黄褐色土 ロームブロックを混入。粘性に富む。
- 3層 暗褐色土 ローム(VI層)土を主体とする。
- 4層 茶褐色土 3層に類するがややしまりのない土。

11号土坑



- 1層 褐色土 白色バミスを多く混入する。しまりは弱い。
- 2層 暗褐色土 白色バミスを多く混入する。炭化粒を混入。
- 3層 暗褐色土 白色バミスを混入。色調は2層より明るい。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入する。

17号土坑

- 1層 黒褐色土 少量の炭化物粒を含む。しまりあり。
- 2層 1層のブロックと黄褐色粘質土ブロックが、斑状に混じる土。
- 3層 黄色粘質土 白色バミス・炭化物を含む。褐色土ブロック含。
- 4層 暗褐色土 しまりが無い。ローム粒・白色バミス・炭化粒含。
- 5層 黄褐色土 やわらかい。やや粘質。

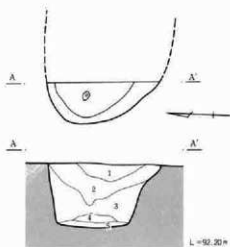
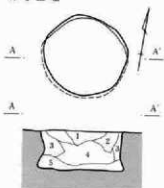


図125 11号の土坑(8)

3. 土 塚

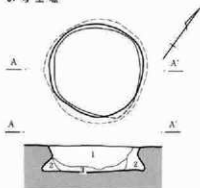
46号土塚



L=95.00*

- 1層 黒褐色土 ローム粒子をブロック状に混入。
- 2層 黒褐色土 色調は1層より明。
- 3層 暗褐色土 ロームブロックを混入する。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子混入。
- 5層 暗褐色土 ロームブロックを混入。しまり強い。

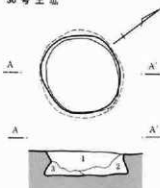
31号土塚



L=96.10*

- 1層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入する。炭化粒含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。2層の色調は暗い。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを主体とする。粘性強い。

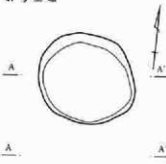
30号土塚



L=94.10*

- 1層 黒褐色土 白色バミスを多く混入する。炭化物含む。
- 2層 黒褐色土 色調は1層より明。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。粘性は強い。

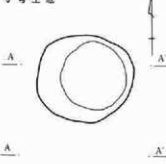
47号土塚



L=95.00*

- 1層 暗褐色土 ロームブロックを混入。しまりは強。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を混入。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを混入。
- 4層 黄褐色土 ロームブロックを主体とする。

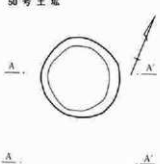
9号土塚



L=92.30*

- 1層 褐色土 白色バミスを多く混入。
- 2層 褐色土 白色バミス混。しまり強。
- 3層 暗褐色土 炭化粒を混入。しまり強。
- 4層 黄褐色土 ローム粒子・ブロックを多く混入。ややしまりのある土。

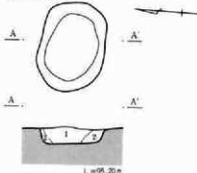
50号土塚



L=95.00*

- 1層 黒褐色土 黄灰色土を板状に含む。硬質。
- 2層 黄灰色土と灰褐色土のブロック混土。硬質。
- 3層 ロームと黄灰色土と灰褐色土のブロック混土。

52号土塚

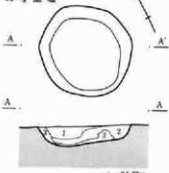


L=95.20*

▶52号土塚

- 1層 灰褐色土 ロームを少含。硬質。
- 2層 黄灰色土 軟質。

49号土塚



L=94.90*

▶49号土塚

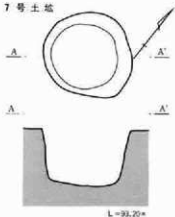
- 1層 黄灰色土と灰褐色土のブロック混土。硬質。
- 2層 黄灰色土 硬質。
- 3層 ハードロームと2層の混土。硬質。

図126 田類の土塚(1)

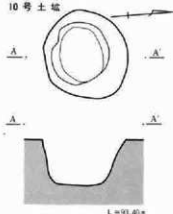


III 縄文時代の遺構と遺物

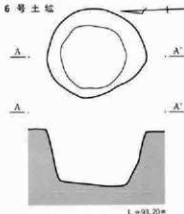
7号土壇



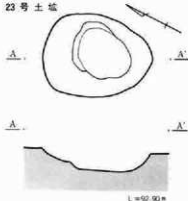
10号土壇



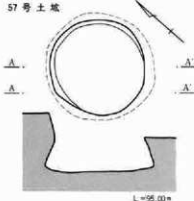
6号土壇



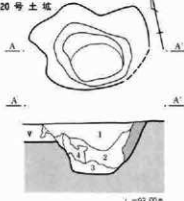
23号土壇



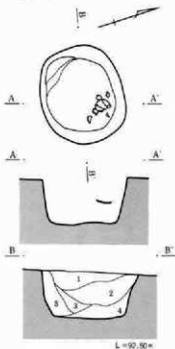
57号土壇



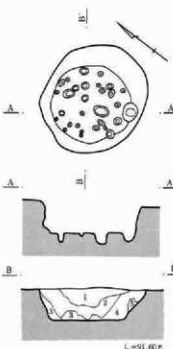
20号土壇



14号土壇



18号土壇



▶20号土壇

- 1層 暗褐色土 白色バミスを少量混入。IVb層に近似。
- 2層 暗褐色土 色調は明るい。
- 3層 粘性の強い、いわゆるB.B(暗色帯)に近い土を主体とする。又、2層が上層部では混在する。
- 4層 暗褐色土 Va層、いわゆるハードロームブロック。

▶14号土壇

- 1層 暗褐色土 白色バミスを多く混入。
- 2層 暗褐色土 色調は明るい、炭化物含む。
- 3層 褐色土 白色バミスを少量混入。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子をブロック状に混入する。
- 5層 褐色土 ロームブロックを多く混入する。しまりはあまりなく、少し粘性帯びる。

▶18号土壇

- 1層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。粘性は弱い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を混入。炭化粒含む。
- 3層 褐色土 ロームブロックを混入。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を混入。
- 5層 黒色土粒・小ブロックを含んだローム。

図127 III類の土壇(2)



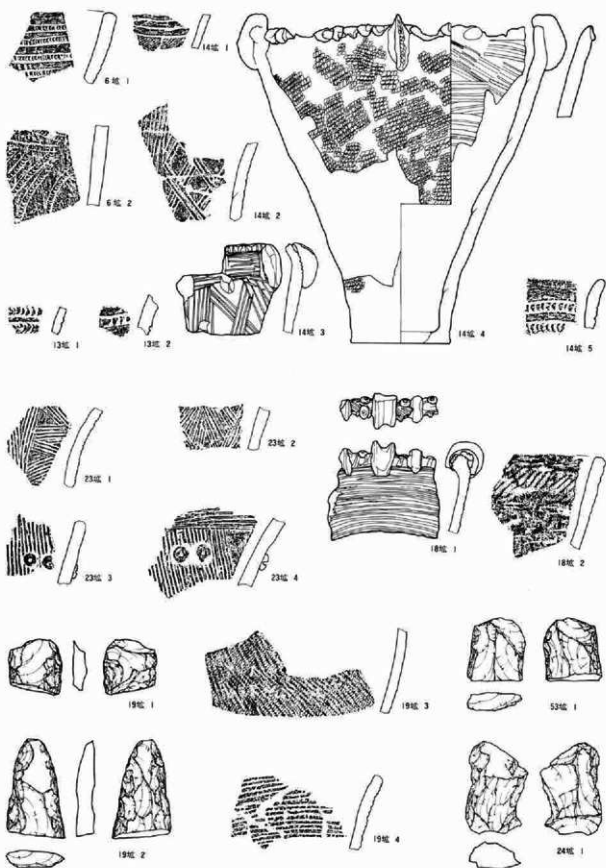


图128 土塚出土の遺物

4. 集石

集石は3基検出されているが、その内の2基は下位に土壇を伴っている。土器等の遺物が検出されていないため、時期については不明である。

1号集石はR-40グリットに位置し、集石の下位に土壇を伴っている。集石には径5~10cm大の河床礫(輝石安山岩)を用いており、礫の表面は煤状炭化物の付着や火熱による割れおよび赤化などが認められる。土壇の規模は、径96×80cmの楕円形状を呈し、確認し得た深さは約10cmである。集石はこの底面より約20cmほど浮いた状態で検出され、その間にソフトロームに類似した暗褐色土が堆積している。暗褐色土中には炭化物の粒子が若干混在しているが焼土粒はほとんど認められない。

2号集石はS-22グリットに位置し、集石の下位に土壇を伴っている。集石には1号集石と同様の輝石安山岩を用いているが、その径が10~15cmとやや大きいものが多い。また、礫面に煤状炭化物や火熱による割れなども認められる。土壇の規模は、径120×98cm、深さ12cmを計る。集石は土壇底面より、10~18cmほど浮いており、その間に1号集石と同様の暗褐色土が堆積している。

3号集石は、1・2号集石に比べて礫が散在しており、下位に土壇を伴わない点でも異なる。輝石安山

岩の河床礫を用いているが、礫面に火熱を受けた痕跡等は認められない。これらの点を考え合わせると、3号集石は1・2号集石とは若干性格を異にすることも想定される。

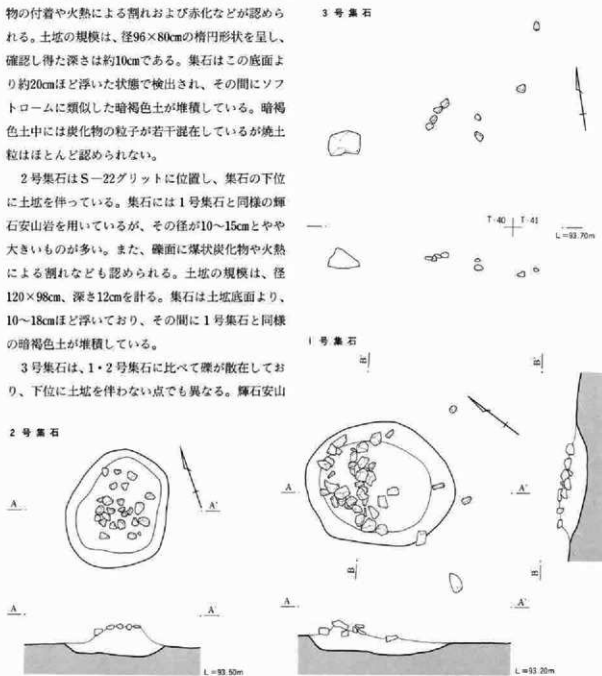


図129 集石

5. 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は、草創期前半から後期前葉にかけての土器・石器である。これらの遺物はそのほとんどがソフトローム上半のIV a層から出土しており、中には草創期前半の爪形文土器のようにソフトローム下半のIV b層内にまで包含されるものもある。

全体的な遺物の分布は、東側の沖積地に近接した台地斜面に集中する傾向が認められるが、その中でも前期の諸磯b・c式土器の分布は、基本的に該期の住居址や土壇の分布と重複しており、遺構と何らかの関連をもつと思われる。また、草創期の爪形文土器や前期黒浜式期の遺構は検出されていないが、各土器群単位で一つのまとまった分布をもっている。中・後期の遺物分布は、わずかな土器片が散在しているのみで、一定の分布域を形成していない。このよ

うな、明確な遺構を持たない時期の遺物分布が何を意味するかについては、不明な点が多いが、遺物包含層がソフトローム層であるということから考えると、遺構の掘り込みがソフトローム中に存在するような浅い場合には、その検出が不可能であり、特に集中した分布を示す爪形文土器などについては、未検出の遺構の存在も考慮する必要がある。

出土土器は、1～8類に分類した。1類は草創期前半の爪形文土器、2類は草創期後半の捺糸文土器、3類は早期の条痕文土器、4類は前期の黒浜式土器、5類は前期の諸磯b・c式土器、6類は前期の興津式土器、7類は中・後期の加曾利E4式・堀之内I1式土器である。

石器は三角錐形石器、スタンプ形石器、凹石、磨石、敲石、石鏃、打斧、削器などが出土しているが、出土層位および分布から、土器との相伴関係を把握することはできなかった。三角錐形石器やスタンプ

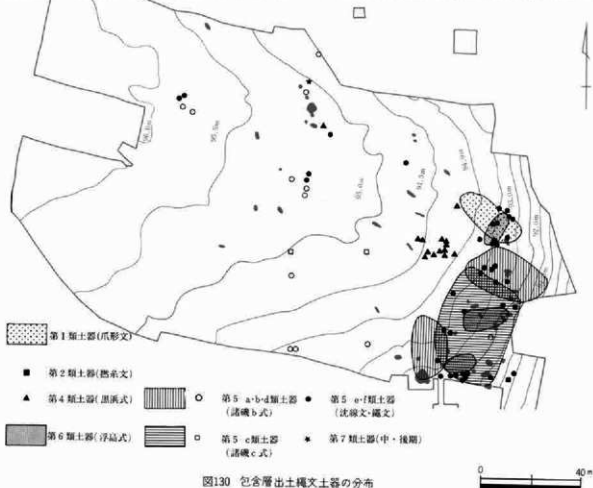


図130 包含層出土縄文土器の分布

III 縄文時代の遺構と遺物

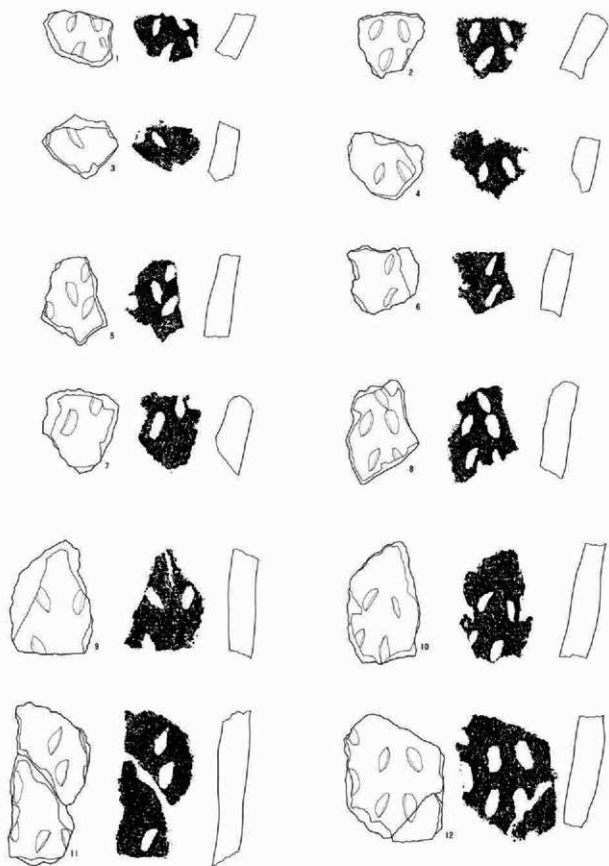


図131 遺構外の出土遺物(1) 第1類土器



図132 遺構外の出土遺物(2) 第1類土器

形石器については、他遺跡における出土事例からみて、摺余土器に伴う可能性が高い。

第1類土器 (図131～132)

いわゆる爪形文の施文される土器であり、40点弱の土器片が出土されている。いずれも小破片のために同一個体の選別が困難であるが、少なくとも複数の個体が混在していると考えられる。

各土器片の爪形文は、いずれも「ハ」字形を呈するものであり、人の第1指と第3指の爪で器面をつまむようにして施文されている。全体的な文様構成を判定できるものはないが、「ハ」字状爪形文が縦位に構成されるものと思われる。

各土器片は、9・10が口縁部付近、15が底部、他は胴部破片であり、爪形文は口縁から底部にまで施文されている。9・10や15の破片から器形を想定すると、口縁端部がやや反し、乳房状の尖底部をもつと思われる。

内・外面ともに、篋状工具による研磨が認められるが、内面に比べて外面はより丁寧に研磨され、光沢を帯びている。

器厚は5～8mmとかなり薄く、胎土には砂粒を多く含んでいる。焼成は堅緻であり、色調は赤褐色あるいはにぶい赤褐色を呈している。

第2類土器 (図133～1～3)

口唇部を除いて、全面に摺余文が施文されるものである。いずれもLの格状体を用いており1・3は同一個体と思われる。1の器形は、口唇が肥厚して丸頭状を呈し、外反ぎみに開口する。内・外面ともに丁寧に研磨され、胎土に多量の石英礫が含まれる。焼成は堅緻で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

稲荷台式に比定されよう。

第3類土器 (図133～4)

表・裏面に貝殻条痕をもつものである。内面に煤状の炭化物が付着している。胎土に繊維や2mm大の礫を含む。やや軟質の土器であり、色調はにぶい赤褐色を呈する。早期の茅山式に比定されると思われる。

第4類土器 (図133～5～20)

前期黒浜式に比定されるものを一括した。5・18は口縁部、13・15・17は底部の破片で、他は胴部から胴部下半にかけての破片である。5は半截竹管による

III 縄文時代の遺構と遺物

平行沈線横位、斜位に施し、その間隙に同一工具による連続した縦位刺突文を配している。6は縄文の施文後に半截竹管による横位の平行沈線を施文している。他の土器については、縄文以外の文様が認められないが、6・7・14・16・18などは二種類の原体を用いて、羽状に文様構成されている。各土器の縄文原体は、以下の通りである。6・7は同一個体で、14・15・18とともにL RとR Lの2種類の原体を使用するが、6・7の原体は織維が粗い。8・11・12はR L、9は前々段反摺りのR Lである。10・19は附加条第1種L R+R、20も同種R L+Lであるが、10は原体端部のR繩の結び目が破線文を表出している。13・17はL R、16はRとLの2種類の原体を使用している。5・7の口唇部は角頭状を呈し、直立ぎみに開口する。20も口縁付近の破片であるが、口縁が内湾するキャリパー形に近い器形と思われる。6・7の内・外面には煤状炭化物が付着している。6・14・15・19の内

面は良好に研磨されている。いずれの土器も胎土に織維を含み、10・13・15・18は多量の砂礫が認められる。やや軟質の土器が多く、色調はにぶい赤褐色や灰褐色を呈する。

第5類土器 (図134~138)

前期の諸機b・c式を一括したものであるが、更に5つに分類される。

第5a類 (図134) 半截竹管による平行沈線で文様構成されるものである。平行沈線文を数単位にかつ数段施文し、その間に弧状・渦巻状・三角形の平行沈線文を施文している。1~8および11は、縄文を横位に施文した後に平行沈線文を施文しているが、1~4・8などは平行沈線文の施文によって縄文がつぶれ、不明瞭となっている。5・6はR L、7・11はL Rである。1・8の口縁部破片は、ともに外反ぎみに開口する器形をもつが、口唇の形状は1が丸頭状、8が角頭状を呈する。内・外面ともに良好に研磨

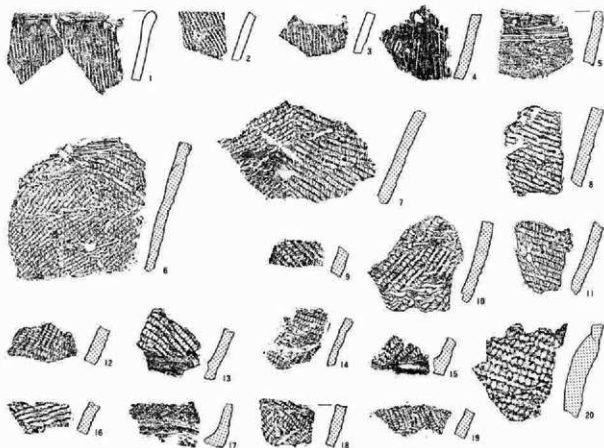


図133 遺構外の出土遺物(3) 第2・3・4類土器



されている。焼成は堅緻であり、胎土に多量の砂礫を含む。9・10は2〜3mm次の石英や片岩礫を含む点で他と異なる。

いずれも諸磯b式に比定される。

第5b類(図135-1~17) 半截竹管あるいは円形竹管状工具による連続爪形文や円形竹管文で主に文様構成されるものを一括した。連続爪形文には、半截竹管による平行沈線文内に、同一工具による爪形文を充填するものと、半截竹管を器面に押し当てながら連続した爪形文を表出するものとの2種類が認められる。後者の爪形文をもつ土器は少ないが、6(=10)・16などはその例である。基本的な文様構成は、胴部上半に連続爪形文が施文され、以下は縄文となる。施文順序は、縄文→爪形文であり、胴部上半の縄文は磨消されるか、施文されないかのいずれかである。

1~12の文様は、横走する2~3条の連続爪形文を、間隔を置いて2~3段に重ね、各間に弧状か渦巻状の爪形文が施文されている。3・4の口唇部は、瘤状の粘土が貼付されて小波状および小突起状を呈する。14は、爪形文が施されことによって隆帯状に盛り上った部分に、篋状工具による刻み目が施文されている。13は斜位の平行沈線文が施された後に、

円形竹管文が付加され、口唇部には棒状あるいは竹管状工具による刻み目が施される。2・3~17は、横位のRL縄文が施文される。

器形は、小突起などを有して波状口縁的な形態をもつものもあるが、数量的には平口縁が多い。口縁がラック状に開口し、胴部下半でわずかに膨らみをもつ。

各土器の内面は良好に研磨されているが、15の器面は風化により荒れている。焼成は堅緻になされ、胎土には多くの砂粒が含まれている。6・17は片岩礫が多量に含まれる点で、他と異なる。

13は諸磯a式、他は同b式に比定される。

第5c類土器(図135-18~22、図136 1~30、図137-1~3) 半截竹管状工具による集合条線文と、ボタン状・棒状・耳状・半環状などの貼付文により文様構成されるものである。集合条線文は、口縁部から胴部中位にかけては横位や矢羽根状に施されるが、それ以下は縦位・斜位および格子目状・矢羽根状に施される。図135-21は、肥厚した口唇上に矢羽根状の集合条線文が施文される。図135-21・22、図136-6・7・15・26のボタン状貼付文には、円形竹管状工具による刺突が加えられている。地文に縄文をもつものは13のみであり、LRが横位に施文されて

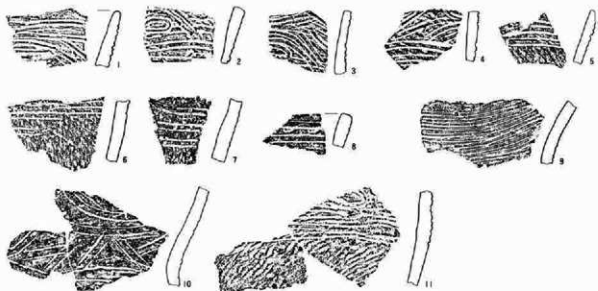


図134 遺構外の出土遺物(4) 第5-a類土器



III 縄文時代の遺構と遺物

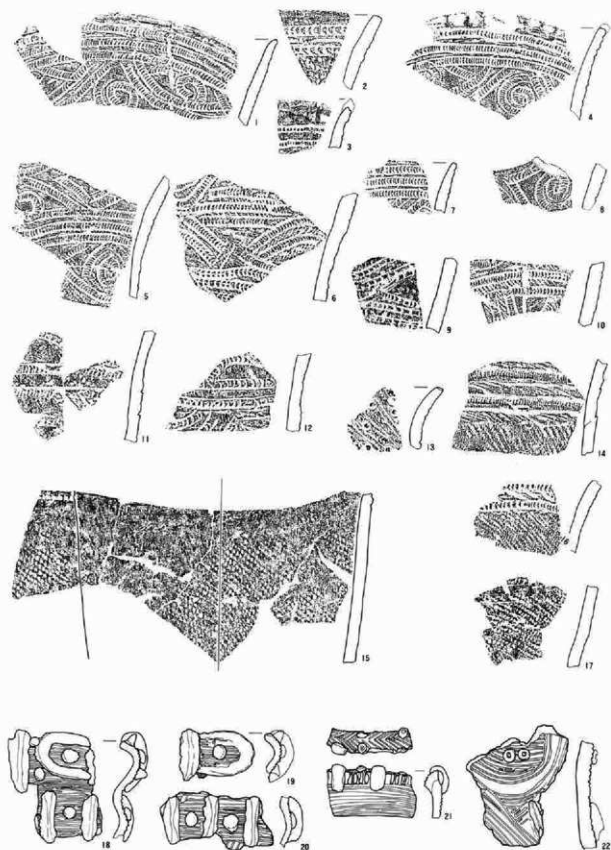


図135 遺構外の出土遺物(5) 第5-b・c類土器

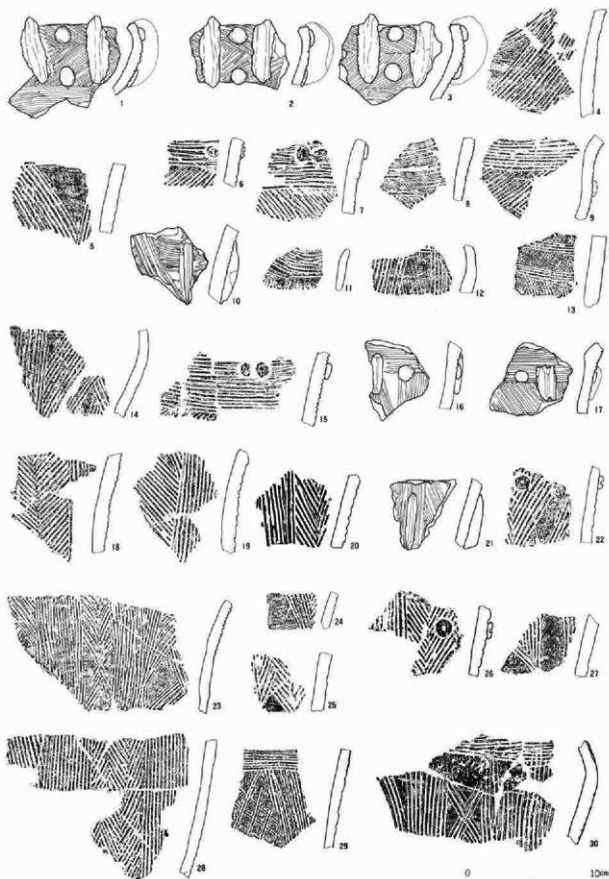


図136 遺構外の出土遺物(6) 第5-c類土器

III 縄文時代の遺構と遺物



図137 遺構外の出土遺物(7) 第5-c・d・e類土器



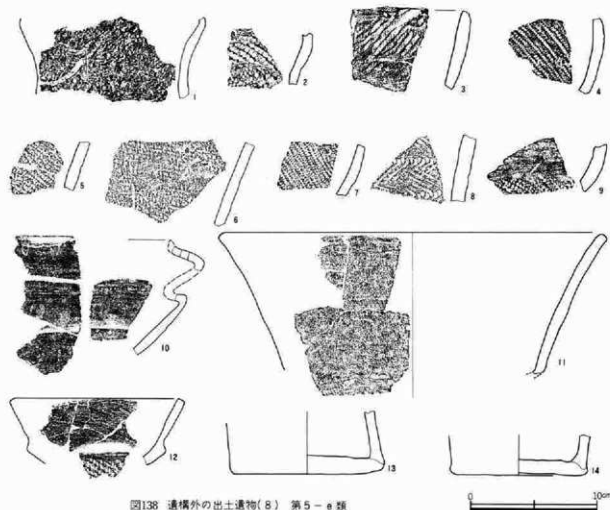


図138 遺構外の出土遺物(8) 第5-a類

いる。

器形は口縁が内湾し、胴部でかなり強く括れるいわゆるキャリパー形を呈するものが多いが、図136-23や図137-3のようにあまり屈曲せず口縁が外反ぎみに開口し、底部が張り出すものもある。

各土器の内面は良好に研磨され、焼成も堅緻である。胎土に砂礫が多く含まれる。器面に煤状・炭化物の付着している例が若干認められるが、図136-4は内・外面に、図136-10・28、図137-3は内面に、図136-18・23・30は、外面にそれぞれ認められる。

図136-13が諸磯b式の他は、全て諸磯c式に比定される。

第5d類土器(図137-4~15) 細い隆線上に篋状工具による刻み目を施した、いわゆる浮線文を有するものを一括した。5・6・10は隣接する浮線文の刻み目の方向を変えて、矢羽根状にしている。地文

をもつ例が多く、5・12はRL、6・8・11・14はLRである。9・10は浅鉢形土器であるが、口唇に近接して推定4箇所に貫通孔を有する。深鉢形土器の器形は、平口縁(4・5)と波状口縁(6)があり、概して屈曲の著しいキャリパー形を呈する。各土器の内面は良好に研磨されているが、10は風化によりやや荒れている。焼成は堅緻で、胎土に石英や片岩礫を多く含む。いずれも諸磯b式に比定される。

第5e類(図137-16~25・図138) 縄文によって文様構成されるもの、および無文土器を一括した。図137-16~25と図138-1~9は深鉢形土器の破片で、16(=17・23)・18・20~22、図138-3はL縄文、図137-19・24・25、図138-1はLR縄文、図138-5~7・9はL縄文、図138-4は附加条第1種のRL+L、8は結束第1種のL+Rの縄文が施文される。浅鉢形土器であり、12はRL縄文が施文される。

III 縄文時代の遺構と遺物

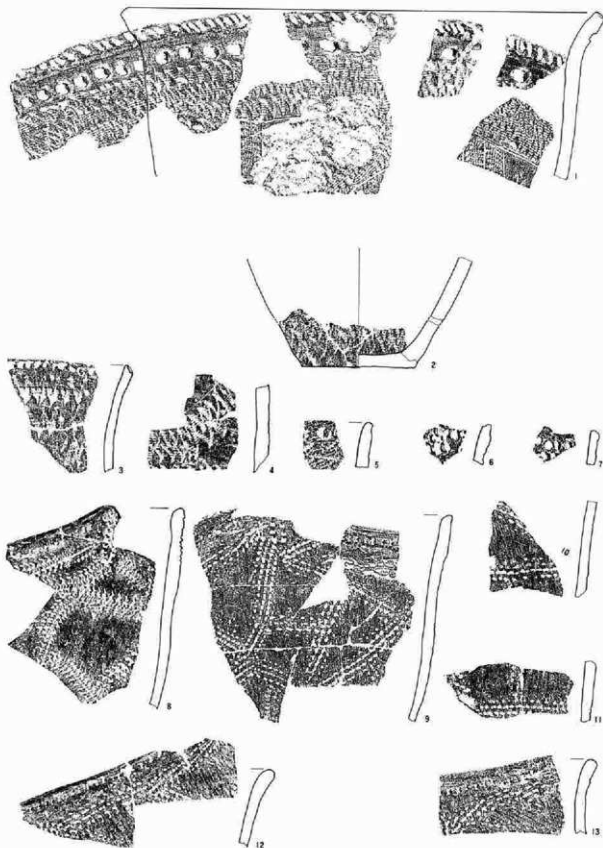


図139 遺構外の出土遺物(9) 第6類土器



10は屈曲の著しい浅鉢形土器で、口唇近くに貫通孔を有する。各土器の内面は良好に研磨され、焼成は堅緻である。胎土中に多量の片岩礫を含む。図138-13は、内面に煤状炭化物が付着している。

図138-10~13は諸礫B式に比定される。

第6類土器(図139-1~13)

アナダラ属やハマグリのような貝殻の腹縁を使用し、支点を交互に変えて表出される、いわゆる波状貝殻文によって文様構成されるものを一括した。1・2・4、8~13は各々同一個体の破片である。1は口唇上に棒状工具による刻目を施し、その下位に半載竹管状工具により、約45°の角度で刺突を加えている。以下にアナダラ属による横位の波状貝殻文が重帯され、更に篋状工具により幾何学的な沈線文が施される。3は、口唇上に半載竹管状工具による刺突が加えられ、以下にハマグリなどによる波状貝殻文が施文される。5~7は、棒状工具の先端を使用して器面を抉るような刺突が加えられるために、各刺突部分の粘土が瓠状に盛り上っている。8は、口唇下に半載竹管状工具による刺突が横位に加えられ、以下にアナダラ属による波状貝殻文が、菱形や三角形に配されている。また、波状を呈した口縁の波頂下には、口縁下に加えられたと同様の刺突文が、徒位に3単位施される。波状貝殻文の中に

は貝殻腹縁の支点移動が小刻みであるために、波状を呈していない部分も見られる。

器形は、平口縁(1・3・5)と波状口縁(8)が認められるが、両者とも口縁が外反ぎみに開口し、ほとんど屈曲を持たずに緩やかな曲線を描いて底部へと移行する。口唇端部は丸頭状を呈する。

各土器の内・外面は良好に研磨されているが、1の外面は風化による剥落が認められる。焼成は堅緻で胎土には砂粒が多量に含まれる。

いずれも興津式に比定される。

第7類土器(図140-1~11)

中期末葉から後期前葉に属する土器を一括した。

1は、幅広い沈線によって区画された中に、R L縄文が充填される。2~7・9・10は、棒状あるいは円形竹管状の工具による細沈線で文様構成されるものである。3は沈線文の区画内にL R縄文が充填されている。9・10は沈線文の交点に、円形竹管による刺突が加えられている。8は斜位に貼付された隆帯に、刻目が施されている。4は深鉢形土器の胴部破片を利用した土製円盤であり、周縁は研磨されている。3・9・10の器形は、口縁が外反ぎみに開口し、胴部中位で一旦括れてやや膨らみをもちながら底部へと移行する。各土器は内・外面とも良好に研磨され、焼成は堅緻である。胎土に多量の砂礫を含む。2~4



図140 遺構外の出土遺物(10) 第7類土器



III 縄文時代の遺構と遺物

は外面に煤状の炭化物が付着している。

1は加曾利E 3式、2～10は堀ノ内1式に比定される。

石器

三角錐形石器(図141・142-1～6・8)

石器形態は裏面に自然面を残すことが多い、下彫れのする例がほとんどである。スタンプ形石器の分割面に相当する底面は複数の剥離面より構成され、摩滅することなくシャープである。断面形は三角形状を呈するものも認められるが、五角形状を呈する例が多い。

石器の製作工程は石器表面→両側面→底面の順に

進むことが多いが、稀に、裏面の平坦面を自然面に変わって、剥離によって得る作業がこれらに先行する例も存在する。側縁部には微細な連続加工痕が認められるものが多い。一般に、機能部として扱われている部分に明瞭な使用痕は、認められなかった。

3は左側面を除いて自然面を残し、通例の丸味をもつ頭部形態とは異なっている。再加工例か。5も再加工を示す剥片3点の接合例である。いずれも左側面に打点がある。6は裏面の平坦面を自然面に変わって剥離面によって得ていること、底面に自然面をもつことで、他の石器と異なる。石器の製作工程から他と同様な技術基盤に立って作出された石器で

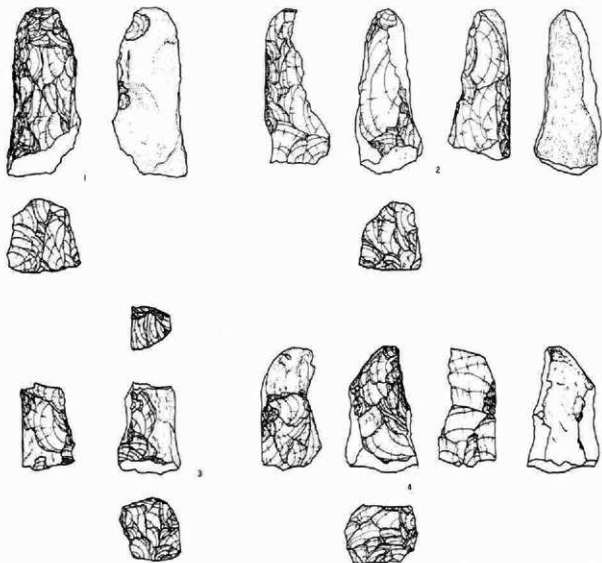


図141 遺構外の出土遺物(11)

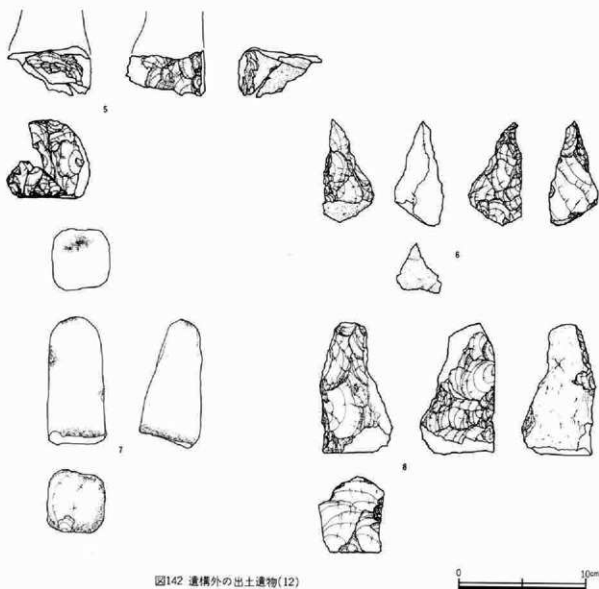


図142 遺構外の出土遺物(12)

あることは明らかである。他に類例は見られないが石器を考える上で重要な意味をもつ可能性がある。

スタンプ形土器(図142-7)

1点が出土している。分割面を中心に打痕が見られるほか、頭部にも同様な打痕が見られる。

凹み石(図143・144-11・14-17)

住居址出土例を加えて総計10点が出土している。輝石安山岩を多く用いる。径10cm程度の扁平状が多くいずれも磨面、打痕が見られる。窪み部は集合打痕によるものも見られるが、ロート状の窪み部が表裏に認められる例が多く側面に見られる窪みの作出方法と同様であり、窪み自体が多様なあり方を示す。

実用具として凹み石の果たした役割が多様性に富んでいたことが示唆されると同時に半数が住居址出土である点が注目される。

敲石(図143-9)

機能部を示す使用痕のあり方はスタンプ形石器と同様であるが、巾広に過ぎる事から一応敲石として理解しておく。

磨石(図143-10)

扁平な円礫を素材とし、表・裏面に磨面が見られる。

下半部が欠損する。

石皿(図143-12・13)

III 縄文時代の遺構と遺物

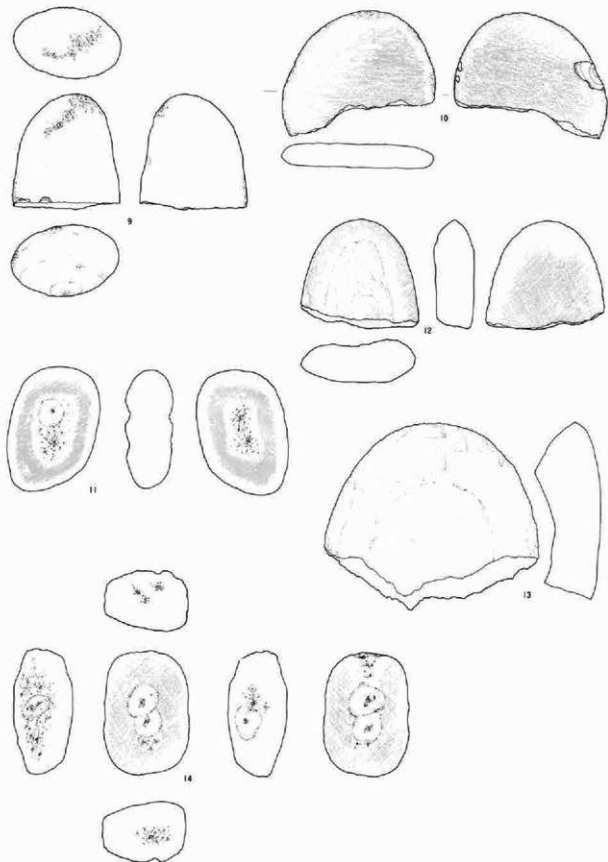


図143 遺構外の出土遺物(13)



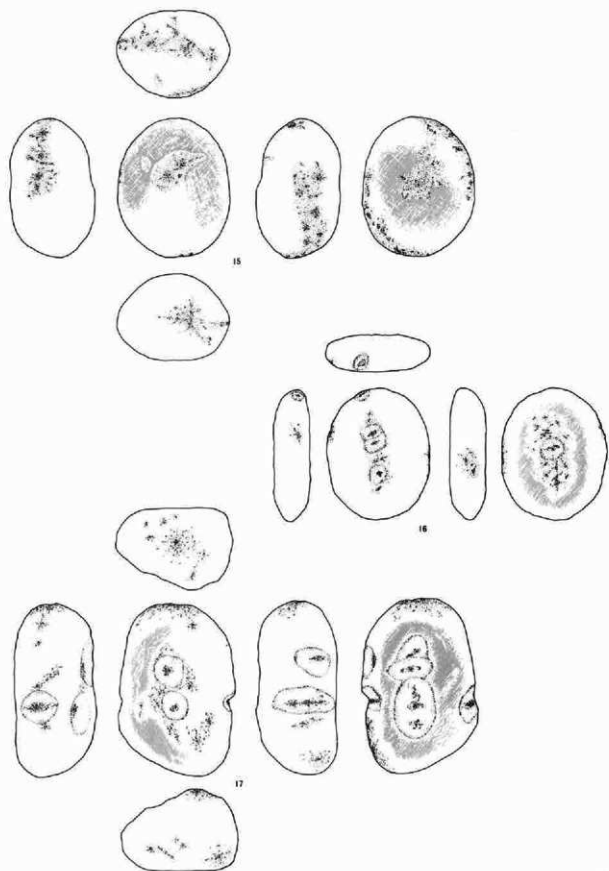


図144 遺構外の出土遺物(14)



III 縄文時代の遺構と遺物

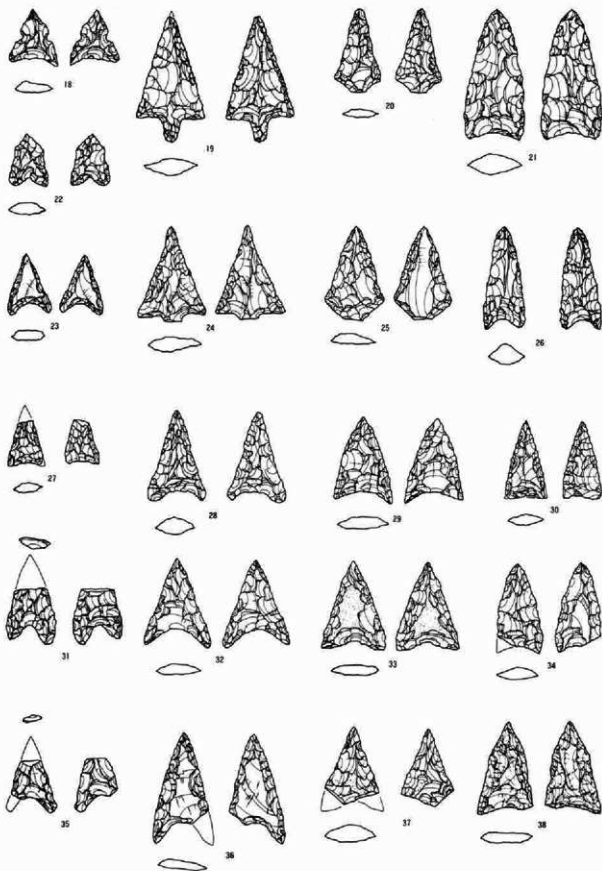


図145 遺構外の出土遺物(15)

5. 遺構外の出土遺物

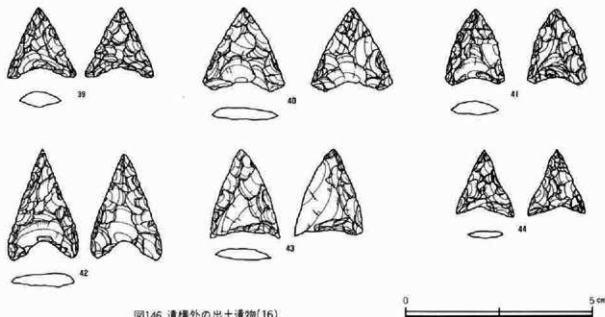


図146 遺構外の出土遺物(16)

いずれも、欠損例である。12は裏面にも磨面が見られ、石皿特有の窪みも明確でなく、小形である。

石鏃(図144・145-18~44)

住居址から出土した1点を加えて総計28点が出土している。調査区全域IV a層上面での採集がほとんどである。いずれも縄文期の所産であるが、限定された時期の所産でないことは出土した土器群、石器形状からも容易に想定される。一般に石鏃の茎の有無により2大別される。「有茎鏃」は4点が認められ基部が直線的なもの(19・24)突出するもの(20・25)が見られる。他の24点は「有茎鏃」と呼ばれるものであるが、その形状は、バラエティーに富み、様々なあり方を示している。

一般に石器のみから石器の所属年代を明らかにし得る資料が蓄積されている。所属年代の明らかな事例から、基部(挟り)形態に共通する要素を認めることが可能で、わずかに挟りの見られるもの(20・26・27・29・30・34・38・43)を抽出できる。形状をこえて共通する「クセ」が所属年代を明らかにし得る内容をもつ可能性を指摘できるものと思われる。

石斧(45~57・59・60・62・63・64・67・70・74・78・80)

総計22点(うち、磨製石斧1点(62))が出土している。石器形態は打製石斧の三形態に基本的には納まるものであるが、各々に個性的な特徴も散見される。

分調型 9点がある。欠損例が多く、完形及びそれに近いものは55・56の2例にすぎない。57を本形態の典型例として扱えうが、他の多くは形状観に異なる点が多い。比較的厚みのある素材を用いる。

短冊型 12点がある。素材周縁にわずかに調整加工を施すことにより、作出されるものが多い。45・48・51・54の4点は、中央部にわずかに挟りをもち、使用法を語り得るひとつの根拠になると思われる。

78は自然面を大きく残し、左側縁に丁寧な調整加工を施す。刃部形状が他とは異なり、円刃である。

80は楕形に近い形状を呈し、明らかな刃部の作出は見られない。68・71は打製石斧製作過程にかかわる欠損例である。

その他の石器

(58・61・65・66・68・69・61・72・73・75・76・77・79)

加工痕のある石器(58・65・69・75)、使用痕のある剥片(76・77)などがある。58は打製石斧の未製品である可能性もあるが、積極的な根拠に乏しい。65はスクレイパーの一種であり、定形化した存在である。79は偏平鎌の一端に同一方向の粗い調整加工を施した片刃石器である。

66は上端を欠損する緑泥片岩の石製品である。扁平な両面に磨痕が見られるが、用途は不明である。

III 縄文時代の遺構と遺物

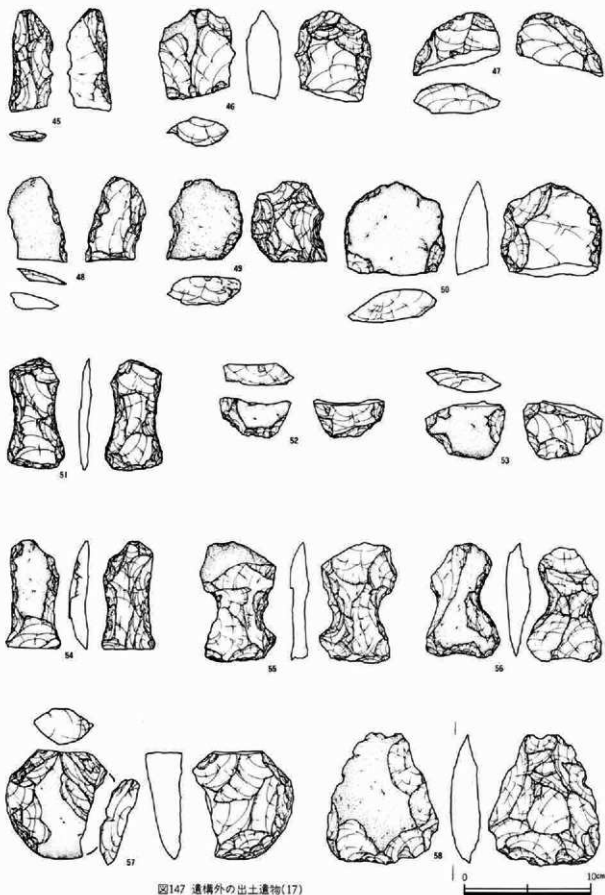


図147 遺構外の出土遺物(17)

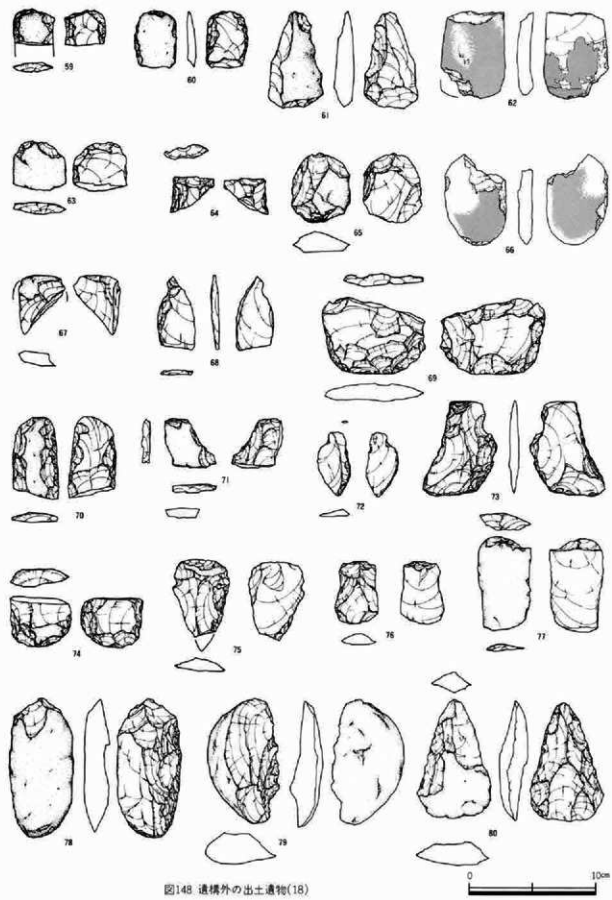


図148 遺構外の出土遺物(18)



図149 縄文時代の遺構

IV 古墳時代の遺構と遺物

1. 概 要

古墳時代の遺構は、住居址13軒、古墳10基が検出された。ほとんどの遺構が調査区南半に集中している。(折り込み図219)

北側の埋没谷中に検出された1号住居、東側斜面に検出された11号住居を除いて、11軒の住居址は、南に緩く傾斜する斜面に集中して立地している。これらの住居群の広がりには調査区の南へ伸びていくものと思われる。

住居址13軒はすべて古墳時代後期鬼高式土器を使用する時期のものである。これらの住居址は、大きさ、形態、構築方法などから、大きく3型式に分けることができる。この3分類は、出土土器を検討してみるとほぼ時間差として捉えることも可能である。8号住居、4号住居、9号住居、6号住居は面積25㎡以上で、方形の床下土坑をもつのが特徴である。また8号住居や9号住居のように張り出し部をもつ住居も含まれている。カマドは6号住居の西向きを除いて、東カマドである。これらの住居は、最も古い8号住居(鬼高期前葉)から、漸次鬼高期中頃まで継続してつくられたとみられる。2号住居は、出土土器から同時期と考えられるが14.4㎡と小形である。

3号住居、5号住居、10号住居、14号住居は、面積7.5～25㎡の住居で壁沿いに凹みをもっている掘り方を呈するのが特徴である。これらの住居は、鬼高期中葉のものと考えられる。

1号住居、12号住居、11号住居、7号住居は、面積10～17.5㎡のやや小形の住居であり、掘り方は中央が凹み型である。さらにこれらの住居はカマドの袖芯に壘形土器を倒立させて入れているのが特徴で鬼高期後葉の住居である。

以上のように、13軒の住居は鬼高期の前葉から後

葉まで継続してつくられている。同時にどの住居が建っていたかははわからず、しかし、この遺跡(発掘区南側も含め)は、6世紀～7世紀にかけてこの地区に古墳群がつけられるようになる間際まで、継続して2～3軒の住居が存在する、小さな第1次新開集落であったと考えられる。

10基の古墳もまた調査区南半に集中している。発掘区から外へ出てしまう3号古墳、7号古墳、9号古墳は全掘できなかった。遺跡の立地する細長い台地上は古墳の密集地帯で、いくつかの古墳群に分けることができる。今回調査した発掘区内の古墳は、そのなかの1つの古墳群の北の端と考えることができる。古墳10基の内訳は方墳1基、円墳9基で、周堀のみ調査の9号古墳を除いてはすべて横穴式石室をもつ後期古墳である。10号古墳は他の古墳に比べ小さく、周堀が検出されなかった。

接近した古墳は、周堀が重ならないようにつくられているため、4号古墳→2号古墳→1号古墳という新旧関係を捉えることができる。1号古墳は、唯一の方墳であるが、出土遺物も多く、直刀1、兼手刀の他、刀子、鉄鏃、釘等の鉄製品や、須恵器長頸壺、長頸瓶が副葬されていた。また歯骨片も検出されている。その他、6号古墳から直刀1が出土した。2号古墳5号古墳からは、最も新しいと考えられる7号住居出土の杯形土器と類似の土師器が前庭より出土しており、居住域から墓域へのプロセス解明の基礎資料となろう。

2. 住 居 址

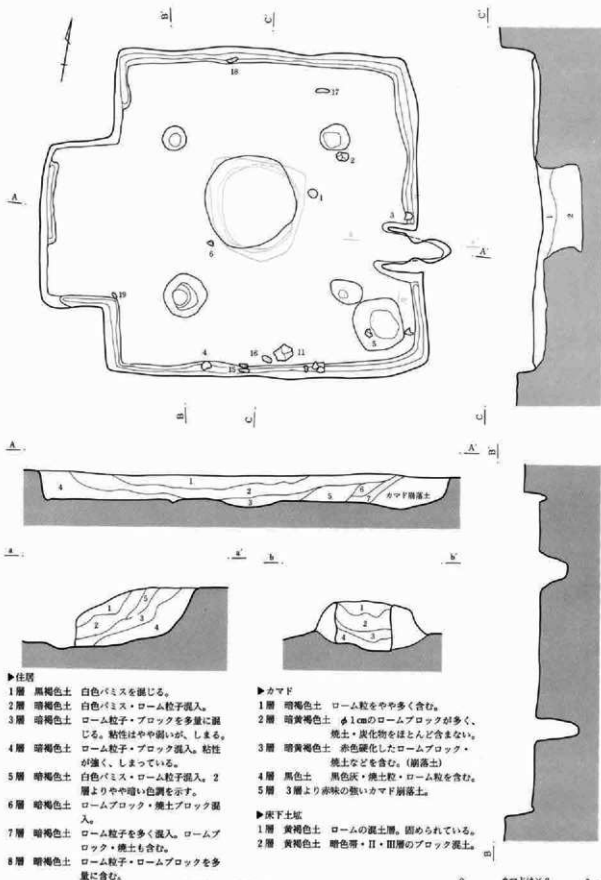
8 号 住 居

位 置 K・L-33・34グリッド。1号古墳の南、9号住居の北に位置する。

重 複 なし。

形 状 5.2×5.2mの正方形を呈し、西壁のほぼ中

IV 古墳時代の遺構と遺物



▶住居

- 1層 黒褐色土 白色バミスを混じる。
- 2層 暗褐色土 白色バミス・ローム粒子混入。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多量に混じる。粘性はやや強いが、しまる。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・ブロック混入。粘性が強く、しまっている。
- 5層 暗褐色土 白色バミス・ローム粒子混入。2層よりやや暗い色調を示す。
- 6層 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック混入。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子を多く混入。ロームブロック・焼土も含む。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。

▶カマド

- 1層 暗褐色土 ローム粒をやや多く含む。
- 2層 暗黄褐色土 ϕ 1cmのロームブロックが多く、焼土・炭化物をほとんど含まない。
- 3層 暗黄褐色土 赤色硬化したロームブロック・焼土などを含む。(崩落土)
- 4層 黒色土 黒色灰・焼土粒・ローム粒を含む。
- 5層 3層より赤味の強いカマド崩落土。

▶床下土壇

- 1層 黄褐色土 ロームの混入層。固められている。
- 2層 黄褐色土 暗色帯・II・III層のブロック混入。

図150 8号住居

L=94.0m

0 カマドは×2 2m

2. 住居址

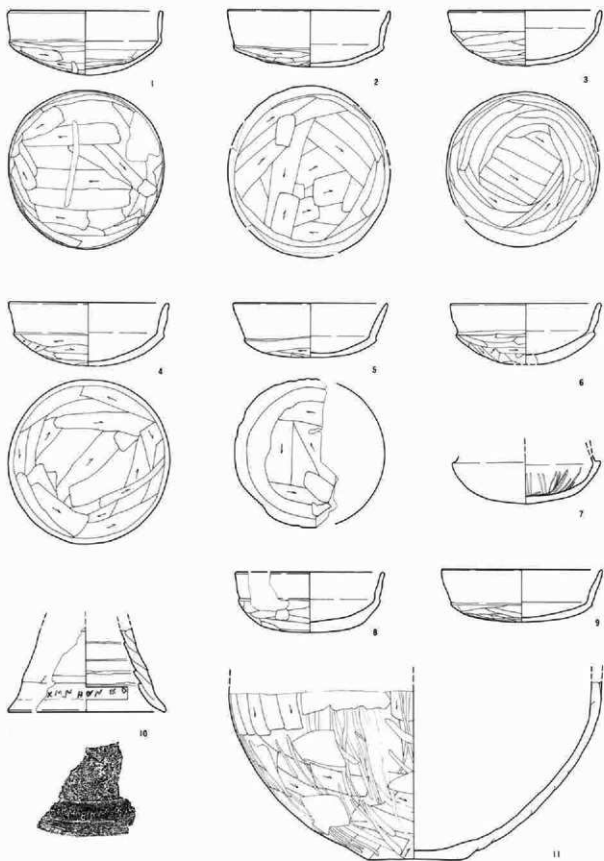


図151 8号住居の出土遺物

0 10cm

IV 古墳時代の遺構と遺物

尖に0.95×3.7mの張り出しがついている。床面のレベルは張り出し部も同様でほとんど段差はない。カマドを通る軸線はN-71°Eに傾いている。

埋土 白色パミスを含む黒褐色土が上層にあり、下半はローム粒・ロームブロックが多く含まれる褐色土であった。

カマド 東壁中央より60cm南へ偏した位置にあり、焚口巾50cm、燃焼部長1.05mの規模で残存していた。袖は左が55cm、右が65cm壁内へ張り出している。煙道部は50cm壁外へ伸びている。袖は粘土貼りつけによって構築されていた。

周溝 張り出し部との接点付近で一部検出できないところがあったが他はほぼ全周している。深さは5~10cmである。

床面 住居中央部に直径1.7mほどのゆるやかなレンズ状の凹みがある。床面下掘り方の土壌に影響されたものとみられる。床面は全面が踏み固められていて凹みの上面や張り出し部の内部も堅くしまっていた。

柱穴 張り出し部を除く四隅のほぼ対角線上に4つの柱穴が検出された。深さは西南隅の1つが40cmで他の3つは60cmである。

貯蔵穴 東南隅、カマド右側に80×80cmの隅丸正方形の貯蔵穴が検出された。深さは最深部で65cmである。

掘り方 本住居は、掘り方を埋め、床面を構築していた。掘り方を全面調査したところ、全体に10~22cmの掘り方充填土があり、柱穴を結ぶ四角形の中央よりやや北寄りに床下土壌も検出された。床下土壌は、直径1.5mの不整形を呈し、底面は大きく広がり平坦であった。床面は第七層(暗色帯)まで達している。断面はフラスコ状を呈する。遺物の出土はみられなかった。

出土遺物 遺物は、南側の壁沿いに集中して出土している。杯形土器の完形が多い。ほとんど床面直上出土であるが10の高杯形土器は埋土中のものである。また棒状の河原石が、北壁・南壁の周溝付近に散在していた。

4号住居

位置 M-29・30グリッド。4号古墳の東、2号古墳の南に位置する。

重複 なし。

形状 4.9×5.1mのほぼ正方形を呈する。カマドを通る軸線はS-75°Eに傾いている。

埋土 最上層の一部に浅間Bテフラを多量に含む黒褐色土層があり、それ以下は浅間C軽石やFPを含む黒色土である。

カマド 西壁中央より50cm南へ偏した位置に構築されている。焚口巾45cm、燃焼部長1.15mの規模で残存し、袖は80cm壁内へ伸びている。煙道は20cm壁外へ出ている。燃焼部中央に支脚として使用されたと考えられる杯形土器が伏せられた状態で出土している。

周溝 カマド右の60cmの区間を除いて全周して検出された。北壁中央よりやや西で膨らんでいるところがあるが、他は下端巾10~15cm、深さ5~7cmとほぼ一定している。

床面 住居中央部に直径1.0mほどのレンズ状の凹みがある。全面に踏み固められていた。

柱穴 住居四隅のほぼ対角線上、上端隅から1.5m内側で4個検出された。深さは、バラつきがあり、35~40cmを計る。

貯蔵穴 住居西南隅、カマド左側に検出された。82×72cmの楕円形を呈し、深さは最深部で70cmを計る。

掘り方 全体に15~20cmの厚さで掘り方を充填し、床をつくっている。掘り方底面は、小さな凹凸がみられるものの平坦であったが、住居中央部に直径1.1mほどのほぼ円形の床下土壌が掘られていた。この床下土壌は、断面がややフラスコ状を呈し、67cmの深さがある。底面は北寄りに一段深い部分があり平ではない。最深部はローム層中第七層(暗色帯)まで達している。

出土遺物 カマド右横に遺物が集中して出土している。杯形土器2個体(1・4)、小形変形土器1個体(10)とともに、瓶形土器(11)がのせられた状態で台付変形土器(9)がそれぞれ床面直上で出土している。

る。またカマド前50cmのところと南壁周溝際に接して、ほぼ完形で杯形土器が1個体ずつ出土している。

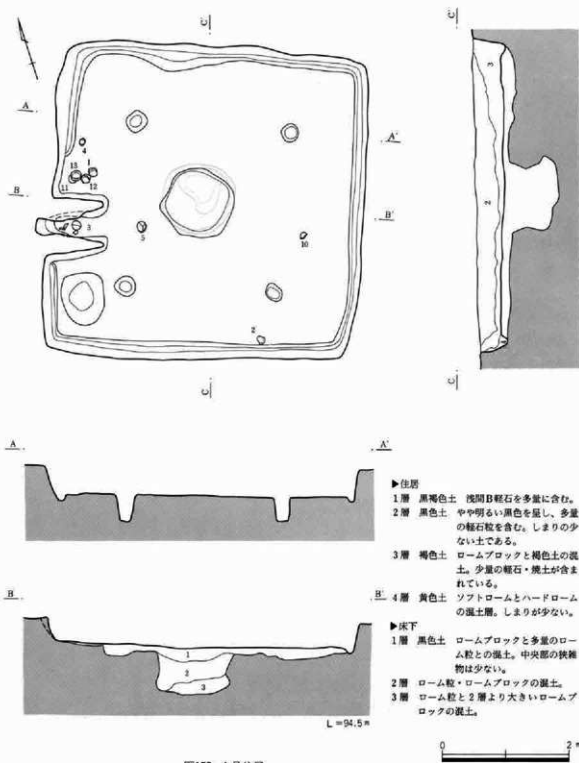


図152 4号住居

IV 古墳時代の遺構と遺物

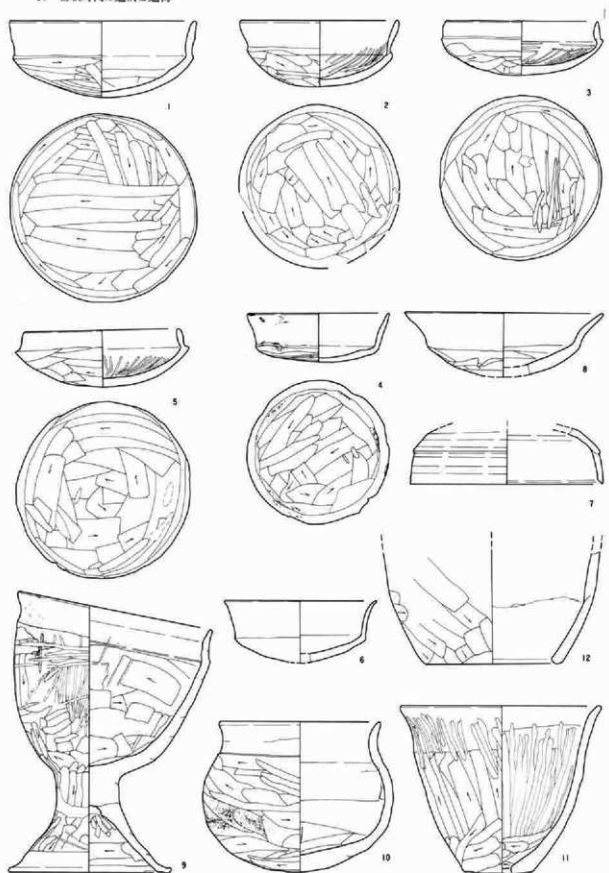


図153 4号住居の出土遺物



9号住居

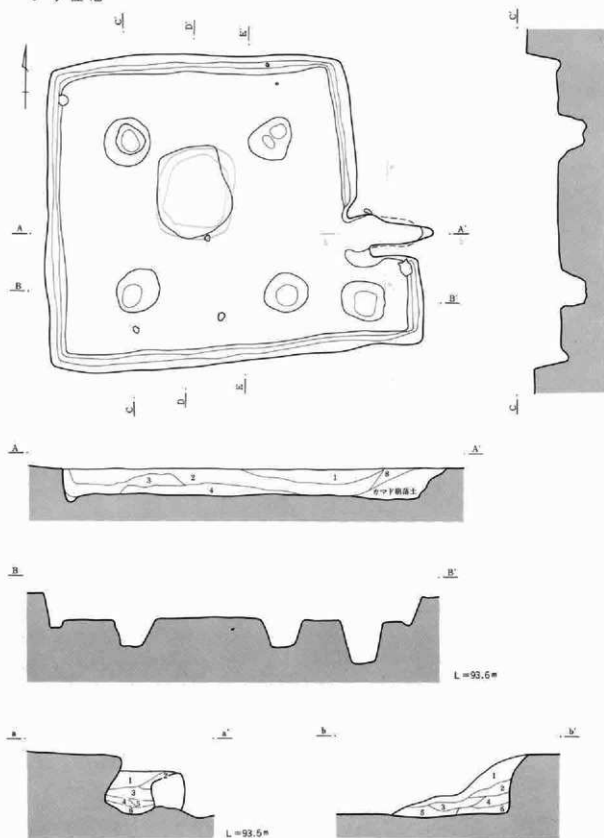
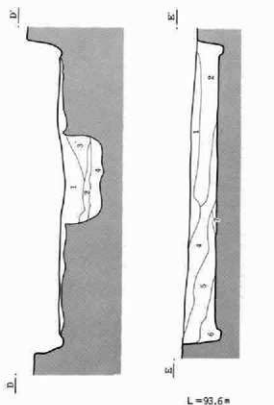


图154 9号住居

0 カマドは×2 2m

IV 古墳時代の遺構と遺物



▶住居

- 1層 ローム粒・ブロックと暗褐色土の混土。
- 2層 ローム粒子・ブロックとの暗褐色土の混土。色調は1層よりやや暗い。
- 3層 ローム粒子・ブロックと暗褐色土の混土。色調は1・2層より明るい。
- 4層 大量のロームブロックと暗褐色土の混土。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を含む。粘性・しまりは強い。
- 6層 暗褐色土 5層よりやや明るい色調を呈する。ローム粒を含む。
- 7層 黒褐色土 壁筋はやや黒く、ロームブロックを混じる。
- 8層 暗褐色土 ローム粒・粘土粒を含む。

▶カマド

- 1層 暗褐色土 ローム粒子混入。しまり強い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒混入。
- 3層 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒を混入。
- 4層 粘土が焼けて赤化したカマド壁体崩落土。
- 5層 暗褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 6層 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒を混入。しまり強い。

▶床下

- 9層 黄褐色土 ソフトローム・ハードロームの混土。よくよみ固められている。
- 10層 黄褐色土 9層に似るがソフトロームが多い。しまりない。
- 11層 黒褐色土 II・III層とロームブロックの混土。しまりない。
- 12層 黄褐色土 ソフトローム・ハードロームの混土。暗色腐ブロックを少量含む。



位置 J-34・35グリッド。重複なし。

形状 ほぼ5m四方の正方形を呈する。東壁にカマドが付設されているが、そのカマド南側に0.9×1.3mの張り出しがある。カマドを通る軸線はN-82-Eに傾いている。

埋土 上層が、ローム粒子・ロームブロック・褐色土の混土で、人為的な埋没過程を示しているのが特徴的である。

カマド 東壁の中央より50cm南へ偏した位置に付設されている。焚口中45cm、燃焼部長1.4mの規模で残存していた。左袖はほとんど壁より内側へ出ない形態であり、右袖は南側に住居張り出し部があるので、1mほど壁より内側に張り出す格好になっている。右袖は粘土貼りつけによるものである。

周溝 下端巾10cm、深さ5～13cmの規模で全周している。前述の張り出し部にも検出された。

床面 カマド前面から住居中央にかけて硬化が強いが、壁直下や張り出し部ではやや軟弱であった。

柱穴 住居四隅の対角線上に4つの柱穴が検出された。深さは40～50cm、上端直径は70cm前後である。

貯蔵穴 カマド右側の住居東南隅、張り出し空間内に検出された。70×65cmの隅丸方形を呈し、深さは70cmほどである。

掘り方 厚さ10cm前後の掘り方充填土によって床面がつくられている。掘り方全体は小さな凹凸があるがほぼ平らで、カマド構築部分がやや掘りくぼめられている。また4本の柱穴を結んだ四角形の中央よりやや北に偏った位置に1.2×1.5mの隅丸長方形の床下土壇を検出した。断面は箱形を呈し、深さ50～60cmを計る。底面には小さな凹凸があり、第七層(暗色帯)まで達している。

出土遺物 遺物は出土量はあまり多くない。カマド右脇に壺形土器の完形(6)、カマド前に完形の杯形土器1個体(1)が出土している。他に2、3個体の完形の杯形土器が出土したが、調査中盗難に遭い報告できない。北壁周溝内からは滑石製製造品が、周溝内側で滑石製紡輪が1点ずつ出土している。

2. 住居址

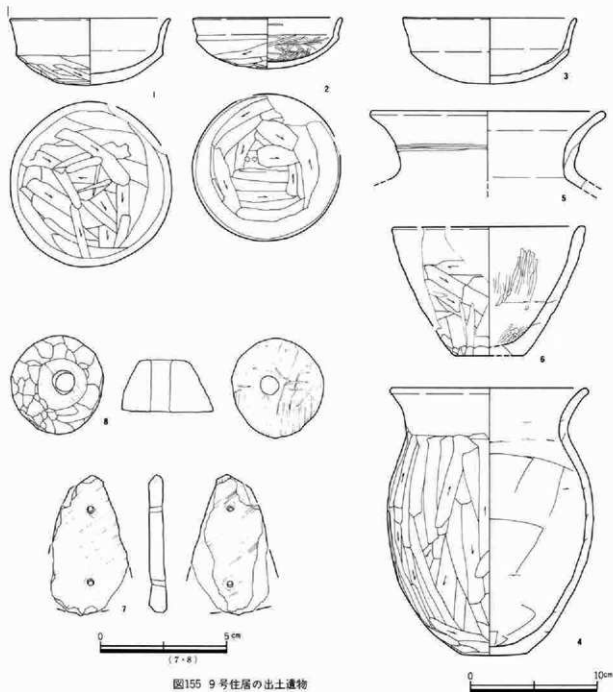


図155 9号住居の出土遺物

6号住居

位置 I-31・32グリッド。

3号古墳の東に位置する。

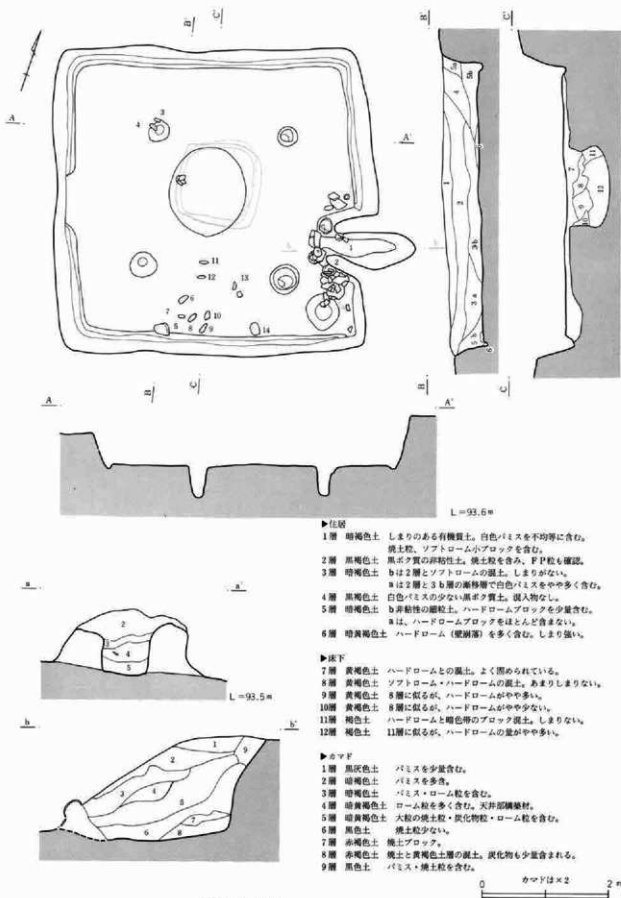
重複 後出の3号墳周堀と北西隅で重複している。

形状 4.9×5.1mの方形を呈する。壁は上方がやや開くように立ち上がる。カマドを通る軸線はS-64'-Wに傾いている。

埋土 浅間C軽石やFPなどのパミス粒を含む黒色土で埋没しており、自然の堆積と思われる。

カマド 東壁中央より80cm南へ偏した位置に付設されている。焚口巾40cm、燃焼部長1.5mの規模で残存し、袖は粘土貼り付けによりつくられている。壁より60cm内側に張り出す大きな袖である。袖の両先端には甕形土器が伏せられて粘土の芯として使われている。焚口部には、両袖の間をつなぐように甕形土

IV 古墳時代の遺構と遺物



▶住居

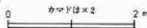
- 1層 暗褐色土 しまりのある有機質土。白色パミスを不均等に含む。焼土粒、ソフトローム小ブロックを含む。
- 2層 黒褐色土 黒ボク質の非粘性土。焼土粒を含み、F P粒も確認。
- 3層 暗褐色土 aは2層とソフトロームの混土。しまりがない。bは2層と3層の漸移層で白色パミスをやや多く含む。
- 4層 黒褐色土 白色パミスの少ない黒ボク質土。混入物なし。
- 5層 暗褐色土 b非粘性の細粒土。ハードロームブロックを少量含む。aは、ハードロームブロックをほとんど含まない。
- 6層 暗黄褐色土 ハードローム（壁崩落）を多く含む。しまり強い。

▶床下

- 7層 黄褐色土 ハードロームとの混土。よく固められている。
- 8層 黄褐色土 ソフトローム・ハードロームの混土。あまりしまりない。
- 9層 黄褐色土 8層に似るが、ハードロームがやや多い。
- 10層 黄褐色土 8層に似るが、ハードロームがやや少ない。
- 11層 褐色土 ハードロームと暗色帯のブロック混土。しまりない。
- 12層 褐色土 11層に似るが、ハードロームの量がやや多い。

▶カマド

- 1層 黒灰色土 パミスを少量含む。
- 2層 暗褐色土 パミスを多量含む。
- 3層 暗褐色土 パミス・ローム粒を含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒を多く含む。天井部構築材。
- 5層 暗黄褐色土 大粒の焼土粒・炭化物粒・ローム粒を含む。
- 6層 黒色土 焼土粒少ない。
- 7層 赤褐色土 焼土ブロック。
- 8層 赤褐色土 焼土と黄褐色土層の混土。炭化物も少量含まれる。
- 9層 黒色土 パミス・焼土粒を含む。



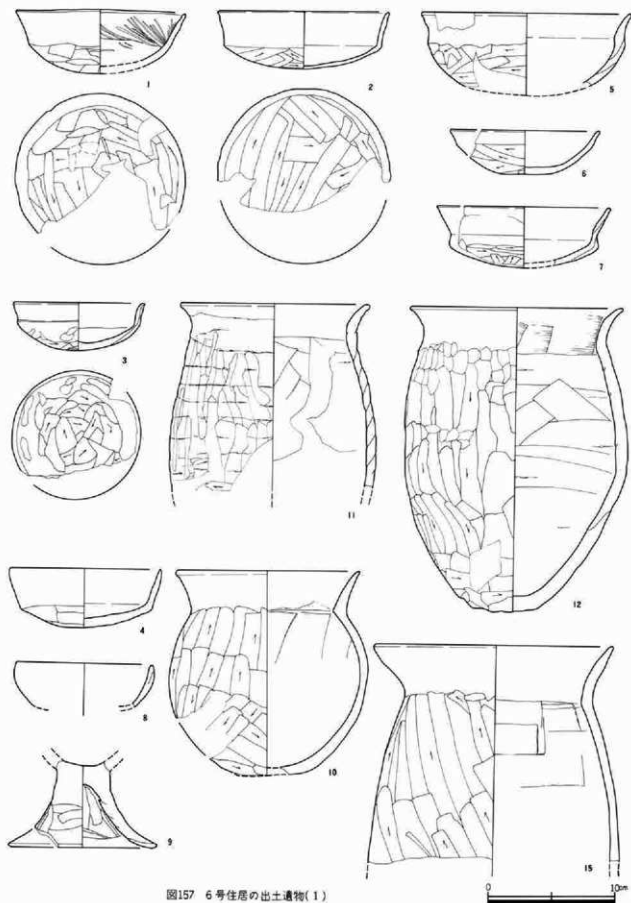


図157 6号住居の出土遺物(1)

IV 古墳時代の遺構と遺物

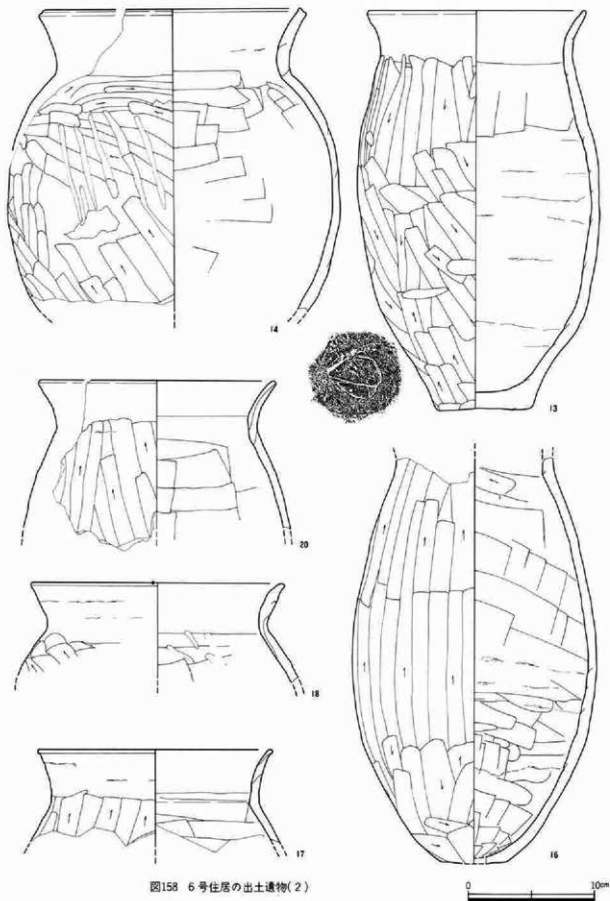


図158 6号住居の出土遺物(2)

器の胴部が横たわっており、鳥居状の焚口部を構築していたものと考えられる。

周 溝 カマド右側の東壁、カマド対辺の西壁の中央80cmの区間を除いて周溝が検出された。下端巾8cm、深さ3～8cmの規模を有する。

床 面 住居ほぼ中央が直径1.2mの円形にレンズ状にくぼんでいる。全面に踏み固められている。

柱 穴 四隅のほぼ対角線上に4個検出されたが、北西隅の柱穴は4つの相対的位置からすると、やや内側に入っている。深さは45～50cmを計る。

貯蔵穴 住居南東隅、カマド右側に検出された。直径46cmのほぼ円形を呈する。深さは最深部で63cmで

あった。カマド右袖との間の貯蔵穴左縁には甕形土器(12)が、床面直上で出土している。

掘り方 全面に7～10cmの厚さで掘り方が埋められ床を構築している。掘り方底面は小さな凹凸の他に、北西隅がやや掘りくぼめられている。またほぼ中央に1.35×1.3m、深さ64cmの方形の床下土壇が掘られていた。床下土壇の長軸線は、カマドを通る住居の軸線より西へ15°ずれている。断面形はフラスコ状を呈する。

出土遺物 土器は、カマドおよび貯蔵穴周辺に集中している。また南西隅寄りには、棒状の河原石9個と台石が集中し、特殊な空間を想定させる。

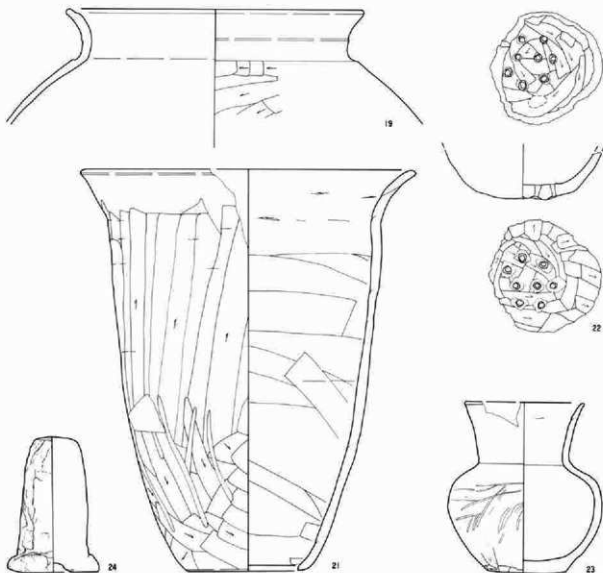


図159 6号住居の出土遺物(3)

IV 古墳時代の遺構と遺物

2号住居

位置 Q-29グリッド。

発掘区南寄りの住居集中区域の北辺に位置している。

重複 2号古墳の周堀と重複している。本住居址の埋土層断面には2号古墳の周堀埋土を確認することができなかった。2号古墳の周堀は全周しておらず、その途切れる浅い部分で本住居址と重複しているために、設定した土層断面にあらわれなかったものと考えられる。双方の出土遺物の年代観も合わせ考えると、本住居は2号古墳に先行するものとしたい。

形状 3.70×3.90mの隅丸方形を呈する。カマドを通る軸線は、N-56-Eに傾いている。壁は大きく上方が開く形態で、壁高は確認面から60~66cmを計る。

埋土 浅間C軽石を含む黒色土で埋まっている。
カマド 東壁中央より55cm南へ偏した位置に付設さ

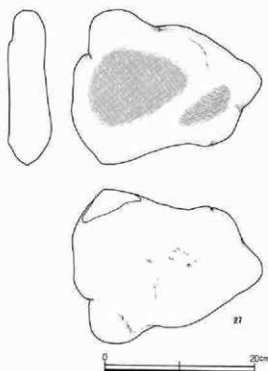


図160 6号住居の出土遺物(4)

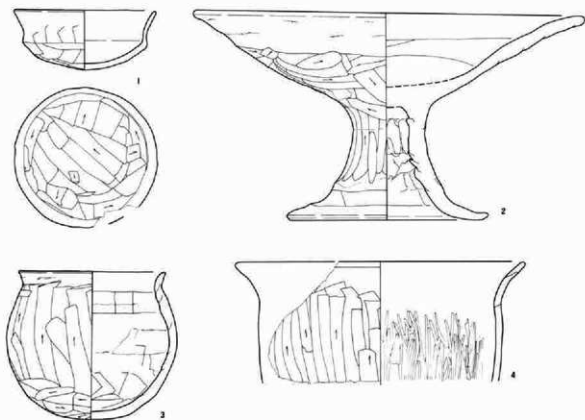


図161 2号住居の出土遺物

れている。焚口巾35cm、燃焼部長1.05mの規模で残存していた。袖は55cmほどの壁内に張り出しており、粘土貼り付けによって構築されていた。

周 溝 なし。

床 面 全面に踏み固められていた。

柱 穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居東南隅、カマド右横に20×40cm、深さ45cmの隅丸長方形の貯蔵穴と思われるピットが検出された。

掘り方 直交する2本のトレンチで掘り方を調査した。底面中央部に小さな凹凸があり、6~12cmの充填土で床をつくっている。

出土遺物 住居北東隅に、高杯形土器(2)の脚部と杯部が少し離れて、床面直上で出土している。

また貯蔵穴の西南には杯形土器(1)がほぼ完形で、正立のまま床面直上出土をしている。

10号住居

位置 H-34グリッド

重複 なし。

形状 4.5×4.7mの方形を呈する。南西隅が一部未買収の桑畑のため未調査である。カマドを通る軸線はN-75°-Eに傾いている。

▶住居

- 1層 黒色土 多くのパミス・炭化物粒を含む。しまりあり。
- 2層 黒色土 多くのパミス・少量の炭化物粒を含む。
- 3層 暗褐色土 多量のパミスを含んだしまりのない土。
- 4層 黒褐色土 かなり多くのパミスと炭化物粒を含む。部分的にソフトローム粒が混入。
- 5層 黄褐色土 ソフトロームとハードロームブロックとの混土。少量の炭化物粒を含む。

▶床下

- 6層 暗黄褐色土とロームの粒状・ブロック状混土。

▶カマド

- 1層 灰黒褐色土 しまりの強い構築材崩落土。
- 2層 暗褐色土 粒子の細かい小砂を構築材とする。
- 3層 暗褐色土 天井部崩落土。3層と4層の間は、燃焼によって硬化著しい層がある。
- 4層 赤褐色土 焼土と黄褐色土層の混土。炭化物も少量含まれる。
- 5層 暗黄褐色土 黒色灰を多く含む。しまりない。

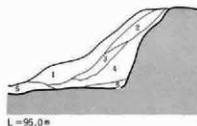
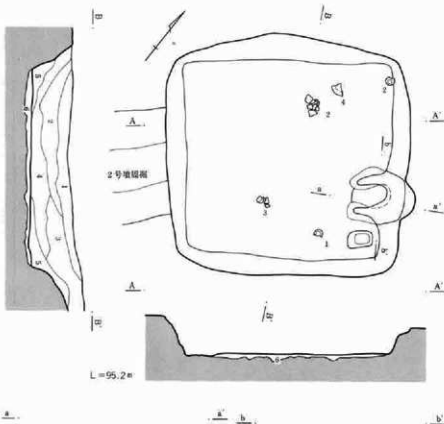
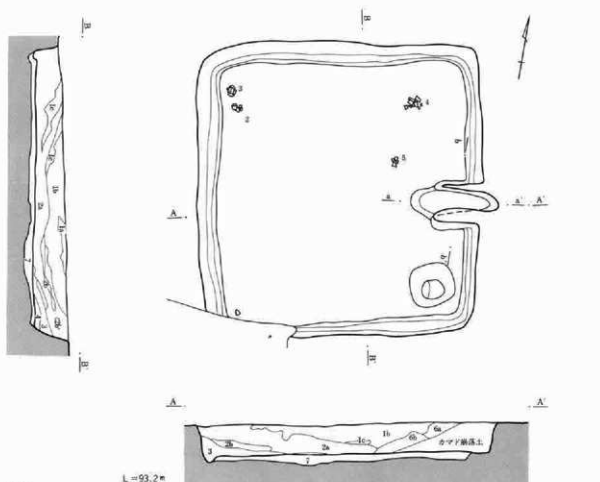


図162 2号住居

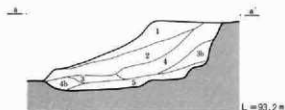
IV 古墳時代の遺構と遺物



L=93.2m

▶住居

- 1層 a 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックをやや多く含む。
- b 暗褐色土 ローム粒子・F P粒を含み、ロームブロックを斑点状に流しる。1層に比べ、黒い。
- c 暗褐色土 a・b層より黒味が強い。F P粒を含む。
- 2層 a ローム粒子・ロームブロックと暗褐色土の混土。粘性が強く、堅くしまっている。
- b 色調が2a層より暗い。粘性が強く堅くしまっている。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを混入する。粘性・しまり強い。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子混入。粘性・しまりあり。
- 5層 暗褐色土 粘性・しまりやや弱い。
- 6層 a 暗褐色土 ローム粒を斑状に含む。炭化物粒、焼土粒を含む。
- b 6a層よりやや明るい色調を呈する。

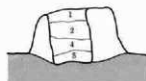


▶床下

- 7層 暗黄褐色土とロームの粒状・ブロック状混土。

▶カマド

- 1層 暗褐色土 住居埋没土。焼土粒を含んでいる。
- 2層 暗黄褐色土 砂粒・ソフトロームを含む。焼土粒を多く混じり、崩れた状態を示している。
- 3層 黒褐色土 焼土粒や黒色灰を含む。崩落した天井面を一部に残す。3b層はローム粒子の混入が多い。
- 4層 暗黄褐色土 2層と3層の混合土。4b層は灰を多く含んでいる。
- 5層 暗黄褐色土 ソフトローム・焼土粒を含む。



0 カマドは×2 2m

図163 10号住居

2. 住居址

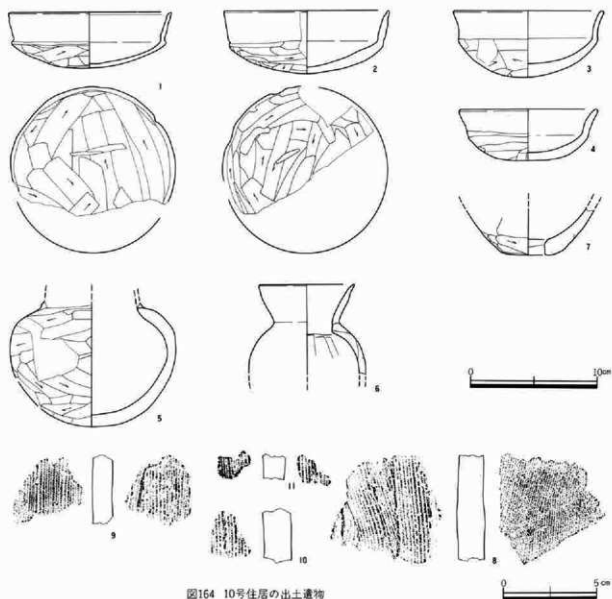


図164 10号住居の出土遺物

埋土 ローム粒子やロームブロックを混じる黒褐色土が交互に堆積しており、人為的埋没過程を示していると考えられる。

カマド 東壁の中央より25cm南へ偏した位置にある。焚口巾50cm、燃焼部長1.4mの規模で残存していた。袖は粘土を貼り付けてつくられ、壁内へ78cm張り出している。

周溝 未発掘部を除いて、全周している。下端巾7~18cm、深さ2~5cmの規模で、大きさは一定していない。

床面

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居東南隅、カマド右側に直径70cmの円形の貯蔵穴が検出された。深さは70cmを計る。

掘り方 直交する2本のトレンチで掘り方を観察した。全体に小さな凹凸があり、北半分にはやや掘りくぼまれたところがある。10~20cmの厚さに掘り方は埋められ、床面がつくられている。

出土遺物 杯形土器2個体(1, 2)が床面直上で出土しているほかは、あまり遺物は多くない。カマド左側の壁沿いに粘土塊が検出された。

IV 古墳時代の遺構と遺物

3号住居

位置 M-24・25グリッド。4号古墳の西に位置し、住居集中区域の最も西側にある。

重複 なし。

形状 4.1×4.3mの隅丸方形を呈する。カマドを通る軸線は、S-51°-Wに傾いている。南壁中央に55×112cmの隅丸直方形のピットが壁から張り出して掘られている。発掘調査当初は、旧カマドの掘り方の残存として掘り始めたが、最終的に性格づけは

できなかった。壁高は確認面から64~70cmを計る。

埋土 焼土粒・炭化物粒・粘土ブロックを含む第1次埋没土に、白色バミスを含む黒褐色土の自然堆積層がのっている。住居確認面と同レベルの埋土最上部には、やや攪乱を受けた浅間Bテフラ層が堆積している。

カマド 住居東南壁中央より45cm南へ偏した位置にある。焚口巾50cm、燃焼部長80cmの規模で残存し袖は左35cm、右50cmの長さで壁内に張り出している。

▶住居

- 1層 浅間Bテフラ純層
やや攪乱を受けている。
- 2層 黒色土
多量の軽石粒と、炭化物粒を含む。しまりのある土で黒ボク土に近い。
- 3層 黒色土
2層よりやや明るい色調を呈し、軽石も多く含む。しまりのやや少ない土。
- 4層 黒灰色土
2層に似ているが、灰色土のブロックを含む。しまりのない土。
- 5層 暗褐色土
軽石をかなり多く含む。炭化物粒も少量混じっている。やや粘性がある。
- 6層 暗褐色土
5層に似るが、やや軽石が少なく、ロームブロックを少量含むようになる。
- 7層 暗褐色土
焼土粒、炭化物粒を多量に含む。
- ▶床下
- 8層 暗黄褐色土とロームの粒状・ブロック状混土。

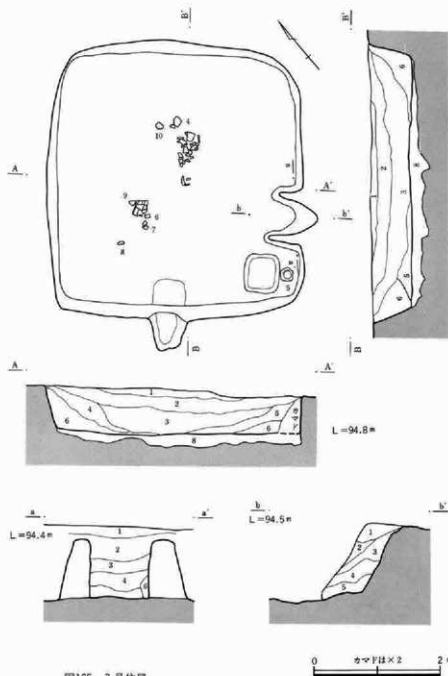


図165 3号住居

2. 住 居 址

袖は粘土貼りつけによる。

周溝 なし。

床面 全面に踏み固めが強く、硬化した明瞭な床であった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 住居東南隅、カマドの右横に58×62cmの方形の貯蔵穴が検出された。

掘り方 直交する2本のトレンチで掘り方を観察し

た。中央部がやや深くなっており、凹凸も激しい。中央部で20～30cm、壁周辺で5～10cmほど掘り方を埋め、床をつくっている。

出土遺物 住居中央部に壘形土器(4)の破片がほぼ床面直上に広がっている。また別の壘形土器(6)がやはり中央部で床面から10cm程浮いて検出された。貯蔵穴の東縁、壁との間にも、壘形土器(5)が床面直上で出土している。

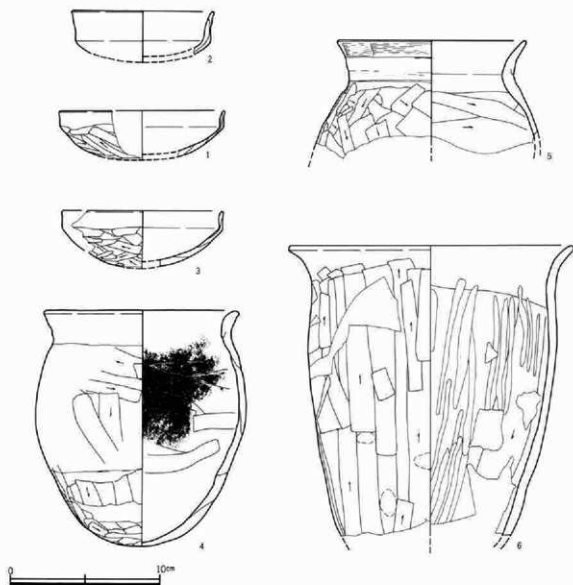


図166 3号住居の出土遺物

IV 古墳時代の遺構と遺物

14号住居

位置 E-36・37グリッド

発掘区内では南端の住居である。

重複 なし。

形状 4.8×4.8mの隅丸正方形を呈する。カマドを通る軸線は東西を示す。西南隅に攪乱があり、壁および床面が破壊されていた。

埋土 床面上10cmくらいまで、攪乱土により埋没している。住居を埋めている土は、浅間B軽石を含む黒色砂質土とロームブロックを混じる褐色土の互層である。

カマド 東壁の中央より55cm南へ偏した位置に付設されている。焚口中60cm、燃焼部長1.8mの規模で残存していた。焚口下には長軸70cmの楕円形で深さ15cmの掘り方があり、それをローム粒・白色バミス・焼土粒の混入した褐色土で埋めて、燃焼面をつくっている。袖はその掘り方埋土の上に粘土貼り付けによって構築され、左袖は35cm、右袖は60cm壁内に張り出していた。

周溝 カマド右側の東壁を除いて全周する。下端巾6cm、深さ2～7cmの規模を有する。

床面 カマド周辺の住居東半分が堅くしまっていた。

柱穴 床面に検出されたピットは8個あった。南西隅のピットを除けば、他の3ピットはやや南へ偏るもの、矩形をなす位置にある。しかしいわゆる柱穴とされるピットの整然とした配置ではなく、かつ比較的浅いので、柱穴とするのは困難である。

貯蔵穴 住居東南隅、カマド右側に90×60cmの隅丸正方形を呈するピットを検出した。底面は直径30cmほどの円形ピットになっていて平らでない。深さは最深部で35cmである。

掘り方 南北方向のトレンチで掘り方断面を観察すると、北壁近くがやや掘りくぼんでおり、小さな凹凸がある。10～18cmの厚さで掘り方の埋土がある。掘り方全掘調査では、北壁沿い1mくらいと、カマド・貯蔵穴のある東南隅が掘りくぼんでおり、中央部はやや高まっていることが判明した。

出土遺物 カマド左側に床面直上で杯形土器2個体(1,3)が出土している。また住居北西隅で杯形土器(2,4)が出土している。

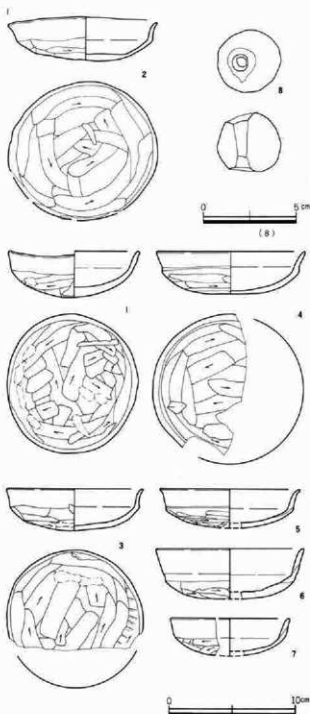


図167 14号住居の出土遺物

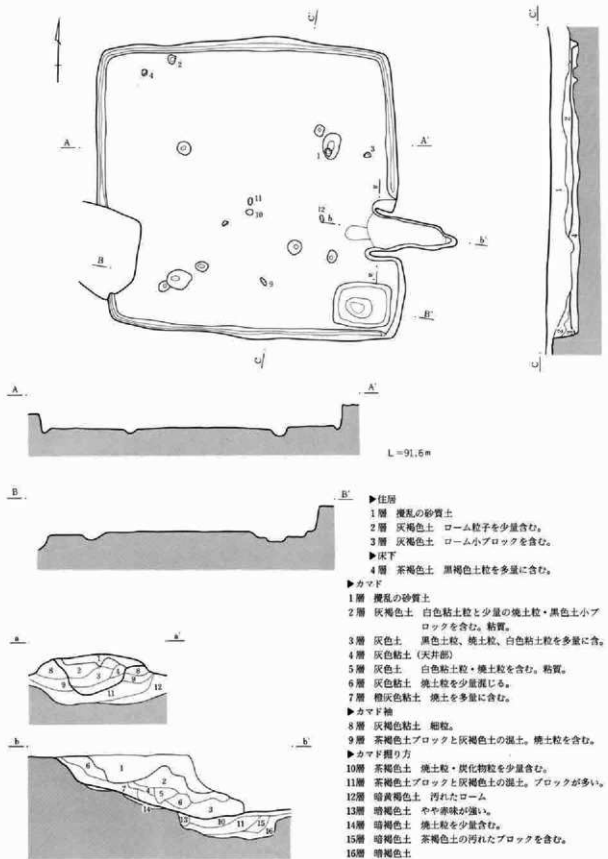


図168 14号住居

0 カマド1:2 2m

IV 古墳時代の遺構と遺物

1号住居

位置 h・i-38グリッド。発掘区北辺の埋没谷の黒色土層中に1軒だけ離れて位置している。

重複 なし。

平面形 3.0×3.3~3.6mのやや台形に近い隅丸方形を呈する。南西隅がやや小さく入り込んでいる。カマドを通る軸線はN-44°Eに傾いている。

埋土 自然の堆積で埋没したと考えられる土層断面を呈している。住居中央部最上層には浅間Bテフラの純層が堆積していた。壁高は遺構確認面より56~58cmを計る。

カマド 北東壁中央より25cm東へ偏った位置にある。焚口中45cm、燃焼部長60cmが残存していた。両袖は巾広く短い。壁より35cm内側へ出ている。

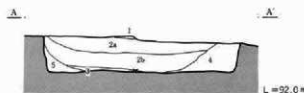
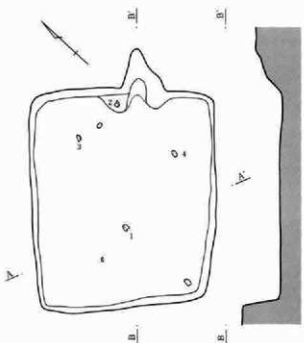
周溝 検出できなかった。

柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 なし。

床面 カマド前面がやや硬化している以外は、全体に軟弱で不明瞭であった。焼土粒の散布がやや多かった。

掘り方 スコップで立ち割り調査をしたが、よくわからなかった。ローム面まで達していない。

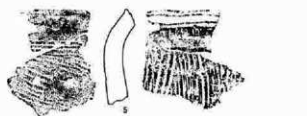
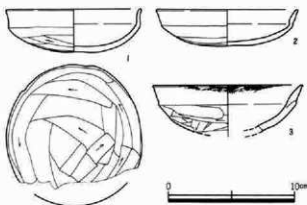
出土遺物 住居中央よりにはほぼ床面上で杯形土器



- 1層 暗灰褐色土 浅間Bテフラの大きなブロックを含む。
- 2層 a 黒色土 粒子の粒い有機質土。φ1mmの軽石を含む。
b a層より軽石が多くなり F Pも確認できる。
- 3層 黒色土 有機質粘質土。
- 4層 暗茶褐色土 粘性の強い、しまりのある土。
- 5層 明黄褐色土 ロームを含む。



図169 1号住居とその出土遺物



(1)が出土している。カマド左袖上に杯形土器(2)が出土している。住居床面には3個の棒状河原石が散在する。

12号住居

位置 H-29・30グリッド。

3号古墳の前庭の位置にあたる。

重複 3号古墳の前庭と住居全体が重複しており、本住居は3号古墳に先行する。

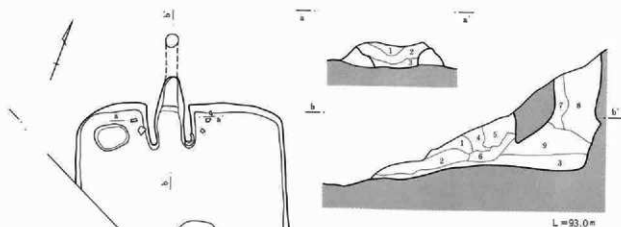
形状 東西3.35mを計るが、南北長は3号古墳前庭の掘り込みによって破壊され明らかでない。隅丸の正方形を呈するものと推定される。

埋土 ほとんどが3号古墳前庭の埋没土であり、住居北西半の第一次埋没土が残存しているだけである。

カマド 北壁中央より15cm西に偏した位置に付設されている。焚口巾50cm、燃焼部長1.15mの規模で残存し、両袖とも70cmほど壁内に張り出している。また煙道の残存が良好で45cm壁外に伸び、直径20cmほどの煙出しの穴も確認することができた。袖は、粘土貼り付けによってつくられていたが、左袖の先端には菱形土器の芯が残存していた。

周溝 なし。

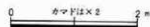
床面 調査範囲は全面に踏み固められていたが、他住居ほど硬化していなかった。



▶カマド

- 1層 暗褐色土 焼土粒子を含む。粘性があるが、しまりは弱い。
- 2層 暗褐色土 多量の焼土ブロック、粘土ブロックを含む。
- 3層 暗褐色土 黒の強い黒色土とロームブロックの混土。炭化物粒を多量に含む。粘性が強い。
- 4層 暗褐色土 焼土粒・ブロックを多く含む。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。しまりは弱い。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒を含む。しまりは弱い。
- 7層 灰褐色土 ソフトロームと焼土の混土。しまりない。
- 8層 褐色土 7層より焼土粒が多い。
- 9層 黒褐色土 ソフトローム・ハードローム・焼土粒・炭化物粒の混土。しまりのない土。

図170 12号住居



IV 古墳時代の遺構と遺物

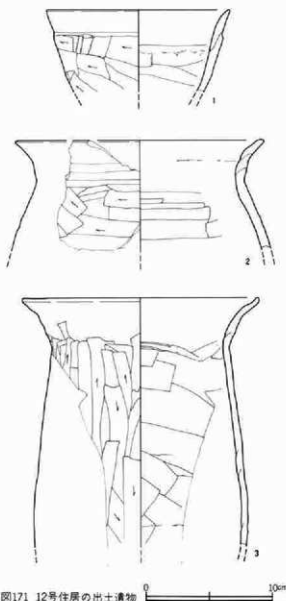


図171 12号住居の出土遺物

柱 穴 検出できなかった。

貯蔵穴 カマド左側に40×55cmの楕円形の土坑が検出された。深さは40cmを計る。

掘り方 未調査。

出土遺物 カマド周辺に破片が検出されている。

11号住居

位 置 P-44グリッド。

住居の集中区域から離れて台地の東斜面上に単独に立地している。

重 複 なし。

形 状 4.0×4.2mの隅丸方形を呈する。カマドを通る軸線はほぼ東西を示す。壁高は確認面より73cm前後を計るが、壁中位までは直に立ちあがり、上半は大きく開いているのが特徴である。

埋 土 Bテフラを混じる黒色砂質土が最上層にのっている。以下、ローム粒子や白色バミスを含む褐色土が、漸次自然堆積と思われる状況で堆積している。

カマド 東壁中央より45cm北に偏した位置に付設されている。焚口中65cm、燃焼部長1mの規模で残存している。袖は、粘土貼りつけによって構築され壁下端より50cm住居内へ張り出している。両袖とも袖の先端から20cm内側に芯として甕形土器を1個体ずつ(8・10)倒立させて入れている。

周 溝 住居東北隅を除いて全周する。下端巾10cm深さ2～4cmの規模である。

柱 穴 東壁に沿って、住居北東隅と南東隅に2本の柱穴状のビットが検出された。2本とも周溝内縁より15cmほど内に入った位置である。北側の1本はカマドが前述のように北偏しているため、カマド左袖にすぐ隣接している。ともに形状は直径30cmほどの円形で、深さは北側50cm、南側60cmを計る。住居が斜面上に位置しており、この2本のビットが低い方の東壁に沿って並んでいることからみて、これらのビットが柱穴であり、片流れの屋根構造も想定できる。

貯蔵穴 なし。

掘り方 直交する2本のトレンチで掘り方を観察した。5～20cmの厚さで掘り方を埋め、床面をつくっている。住居中央部には、深さ20cmほどの皿状の掘りくぼみが認められた。

出土遺物 前述のように、8・10の甕形土器が1個体ずつ両袖の芯として使われている。その他の遺物はカマドおよび柱穴周辺に集中しており、1～3の杯形土器は北側の柱穴の回りで床面直上で出土した。

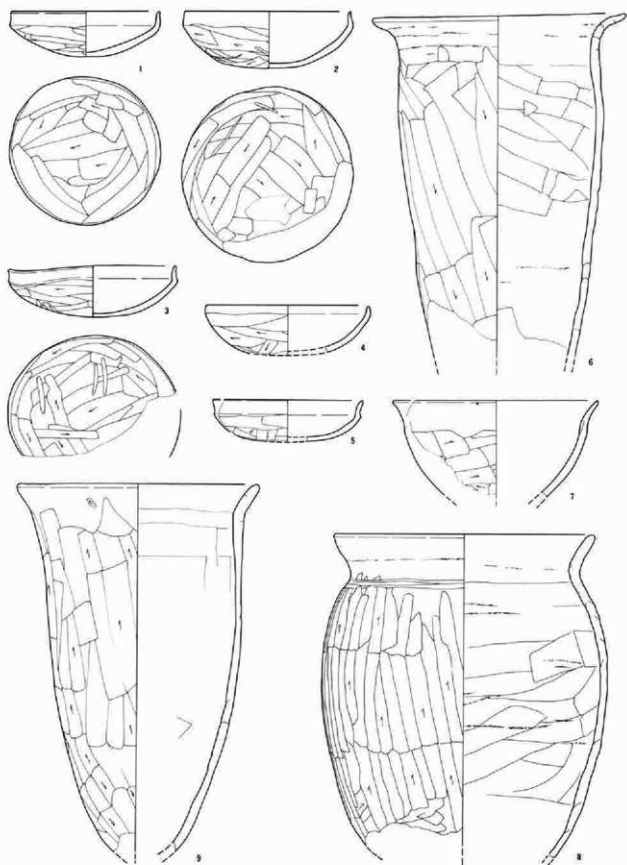
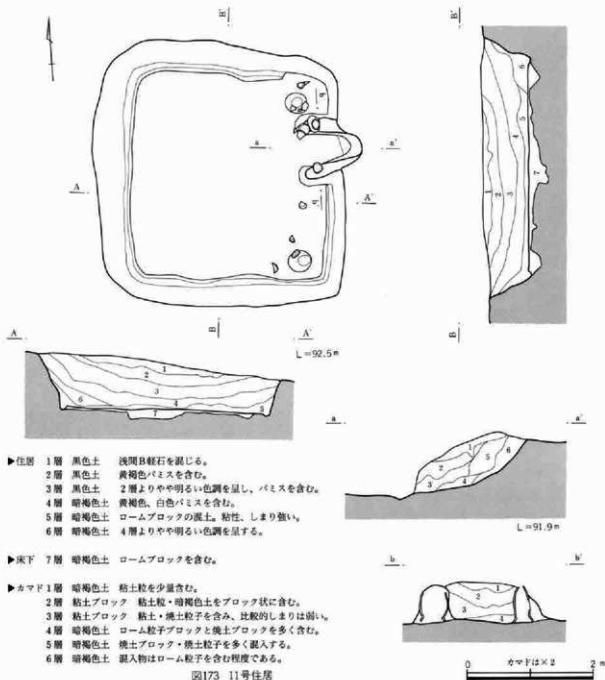


図172 11号住居の出土遺物

0 10cm

IV 古墳時代の遺構と遺物



7号住居

位置 J-33グリッド。

6号住居の東側に位置する。

重複 なし。

形状 3.8×3.6mの隅丸方形を呈する。カマドを通る軸線はN-70°-Eに傾いている。壁高は確認面より66cmを計るが、壁は上方が開いて斜めに立みあがる。

埋土 ローム粒・ロームブロックを含む黄褐色土が埋土の大部分である。

カマド 東壁中央より40cmに偏した位置に付設されている。焚口中45cm、燃焼部長1.08mの規模で残存していた。袖は粘土貼りつけによるもので、50cm程度壁に張り出している。両袖の先端の芯に壘形土器を1個体ずつ倒立させて入れている。

周溝 なし。

床 面 全面に強く踏み固められ硬化が著しかった。

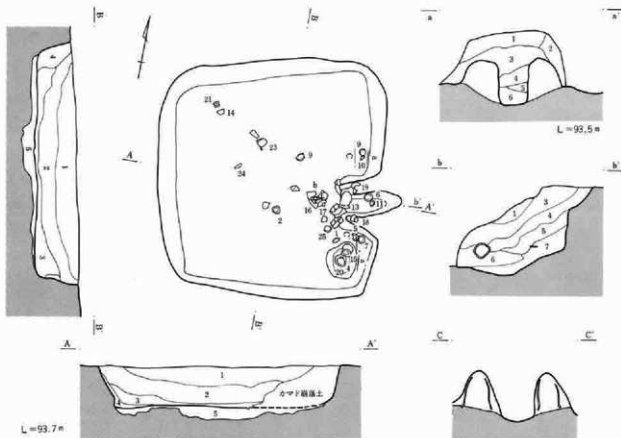
柱 穴 なし。

貯蔵穴 住居東南隅、カマド右側に貯蔵穴と思われるピットを検出した。直径50cmの円形を呈し、深さは50cmである。甔形土器(19)、壺形土器(15)、杯形土器(10)が転りこむように出土している。

掘り方 直交する2本のトレンチで掘り方を観察した。他は全体に10cmほどの掘り込みがあり、これらを埋めて床面をつくっている。住居中央には85×100cm、深さ20cmの掘り込みがあり、西壁沿いもやや掘

り凹められている。

出土遺物 カマド周辺に完形に近い土器が集中して出土している。カマド両袖の芯に甔形土器が使われているほか、焚口部に甔形土器(13)が完形で出土している。また、カマド右側に2個(5・8)、カマド左側に2個(3・6)、カマド前に2個(1・4)、カマド燃焼部に1個(7)と計7個のほぼ完形あるいは完形に近い杯形土器が出土している。前述のように、貯蔵穴にも土器が転りこむような形で出土している。棒状の河原石は、3点住居内に散在している。



▶住居

- 1層 黒色土 白色淡黄色バミスを混入する。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子ブロックを混入する。粘性しまりはやや弱い。
- 3層 ローム粒子ブロックとの混土層。粘性あり、しまりやや弱い。
- 4層 粘性しまりは弱い。ローム粒子はほとんど混入しない。

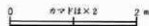
▶床下

- 5層 暗褐色土とロームの粒状・ブロック状混土。

▶カマド

- 1層 暗褐色土 白色バミスを混入。焼土粒子混入。しまり強い。
- 2層 暗褐色土 1層より明るい色調を呈す。しまり強い。
- 3層 暗褐色土 粘土ブロック、ローム粒子、焼土粒子混入、しまりは強い。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子混入。しまりは弱い。
- 5層 暗褐色土 焼土粒子を多く混入する。しまりは弱い。
- 6層 ロームブロック粒子と焼土粒子の混土層。しまりは弱い。
- 7層 ハードロームの赤色硬化層。

図174 7号住居



IV 古墳時代の遺構と遺物

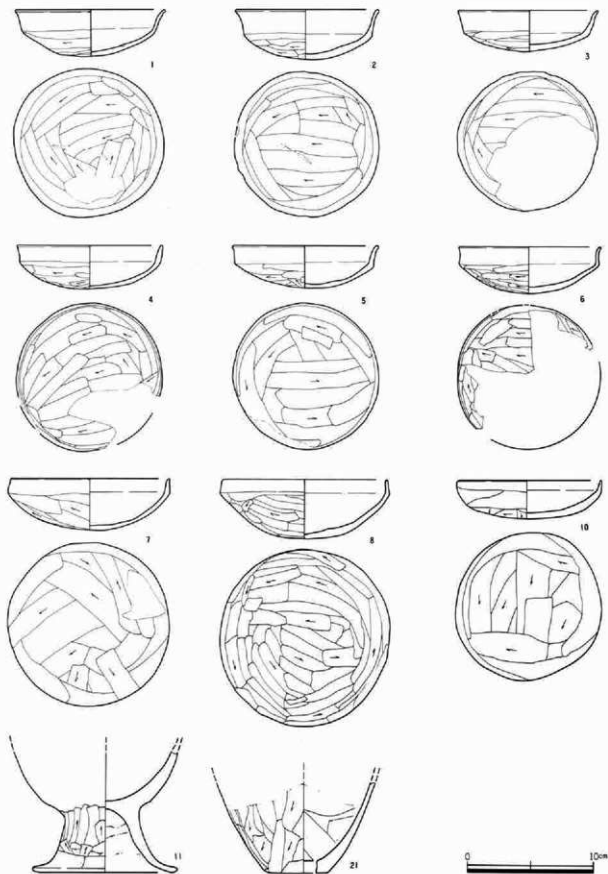


図175 7号住居の出土遺物(1)

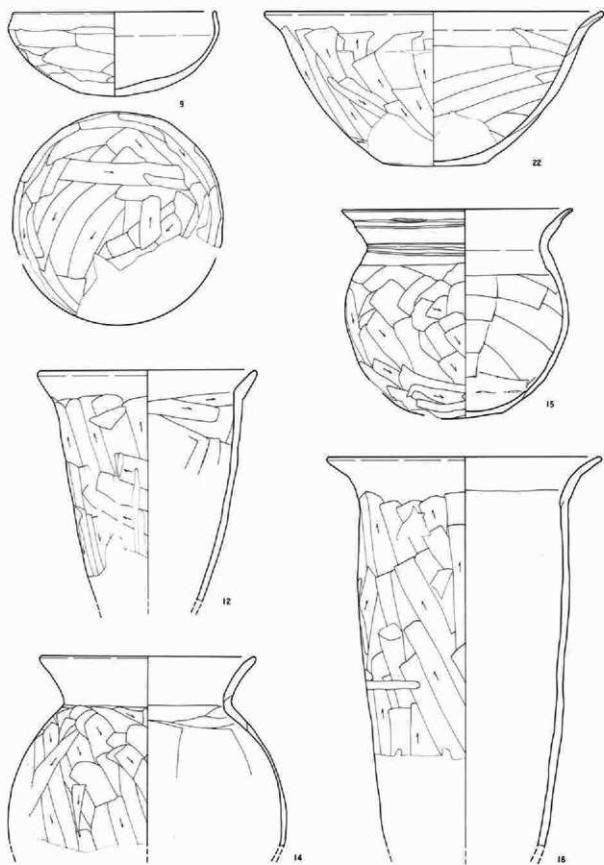
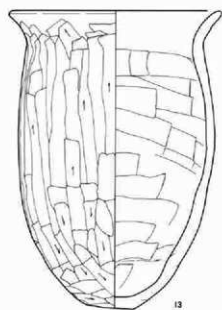


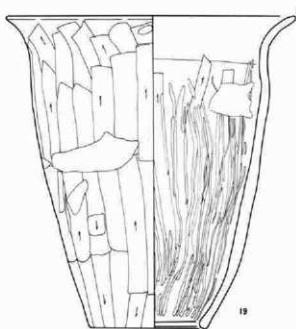
図176 7号住居の出土遺物(2)



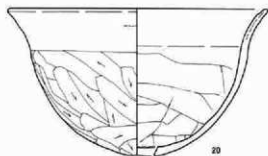
IV 古墳時代の遺構と遺物



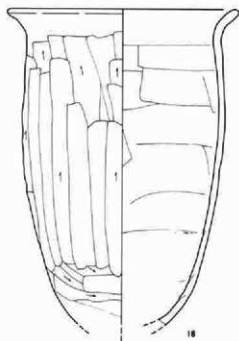
13



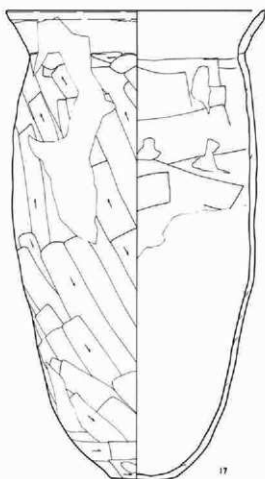
19



20



18



17

図177 7号住居の出土遺物(3)



5号住居

位置 M・L-31グリッド

4号住居の東側に位置する。

重複 なし。

形状 4.7×4.7mの隅丸正方形を呈する。カマドを通る軸線はN-40-Eに傾いている。壁高は52cmを計り、壁は上方がやや外へ開いている。

埋土 最上層は浅間B軽石を混じる黒色砂質土で、以下は、浅間C軽石やF Pの粒子を含む褐色土である。

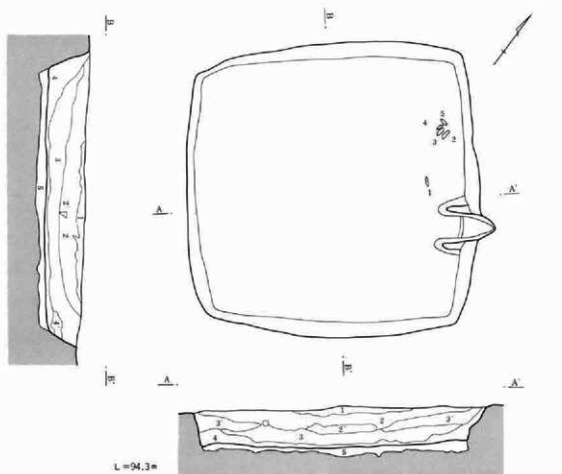
カマド 北東壁中央より65cm南へ偏した位置に付設

されている。焚口中45cm、燃焼部長1mの規模で残存していた。袖は粘土貼付によってつくられ、40cm壁より張り出している。

周溝・柱穴・貯蔵穴 なし。

掘り方 直交する2本のトレンチで掘り方を観察したが、小さな凹凸はあるが全体に10～15cmの深さで全面に掘り方が掘られている。特に掘りこまれた部分は検出できなかった。

出土遺物 図示できる土器はなかった。カマド左側に棒状の河原石が4個と1個の2群に分かれて床面直上で出土している。



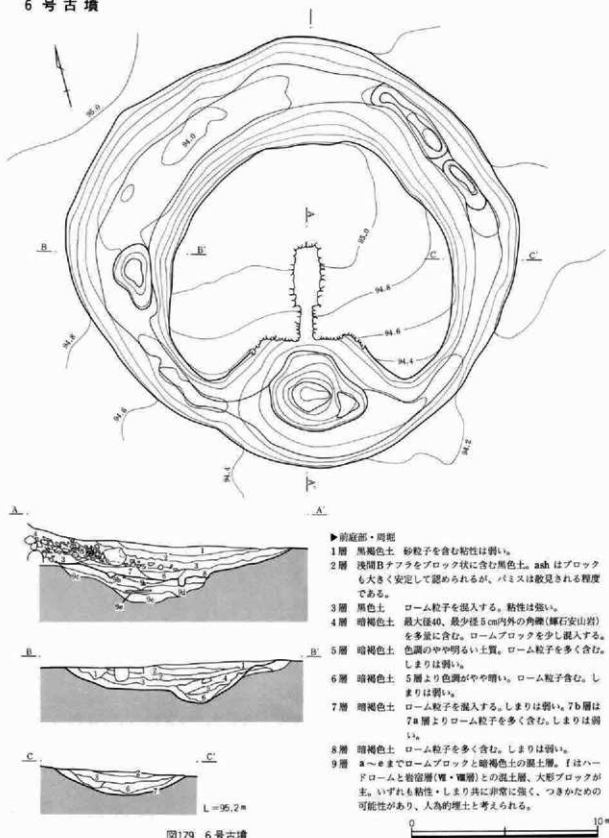
- ▶住居 1層 浅間B軽石混り黒色土
 2層 黒色土 ローム粒子・F P (1mm程の粒子) を混入する。カーボン粒子を多く含む。
 3層 暗褐色土 F P (粒子) を多く混入する。色調は2層と3層の間であるが、より3層に近い板状に暗褐色土を含む
 4層 暗褐色土 ローム粒子ブロックを多量に混入する炭土層。粘しまりは強い。
 ▶床下 5層 ロームブロックと黒色土ブロックの混入。

図178 5号住居



3. 古墳

6号古墳



▶前庭部・甕形

- 1層 黒褐色土 砂粒子を含む粘性は弱い。
- 2層 浅間Bテフラをブロック状に含む黒色土。ashはブロックも大きく安定して認められるが、バミスは散見される程度である。
- 3層 黒色土 ローム粒子を混入する。粘性は強い。
- 4層 暗褐色土 最大径40、最少径5cm内外の角礫(輝石安山岩)を多量に含む。ロームブロックを少し混入する。
- 5層 暗褐色土 色調のやや明るい土質。ローム粒子を多く含む。しまりは弱い。
- 6層 暗褐色土 5層より色調がやや明い。ローム粒子含む。しまりは弱い。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子を混入する。しまりは弱い。7b層は7a層よりローム粒子を多く含む。しまりは弱い。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりは弱い。
- 9層 a~eまでロームブロックと暗褐色土の混土层。fはハードロームと岩宿層(雫・礫層)との混土层、大形ブロックが主。いずれも粘性・しまりに非常に強く、つきかための可能性があり、人為的埋土と考えられる。

図179 6号古墳

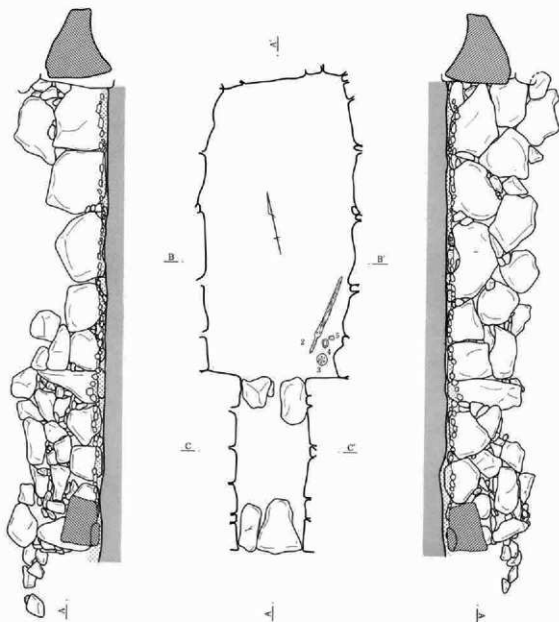
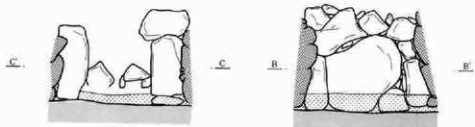


図180 6号古墳の石室

IV 古墳時代の遺構と遺物

位置 M-20グリッドを中心に位置する。西側に7号古墳、南東に10号古墳が隣する。

墳丘と外部施設 規模は周堀も含め南北22.7m、東西23.95mである。墳丘は南北10.35m、東西14.9mである。石室開口部前には前庭があり、これに続く周堀は完周する。墳丘の形状はほぼ円形を呈するが、周堀自体は西北にやや張り出している。

封土は一部が薄く残存していた。土層は灰褐色土と黄褐色土が0.05~0.1m程の厚さで交互に重ねられていた。

前庭の埋没土の状態であるが、第2層に浅間Bテフラが認められ、その下位の黒色土層中には礫が多く流れこんでいた。開口部前は底面が更に一段低く掘り下げられ、深さ1.4mを測った。3層以下の埋没土はロームと暗褐色土の混土層で人為的に突き固められた状態であった。

開口部は狭門を意識した構造をとっている。この左右には石積みか延びる。左は1.9m、右は2.04mで、更にその先端から前庭の形状にそった石積みがある。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積みした両袖型の横穴式石室である。

玄室は弱い副張りをなす。右側壁はやや後にずれている。奥壁には中央に0.8×0.8mの礫を据えている。入口部には玄門があり柱状の礫を直立させている。側壁は根石に0.7×0.8mの大形の用石を置き、これより上段には小形のものを積み重ねている。石積みにはややこぼれがある。

羨道の根石も幅0.5m程の礫を用いており、上端面の高さを一定に保つ意識が働いている。

床面の高さは玄室、羨道ともレベル差は無い。床石は0.05~0.1mの割れ石を一面に敷きつめている。開口部には長さ0.3m程の礫が2石、榎石状に置かれていた。玄室入口にも榎石状に礫が置かれていた。石室の開口方向はS13°5'Wである。

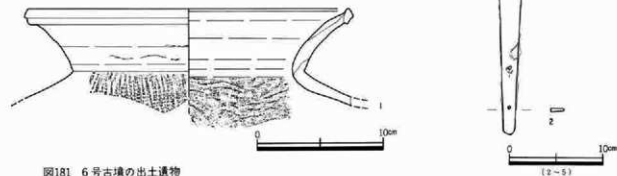


図181 6号古墳の出土遺物

3. 古 墳

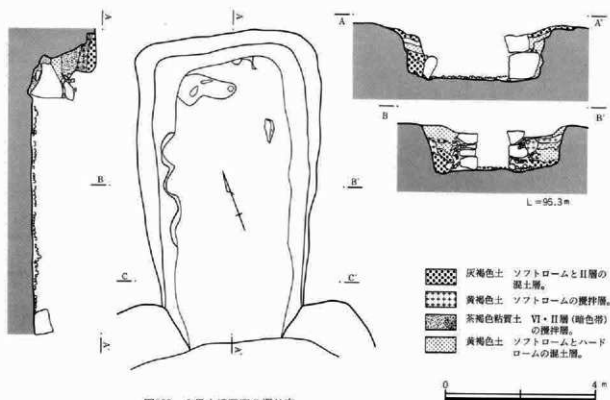


図182 6号古墳石室の掘り方

出土遺物 玄室の左壁、羨道より直刀一振が出土している。切っ先は奥壁にむいており、鏝と鏝口は刀身から離れていた。周堀内からは須恵器の大甕の破片が出土している。玄室の中央、やや奥壁よりから骨片を出土したが残存状態は不良であった。

また、墳丘部、石室の東側から土師器の杯形土器を出土している。

石室の構築状況 石室は掘り方を有している。石室の開口部に開放する竅穴を掘りその底面に根石を設置するものである。規模は上端で縦6.45m、横幅は玄室よりで3.78m、羨道よりで3.05mである。残存壁高は1.0~1.4mであった。今回報告する10基の古墳中、8・9・10号古墳を除く7基は掘り方を造成して石室を構築するという方法が採用されている。

8 号 古 墳

位置 S-13グリッドを中心に位置し、7号、9号古墳の北側に位置する。

墳丘と外部施設 規模は周堀を含めて南北26.35m、東西25.25m、墳丘は南北12.9m、東西17.85mである。

石室開口部前には前庭がある。最大幅は8.5m、長軸8m、深さ0.8mを測る。開口部の直前の底面は更に一段低くなっていた。西南隅から細い溝が周堀に向かって延びている。

周堀は前庭と分離し、2ヶ所が開放している。底面は北側が最も浅く南に向かって徐々に深くなっている。

主体部の構造 横穴式石室を有していたと考えられるが、床面の一部を除いた他は残存しなかった。底面には、径0.05mの小円礫が敷きつめられていたが、その下には安山岩の割れ石が鋪石状におかれていた。床面と掘り方底面との差は0.05mである。

出土遺物 石室床面から2点の鉄片を、前庭埋没土中から須恵器の台付長頸壺形土器とふいご羽口を出

IV 古墳時代の遺構と遺物

土した。

石室の構築状況 石室は掘り方の整穴を掘りその底面に根石を置く方法がとられていたと思われるが、

他の石室に比して、掘り方の掘削深度が著しく浅い。規模は縦5.68m、横幅が奥壁よりで3m、開口部よりで1.95mであった。

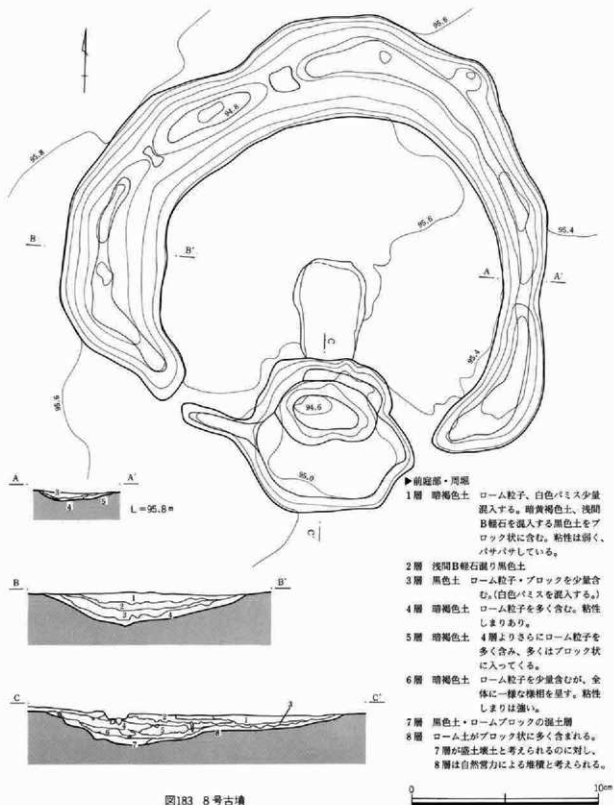


図183 8号古墳

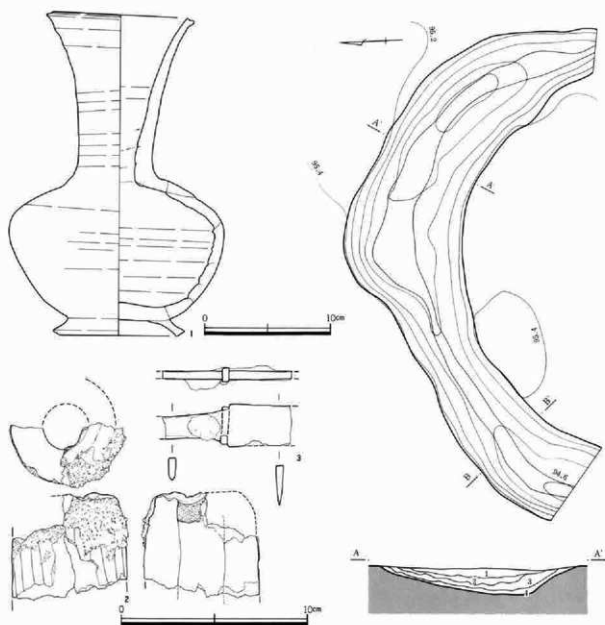


図184 8号古墳の出土遺物

9号古墳

位置 N-11グリッドを中心に位置する。

墳丘と外部施設 周堀は円形を呈すると思われるが、南側半分が調査区域外に及んでいる。墳丘の規模は周堀を含め25.95m以上である。

周堀は西端で上幅4.5m、深さ0.7m、東端で3.6m、深さ0.45mである。埋没土中に浅間Bテフラ純層は認められなかった。

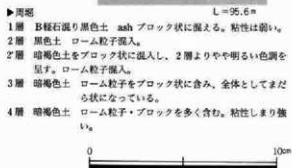


図185 9号古墳

- ▶周堀
- 1層 B種石浜り黒色土 ash ブロック状に混入。粘性は弱い。
 - 2層 黒色土 ローム粒子混入。
 - 2層 暗褐色土をブロック状に混入し、2層よりやや明るい色調を呈す。ローム粒子混入。
 - 3層 暗褐色土 ローム粒子をブロック状に含み、全体としてまだら状になっている。
 - 4層 暗褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。粘性しまり強い。

IV 古墳時代の遺構と遺物

7号古墳

位置 N-15グリッドに中心を置き、6号・9号古墳の中間に位置する。9号古墳とは近接する。

墳丘と外部施設 規模は前庭と周堀の一部が調査区域外にまで及んでいるが、周堀を含めて東西21.05m、墳丘の径は14.75mを測りほぼ円形を呈すると思われる。

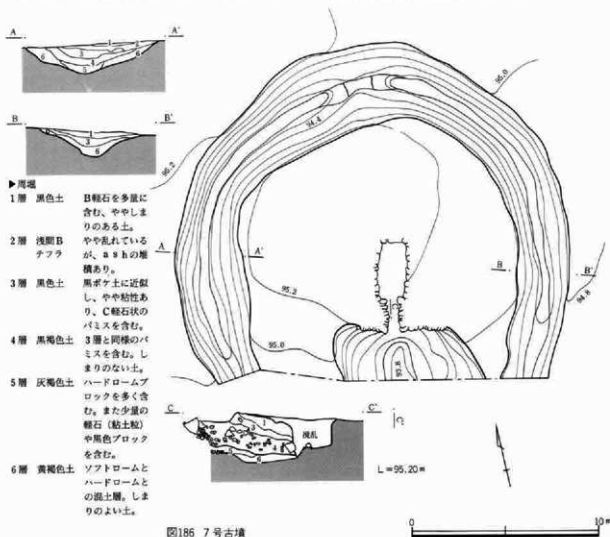
封土はほとんど存在せず、石室の西側に一部、黄褐色土が残存していた。

石室の開口部前には前庭が設けられており、周堀とは分離していたようである。周堀の断面形は内側の傾斜が急であり、外側のそれは緩やかである。西側部分では最上層に浅間Bテフラが堆積していた。底面は北側で高く、東・西側部分にゆくとって深くなる。4・5層は人為的埋土の可能性がある。

開口部の左右には0.1~0.2m程の隙を用いた石積がある。左側は1.81m、右側は2.32mを測る。開口部よりでは高く積み上げられているが、外側に向うに従って1~3段となる。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積した両袖型の横穴式石室で開口方向はS11°Wである。

玄室は割張りが著しい。奥壁は大礫を1石襖え間隙を小礫で補充している。側壁には幅0.6m程の礫を根石に用い、上段はこれよりやや小形になる。壁面は用石を巧みに調節し面とおしがなされている。羨道は偏平の礫を小口積しており、用石の規模はほぼ一定である。また、羨道は閉塞された状態にあった。玄室間近では長さ0.2m程の礫を石室の中軸に対して小口積しており、それから開口部近くまではこれよりやや小形の礫が使用されていた。



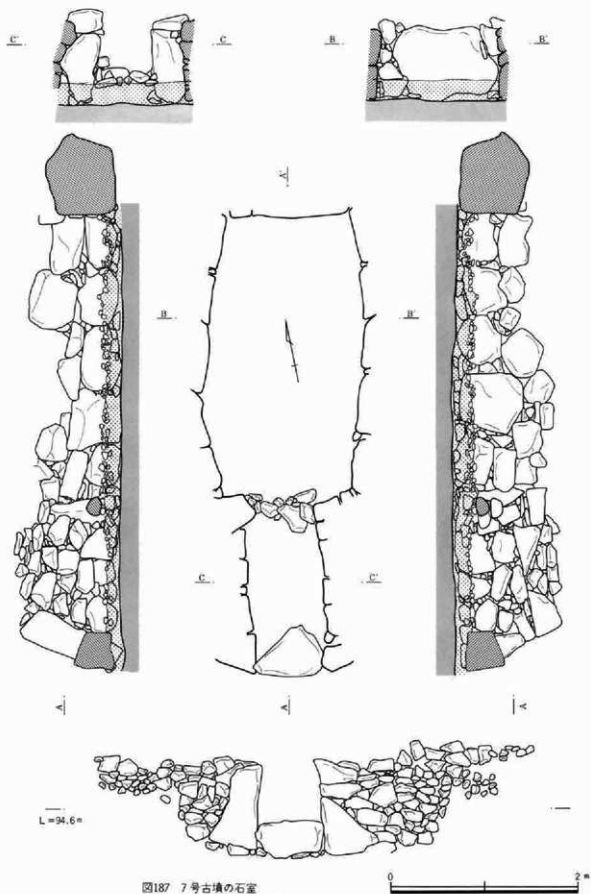


図187 7号古墳の石室

IV 古墳時代の遺構と遺物

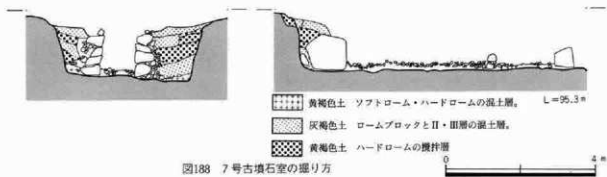


図188 7号古墳石室の掘り方

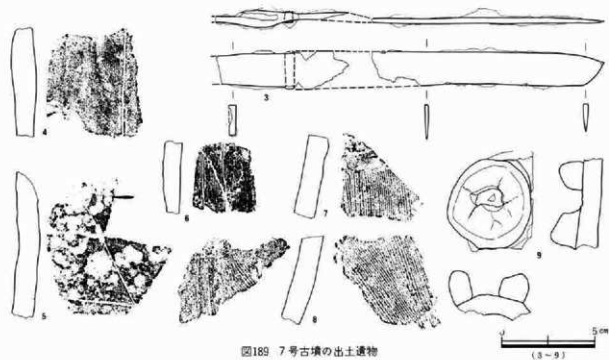
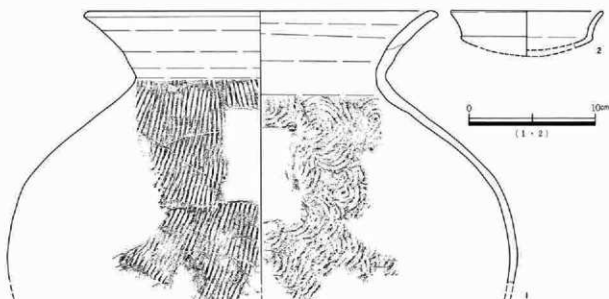


図189 7号古墳の出土遺物

開口部は最下位に $0.7 \times 0.4 \times 0.5\text{m}$ の礫を榎石状に置き、この上に小礫を積み上げ、最上位に榎石と同規模の礫を差し込んでいた。

羨道、玄室の床面の高さは差が無い。玄室の床石には割れ石を舗石状に敷き、この上に径 0.05m 程の小円礫を置いていた。羨道床石は角礫のみである。

出土遺物 玄室の右側壁際から刀子1本を出土した。また前庭からは須恵器の大甕を出土している。石室内の埋没土中から形象埴輪、円筒埴輪の破片を多く出土している。

石室の構築状況 石室は竪穴を掘り、その底面に根石を置く方法をとっている。規模は縦 6.15m 、横幅は玄室よりで 3.9m 、羨道よりで 3.9m を測る。残存壁高は 1.2m 前後である。この壁穴の縦方向の中軸線と石室の中軸線は大きく異なっていた。

3号古墳

位置 J-30グリッドに中心を置き、2号・4号古墳の南側に位置する。前庭の中央部分で12号住居、周堀の東側部分で5号住居の北西コーナーと重複するが、いずれの住居よりも本古墳の築造時期が新しい。

墳丘と外部施設 規模は周堀を含め東西 16.95m 、南北 19.45m 以上である。北側の周堀は外縁が突き出しており、墳丘全体の形状は南北方向に長い円形を呈している。墳丘は東西で 16.95m を計った。封土は全く確認できなかった。

周堀と前庭は南側の一部が調査区域外へ延びており全体の形状を把握できなかった。東側の周堀は前庭との間が開放しており、西側もその可能性がある。

周堀は上端の最大幅が西側部分で 2.95m 、東側で

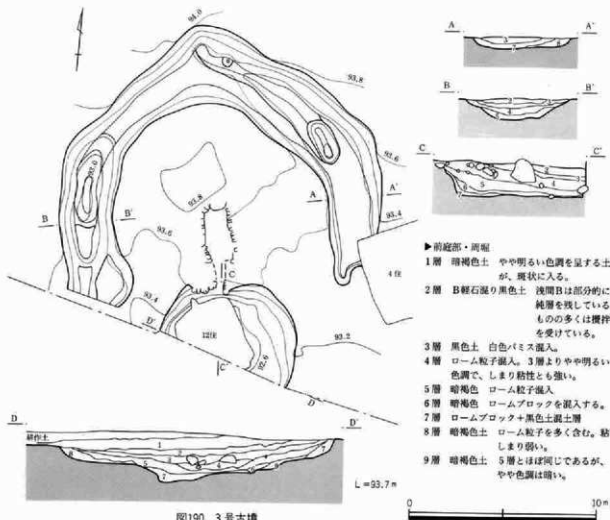


図190 3号古墳

IV 古墳時代の遺構と遺物

3.5mである。周堀の底面は石室の東側、西側と土坑状に深く掘り込まれた部分があり、起伏に著しい相違がある。起伏を除いて埋没土の最上層に浅間Bテフラの堆積が確認された。

前庭は横幅7.22m以上、縦5.1m以上で残存壁高は0.9mであった。開口部の左右には石積があり、それぞれ1.2mほど延びていたようである。左側に0.8m程残存していた。径0.2m程の礫を小口積していた。前庭の底面と開口部床面との比高差は0.85mである。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積した横穴式石室である。両袖型と思われるが残存状態が極めて悪く羨道がほとんど壊れており、原形を把握できなかった。

玄室は弱い膨張りを呈して羨道と接していたものと思われる。奥壁は右側壁より幅0.85mの大形の礫を据え、左側には0.3~0.4mの小礫を補填していた。側壁は奥壁に近い部分で第1段目が残存していた。左側壁はほぼ中頃に1.1×0.6mの礫が置かれ、その奥に幅0.2m程の礫が使用されていた。

床面は右側壁際を残して他は攪乱の為ほとんど残

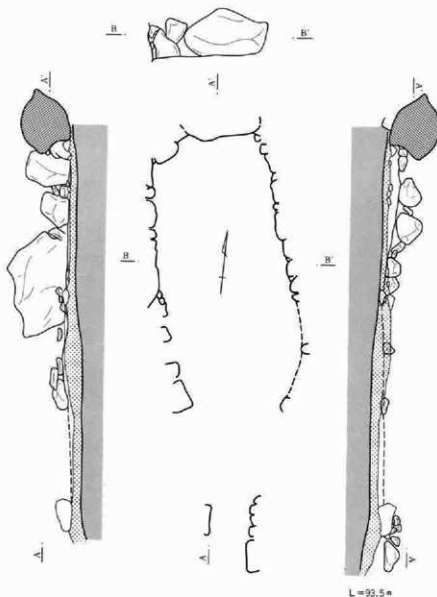


図191 3号古墳の石室



図192 3号古墳の出土遺物

存していなかった。床面に径0.2m程の割り石が舗石状に敷き詰められていたと考えられる。

開口方向は羨道の方からはS6°Eであるが玄室の中軸線はS16°30'Eとなり、玄室と羨道に大きな食い違いがあったようである。

出土遺物 周堀の埋没土中から土師器の杯形土器と甕形土器の破片が出土している。

石室の構築状況 石室は長方形の竪穴を掘り方としその底面に根石を置いている。掘り方の規模は上端が縦5.57m、横幅が玄室部分で4.25m、羨道部で4.02mである。いずれの部分でも壁面の立ち上がりは緩やかであった。残存壁高は最深部で0.65mである。

裏込め材には小礫の混入は少なく、黒褐色土と灰褐色土の層が0.3m程の厚さで詰められていた。奥壁部分では用石の形状にあわせて掘り方法面の造成が行われており、裏込の土粒はほとんど無い状態であった。

4 号 古 墳

位置 N-27グリッドを中心に位置し、2・5号古墳と接する。

墳丘と外部施設 規模は周堀を含め、東西15.75、南北15.4m、墳丘は東西で11.3mと今回検出した古墳の中で最も小形である。封土は全く残存していなかった。

石室開口部前には前庭があり、これから分離して周堀がめぐっている。周堀はいわゆる馬蹄形を呈しているが東南端はやや外側へ向かって延びている。幅は他の古墳のそれよりも狭く石室の北側が最も細くなっていた。規模は北側から東側部分で上端1m前後、西側部分はやや広くて2.8mを計った。深さは0.2~0.25mと浅い。埋没土はF P、浅間C軽石を含む黒色土であった。

▶前庭部・周堀

- 1層 暗褐色土 B軽石層に伴い、バラバラしている。
- 2層 浅間B軽石やや混れるが、下層は比較的残りが良い。
- 3層 黒色土 ローム粒子を混入する。粘性しきりあり。
- 4層 黒色土 3層よりやや軽い色調を呈す。
- 5層 黒色土 3・4層の中間の色調を呈す。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。粘性あり。しきりはやや弱い。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。6層よりやや明るい色調を呈す。
- 8層 黒褐色土 ローム粒子を混入する。
- 9層 ロームブロック及び黒色土の混入層。
- 10層 暗褐色土 9層よりやや暗い色調を呈し、ロームブロックを混入する割合は少ない。

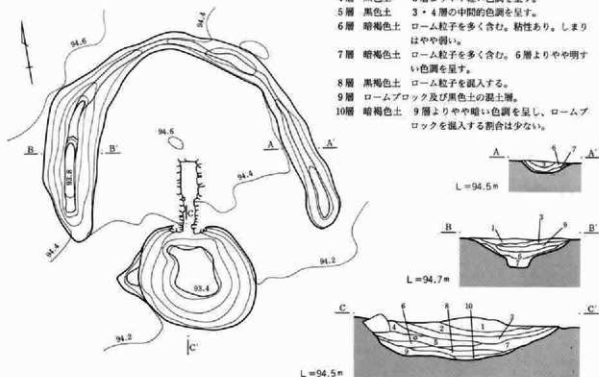


図193 4号古墳



IV 古墳時代の遺構と遺物

前庭は比較的形整った隅丸の台形である。南西部分の角には浅い掘り込みが周廻に向って張り出していた。規模は最大横幅7.15m、縦4.92m、深さ0.8mであった。埋没土の最上層に浅間Bテフラの純層が堆積していた。底面と石室開口部との比高差は0.4mである。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積した両袖部横穴式石室である。玄室長に比して羨道長が長いプランである。また、玄室の幅が狭いため羨道幅が広く感じられる構造である。開口方向はS10°Wである。

玄室は奥壁の中央に0.6×0.65mの大形の礫を据え、側壁との間には0.4×0.2m程の礫を充填しており左壁側に4石、右壁側に3石残存していた。側壁の根石は幅0.3～0.4mの礫が使用の上面の状態にあわせて次の段の用石を固定してゆくいわゆる「落とし

込み」に近い構築技法が用いられているようである。

羨道は開口部と玄室入口に柱状の角礫を立石し、これに偏平な礫を積み上げそれぞれ渡門、玄門を意識した構造をとっている。その他の側壁の根石は偏平で小口に置かれている。用石の大きさは左壁に比して右壁がやや大きく、各段ごとに水平を調整しながら玄門から開口部に向けて積み上げているようである。

閉塞には0.1～0.2mの角礫が用いられていたがあまり丁寧ではなかった。玄室との境には翻石状の礫を確認することはできなかった。

床面は0.1～0.15mの小礫が敷きつめられていた。掘り方の面との差は約0.1m、側壁の根石はほとんどの部分が床面下にかくれている。

出土遺物 前庭から須恵器の台付長頸壺、周廻の埋没土中から土師器の杯形土器の破片、石室埋没土中

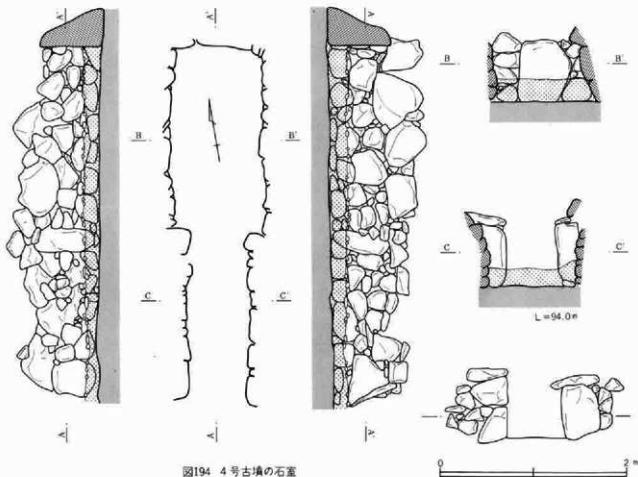


図194 4号古墳の石室

から鉢形土器の破片を出土している。

石室の構築状況 竪穴を掘り根石を置く方法が取られている。規模は縦5.56m、上端の横幅は玄室部分で2.84m、羨道部分で2.24mで、北側の隅は丸味を帯びている。

壁面の下半部には跡と思われる工具による掘削痕が2段から3段残存していた。掘削の方向は最下段が玄室右壁中央から奥壁に向かって、その上段は奥壁から右壁中央に向かっていった。

底面はほぼ水平に掘削された後、根石を設置する部分はその用石の形状に合わせて底面を再度掘削して根石上端の水平を調節している。奥壁部分は他よりも0.2m程、掘り下げられていた。

裏込には礫はほとんど用いられず石室の用石との間にはロームブロックを多く含む土粒が入れられていた。

3. 古 墳

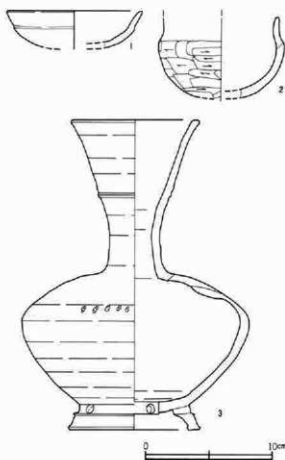


図195 4号古墳の出土遺物

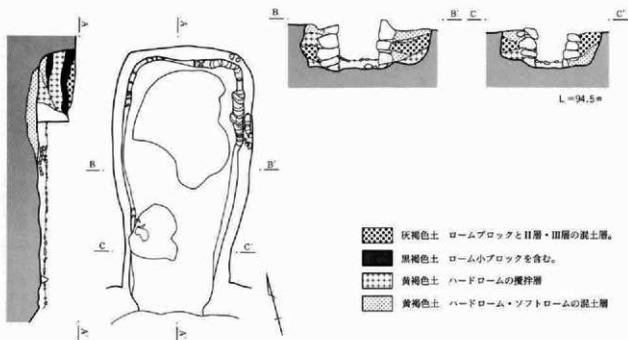






図196 4号古墳石室の掘り方

-  灰褐色土 ロームブロックと2層・3層の礫土層。
-  黒褐色土 ローム小ブロックを含む。
-  黄褐色土 ハードロームの覆存層
-  黄褐色土 ハードローム・ソフトロームの混土層

IV 古墳時代の遺構と遺物

5号古墳

位置 R-25グリッドを中心に位置する。南東に2号古墳、4号古墳が接する。

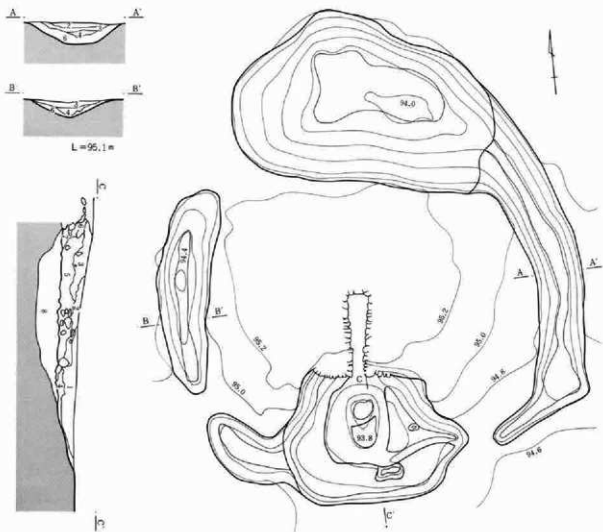
墳丘と外部施設 形状は周堀の外縁をみる限り南北に長い鶏卵形を呈しているようであるが、周堀の内縁、すなわち墳丘自体は東西に長く矩形に近い形状を呈している。これは北側の周堀の幅が著しく広がる為である。

規模は周堀を含めると東西22.5m、南北26.1m、墳

丘は東西17.55m、南北10.35mを測った。

封土は墳丘中央、石室近くに一部が残存していた。ソフトローム、ハードロームを混入する灰褐色土である。

周堀は部分的に分離し、3カ所で開放している。西側の上部の幅は2.5~2.8mである。北側の著しく拡張している部分では最大幅を8.8m計った。埋没土中に浅間B軽石の純層の堆積は認められなかったが最上層の黒色土中にBテフラが多く含まれていた。



▶前庭部・周堀

- 1層 暗褐色土 (灰)白色バミス、黄色バミスを混入する。土質はBテフラが攪拌されバヤバヤしている。
- 2層 暗褐色土 1層より色調はやや暗い。浅間テフラをブロック状に混入する。
- 3層 暗褐色土 黄色バミスを多く混入する。粘性、しまりともにやや強い。
- 4層 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5層 暗褐色土 一律に黄色バミスを混入する。粘性しまりあり。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子を混入する。3層よりやや明るい色調を呈す。
- 7層 暗褐色土 色調はやや暗く、ローム粒子・少量混入する。 8層 ローム粒子・ロームブロック・黒色土の混土層。

図197 5号古墳



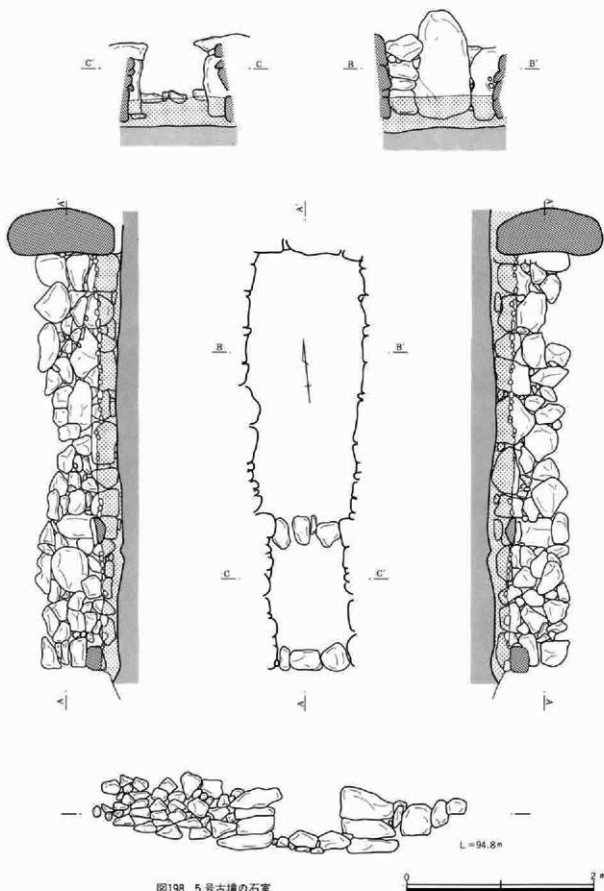


図198 5号古墳の石室

0 2 m

IV 古墳時代の遺構と遺物

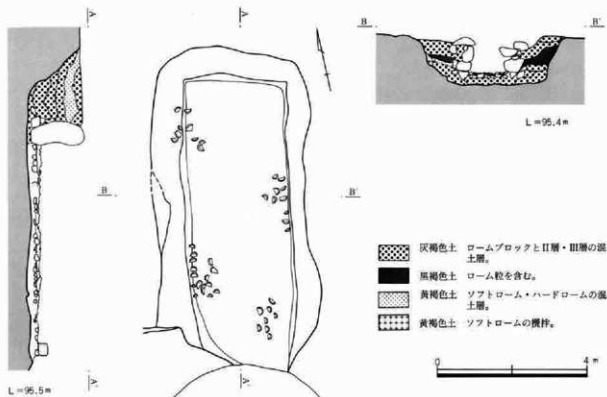


図199 5号古墳石室の掘り方

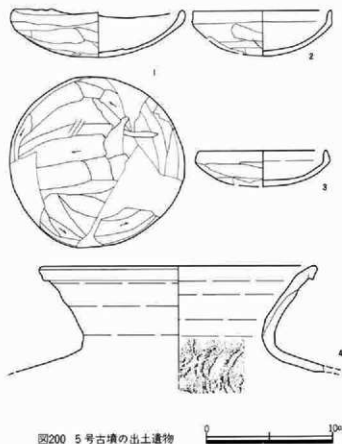


図200 5号古墳の出土遺物

石室の開口部前には前庭が設けられている。西壁は西側の周堀に向って浅い掘り込みが延び、東壁も周堀に向って突き出ている。

規模は縦6.7m、最大幅9.65m。底面は起伏が著しく、開口部前は底面が更に一段低く掘り下げられていた。壁面の残高は最深部で1.4mを計った。

また、開口部の左右には石積があり石室の正面観が整えられている。左側は1.94m、右側は1.33mで0.2m程の大きさの礫が用いられていた。

埋没土の最下層はロームブロックと黒色土の混土層で人為的な埋土の可能性はある。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積した両袖型横穴式石室である。

玄室はやや胴張りを有する。玄門は柱状の礫を直立させている。袖部は短く、羨道の幅に比して玄室の幅が狭い。奥壁は中央に大形の礫を据え削壁との間には幅0.2～0.3mの礫

を補填している。開口部は0.4～0.5×0.2m程のやや偏平な隙を石室の中軸線に対して小口積み重ねている。羨道の用石は幅0.2～0.3mで良好な部分で3段残存していた。

石室開口部には榎石が、羨道と玄室の境には榎石が置かれており、羨道内は閉塞がなされていたと思われる。

床面は玄室、羨道とも同じ高さである。床石には下位に径0.2m程の礫を一面に敷き、その上に径0.1m以下の小円礫が敷き詰められていた。

出土遺物 前庭の埋設土中から土師器の杯形土器を3個体また、周堀の埋設土中からは須恵器の大甕の破片を出土した。

石室の構築状況 石室は長方形の堅穴を掘り、その底面に根石を置いている。規模は縦6.65m、横幅3.35mである。壁面は全体にやや外反形状で底面近くに弱い稜を有する。残存壁高は1～1.15mである。

また、底面には4号古墳と同様、工具による掘削痕が残っていた。

裏込材には礫がほとんど用いられずローム混りの黒色土、黄灰色土が入れられていた。

石室床面と掘り方底面の間は約0.1m、灰褐色土が入り堅くしまっていた。

2号古墳

位置 P-31グリッドに中心をおき、東に1号古墳、南西に4号墳、北西に5号古墳が位置する。墳丘の北側で周堀が2号住居と重複するが、古墳が新しい。
墳丘と外部施設 円墳と思われるが周堀の状況からは方墳とも考えられる。規模は周堀を含めて南北23.75m、東西24m、墳丘は東西14.25mである。

封土は石室北側の一部にロームが汚れたような黄褐色の土粒が確認できただけである。

石室の開口部前には前庭が設置されている。平面形は台形で、南東隅が嘴状に東側に延びている。最大幅は9m、深さ1mで底面には更に方形の掘り込みがあった。埋設土の最上層に浅間Bテフラが堆積している。その下位の黒色土中には焼土ブロックの混入が顕著である。開口部床面と底面との比高差は0.4mである。

開口部の左右には石積が延びている。左側は1.73m、右側は1.47mである。0.1～0.2mの礫を横積にしているが右側の方がやや小ぶりである。左側はほぼ2段積で残高約0.4m、右側は3段積で約0.3mである。

周堀は前庭の東側と石室の北側で分離していた。西側の周堀は4号古墳の周堀の存在を意識してか外周の一部が内側にくぼんでいる。断面形は緩やかな

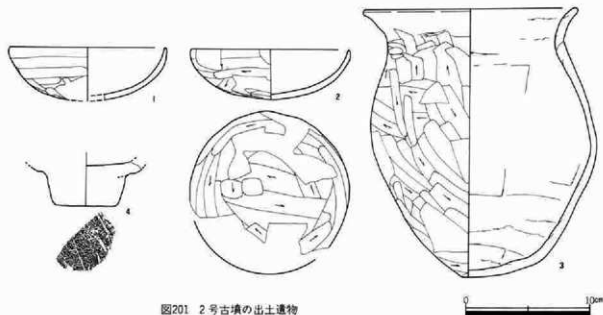


図201 2号古墳の出土遺物

IV 古墳時代の遺構と遺物

レンズ状を呈しており、残存壁高も0.6~0.7mと比較的浅い。埋没土の最上層はF P、浅間C軽石混りの黒色土である。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積した横穴式石室と考えられるが攪乱が著しく開口部の周辺を除いてはほとんど残存していなかった。

床面もほとんど残存しなかったが、径0.2m以下の礫が用いられていたと思われる。

出土遺物 前庭の埋没土中から土師器の甕形土器と杯形土器が出土している。

石室の構築状況 主体部は長方形の竪穴を掘り方とし、その底面に根石を据えていたようである。規模は長さ5.67m、支室部分の幅横3.7m、羨道部分3.04mで残存壁高は0.9~0.15mであった。断面形は残存部の上位は大きく外反するがそれより下位は垂直に近い立ち上がりである。根石はそれぞれの大きさに即して安定性のある据え方がなされ、部分的には掘り方底面を更に掘り下げている。中軸線の方法はS9°Eである。

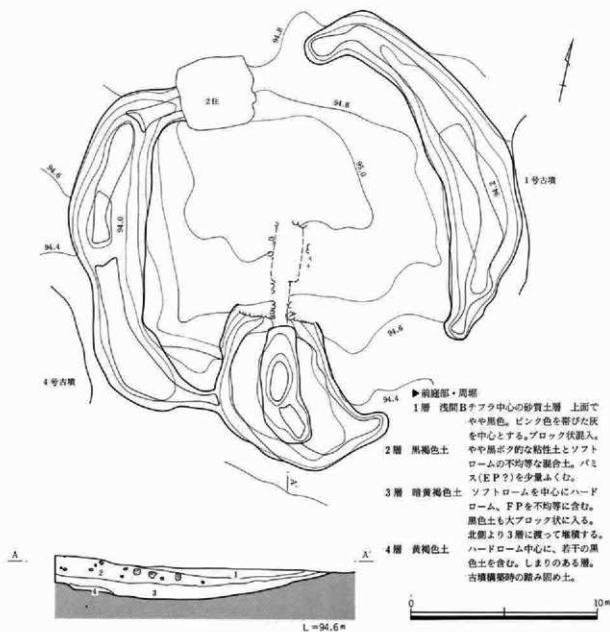


図202 2号古墳

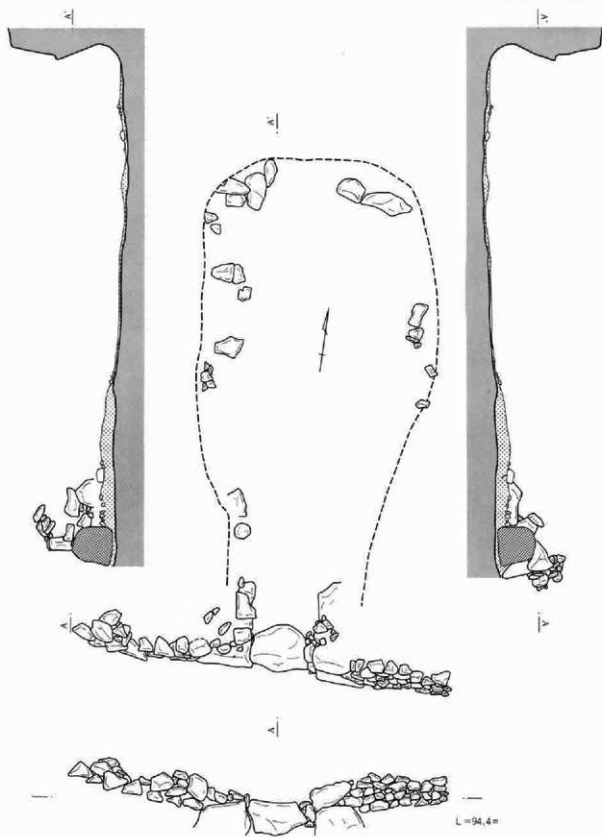


図203 2号古墳の石室

0 2 m

1号古墳

位置 0-35グリッドを中心に位置し、西側の周堀は2号古墳の周堀と接する。今回検出された古墳群中最も東側に位置する。地形は序々に北西から南東に向かって低くなり、古墳の東は約50mで沖積地となる。

墳丘と外部施設 方墳である。規模は周堀を含めて南北25.15m、東西27.15mであり、墳丘は南北17.5m、東西18.7mを計った。

封土はその多くが失われほぼ削平された状態であったが石室から東に2.8m、西に2.3m、北は周堀の内縁までの範囲に10~15cmの厚さで残存していた。基本土層のII層、III層、IV層の混土層である。

周堀は石室開口部の左側で一部分離している。また、周堀の掘削には一定の企画性を保ちながらも処々に形状の相違が認められる。北東と南東の両隅は外縁が丸みをもっている。西側の周堀は北西隅のやや南側は2号古墳の周堀をよけるように幅が狭くなり内側にくびれている。そして、南西隅に向けて序々に外縁が幅狭くなっている。断面形は内側の傾斜が急、外側が緩やかである。埋没土の上層には浅間Bテフラの純層が堆積していた。また、これより下位の黒色土層中にはFPや浅間C軽石が少量含まれていた。

石室開口部前には前庭がある。台形状を呈し、四隅はやや丸みを帯びていた。規模は最大幅7.7m、縦5.52m、深さ0.8mである。石室開口部の両側には石積がある。左側には1.34m以上、右側には0.72m以上あったと考えられ、石室を構築する際に掘削される竪穴の幅と一致すると思われる。左側は0.5m程の礫が、右側はこれよりも小さく0.2m程の礫が横積みされている。

埋没土の上から第2層目は浅間Bテフラの純層であり、その下層には多量の礫とともに多くの炭化物、焼土の混入が認められた。最下層とその上の第1層はロームブロックと黒色土の混土層で6号古墳同様に人為的に埋め戻された可能性もある。

主体部の構造 輝石安山岩の割れ石を乱石積した両

袖型の横穴式石室である。玄室の一部が張り出してL字形を呈している。左壁の奥壁よりの一部が内側に迫り出しているのは右室の崩壊のためと考えられる。

玄室の規模は長さ2.98m、右壁の奥壁よりが長さ0.74m程張り出しており、奥の幅が2.0mであるのに対し、玄室中央の幅は1.44mである。

奥壁は幅0.8m程の礫を2石据えその両側には小形の礫を充填している。側壁は壁面の良好な部分で4段積まれていた。根石は0.2~0.3×0.25~0.3mの礫を小口に据えている。用石は羨道のそれよりやや大形で割れた面を巧みに組み合わせ、これに割れ石を差し込み安定を保っている。羨道との境はいわゆる玄門を意識した構造がとられている。左右両袖とも柱状の礫を直立に据え、これに偏平な形の礫を重ねている。

羨道は開口部から半分が攪乱の為に欠失していた。石積は良好な部分で3段積まれていた。0.2~0.3mの用石が使用されている。

床面は羨道部分のレベルがわずかに高いが玄室、羨道の間には用石の差はなく、0.1~0.15m程の割れ石が鋪石状に敷き詰められていた。羨道と玄室の境には長軸0.25m程の礫が2石、石室の長軸に直交するように置かれており、楕円状を呈していた。またこれよりも開口部よりも同規模の礫が石室の長軸と同方向で3石置かれていた。

石室の構築状況 石室は矩形の竪穴を掘り、この底面に根石を置く方法がとられていた。竪穴の規模は長軸で7.62m、横幅は玄室で3.5m、羨道よりで5.84mである。断面形は垂直に近い立ち上がりであるが羨道よりの左側壁は緩やかな形状であった。底面は平坦に仕上げられているが、奥壁や開口部、玄門にあたる石材が位置する場所は更に深く掘り込まれていた。奥壁よりの壁面には鋸痕と思われる工具による掘削痕が明瞭に残っている。石室は掘り方の東側にやや偏って構築されており左側に余裕がある。裏込め材には礫がほとんど用いられず土粒が入れているが特に突き固めた様子もなかった。

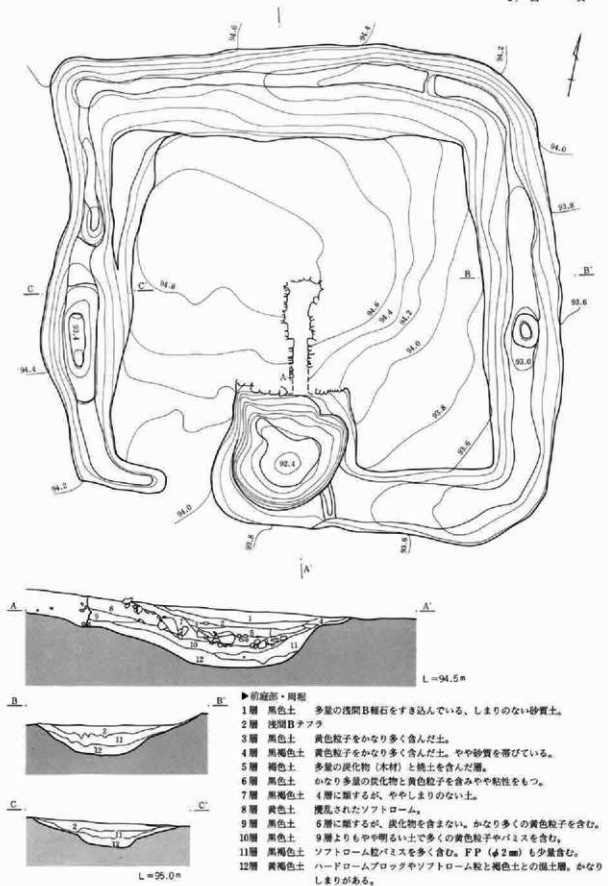


図204 1号古墳

IV 古墳時代の遺構と遺物

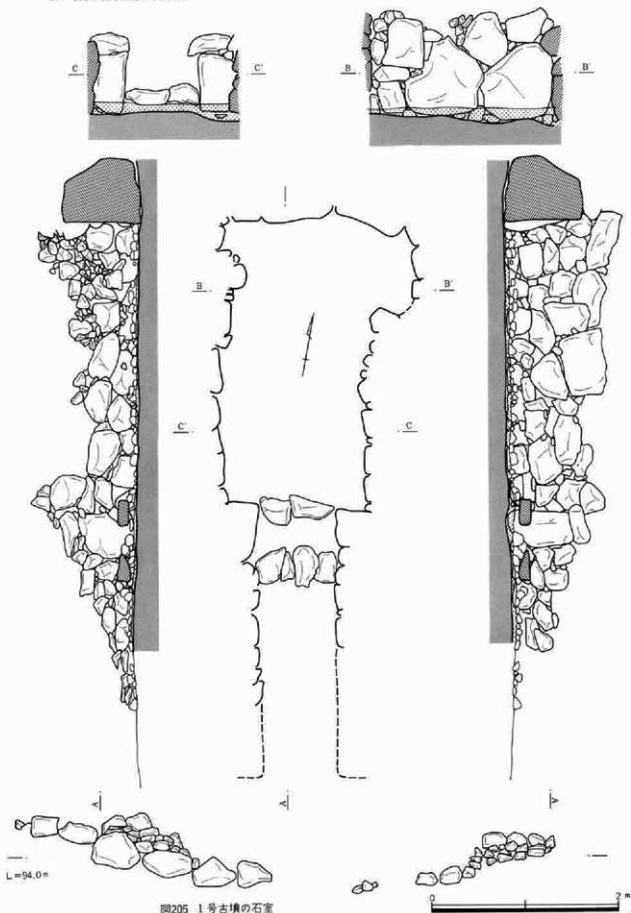


図205 1号古墳の石室

3. 古 墳

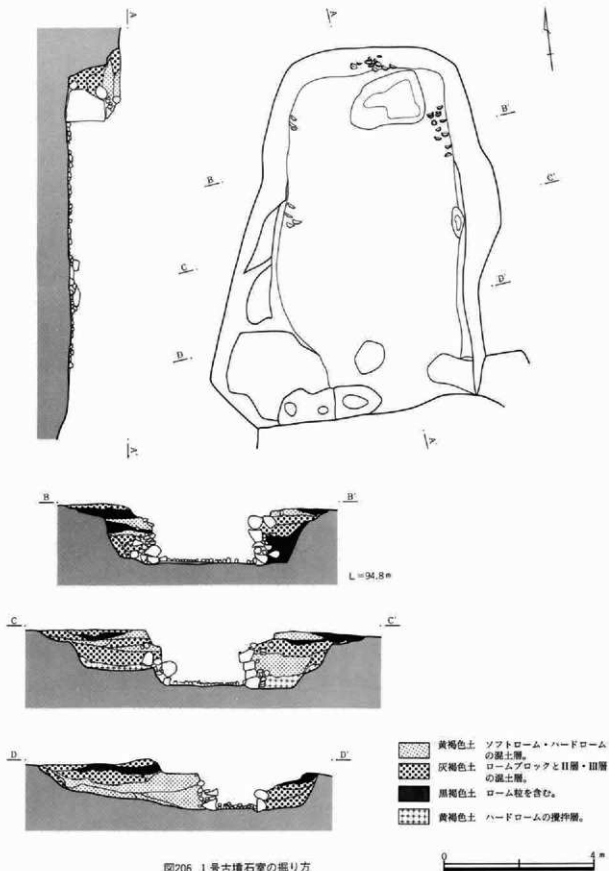


図206 1号古墳石室の掘り方

IV 古墳時代の遺構と遺物

出土遺物 玄室内を中心に多くの遺物が出土している。外部施設では前庭の埋没土中から須恵器の甕(5)、大甕の破片が出土している。周堀の埋没土中からも須恵器の大甕の破片と埴輪の破片2片が出土している。埴輪についてはこの古墳に伴うものとは考えられない。

玄室の玄門右袖隅からは2個の須恵器の長頸壺(2・3)と1個の提瓶(1)が口縁部を上にして寄りあつた形で出土している。玄室からは他に須恵器の杯形土器(4)が出土している。

玄室の左袖には切っ先を下にして兼手刀(6)が立て掛けられたような状態で出土した。鞘金具は刀身

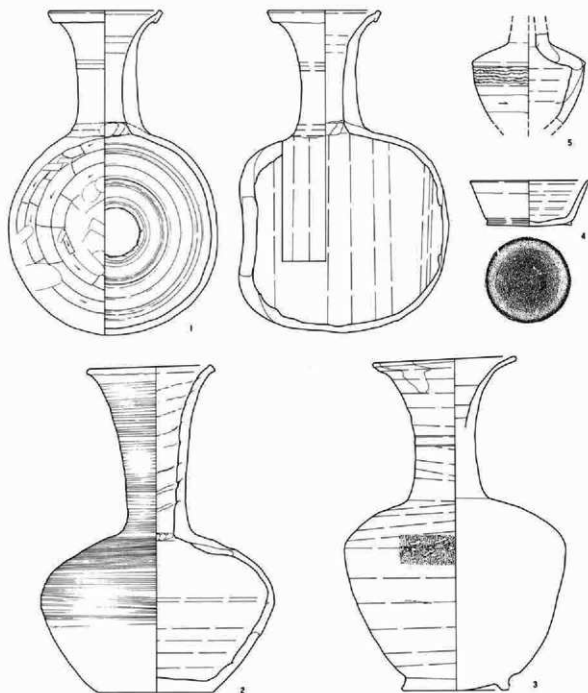


図207 1号古墳の出土遺物(1)

0 10cm

の北側に離れて出土していることから刀身は鞘から抜かれて置かれてあったと思われる。中央、左壁際からは直刀が切っ先を羨道側に向けて出土しており、柄の脇には刀子があった。刀子は合計4本出土している。また、玄室の羨道より左側から金環が2個出土している。

鉄鎌は鎌身の確認できたものが62本あり、頭部を含め134点を取り上げた。型式別には、短頭闊筥被脇扶両刃両丸造五角形式が1本、短頭闊筥被脇扶両刃平造五角形式1本、短頭闊筥被両刃片丸造五角形式3本、長頭棘筥被閑無端刃平刃箭式9本、長頭闊筥被閑無端刃平刃箭式3本、長頭棘筥被両刃両丸造盤箭式5本、長頭闊筥被両刃両丸造盤箭式4本、長頭闊筥被両刃片丸造盤箭式1本を確認できた。藏手刀(12)の周辺と奥壁際に集中していた。

鉄釘は頭部で10本、身部で43本が確認できた。床一面に散乱しており床石の間に落ち込んでいるものもあった。身部に木質片が付着しており、木棺に使用されていたと思われる。

玄室内からは人骨や歯も検出された。歯は奥壁近くの床面から38個が出土している。人骨は残存状態が極めて悪かったが頭骨の破片が羨道に近い場所か

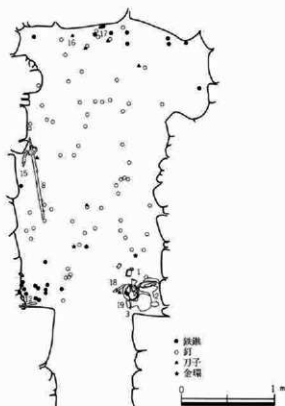


図209 1号古墳の遺物出土位置

ら出土しており、石室内が乱れていたことを推定することができる。

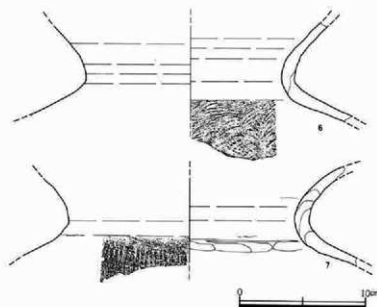


図208 1号古墳の出土遺物(2)

IV 古墳時代の遺構と遺物

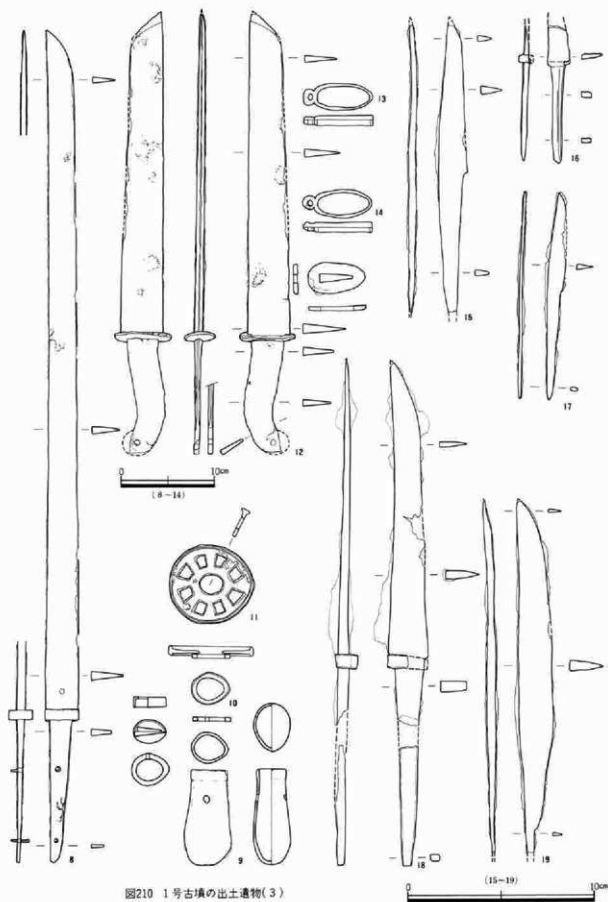


図210 1号古墳の出土遺物(3)

3. 古 墳

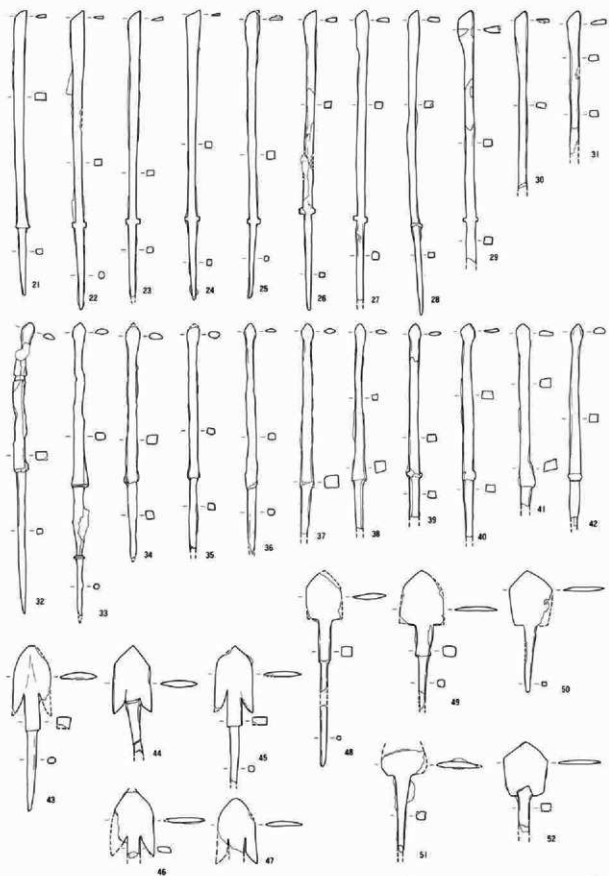


図211 I号古墳の出土遺物(4)

IV 古墳時代の遺構と遺物

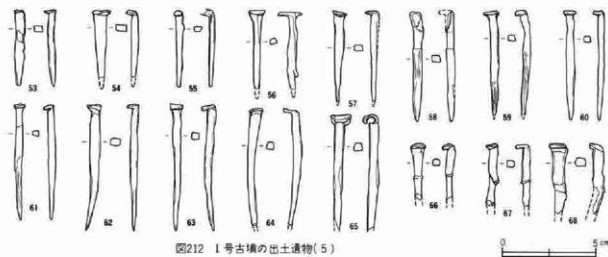


図212 1号古墳の出土遺物(5)

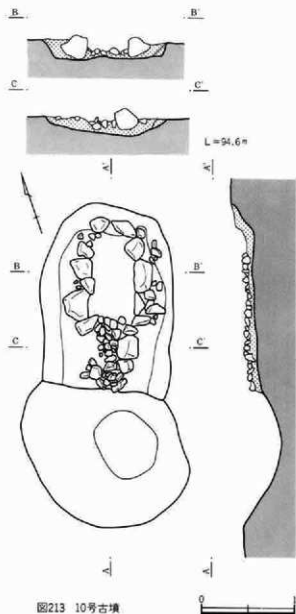


図213 10号古墳

10号古墳

位置 L-12グリッドに位置し、6号古墳の東南に位置する。

墳丘と外部施設 石室の開口前に他の古墳の前庭に相当する掘り込みがある。これの規模は縦1.45m、横幅1.78m、深さ0.38mである。

主体部の構造 両袖型の横穴式石室の形状を呈する。0.2~0.3m幅の輝石安山岩の割れ石を立石させている。石室は長軸0.95m、奥壁の幅0.37mである。玄室は左側壁の3石、右側壁の4石、奥壁の2石からなる。

石室の構築状況 石室を構築するにあたり、長方形の竪穴を掘削している。規模は縦1.94m、横幅1.28~1.36m、深さ0.2~0.24mを測った。

4. 遺構外の出土遺物

以上報告した住居や古墳などの遺構からの出土遺物の他に、多くの遺物が出土していた。それらは、ほとんど遺構確認時に検出されたもので、H・I-33~35グリッドの遺構密集区のものが多い。本書では、図示可能なものだけを掲載した。

4~11(図214)は土師器である。11は刷毛目整形を残した壺形土器でやや古い様相を示すが、4~10の杯形土器とともに、本遺跡検出の住居や古墳と同時期の遺物と考えられる。

1~3(図214)、12~21(図215)は埴輪片であり、すべて円筒埴輪とみられる。1の裏面の横ハケの他は、縦および斜め方向の刷毛目整形を行っている。図示

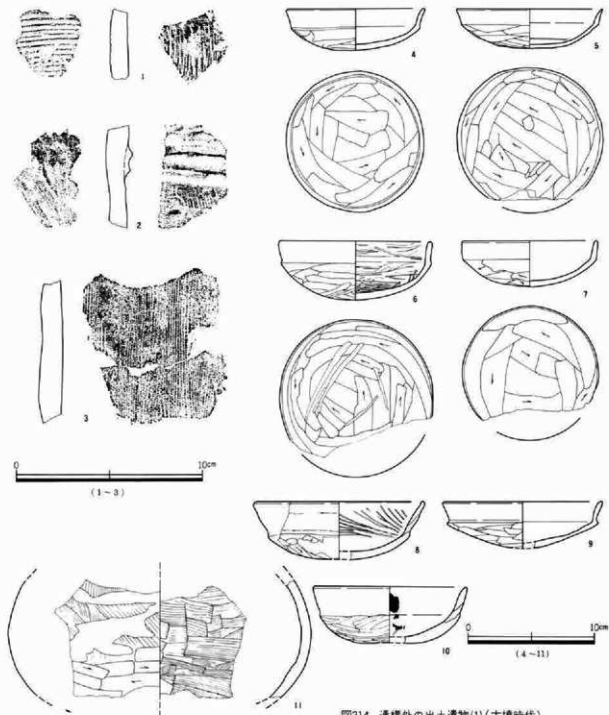


図214 遺構外の出土遺物(1)(古墳時代)

IV 古墳時代の遺構と遺物

したものは、遺構外で検出した埴輪片のほとんどで、他に1号住居の埋没土中に破片が少量含まれていただけである。

本遺跡で調査した古墳は、墳丘が失なわれており、にわかに判断し難いが、周構に埴輪が落ちこんでいないことから考えれば、埴輪配列が施設されていないと判断できよう。古墳の隔年観からしても、本遺跡の古墳には、埴輪配列は一般的には考えられない。したがって、これらの埴輪片は今回調査した遺構に

伴うものではないと判断した。

本遺跡の南方には古墳群が形成されており、本遺跡の古墳より古い時期の古墳も分布している。しかし、古墳時代以降の畑地開発に伴って墳丘を失っているものが多い。このような人為な開発によって、土砂の移動は充分考えられ、本遺跡内にも埴輪片を検出したものとする 것도できよう。

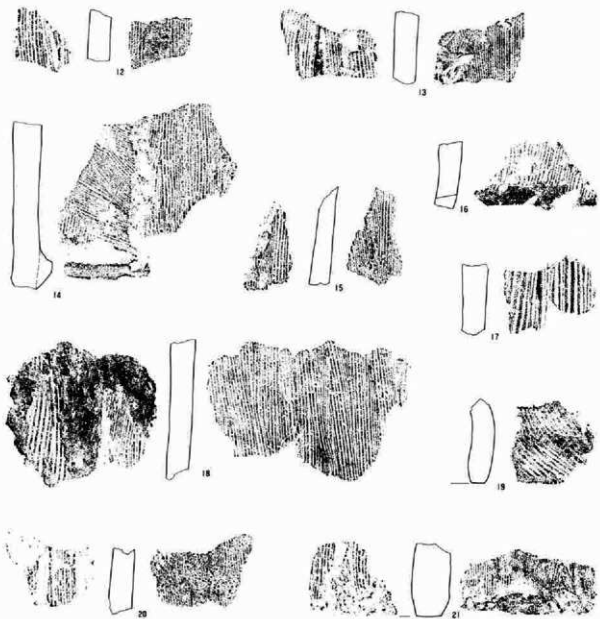


図215 遺構外の出土遺物(2)(古墳時代)



V その他の遺構と遺物

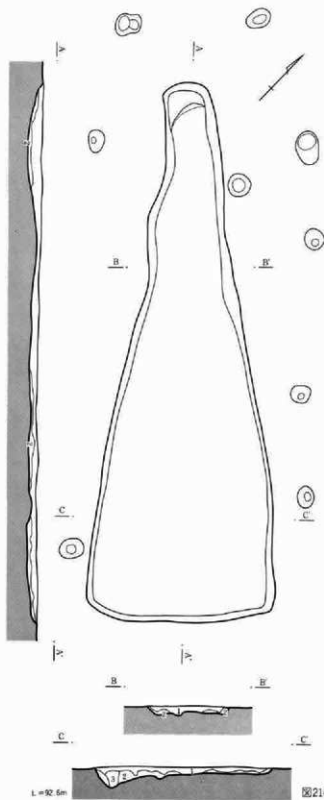


図216 60号土塚

1. 土 塚

発掘区南半に集中する古墳や住居から離れて台地上部に土塚6基が検出された。いずれも古墳時代以降の土塚と考えられ、この台地上に人々が居住しなくなってから後、居住以外の何らかの活動の結果つくられた施設と考えられる。

3・4・56・60号土塚は、細長い二等辺三角形を呈し、掘り込みは確認面から浅く10~30cmである。いずれも多量の炭化物・炭化材を埋没土に混入すること、三角形の先端方向が北西であることを共通の特徴とする。形面的には床面に凹凸があり、先端部がやや浅く底辺部がやや深くなっている傾向がある。56号土塚には周辺に小ピットが並んでおり、付属する覆屋の想定も可能である。ピットの深さは15~20cmである。3号土塚の平面形確認時には、図217のようなロクロ使用酸化焙焼成の小形杯形土器が埋没土上層部で出土している。

1号土塚は円形の土塚であり、埋没土の大部分は浅間Bテフラである。発掘区北側の浅い埋積谷で検出された。

2号土塚は3×2mの隅丸長方形の土塚である。上層はFPを含む黒色土で埋まっている。

- 1層 黒色土。炭化物を多量に含む。黒褐色土粒を少量混じる。
- 2層 炭化物とソフトローム粒の混土層。
- 3層 暗褐色土とソフトローム粒の混土層。

V その他の遺構と遺物

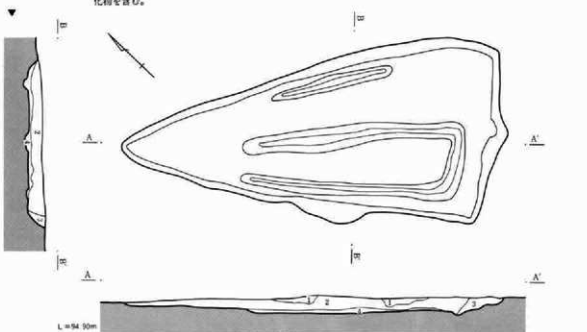
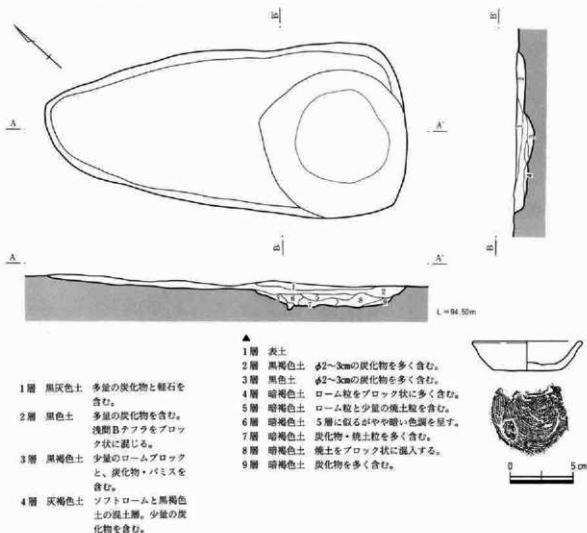
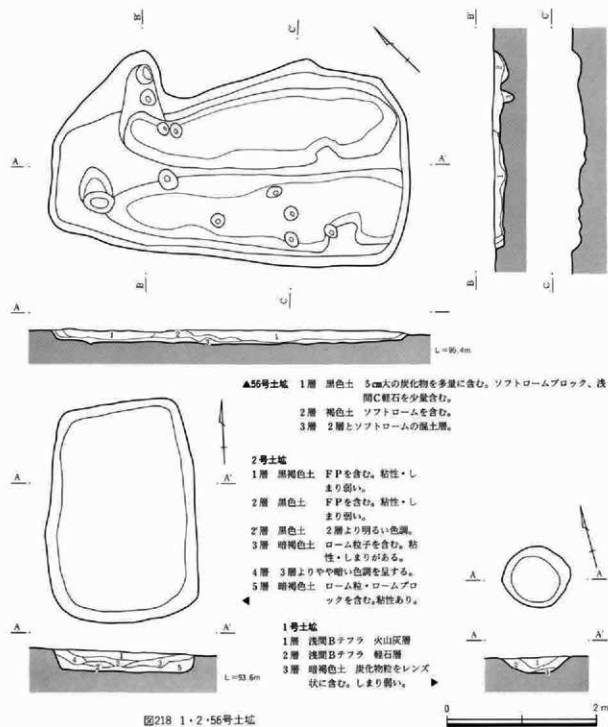


図217 3号土坑(上)と4号土坑



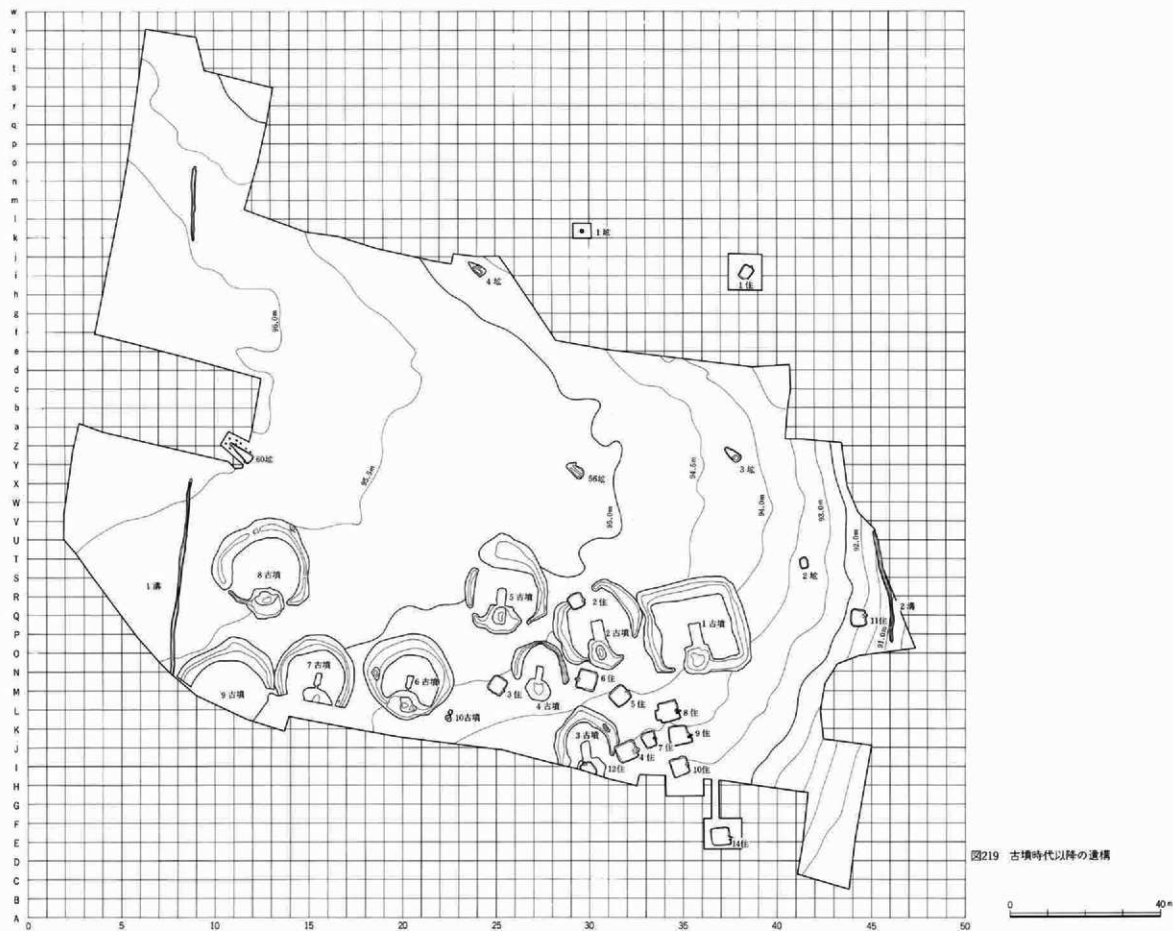


2. 溝

溝は東へ突き出した台地の東西を面するように、南北方向の溝2条が検出された。

1号溝は、グリッド8および9ラインに沿うような位置にある。幅は70~100cmである。確認面からの

深さが7~10cmと浅くeラインからkラインおよびoライン以北は、途切れて確認できなかった。用地買収が遅れていた宅地部分(Y~eライン)は、遺構確認をハードルーム上面で行なったので、1号溝を未確認である。2号溝は、台地東縁をまわるように検出された。断面形が特徴的で山側は緩やかに立ち



0 40m

上がり、谷側はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は黒褐色土が中心であるが、特に谷側がしまりのない土で埋まっている。

なお、発掘区北部の浅埋積谷の北岸で、トレンチ調査の際にトレンチに沿うような東西走向の溝を確認している。幅40～70cmほどで、しまりのないやや砂質の黒褐色土で埋まっているが、1、2号溝との関連は不明である。

3. 遺構外の出土遺物

図221に示した遺物が、遺構に伴わない形で出土している。

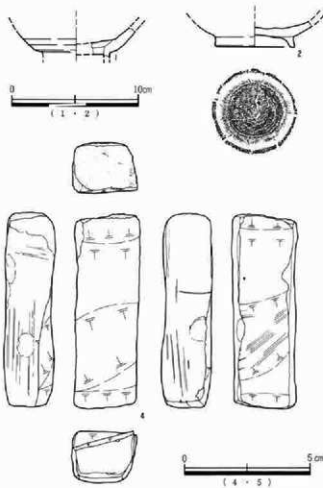
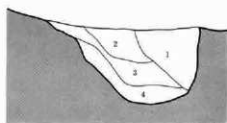


図221 遺構外の出土遺物

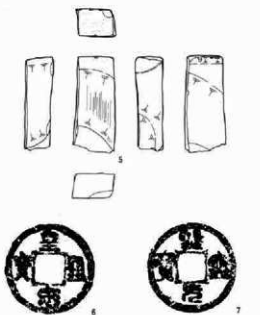
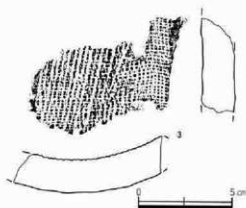
2. 溝 3. 遺構外の出土遺物



- 1層 黒褐色土 少量の褐色土ブロックを混入。しまりのない。
- 2層 黒色土 やや粘性があり、少量の褐色土をきむ。
- 3層 黒色土 2層に類するが、より黒色である。
- 4層 黒褐色土 ソフトロームと黒色土の混土層。しまりのない。



図220 2号溝埋土断面



VI 科学的分析

1. テフラの同定

群馬大学
新井 房夫

R-36グリッド発掘調査坑の壁で、図1に示したように11資料を採集した。

1. 重鉱物組成

①から⑪まではほぼ類似して斜方輝石>単斜輝

石>磁鉄鉱の組成を示し、ごく少量の緑色角閃石を伴う。⑦より下位では緑色角閃石が急増し、⑩・⑪では角閃石>斜方輝石>単斜輝石>磁鉄鉱の組合わせとなる。⑥より上位は上部ローム層の、⑦以下では中部ローム層(暗色帯)の特徴と一致する。

2. 上部ローム層中の示標層との対比

層位、鉱物組成、斜方輝石、火山ガラスの形態および屈折率などの特徴を総合し、上部ローム層中の示標テフラ—板鼻黄色軽石(YP)；白糸軽石(SP)

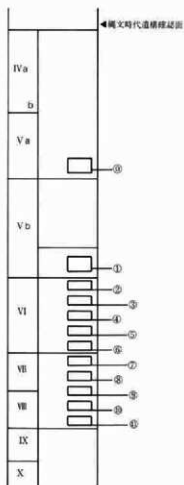


図1 テフラ分析資料採取層位

表1 テフラ分析結果 830907牛状遺跡R-36グリッド

試料	純度	重 鉱 物 組 成		石 英
		相 対 量 比	絶対量	
830907-①	c	hy>au≒mt (ho 1)	y	-
〃 - ①	c	hy>au>mt (ho+)	y	-
〃 - ②	c	hy>au>mt	y	+
〃 - ③	c	hy>au>mt(ho)	y	+
〃 - ④	c	〃	y	++
〃 - ⑤	c	〃	y	+
〃 - ⑥	c	hy>au>ho>mt	m	++
〃 - ⑦	c	hy>ho>au>mt	y	++
〃 - ⑧	c	〃	y	+
〃 - ⑨	c	ha>hy>au≒mt	y	+
〃 - ⑩	c	〃	y	+
〃 - ⑪	c	〃	y	+

1. テフラの同定

板鼻褐色軽石(BP)；始良Tn火山灰(AT)などの対比を検討した。

サンプル⑥の対比 斜方輝石の最大屈折率1.702~1.707は白糸軽石(SP)の傾向に類似する。層位や緑色角閃石を少量伴うことなども合わせて、ほぼ白糸軽石(SP)の層準に対比が可能である。

サンプル①の対比 斜方輝石の最大屈折率はサンプル⑥に比べてやや低め(1.700~1.705)で、板鼻褐色軽石(BP)の特性に一致する。層位とも合わせて、いわゆるBPグループの中部層に対比できる。

始良Tn火山灰(AT)の降下層準 5cm厚さずつ系統的にサンプリングした②~⑩について、火山ガラスの(相対的な)含量と、形態的特徴および屈折率を

調べた。②から⑦にいたるすべてにAT火山灰特有の清澄なバブル・ウオール型の火山ガラス(一般に平均粒径0.5mm)を含んでいるが、含量は系統的に変化し、⑥の層準に明確なピークが認められる。⑥の下部では急減し、⑧以下の層準ではほとんど含まれていない。上記火山ガラスは形態、屈折率(1.499~1.501)ともAT火山灰の特性と完全に一致する。したがって、すべてATに由来する火山ガラスと考えられ、AT火山灰の降下層準(2.1~2.2万年前)は、ほぼ⑥の層準に当ると認定できる。

5		6		7				8	9	10	
火山ガラス		屈折率				粒径(cm)	色	記 事			
タイプ	絶対量	対象物(品数)	範囲	主範囲	最頻値						
-	-	hy(50)	1.702~1.707	-	-	砂質ローム	br	白色細粒スポット(軽石)に富む。白糸軽石(As-SP)層準。			
-	-	hy(40)	1.700~1.705	-	-	砂質ローム ($\phi \times 0.3$)	#	板鼻褐色軽石(As-BP)の特性一致。			
cl bw	+	gl	1.499~1.501	-	-	0.05	cl	〔以下、厚さ5cmづつの連続サンプルについてのAT層準の検討〕			
cl bw	++	gl	1.499~1.501	-	-	0.05	cl				
cl bw	++	gl	1.499~1.501	-	-	0.05	cl				
cl bw	++	gl	1.499~1.501	-	-	0.05	cl				
cl bw	+++	gl	1.499~1.501	-	1500	0.05	cl	ATガラス最多層準。ほぼAT層準(2.1~2.2万y.B.P.)とみなすことができる。			
cl bw	+	gl	1.499~1.501	-	-	0.03	cl				
-	-										

2. 牛伏1号墳の人骨と骨

国立科学博物館人類研究部

佐倉 朝

1. 出土および保存の状態

牛伏第1号墳からは少量の人骨と約38個の人歯が検出された。保存状態は不良で、とくに骨は頭蓋の破片のほか微小な骨片と骨粉を残すのみであった。歯は歯冠の部分のみ残存し、歯根は消失し、大部分の歯では歯冠内部の象牙質も消失してエナメル冠だけが残されていた。エナメル冠の保存は比較的良好で、中には破折して細片になっていたものもあったが、大部分は歯冠表面の形態観察が可能であった。これらの遺残は清掃後アクリル樹脂溶液(パラロイド, 15%)で補強された。

歯および骨は出土物の番号が付けられ、検出位置を図面に記録された。番号はNo1~28、105、107、115、116、129、130の34個あって、そのうちNo1~28、115、116、129、130は歯、No107は歯および微小骨片、No105は頭蓋片であった。歯については、No18が3個、No127が2個、No129が3個の歯を含むほかは、それぞれ一つの番号につき1個であった。図面によると、これらの検出位置は、大部分が石室の奥半分の表面付近であるが、頭蓋片と数個の歯は石室前半の右寄りからも検出されている。歯のうちには数個が接近した位置にあるものもあったが、多くは散在しており、その位置のみから所属個体である被葬者の異同を確定することは困難であった。

2. 個体数と個体の異同

残存歯の歯種を鑑別して見ると、同一の歯種に複数の歯が認められるものがある。例えば下右第1大臼歯は少なくとも3個ある。したがってこれらの歯は3個体以上に由来することは明らかである。またかなり若年の個体が2体存在することは、2個の下右第2乳臼歯と1個の上右第2乳臼歯が存在することから知られる。このうち上右第2乳臼歯(No129)と1個の下右第2乳臼歯(No129)は他の歯と異なり歯冠

内部に象牙質が残存するが、その形状からこれらの歯は生前に歯根が生理的にほぼ溶解消失して脱落寸前の状態にあったと推定される。したがって所属個体の年齢は10歳前後と考えられる。もう1個の下右第2乳臼歯(No130)は、咬耗がやや軽度であることから、所属個体の年齢はそれより若いと考えられる。

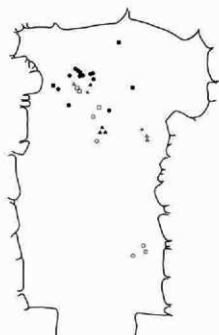
上に述べたことに加え、歯の大きさと形態の特徴および咬耗の程度などを総合的に考慮し、可能な限り歯の個体的な異同を鑑別して見ると、やや不確実な点もあるが概ね次のような6個体またはそれ以上に分けられる。

第1個体：上右第2小臼歯(No3)、下右第1・第2切歯および犬歯破片(No18)、第2・第3大臼歯(No19・6)、下左第1・第2大臼歯(No107)を含む。歯は小さく、女性の可能性が大きい。咬耗は強く、切歯、小臼歯、第1大臼歯ではブローカの2度に達しており、年齢は熟年と考えられる。

第2個体：上右第1大臼歯(No23)、上左犬歯(No20)、第1・第2小臼歯(No4・5)を含む。歯はやや小さく、女性の可能性がやや大きい。咬耗は犬歯の先端に小さいエナメルの孔がある他はブローカの1度に留まるが、年齢は壮年と考えられる。

第3個体：上右第2大臼歯(No2)、上左犬歯破片(No25)、第2大臼歯(No1)、下右第1・第2大臼歯を含む。中等の大きさで性別は不明である。咬耗は軽度で、年齢は若い壮年と考えられる。なお下右第1大臼歯の頬側面にはプロトスタイリッドが存在する。

第4個体：残存歯の最も多い個体で、前述の上下の右第2乳臼歯(No129・130)のほか14個の永久歯を含む。それらは上右第2切歯(No129)、第1大臼歯(No28、遠心部が破損)、上犬歯(No116)、第1小臼歯(No115)、第2大臼歯(No24)、下右第1切歯(No25)、犬歯(No16)、第1小歯(No11)、第1・第2大臼歯(No26・13)、下左第2小臼歯(No12)、第1・第2・第3大臼歯(No17, 10, 27)である。咬耗は乳臼歯と切歯を除けばごく軽度で、とくに第2小臼歯、第2大臼歯、第3大臼歯では全く認められない。この個体の



- 第4個体 10歳前後男性 ■ その他
○ 第1個体 成年女性 □ その他
▲ 第2個体 成年女性 × 第5個体 5歳前後男性
△ 第3個体 若い成年性別不明

図1 1号古墳石室の人骨・歯

年齢は前述のように10歳前後と推定されるので、これらの咬耗のない歯はまだ萌出していなかったと考えられ、とくに第3大臼歯は歯冠さえも未完成であったと見られる。歯は概して大きく、性別は男性である可能性が大きい。なお、下右第2乳歯にはプロトスタイリッドの痕跡が、上右第2乳歯および第1大臼歯にはカラベリー結節の痕跡が認められる。

第5個体：下右第2乳臼歯(No.129)、および第1大臼歯(No.15)を含む。これらの歯はやや大きく、咬合面に細かい溝が多いという共通点がある。第1大臼歯に咬耗がなく、未萌出であった可能性もある。年齢は5歳前後、性別は男性である可能性が大きいと考えられる。

その他：所属個体の明らかでない歯は次のとおりである。上大臼歯破片(No.9)、下右第1大臼歯破片(No.22)、下右第2大臼歯(No.14)の3個は同一個体に属する可能性があり、第2大臼歯にも咬耗があるの

で、成年に近い個体のものである。また上右および上左第2大臼歯各1個(No.21・7)があり、ともに軽度の咬耗がある。その他に微小な破片(No.4・22)が認められるが、歯種は不明である。

3. 人骨片

残存する人骨はごく少量で、数個の頭蓋破片(No.105)と微小な四肢骨片(No.107)を認めるに過ぎない。頭蓋片は頭頂骨を主とする長径5cm以下の破片で、一部に縫合線をもつが、内面は剝離している。縫合線の最長の部分は約5cmで、矢状縫合の後部に相当すると考えられるが、閉鎖の徴候はない。歯による個別別のうちのどれに所属するかは不明である。

3. 古墳出土須恵器の胎土分析

群馬県工業試験場花岡敏一
群馬県埋蔵文化財調査事業団 小島敦子

はじめに

今回の分析は後期古墳である牛伏1・5・6号墳から出土した須恵器を分析対象とした。肉眼観察の結果、試料5点はそれぞれ共通した胎土傾向にあり白色微鉱物粒を含み、黒色微鉱物粒がわずかな点からすれば、太田・金山窯跡群の製作が想定される。今回の分析依頼目的は、5試料が既分析された太田・金山窯跡群領域に入るか否か、あるいは近似の胎土の笠懸・吉井・藤岡窯跡群など、他の窯跡群で焼成されたかどうかを明らかにすることにある。

1. 分析試料について

試料は1墳・2墳・5墳出土の須恵器を任意抽出した。胎土の肉眼観察は下記のとおりである。

試料No.1(299)は7世紀中頃の製作と考えられる須恵器・長頸甕である。胎土は角ばった白色微鉱物粒を含み、黒色微鉱物粒をわずかに含む。素地鉱物粒はき目細かく、幾分雲母状の素地成し

VI 科学的分析

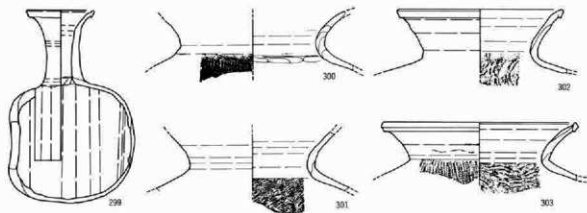


図1 分析資料実測図

となっている。焼成は硬質で、還元気味の灰色を呈す。雲母状の素地状態と白色微鉱物粒が特徴的に入る点から製作地域を想定すれば、太田・金山古窯跡群の可能性が高く、このほか笠懸・吉井・藤岡窯跡群などが考えられる。

試料No.2 (300) は7世紀の製作と考えられる須恵器・甕である。胎土は白色微鉱物粒を含み、黒色微鉱物粒をわずかに含む。素地鉱物粒はき目細かいが焼成がやや甘いためか全体に粗質に感じる。胎土傾向は概ね試料No.1と共通する。焼成はやや軟質で還元気味の灰色を呈す。製作地域を想定すれば、胎土傾向から試料No.1と同様と考えられる。

試料No.3 (301) は7世紀の製作と考えられる須恵器・甕である。胎土は白色微鉱物粒を多く含み、黒色微鉱物粒をほとんど含まない。素地鉱物粒はき目細かいが、焼成温度が上がっているためか幾分発泡している。このため耐火性が高いとは思えない。焼成は焼締りがあるもの高は軽い。一部に自然釉が及ぶ。製作地は胎土傾向からして試料No.1・2と共通し、ほぼ同様と考えられる。

試料No.4 (302) は7世紀の製作と考えられる須恵器・甕である。胎土は白色微鉱物粒を多く含み、黒色微鉱物粒をわずかに含む。素地鉱物粒はき目細かいが、焼成がやや甘いためか全体に粗質に感じる。焼成は軟質で還元気味の白色を呈す。

製作地域を想定すれば、胎土傾向から前例とほぼ同様と考えられる。

試料No.5 (303) は7世紀の製作と考えられる須恵器・甕である。胎土は白色微鉱物粒を多く含み、黒色微鉱物粒をわずかに含む。素地鉱物粒はき目細かいが、焼成温度が上がっているためか幾分、微気泡が生じている。このため耐度が高いとは思えない。焼成は硬く、灰色を呈し、外面に幾分煤が及ぶ。製作地域は胎土傾向から、前例とほぼ同様と考えられる。

2. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各資料を10 μ m以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電機製KGF-4型

X線管球：銀対陰極 50KV, 20mA

分光結晶：Fe, Sr, RbにはLIF(2d=4.028 \AA)

Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT(2d=8.808 \AA)

AgにはADP(2d=10.648 \AA)

検出器：LIFを使用したとき、S・C

EDDT, ADPを使用したとき、P・C

測定数：1

計数法：Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートにより、Si, Al, Mgは定時計数法による。なおチャートは4 r/min とした。

3. 古墳出土須恵器の胎土分析

波高分析器：積分方式

測定線：FeK β , CaK α , KK β , TiK α , SiK α ,AlK α , Mg, K α , SrK α , RbK α の各1次線を使用した。X線照射面積：20mm ϕ

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器5点(分析通番試料295, 310, 336, 345, 360, 380)を化学分析し、標準試料とした。

3. 分析結果

分析値に関しては表1、図2に示したとおりであるが、月夜野・中之条窯跡群に関しては本遺跡と距離差が著しいため比較から除外する。

分析の結果、301~303の4点はCa/Kが1.7前後、Sr/Rbが2.3前後にまとまる傾向である。この傾向は従来から分析を続けてきた県内窯跡群の分析値から比べればCa/K値が高く、特徴的である。

試料は肉眼観察の結果、5点ともに類似し、距離的に太田・金山窯跡群が、白色鉱物を特徴的に含む

表1 下触牛伏遺跡試料 胎土分析値一覧

成分 試料	SiO ₂ %	Al ₂ O ₃ %	Fe ₂ O ₃ %	TiO ₂ %	CaO%	MgO%	K ₂ O%	Ca/K	Sr/Rb
299	62.2	23.8	5.80	1.24	2.12	0.73	1.18	2.35	3.24
300	62.7	23.6	7.85	1.24	1.34	0.49	1.21	1.45	2.09
301	64.2	21.4	7.30	1.22	1.67	0.65	1.35	1.63	2.52
302	64.7	24.1	5.88	1.20	1.32	0.39	1.22	1.42	2.44
303	63.7	21.6	5.10	1.02	1.23	0.83	0.92	1.77	2.14

表2 太田・金山窯跡群試料 胎土分析値一覧

成分 試料	SiO ₂ %	Al ₂ O ₃ %	Fe ₂ O ₃ %	TiO ₂ %	CaO%	MgO%	K ₂ O%	Ca/K	Sr/Rb
太田・金山	69.7	18.4	3.93	0.70	0.26	1.00	2.61	0.14	1.30
	66.5	21.0	5.05	0.89	0.84	0.77	1.36	0.85	1.77
	67.1	20.1	5.66	1.09	0.90	2.23	1.94	0.65	1.59
	69.3	19.2	3.38	0.70	0.40	0.91	2.34	0.24	1.41
	64.3	21.7	7.64	1.09	0.74	2.75	1.91	0.54	1.51
	67.0	18.5	6.91	0.96	0.85	2.03	2.19	0.54	1.10
	68.0	18.9	6.51	0.87	0.53	0.94	1.42	0.51	1.09
	64.6	22.5	7.45	0.96	1.02	1.01	1.48	0.79	2.31
	62.7	24.4	7.73	0.93	0.97	0.62	1.34	0.83	3.17

表3 吉井・藤岡窯跡群試料 胎土分析値一覧

成分 試料	SiO ₂ %	Al ₂ O ₃ %	Fe ₂ O ₃ %	TiO ₂ %	CaO%	MgO%	K ₂ O%	Ca/K	Sr/Rb
	71.3	17.0	4.02	0.95	1.39	0.82	1.55	1.19	2.65
	57.5	21.3	7.45	1.16	2.19	0.60	0.78	3.68	3.28
	61.8	18.0	7.80	1.17	1.51	2.50	1.55	1.28	1.71
	63.7	23.8	6.70	1.21	0.66	0.73	1.35	0.65	2.39
	60.3	18.0	6.00	1.20	1.73	3.23	1.62	1.41	1.85
	71.3	15.7	4.25	0.68	1.35	0.70	1.47	1.25	2.40
	65.7	17.2	7.50	1.15	1.76	1.67	1.71	1.35	2.23
	67.3	17.7	3.00	0.74	0.53	0.83	2.13	0.33	1.40
	69.8	20.2	3.30	0.87	0.36	0.49	1.54	0.30	3.16
	65.7	22.7	6.85	1.28	0.87	0.68	0.94	1.07	2.15
	64.1	18.3	11.35	1.31	0.85	0.68	1.13	0.88	1.92

VI 科学的分析

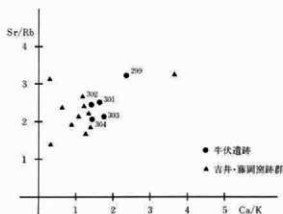


図2 牛伏遺跡および吉井窯跡群資料

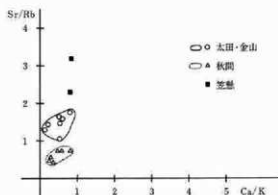


図3 太田金山・秋間・笠懸窯跡群資料

点から笠懸・吉井・藤岡窯跡群などの可能性が指摘された。各窯跡群との比較次に行う。

- (1) 太田・金山窯跡群は表2、図3に示したとおり分析値、領域ともに差があり、太田・金山窯跡群の可能性は低い。
- (2) 笠懸窯跡群の既分析試料数は少ないが、分析値は太田・金山窯跡群の値に近い。
- (3) 吉井・藤岡窯跡群の既分析値は表3、図3に示したとおり Ca/K 値の高い試料が含まれており、今回分析の5点はその領域内に入るか近接するため、吉井・藤岡窯跡群の可能性がある。

以上、既分析値を前提とすれば今回分析の5点は吉井・藤岡窯跡群の可能性があるが、同窯跡群は値にばらつきがあり、今後試料蓄積を計らなければならないであろう。

注1 花岡純一「土器の胎土分析」『塚廻り古墳群』（群馬県教育委員会）1980に詳しい

注2 牛伏遺跡資料と同時に分析した例が12点あり、それを領域設定の基本とした。

4. 花粉分析

バリノサーヴェイ

4-1 試料

分析試料は、下触牛伏遺跡のA・B・C・Dの各地点より採取した65点の内の40点である。採取地点岩質については、図1、表1を参照。

4-2 化石の抽出

花粉・孢子化石の抽出は、試料15-20g(湿量)を秤量し、48%HF一重液分離(ZnBr₂-比重2.15)一アセトリシス処理—10%KOHの順で物理・化学処理を行った。残査をグリセリンゼリーで封入し、検鏡に供した。

4-3 分析結果

計数においては、プレバート全域を走査し、その間に出現したすべての分類群と個数を表2に示した。表中、複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。

大半の資料は、50個体以下と著しく少ない。全体で100個体を越えたのは、A-1・7・9、B-1・2の5点のみである。A-9では、キク亜科が多い。A-7では、キク亜科が多く、次いでキンポウゲ科コナラ亜属が多い。A-3では、コナラ亜属・キク亜科・ヨモギ属が比較的多い。D-2では、ヨモギ属が大半を占める。D-1では、ヨモギ・マツ・スギ各属が多い。他の試料(Dを除く)においては、少ない中では樹木花粉の量が多く、大半をスギ属が占める。しかし、これらスギ属の大半は、極めて保存が良く、ローム層中の花粉とは考えにくい。試料採取においては、堆積層断面を15cm削り採取面を出し、さらに個々の試料を採取する際に2cmほど露出面を削るなどの注意を払ったが、時期が3月で風が強かったことなどから、採取時に現生花粉が混入した可能性が高い。花粉含有量が著しく低い試料においては、わずかな汚染でも過大評価されるものと考え

られる。

D地点は、ソフトローム層より上部を行ったが、No.1・2を除いて花粉は少ない。No.1については、マツ・スギ各属により特徴づけられる。北関東におけるマツ属の増加は、浅間B降下スロリア軽石層降下後に認められることから、かなり新しい堆積物である。

ローム層及び風化土壌中の花粉については、すでに辻(1984)が指摘しているように、花粉は酸化条件下化学的D.Hが低い環境下では多くが分解してしまう。ローム層等においては、大半の花粉が消失し、スポロポレン含有率の高いものが選択的に残っているのみである(分解が進むとすべて消失する)。従ってローム及び風化土壌においては、たとえ花粉を多く検出したとしても解析することは困難である。

表1 下触牛伏遺跡花粉分析試料

地点	試料番号	岩質	1)	地点	試料番号	岩質	1)
A	1	暗褐色ローム	7	B	7	暗褐色ローム	
	3	褐色ローム	9		9	褐色ローム	
	5	黄褐色ローム	11	地	11	褐色ローム	
	7	褐色ローム	13	点	13	褐色ローム	
	9	褐色ローム	1	C	1	褐色ローム	
	11	褐色ローム	2		2	褐色ローム	
	13	褐色ローム	3		3	褐色ローム	
	15	褐色ローム	4		4	褐色ローム	
	17	褐色ローム	5	地	5	褐色ローム	
	19	に深い黄褐色ローム	6	点	6	褐色土	
B	21	褐色ローム	1	D	1	褐色土	
	23	褐色ローム	2		2	褐色土	
	25	褐色ローム	3		3	褐色土	
	27	褐色ローム	4		4	褐色土	
	29	褐色ローム	5		5	褐色土	
	31	褐色ローム	6		6	褐色土	
	33	褐色ローム	7		7	褐色土	
	35	褐色ローム	8		8	褐色土	
	37	褐色ローム	9		9	褐色土	
	39	褐色ローム	10		10	褐色土	

- 1) 色調は、新原標準土色帖(小山・竹原、1967)による
- 2) 文脈

辻一朗(1983) 下末吉期以降の植生遷変と気候変化
アーバンタボタ、21、P.44~47

辻一朗(1984) 植物学
季刊植物学、7、P.90~94

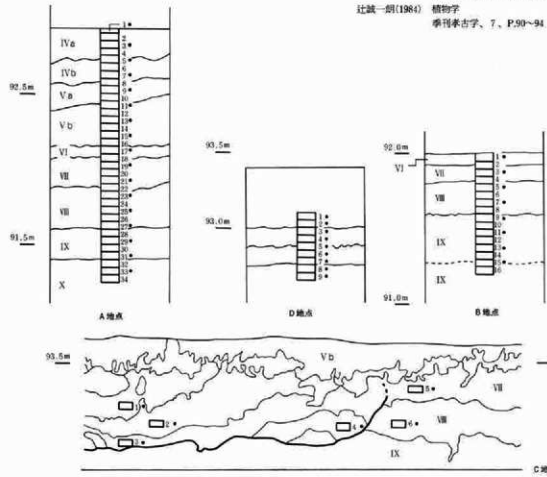


図1 牛伏遺跡 花粉分析試料採取地点柱状図

表2 下触牛伏遺跡花粉分析値一覧

試料採取地点 及び 試料番号	A地点										B地点										C地点										D地点																																																						
	No.1	No.3	No.5	No.7	No.9	No.11	No.13	No.15	No.17	No.19	No.21	No.23	No.25	No.27	No.29	No.31	No.33	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9																																															
花粉・胞子化石名																																																																																					
Taxus																																																																																					
Pinus subgen. Diploxylon	1																																																																																				
Pinus																																																																																					
Cyathomeria	1	4	1	5	14	5	4	6	14	7	25	30	4	14	1	1	2	14	33	33	12	2	4	2	36	5	16	20	1	35	4	3																																																					
T.-C.																																																																																					
AP-1	2	4	1	5	14	5	4	6	15	8	25	30	4	15	1	1	2	14	33	33	14	2	4	2	38	5	17	21	0	2	139	9	4	0	1	0	0	2	0																																														
Juglans																																																																																					
Carpinus-Ostrya																																																																																					
Alnus																																																																																					
Fagus																																																																																					
Quercus subgen. Lepidobalanus	2	49	7	37	9	2	9											2	3											1	1	15	19																																																				
Quercus subgen. Cyclobalanopsis																																																																																					
Ulmus-Zelkova																																																																																					
Celtis-Aphananthe																																																																																					
Liquidambar																																																																																					
Acer																																																																																					
Asacibus																																																																																					
Vitis																																																																																					
Canella																																																																																					
Araliaceae																																																																																					
Fraxinus																																																																																					
AP-2	3	56	7	38	9	2	10	2	5	2	3	1	0	2	0	0	0	3	6	0	2	0	0	0	1	0	4	3	0	0	15	0	0	0	1	0	1	15	21																																														
AP	5	60	8	43	23	7	14	8	20	10	29	31	4	17	1	1	2	17	33	33	16	2	4	2	37	5	21	24	0	2	154	9	4	0	2	0	1	17	21																																														
Gramineae	6	23	9	7											1	3											3	3	3	1	1	1	5	6	16																																																		
Polygonum sect. Persicaria																																																																																					
Chenopodiaceae																																																																																					
Thalictrum	5	1	1	1	1	1																																2	1											1	1																																		
Ranunculaceae	1	8	1	33	2																																2	1											1	1											2	6	1																						
Macleaya																																																																																					
Vicia																																																																																					
Leguminosae	6	1	5	3											1	1											1	1																																																									
Geranium																																																																																					
Euphorbia	7	1	7	2	1																																1	1											1	1											1	1																							
Holcus																																																																																					
Umbelliferae	5	1	7	3	1																																1	1											1	1											1	1																							
Labiatae																																																																																					
Plantago																																																																																					
Patrinia																																																																																					
Asteraceae	3	33	8	7	1	2											1	1											115	179	40	1	4	2	6	9	12																																																
Caraboidae	4	40	5	115	99	8	6											1	2											1	3	1	1	2											2	5	6																																						
Cichorioideae																																																																																					
NAP	14	132	10	200	150	13	10	0	3	0	3	2	0	3	0	0	0	3	2	4	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	152	191	44	3	8	9	16	31	45																																														
Tricolpate pollen																																																																																					
Tricolporate pollen	1	12	1	2	1																																1	2	1											1	1											7	2											1	2										
FP	2	12	1	2	1	0	0	0	0	1	0	2	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	2	0	0	0	0	0	1	2																																														
Lycopodium																																																																																					
Osmunda																																																																																					
Monolete spore	1	1	1	1	2											1	1											2	0											1	1											2	2																																
Trilete spore																																																																																					
PS	1	1	1	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																																													
Total Number	22	205	20	246	176	29	25	14	23	11	32	35	5	20	1	1	2	20	36	38	17	2	4	2	38	6	21	25	0	2	321	203	48	3	11	10	17	51	70																																														
Pseudoschizaea	3	4											1	1	11	8	38	13											1	1											1	1																																											
AP-1 (%)																																																																																					
AP-2 (%)																																																																																					
NAP (%)																																																																																					
FP (%)																																																																																					
PS (%)																																																																																					

Ⅶ 成果と問題点

1. 古墳時代の住居について

本遺跡では13軒の古墳時代の住居址が検出された。これらは、北側埋積谷上に検出された1号住居の他は前述したように発掘区南東隅に立地し、一部は後続する古墳と重複しているものもある。居住域から墓域への変化については、次節に述べる。

検出された住居群は、すべて同様の形、大きさではなく、付属施設なども含めて、いくつかの形態に分けることができる。まず、大きくみると正方形のものと、縦長方形のものに分けられる。横長方形のものは検出されていない。縦長方形の住居は、1棟離れて立地する1号住居だけである。残りの12棟は正方形であり、これらは更に大きく3分できる。

4号住居・6号住居・8号住居・9号住居・14号住居は、一辺5m前後の大形正方形住居である。8号住居と9号住居は、それぞれ、カマド対辺中央とカマド右側に張り出し部をもっている。厳密には住居形態を正方形とするのはおかしいが、住居設計の基本は4号住居等と同じであり、付属施設として張り出し部を考慮しておきたい。これらの住居は、すべて壁周溝をもち、カマドを付設している。カマドの横には、4号住居が左側であるのを除き、他はカマド右側に貯蔵穴を持っている。柱穴は4本主柱がみな検出されている。特筆されるのは、14号住居を除く4棟の竪穴住居から床面ほぼ中央の床下に規模1mほどの隅丸方形あるいは、円形の床下土壇が設けられていることである。掘り方は深さ50～60cmあり、底面は第Ⅶ層暗色帯まで及んでいる。用途については、結論をみていない。3号住居・5号住居・10号住居は、一辺4.5m前後の中形の正方形住居である。カマド・貯蔵穴が基本的に付設されているのは前述の大形正方形住居と同様であるが、5号住居に貯蔵穴がないこと、3・5号住居に壁周溝がないこと、3・10号住居ともに柱穴を持たないことが相違点である。また、この住居の掘り方は20～30cmの掘り込み・凹凸であり、不定形である。2号住居・7号住居・11号住居・12号住居は一辺3.5～4.0mほどの小形の正方形住居である。すべてカマド・貯蔵穴があるが、壁周溝がめぐっているのは、11号住居だけである。これらの住居の掘り方も不定形であった。これら3形態の他に1号住居が小形の縦長方形住居である。

牛伏遺跡で検出された13棟の住居は形態差だけでなく、時間差もあると考えられる。それは住居群の分布が重複するものこそないが、かなり近接・隣接していること、出土する遺物の構成などから見てとることができる。出土土器をみると杯形土器は次のように変遷をとらえることができる。鬼高式土器のメルクマールである須恵器模倣杯は深く、その口縁も直立している段階から(1)、漸次浅くなり、口縁も小さく外反するよう変化する(II)。他に、小さくつまみあげるような口縁をもつ杯が出現し、最も新しい様相として、盤形の杯形土器の萌芽をみる。碗形土器も初めは小形のものだけであつ

★このような観点は、三原田遺跡、伊勢崎・東直道団地遺跡の分析で「住居型式学」として採られてきた。最近では1984「海岸遺跡」で型態別の変遷を整理し、居住家族のあり方を視座に加えた検討が始まっている。

★10住 11住がやや横長方形のようにみえるが意識的な横長を看取できないので、横長方形の住居とはしなかった。

★★上場での計画

Ⅶ 成果と問題点

土器の変遷	住居形態	正 方 形 ・ 住 居			縦長方形住居
		大 形	中 形	小 形	小 形

図1 牛伏遺跡の住居形態と土器の変遷

た(II)が、次第に長胴化するものがあられ(III)、大小の容量の分化が成立し、長胴甕は器壁を薄く底を小さく仕上げるようになる(III)。

これらの牛伏遺跡の住居出土土器の変遷(I・II・III)と、前述した住居の形態分類をまとめたのが図1である。

牛伏遺跡では、古墳時代の住居は、正方形が主流であり、なかで大形のもの、中形のもの、小形のものゝ形態として分類できる。大ききの三形態が時間の経過につれてどのような比率や空間配置をもって、鬼高期の居住域を構成しているかは、発掘区が限られており、一集落における居住形態のすべてを見せる資料でないので、今後の課題となろう。また、峯岸遺跡においては、正方形・縦長方形・横長方形というかたちの三形態が8世紀から9世紀前半にかけて共存することがわかっている。古墳時代の正方形住居を主体とする集落とどう関わるのかも課題である。

一時の盛況を極めた『集落論』も最近では停滞している。従来までの視点のいきづまりもないとは言え切れまい。岩崎卓也氏も、従来の研究史を整理しながら「新視覚」の必要性を説いている。筆者らは、数年来農耕集落の発展過程を、生産域と居住域の分布(遺跡群研究)から考えてきた。生産の場である水田や畠の様子も解明されつつある。今後は、単一の農耕集落遺跡の詳細な分析によって、居住形態のあり方を解明し、生産との関連の中で発展する農耕集落の実態化を計っていきたいと考えている。

(小島教子)

*岩崎卓也1983(文庫101)

**能登・石坂・小島・徳江1983(文庫96)

2. 検出された古墳をめぐって

赤城山南麓地域、下駄牛伏遺跡周辺では現在のところ伊勢崎市所在の華藏寺裏山古墳が前期の前方後円墳とされている。そして、5世紀になると全長125m、主体部に長持形石棺を有する御富士山古墳や帆立貝式の墳形をした丸塚山古墳の出現をみる。その他この地域では洪積台地上を中心に中期から後期にかけての古墳が集中して分布する傾向が顕著である。

本遺跡においても10基の古墳が検出され、近接地における調査例も知られている。本稿では本遺跡の古墳を分析し築造の時期を明らかにすることを第一の目的とした。次に検出された古墳と周辺の古墳との関係を周辺遺跡の推移を含めて分析したいと思う。筆者は本遺跡の周辺地域における農耕集落の発達過程を解明することを最終目的としており、今回の作業は墓域に関しての第一段階の資料を得るためのものである。

1) 各古墳の分析

10号墳を除く1～9号墳の9基を分析対象とした。分析にあたってはその焦点を周堀や前庭といった外部施設、石室の構築状態を中心とした内部施設、石室の掘り方の状態、出土遺物等にあててみた。

外部施設 周堀の形状についてみる。全体の形状を把握できなかった7・9号墳は対象から除く。6号墳が完周する他はいずれも周堀の一部が分離し開放の部分がある。3・4号墳は馬蹄形を呈している。2・5号墳は内縁が方形に近い。1号墳は方形である。

1・2・4号墳は近接して築造されており、各々の周堀に変形した部分があることが窺える。これは新たに古墳を築造する際、既に存在していた古墳と周堀どうしが重複することを避けた為に生じたものと考えられる。このことから平面的な位置関係、周堀の微細な形状を検討すると4号→2号→1号という築造順序を見い出すことができる。また、周堀の形状が円形から方形へと変化する過程が看取できる。さらには墓域に対する制約が存在したことも想起できる。

1～8号墳はいずれも石室開口部前にいわゆる前庭がある。石室開口部の左右には小竈による石積が延びていた。特に6号墳は石積が更に前庭の形状にそくしてハの字状に延びたものであった。前庭の形状差や石積の状態の差異等は特に遺出できなかった。

いずれの古墳にも埴輪の樹立はなされなかったと思われる。7号墳の周堀から埴輪片が少量出土しているがこの古墳に直接関連するものとは考えられないものである。

内部施設 主体部は両袖型の横穴式石室で玄室に胴張りが見られる。7号墳ではそれが顕著である。1・4号墳では設計に際してその基準単位に高麗尺が使用された可能性があるが、載石切組積の石室などとは異なりその確認はもちえない。平面プランの比較においても相似形の関係や羨道、玄室の規模の比率等で特別の共通値等は見出しえなかった。

2. 検出された古墳をめぐって

石室の石積の状態であるがどの古墳においても漢門や玄門を意識した石積や石材の選択がおこなわれている。但し、玄室の奥壁、側壁においては多少の差異が認められたので記しておく。奥壁の構築は石材の利用状況により3つのタイプに分けられた。
 ①1・3号墳のように中位の礫、2石以上で構成されるもの。
 ②4～6号墳のように中央に大形礫を置き、側壁との間隙に小礫を充填したもの。
 ③7号墳のように大形の礫1石で構成されるものの3つである。

側壁では6・7号墳が第一石に幅0.6～0.7m程の大形の礫を用いているのに対し、1・4号墳では第一石に比較的小形の礫を用い、第二、第三石にそれよりも大形の礫が積まれていた。各古墳の形状の比較は表1のとおりである。

掘り方 石室を構築するに際しては、地表面を掘り、石室開口部側の開放する土坑の底面に根石を据え置く方法が採用されている。この石室構築方法は6世紀前半、横穴式石室が受容された時点で既に認められるという。本遺跡周辺の小規模古墳でも6世紀中頃には認められ、それ以後、立地条件の区別なくほぼ普遍的に採用されている。

本遺跡の場合、掘削深度の点で8号墳は残存壁高12cmと他が1m前後あるのに比して浅いものであるが、旧表土の状況を復元することが困難な現時点では残存壁高の差異をもって時期差等を導き出しえなかった。

出土遺物 内外両施設を含めて1号墳を除いては量的に非常に少量である。

1号墳からは10型式の鉄鏃が出土している。型式的には使用年代に相当の時間幅を持っているものが多いが、長頸闊無端刀平刃箭式や長頸鑿箭式などは後出的な型式、

表1 古墳形状一覧

No	周 堀	漢 門	羨道側壁	玄 門	玄室側壁	玄室奥壁	床 面	羨道：玄室長	羨道：玄室幅	玄室幅：長	出 土 遺 物
1	方形	欠矢、左右に石積	小礫	柱状の石材を立置	上段につれ大形	2石と小礫	舖石状の割れ石	1：1.40	1：1.77	1：2.03 (1：1.48)	直刀、斬手刀、刀子、鉄鏃、金環、鉄釘、須恵器、土師器
2	方形に近い形状	多石、左右に石積	小礫	—	—	—	割れ石	—	—	—	土師器、杯
3	馬蹄形	—	—	—	左壁1段目に大形	多石	舖石状の割れ石	—	—	—	土師器、杯
4	馬蹄形	右は柱状左は多石	小礫	柱状	1に近い状態	多石、中央に大形	舖石状	1：1.06 (1：1.03)	1：1.82 (1：1.81)	1：2.04 (1：2.13)	土師器、杯 須恵器、長頸鏃
5	内縁は方形に近い	多石、左右に石積	小礫	柱状	下段がやや大形	4に近い状態	割れ石と小円礫	1：1.69	1：1.51	1：2.73	土師器、杯 須恵器、大槩
6	円形、周堀は全周	多石、前庭にあわせた石積	1に比して大形	柱状	1よりも大形	多石、中央に大形	割れ石	1：1.62 1：1.72	1：2.02	1：2.13 1：2.26 1：1.84	直刀 須恵器、大槩
7	円形	柱状、左右に石積	1段目はやや大形	柱状	6に近い	ほぼ1石	割れ石と小円礫	1：1.58 1：1.68	1：1.80	1：2.14 1：1.80	鉄刀、土師器杯、須恵器大槩、埴輪
8	円形	—	—	—	—	—	割れ石	—	—	—	須恵器長頸鏃、羽口
9	円形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

●松本氏は横穴式石室の「掘り方」について形態分類をおこなうとともに変遷、構築などにふれている。

松本浩一・坂場一寿・右島和夫「畿石切組横穴式石室における構築技術上の問題 下—いむゆる朱線をもつ南下E号古墳を中心として—」『群馬県史研究』13 1981

立地や副葬品の時期の分析からすれば1号墳が最終の築造とすることができる。そして、墓域としては1号墳、石室内出土の長頸蓋の年代に至るまで継続していたと考えられ、本遺跡の古墳は築造から50～75年間、機能していたことが推定できる。

10号墳については出土遺物もなく他の9基の古墳と前後関係を比較することができない。石室の全長は1.65mであるが狭道にあたる開口部近くの裸の状態を考えると成人を伸展で埋葬することは不可能である。乳幼児の埋葬施設として考えられなくもないが1号墳で幼児骨が合葬されている例をみればこのような施設の必要性は稀薄となろう。荒砥二之塚遺跡においても同様の小石室が検出されている。この時点で筆者はこのような石室は埋葬の方法が変化し、複次葬から単身葬へ移行する過程で出現する形状と考え、これらを古墳時代終末に位置づけた。しかし、再度、本遺跡で同様の資料に接し、他遺跡等における検討などを充分におこなっていない現時点では一概に葬送方法の変化と規定することは危険であると考えている。

別の視点からこの石室について考えてみると、この石室の被葬者は、他の古墳のような大形(10号墳に比して)で盛土を有する墳墓をつくりえない。また、通常の古墳に合葬されることを許されない者(非血縁者、その他の理由のある者)ということになる。しかも、規模からみて再葬の可能性が高いと思われる。しかし、10号墳は小規模ながら前庭状の堀り込みや、両袖型のプランなど他の古墳と同様の構築方法が用いられている。このことは10号墳の被葬者が土塚墓に葬られる階層の者と同一に位置づけることのできない性格を有していたことの現われとも思われ、この被葬者の社会的地位^{***}を複雑にしているといえる。

検出した古墳と下駄牛伏遺跡の住居群との関係についてもふれてみたい。住居は14軒検出された。詳細は前節に述べられている。住居群の中で後出と思われる7号住の土器には7世紀前半の時期を与えることができよう。これに対し、古墳の周堀、前庭から出土した完形、半完形の土器をみると、2号墳、5号墳からは7世紀中葉から後半の時期の杯が出土している。このことは住居と古墳の平面的な重複関係の成果にも合致するものである。7号住と6号墳、7号墳は重複関係にないが石室形状の共通性から住居群よりも古墳が後出と考えられる。住居群が廃絶した後に居住域が墓域へと変化し、古墳が築造されたと思われる。

3) 周辺遺跡の概要

本遺跡の古墳は先述のように7世紀中葉以降の築造と位置づけることができる。そして、これらの古墳と宮戸古墳群、波志江今宮遺跡で調査された古墳は同一台地上に近接して立地する。

宮戸古墳群では4基の古墳が調査されている。内部主体が確認された3基はいずれも横穴式石室を有する。うち2基は前庭が付き、墳丘に埴輪が認められないことから牛伏遺跡の古墳に近い時期と思われる。他の1基と内部主体が不明なものは円筒埴輪が出土している。

波志江今宮遺跡は宮戸古墳群に隣接している。8基の古墳が検出された。墳形や内

●荒砥二之塚遺跡では検出した21基のうち7基が小規模の石室であった。赤堀村地蔵山古墳群にも数基の検出例がある。

●●河上邦彦氏は墓域・石光山古墳群の改葬の箱式石棺について記す中で被葬者の性格についてふれている。

白石太一郎ほか「葛城・石光山古墳群」奈良県立橿原考古学研究所 1976

Ⅶ 成果と問題点

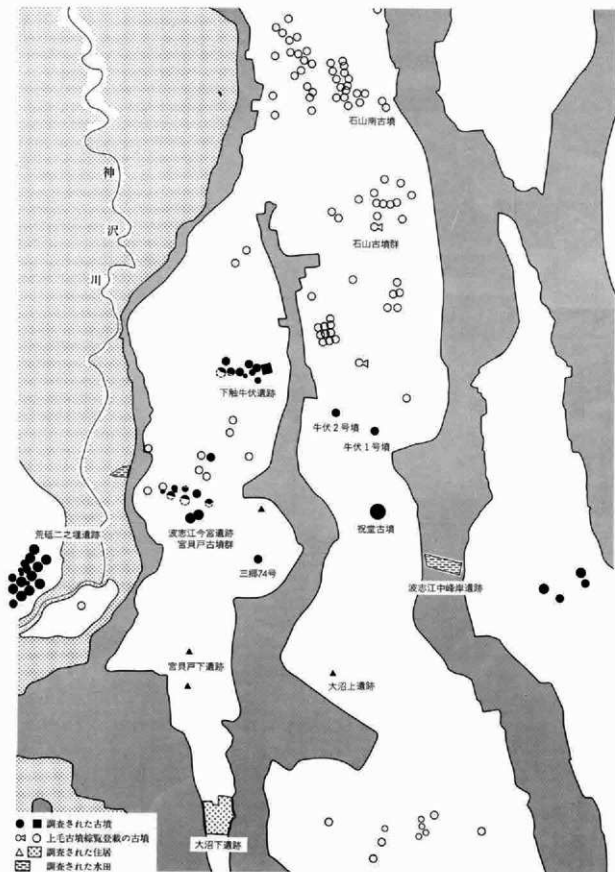


図1 下船牛伏遺跡周辺の古墳

部主体が確認できた古墳は6基で帆立貝形(主軸長26m)1基と円墳(径12~24m)5基がその内訳である。帆立貝式の4号墳と1号墳(径12mの円墳)は主体部に箱式石槨を有していたと考えられ、墳丘には埴輪が樹立されていた。3・7号墳は横穴式石室で埴輪を有するもので、7号墳は両袖型であった。8号墳は埴輪をもたない両袖型横穴式石室の円墳である。

正式報告がおこなわれていない現時点では今後の成果に待たねばならない点が多いが、簡単に古墳群の形成についてふれてみる。帆立貝式の4号墳と1号墳が主体部に箱式石槨を有することからこの遺跡の中ではやや先行すると思われる。次に横穴式石室を有しながらも墳丘に埴輪を樹立する3・7号墳、次に埴輪を有しない8号墳の順で造営されていったと考えられる。これらの古墳は6世紀の中葉から7世紀前半に至る築造と思われ、牛伏遺跡にやや先行している。

三郷74号墳は台地の東端、やや奥まった所に位置する円墳である。墳丘に埴輪の樹立はない。主体部は両袖型の横穴式石室で角閃石安山岩の削り石(三面削り、五面削り)と一部、輝石安山岩の削り石、転石が混在して用いられている。前庭の存在も推定され、7世紀中葉以降の築造と考えられる。また、この古墳に接する場所からB種ヨコ刷毛が施された円筒埴輪の出土が伝えられており、5世紀代の古墳の存在が想定されている。

周辺地域の古墳の動向は以上のとおりであるが居住域、生産域はどのようであろうか。牛伏遺跡の南1.3kmに大沼下遺跡がある。住居19軒が検出された。時期の明確になったものは古墳時代前期4軒、奈良時代3軒、平安時代4軒である。また、方形周溝墓が1基検出されている。

宮戸下遺跡は牛伏遺跡の0.9km南にある。台地の中央に位置し、古墳時代後期から奈良時代前半にあたる住居1軒が調査されている。

波志江今宮遺跡でも台地の東端で奈良時代の住居1軒を検出している。台地の西側の沖積地からは浅間Bテフラ下の水田が検出された。また、石山古墳群の東側の沖積地においても波志江中峰岸遺跡でBテフラ下の水田が確認されており、牛伏遺跡周辺の沖積地は平安時代には広範囲に耕地化がなされていたと思われる。今宮遺跡では水田よりも古い時期の掘削と考えられる溝が南北に走り、下流への大規模な導水があったことが予想される。

4. 波志江沼西側にひろがる古墳群

本遺跡周辺の遺跡の分布と概要は以上のようなものである。周辺地域の農耕集落の変遷については今後の成果が増加するのを待ってその分析を加えなければならない段階と思われるが、周辺の古墳群の推移を分析するにあたり一応の整理をしておきたいと思う。

大沼下遺跡は古墳時代中・後期の住居が検出されていないが古墳時代から平安時代まで継続した伝統集落の1つと考えるとよいと思われる。古墳時代前期には隣接する沖積地の一部、小区域を生産域にしていたであろう。本遺跡検出の住居群は東接した沖積地を生産域とした第一次新開集落である。この集落の出現は古墳時代後半の生産域

● 概要は「群馬県史」資料編3を参照

●● 本事業団、石塚久則氏の講義による。

●●● 用語の使用については松登健・小島敦子「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会1984の中でおこなわれている定義に従っている。

●●●● 同上

VII 成果と問題点

が現在、波志江沼が存在する沖積地全域に拡大していったことを想起させる。奈良・平安時代の住居の調査例は断片的な内容提示に停っているが、浅間Bテフラ下の水田の検出例と併と考えあわせれば、この地域が伝統的地域として継続的に開発されていったことが認められよう。

以上のような遺跡の推移からすると、波志江沼西側の台地上に展開する古墳は、台地両側の沖積地を生産域とした農耕集落の存在を背景に成立した1つの古墳群として把握できそうである。

この古墳群は現在得られる資料からは5世紀後半に初源が求められる。6世紀代には波志江今宮遺跡で認められたように箱式石椁から横穴式石室へと内部主体の変化を経て、7世紀中葉以降の埴輪樹立の消滅した両袖型横穴式石室の古墳築造となるようである。また、7世紀の中葉以降では波志江今宮遺跡の8号墳にみられたように6世紀代から継続する墓域の古墳と古墳の間隙を埋めるように古墳が築造される。それとともに古地を台地の北側に広げながら造墓が継続し、7世紀中葉には旧居住域の一部をも墓域に含みこんでしまったと推定される。

6世紀から7世紀にかけて古墳が増加してゆく状況の背景には伝統地域においても本遺跡のような第一次新開集落の出現にみられるような生産域の拡大と安定性の獲得があったと思われる。

下触牛伏遺跡の10基の古墳は遺跡の南側に延びる台地上に展開した古墳群の一部としてとらえることが可能である。しかし、文中でも記したように居住域や生産域との関係についての分析は不十分なままである。また、居住域や生産域のあり方を背景にした古墳群と古墳群の関係(本遺跡と石山古墳群のように1つの沖積地をはきんで分布する古墳群立地の状況)についても分析の範囲に制約もあり、古墳立地の背景は以前として不鮮明なまま今後の課題となってしまった。

牛伏遺跡の周辺には、中期から後期にかけて前述した古墳の他に地蔵山古墳群や蟹沼東古墳群など多数の古墳群が形成されている。古墳群のとらえ方として1つの生産域を中心とするものを1つの古墳群として把握するのはよいとしても、牛伏遺跡周辺の古墳群の古地状況は単一水系(用水系)に古墳群というような単純な図式とはならないものである。

農耕集落の変遷とそれに係る古墳立地の傾向については、遺跡群研究の成果としてその過程が解明され、更にその分析が進んでいる。牛伏遺跡周辺における古墳群の立地と農耕集落の変遷過程における推移については個々の古墳群の形成過程を詳細に分析することにより、その背景や動向が確明になってくるであろう。そして、それらをおこなう作業の中で前庭や石室構築時の企画性等の問題についても再度整理されなければならないと考えている。

なお、本稿を記すにあたり、右島と夫氏に多くの御教授を得た。記して感謝の意を表します。

(徳江秀夫)

●本遺跡において旧居住域に墓域が遷出することについては近接する瓦城二之塚遺跡で類例が認められる。分析の不徹底からその要因については全く言及できなかった。今後の課題としたい。

●能登・小島前掲書
●●鹿田雄三「群集墳研究の現状をめぐって―後期小古墳の成立とその背景について新しい分析―」『研究紀要』2 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

参 考 文 献

- 1 町田 洋、新井房夫、小田静夫、遠藤邦彦、杉原重夫「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—」〔文化財に関する保存科学と人文・自然科学〕波辺直樹編 1984
- 2 井上唯雄・徳江秀夫・石坂 茂「高紙二之壱遺跡」00群埋文 1984
- 3 石坂 茂・徳江秀夫・小島敦子「高紙五原遺跡」00群埋文 1984
- 4 小島純一「F1安通・洞遺跡」稻川村教育委員会 1982
- 5 磯野雅男「青柳遺跡」〔年報〕1 00群埋文 1982
- 6 「群馬県遺跡台帳Ⅰ（東巻編）」群馬県教育委員会 1971
- 7 尾崎喜左衛門「上野園の信仰と文化」1970
- 8 鹿田雄三他「上ノ坊遺跡」〔年報〕2 00群埋文 1983
- 9 井上唯雄「前橋市城南地区の土器器使用遺跡」茨城史談会 1968
- 10 「高紙下切切Ⅰ遺跡・舞台西遺跡・中屋敷Ⅰ遺跡」〔年報〕2 00群埋文 1983
- 11 相原建史他「高紙中屋敷Ⅱ遺跡・下切切Ⅱ遺跡」〔年報〕2 00群埋文 1983
- 12 鹿田雄三他「高紙瓦子遺跡」〔年報〕2 00群埋文 1983
- 13 鹿田雄三他「高紙瓦子遺跡の方形区画遺構」〔研究紀要〕1 00群埋文 1983
- 14 井上唯雄他「黒塚遺跡」群馬県教育委員会 1985
- 15 井上唯雄他「昭和58年度高紙北部遺跡群発掘調査概報」群馬県教育委員会 1984
- 16 徳江 紀他「高紙上原原遺跡」〔年報〕4 00群埋文 1985
- 17 「文化財調査報告書第12集—昭和56年度—」前橋市教育委員会 1981
- 18 「敷土井二本松遺跡」〔昭和60年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要〕00群埋文 1985
- 19 飯田陽一「高紙東原遺跡」00群埋文 1979
- 20 木部日出男他「富田遺跡群・西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1982
- 21 中澤貞治他「大沼下・西福岡遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977
- 22 中澤貞治他「蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」伊勢崎市教育委員会 1978
- 23 石塚久則他「今宮遺跡」00群埋文 1981
- 24 中澤貞治「宮貝戸古墳群・蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1983
- 25 柳沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立」〔群馬県史研究〕2 群馬県史編纂室 1975
- 26 横沢克明「関之出上の箱式形状石棺について」〔まゝあし〕17 1975
- 27 中澤貞治他「蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1979
- 28 中澤貞治他「蟹沼東古墳」伊勢崎市教育委員会 1982
- 29 中澤貞治「宮貝古墳群・蟹沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1983
- 30 中澤貞治「牛伏第1号墳・紀堂古墳・大沼上遺跡」伊勢崎市教育委員会 1982
- 31 「波志江六反田遺跡」〔昭和60年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要〕00群埋文 1986
- 32 相沢忠昭「群馬県赤塚山遺跡」〔考古学ジャーナル〕6 1967
- 33 松村一昭「赤塚村地蔵山の古墳1」赤塚村教育委員会 1978
- 34 松村一昭「赤塚村地蔵山の古墳2」赤塚村教育委員会 1979
- 35 友直哲也「榎下八幡遺跡」〔年報〕4 1985
- 36 松村一昭「八幡林古墳群及び縄文住居跡調査概報」赤塚村教育委員会 1982
- 37 「波志江中峰岸遺跡」〔昭和60年度一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査・整理概要〕00群埋文 1986
- 38 松村一昭「五日牛東遺跡群及び赤塚村8号墳発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1979
- 39 中山純一「五日牛清水田・中田遺跡」〔年報〕4 00群埋文 1985
- 40 坂井 隆「五日牛南遺跡」〔年報〕4 00群埋文 1985
- 41 松村一昭「五日牛岡山遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1980
- 42 松村一昭「新山古墳群及び北通・黒島遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1983
- 43 松村一昭「川上遺跡、女塚遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1980
- 44 松村一昭「下船内井遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1980
- 45 尾崎喜左衛門・大里仁一「群馬県赤塚村多田山発見の火葬墓群」〔古代学研究〕15・16 1956
- 46 後藤守一「青宮博物館学報6 上野園在波部赤塚村今井茶臼山古墳」青宮博物館 1932
- 47 柳沢重昭「赤塚茶臼山古墳」〔群馬県史〕資料編3 群馬県史編纂室 1981
- 48 能登 健「上川久保遺跡」群馬県教育委員会 1977
- 49 前原孝子他「富田遺跡群・西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1982
- 50 井上唯雄他「高紙五反田遺跡」群馬県教育委員会 1978
- 51 井上唯雄他「高紙上諏訪遺跡」群馬県教育委員会 1979
- 52 能登 健他「高紙上諏訪遺跡」00群埋文 1981
- 53 柴田常恵監修「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告」第1輯 1928
- 54 松村浩一他「西大室遺跡群Ⅱ」前橋市教育委員会 1981
- 55 江原和彦「西大室遺跡群」前橋市教育委員会 1983
- 56 松原一昭「今井南遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1980
- 57 松原一昭「南原B号古墳」〔群馬県史〕資料編3 1981

- 58 松原一昭「今井柳田遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1982
- 59 松村一昭「多田山東遺跡発掘調査概報」赤塚村教育委員会 1982
- 60 村田喜久夫・須兵幸一「上西遺跡」伊勢崎市教育委員会 1984
- 61 坂場一秀編「土樋木庵寺発掘調査概報Ⅰ」伊勢崎市 1984
- 62 坂場一秀編「土樋木庵寺発掘調査概報Ⅱ」伊勢崎市 1985
- 63 鹿田三編「女塚」群群理文 1984
- 64 山崎 一「群馬県古墳遺址の研究」上巻 1971
- 65 「東山遺」群馬県教育委員会 1982
- 66 杉原在介「群馬県岩戸発見の石器文化」明治大学文学部研究報告第一冊 1981
- 67 戸沢光剛「砂川先土器時代遺跡」所沢市教育委員会 1974
- 68 石原伸一編「御正作遺跡」大泉町教育委員会 1984
- 69 森嶋純「男女倉遺跡」和田村教育委員会 1975
- 70 野野孝「熊原遺跡」北茨城市史編纂委員会 1982
- 71 寺崎直史「解説 先土器時代の遺物について」『城山遺跡第9次調査概報』1982
- 72 藤原正・戸田竹也「東内野遺跡発掘調査概報」東内野遺跡発掘調査団 1977
- 73 道沢武則「一の台遺跡」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会 1986
- 74 鈴木道之助「木刈遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』1975
- 75 中村政代重「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古7』1979
- 76 藤田明晴他「深見塚山遺跡」大和市教育委員会 1983
- 77 戸沢光剛「概観月見野遺跡群」月見野遺跡群調査団 1969
- 78 鈴木次郎・丸島誠雄「相模野台地におけるナイフ形石器文化終末期の様相」『神奈川考古7』1979
- 79 鈴木次郎「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現—相模野IV期石器群の構造的理解」『神奈川考古22』1986
- 80 栗島義明「槍先形尖頭器石器群の研究序説—中部日本における地域的様相の把握—」『考古学研究128』1986
- 81 藤田明晴「相模原市長久保遺跡採集の石器」『神奈川考古15』1983
- 82 岩崎泰一「勝保山中ノ山遺跡」『年報2』群群理文 1983
- 83 岩崎泰一「ローム層中に見られる逆転層の存在とその意味について」『研究紀要2』群群理文 1985
- 84 須藤隆司「(3) IV層下部の機群と石器群」『下山遺跡Ⅱ』野田谷区教育委員会 1985
- 85 加藤晋平・鶴丸俊明「川向・間村遺跡の調査」『考古学ジャーナル』1971
- 86 鶴丸俊明「増田遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物(上)』雄山閣 1975
- 87 能登 健「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として—」『信濃』第26巻3号 1974
- 88 若月省吾「和田遺跡」『笠懸村誌別巻—』笠懸村誌編纂室 1983
- 89 芥沢武介「磯山遺跡」『栃木県史料編・考古—』栃木県史編さん委員会 1981
- 90 松谷純一「IX期の文化層」『多聞寺前遺跡Ⅱ』多聞寺前遺跡調査会 1983
- 91 稲田孝司「旧石器時代武蔵野台地における石礫石材の選別と入手過程」『考古学研究』第30巻4号 1984
- 92 砂田佳弘「盤状割片石核の系譜—南関東先土器時代石器群における割片割断工程の一端—」『神奈川考古22』1986
- 93 杉原在介「群馬県武井における二つの石器文化」明治大学文学部研究報告書VII冊
- 94 小田静夫「高井戸東遺跡」高井戸東遺跡調査会 1977
- 95 戸沢光剛編「下里木邑遺跡」下里木邑遺跡調査会 1982
- 96 能登 健・石坂 茂・池江秀夫・小島敦子「赤城山南麓地域における遺跡群研究—真群集落の衰退と湖井遺儀の出現」『信濃』第35巻4号 1983
- 97 能登 健・小島敦子「弥生—平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会 1984
- 98 内田澄治・能登 健「軍岸遺跡」新里村教育委員会 1984
- 99 石塚久剛他「美原古墳群」群馬県教育委員会 1984
- 100 「上毛古墳総覧」群馬県史跡名勝天然記念物報告第5群 群馬県 1938
- 101 岩崎卓也「古墳時代集落研究序説」『古墳時代の新視角』雄山閣 1983
- 102 田中正夫・櫻岡芳之「埼玉における古墳出土の鉄鍬の基礎的型式分類と年代観」『埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ—鉄鍬について—』研究紀要 1983
- 103 江本直也「曲野遺跡」熊本県文化財調査報告65集 1984
- 104 三宅徳也「大平山元日遺跡発掘調査報告書」青森県立郷土館調査報告書第8集 1980
- 105 菊池強一「大台野遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物(上)』雄山閣 1975
- 106 鈴木次郎他「栗原中丸遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター 1984

写 真 图 版



△空から見た下触牛伏遺跡（北上空から）



△遺跡の遠景（東南から）

▽遺跡の遠景（北から）

▽遺跡の遠景（東から）





△牛伏遺跡基本土層

▽チフラの同定 (群大 新井房夫教授)

▽花粉分析試料サンプリング



▽先土器時代遺物と出土層位



▽ローム層の調査





△第I文化層



△第I文化層 1 礫群



△2 礫群

▽4 礫群

▽5 礫群





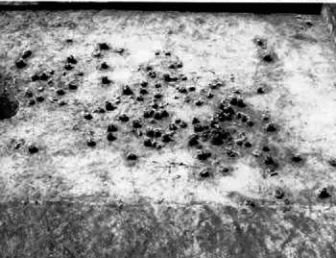
△第1文化層 6礎群



△7礎群

▽2・3礎群

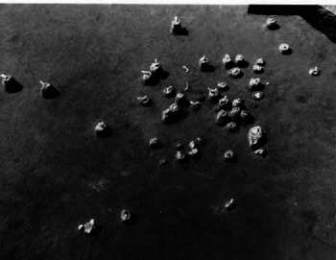
▽第1文化層 1ブロック



▽37ブロック



▽47ブロック

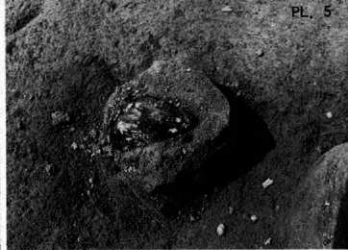
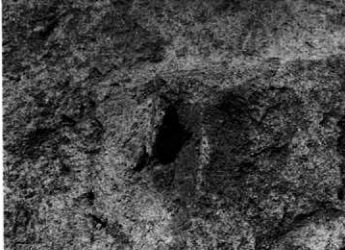


▽67ブロック



▽77ブロック





△第I文化層 石器の出土状態 Q43

△R33・133

▽S40・59

▽Q43・3



▽第II文化層





△第II文化層 1ブロック



△1ブロック

▽87ブロック

▽137ブロック



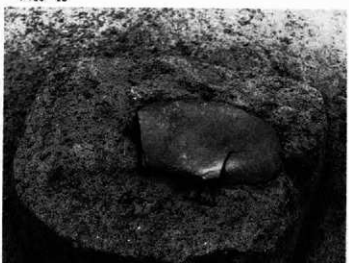
▽第II文化層 石器の出土状態 O41・24



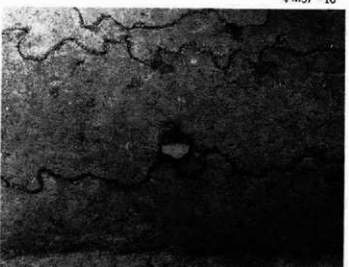
▽S35・18



▽Q39・12



▽M37・16





△13号住居全景

▽13号住居炉址



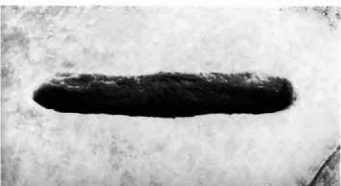
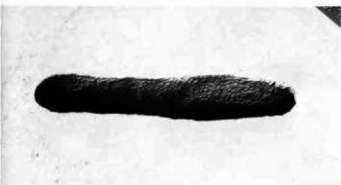
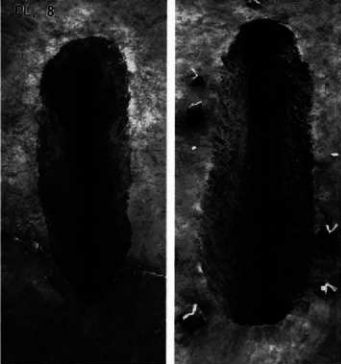
△13号住居埋没土断面



▽13号住居遺物出土状態

▽15号住居全景





5号 8号 26号 28号
 29号 同上 同上 27号
 32号 同右上
 33号

13号

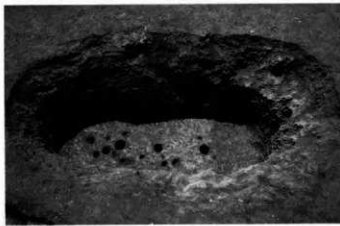
16号 15号

21-22号 24号

25号 同上

40号 34号

II類の土壇



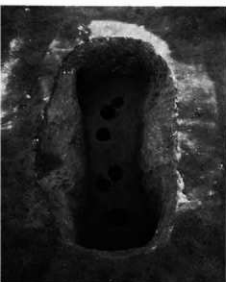
45号 43号

51号 54号 48号

11号 同上 同上

58号 12号

Ⅱ類の土壇



6号

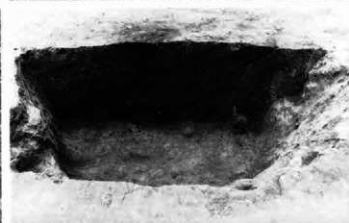
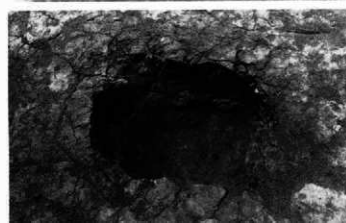
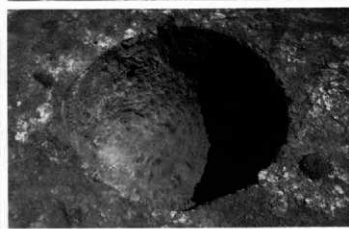
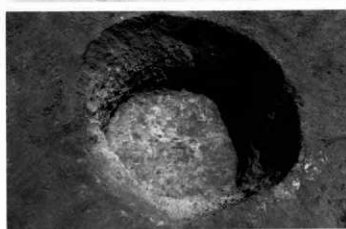
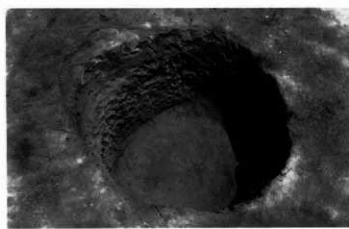
同上 7号

9号 10号

14号 18号

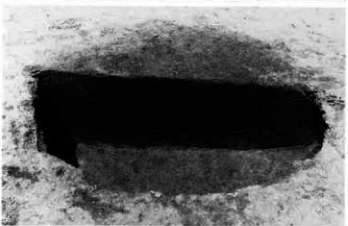
19号 同上

Ⅲ類の土坑



30号
46号 同上
31号 49号
50号 47号
同上 同上

Ⅲ類の土坑





△孤状に展開する土垣群



△1号集石



△2号集石

▽1号集石断面

▽2号集石断面





△8号住居全景

▽8号住居カマド



▽8号住居埋没土断面



▽8号住居床面

▽8号住居掘り方





△ 8号住居床下土坑



△ 8号住居床下断面図



△ 4号住居全景

▽ 4号住居埋没土断面

▽ 4号住居カマド

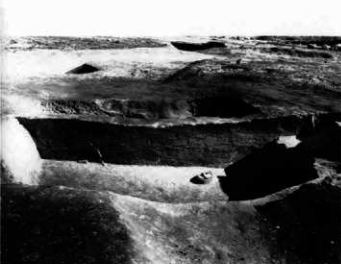




△4号住居掘り方



△4号住居床下土壇埋土断面



△2号住居埋土断面



△2号住居カマド

▽2号住居全景





△9号住居全景



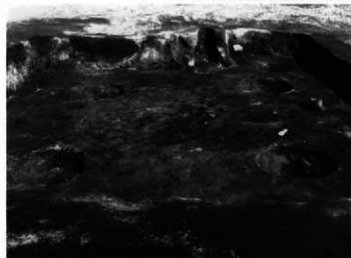
△9号住居埋没土断面

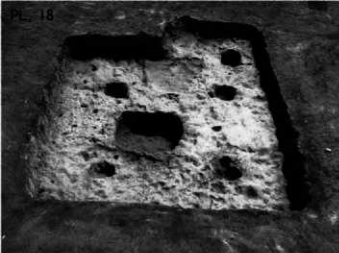


△9号住居カマド

▽9号住居床面遺物出土状態

▽9号住居石製品出土状態





△9号住居掘り方



△9号住居床下土壇埋没土断面



△6号住居全景

▽6号住居埋没土断面

▽6号住居と周辺の住居址





△6号住居カマド遺物出土状態



△6号住居カマド

▽6号住居南壁付近遺物出土状態



▽6号住居床面遺物出土状態



△6号住居掘り方全景



△6号住居掘り方半載状態

▽6号住居床下土城埋土断面

▽6号住居床下土城





△10号住居全景



△10号住居埋没土断面



△10号住居カマド

▽10号住居遺物出土状態

▽10号住居貯蔵穴埋土断面





▽3号住居床面遺物出土状態

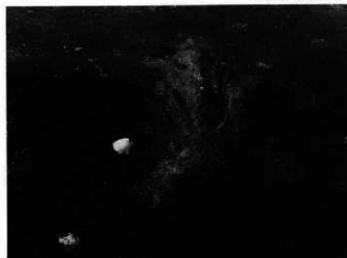
△3号住居全景



▽1号住居カマド

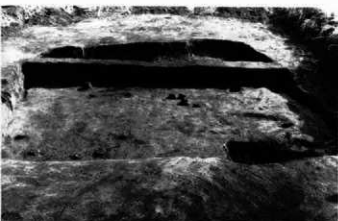
△1号住居全景

▽1号住居埋没土断面





△14号住居全景



△14号住居埋没土断面



△14号住居カマド

▽14号住居掘り方全景

▽14号住居遺物出土状態





△12号住居全景



△12号住居カメラ



△11号住居全景

▽11号住居埋没土断面

▽11号住居カメラ





△7号住居全景



△7号住居埋没土断面



△7号住居遺物出土状態

▽7号住居と周辺の住居址



▽7号住居カマド





△7号住居厨房空間



△7号住居カマド遺物出土状態

▽7号住居カマド



▽7号住居貯蔵穴



△5号住居全景



▽5号住居遺物出土状態

▽5号住居カマド





◁調査された古墳群



◁西群の古墳
(6～9号古墳)



◁東群の古墳
(1～5号古墳)



△ 6号古墳石室



△ 6号古墳と隣接する古墳



△ 6号古墳前庭埋没土断面

▽ 6号古墳前庭の石積み

▽ 6号古墳石室玄門





△6号古墳直刀出土状態



△6号古墳後遺石積み

▽6号古墳左袖。左壁の石積み

▽6号古墳左壁から奥壁の石積み



▽6号古墳掘り方全景

▽6号古墳石室掘り方埋土断面



▽7号古墳全景

▽7号古墳前庭埋土断面





△7号古墳石室

▽7号古墳全景

▽7号古墳石室奥壁



▽7号古墳左壁の石積み

▽7号古墳玄門周辺の石積み





△7号古墳閉土（外面）

△7号古墳閉土（内部）



△7号古墳前庭埋没土断面

▽12号古墳全景

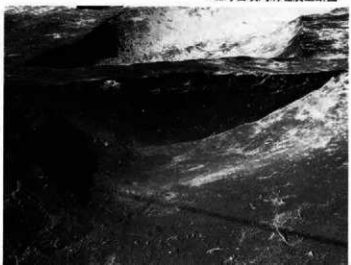
△7号古墳周溝埋没土断面

▽12号古墳・2号住居埋没土断面



▽12号古墳石室

▽12号古墳周溝埋没土断面

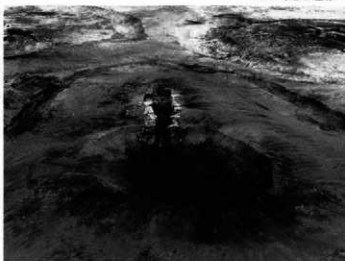




△4号古墳石室

▽4号古墳と周辺の古墳

▽4号古墳全景



▽4号古墳石室閉そく(外面)

▽4号古墳石室閉そく(内面)





△4号古墳石室右壁の石積み

▽4号古墳掘り方全景

△4号古墳石室奥壁

▽4号古墳掘り方工具痕



▽5号古墳全景





△5号古墳石室



△5号古墳石室前室

▽5号古墳石室左壁の石積み

▽5号古墳石室奥壁



▽5号古墳周溝埋没土断面



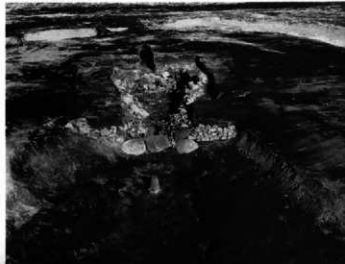
▽5号古墳前庭埋没土断面



▽2号古墳全景

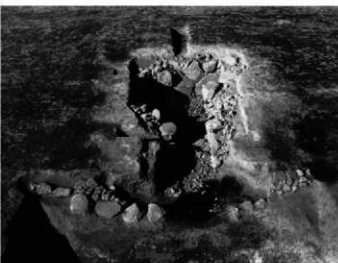


▽2号古墳石室





△1号古墳全景



△1号古墳石室



△1号古墳石室

▽1号古墳石室前室

▽1号古墳石室玄門





△1号古墳
蓋刀出土状態



△1号古墳須恵器出土状態



1号古墳
わらび手刀出土状態▷



△1号古墳閉そく(内部)

▽1号古墳掘り方埋没土断面

▽1号古墳掘り方埋没土断面



▽10号古墳全景



▽10号古墳石室



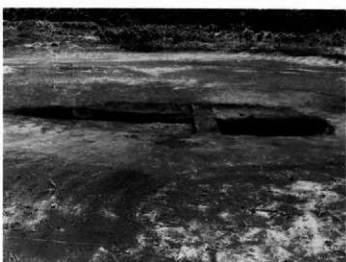
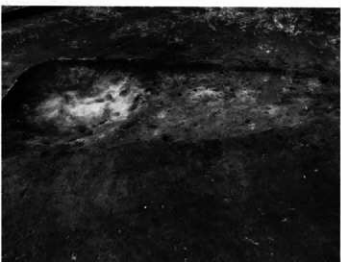


△ 2号溝全景

▽ 2号土坑全景

△ 2号溝埋没土断面

▽ 2号土坑埋没土断面



△ 3号土坑全景

▽ 4号土坑全景

△ 3号土坑埋没土断面

▽ 4号土坑埋没土断面





△56号土壇全景



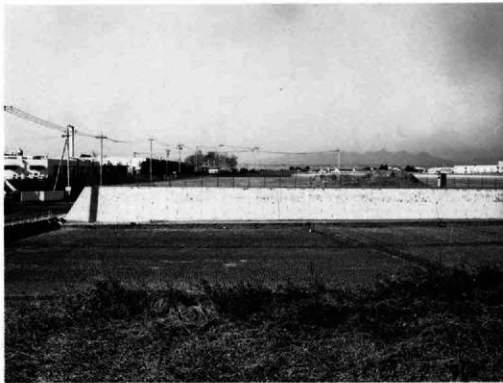
△56号土壇埋没土断面



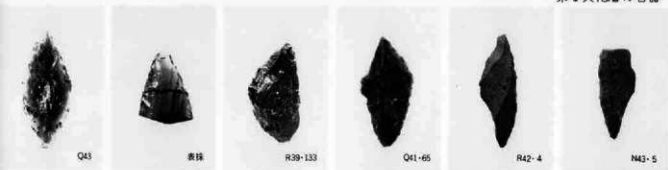
▽60号土壇全景



▽60号土壇埋没土断面



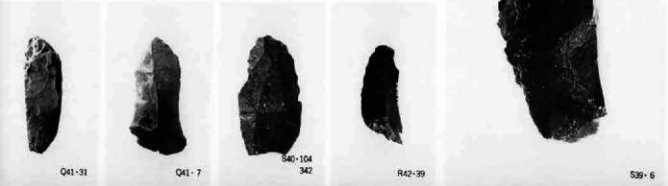
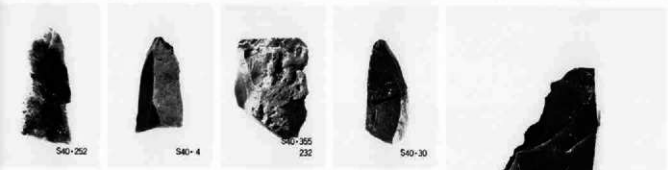
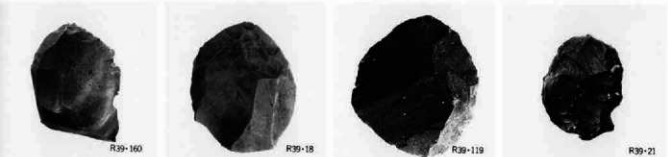
造成後の下触牛伏遺跡▷



▽台形石器

△ナイフ形石器

▽形 器

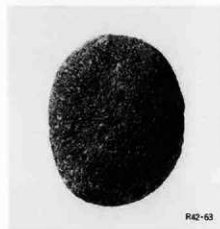
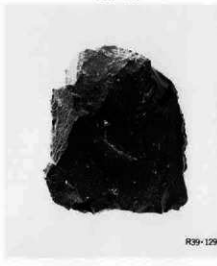




△削器

▽敲石

▽石核



▽打面調整剥片

▽削片









種I-21



種I-40

第II文化層の石器 ナイフ形石器



Q36-13



R36-8



P37-7



Q36-20



Q36-66
30
Q35-8



Q36-34

▽側縁整形石器



K38-11



R41-7



Q40-28



R40-28



Q39-12



Q38-47

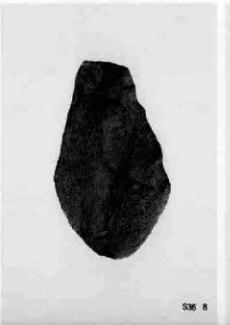
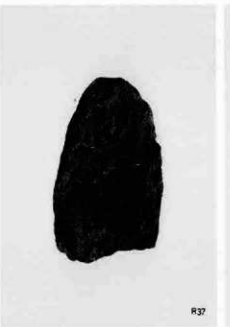


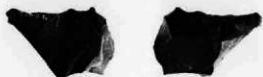
△側縁整形石器



△その他の石器

△▽局部磨製石斧





O40-1



種II-10



M35-7



S34-2



種II-4



L37-40



R32-3



種II-35



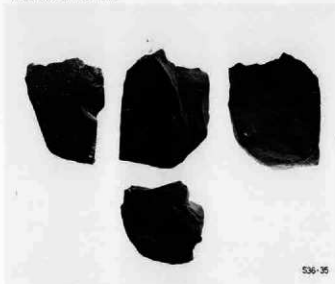
種II-6



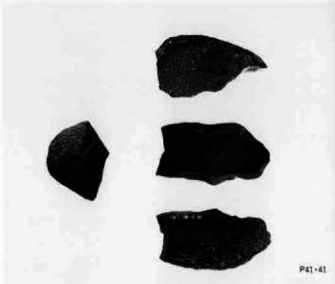
O33-89



S39-77



S36-35



P41-41

△石 核

▽折断断片



S37-7



U39-1



P40-71



R35-23



Q33-66



Q40-24
T41-11



Q35-21



P37-19



Q37-12



S39-138



Q35-27



Q36-11



P37-13



P36-5
6



Q36-38



R35-7



Q36-7



P37-14
16
18



種II-69



種II-1



種II-36



N33-23
33
59



種II-56



種II-48



接II-76



接II-75



接II-39



接II-60



接II-69



接II-51



接II-5



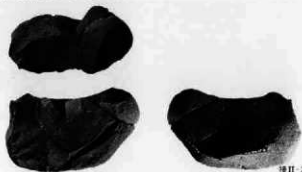
接II-53



接II-42



接II-2



接II-21



接II-15



接II-44



接II-27



接II-16



接II-71



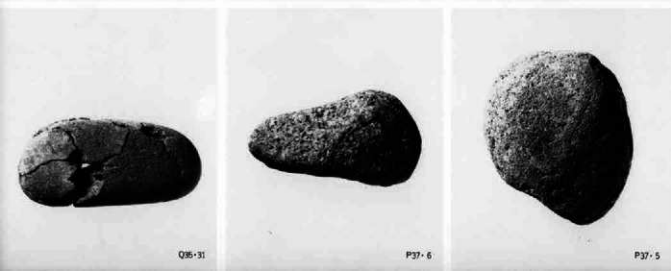
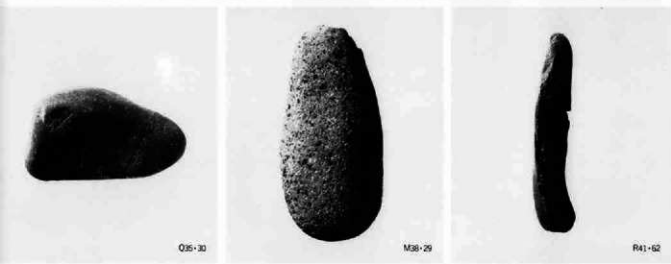
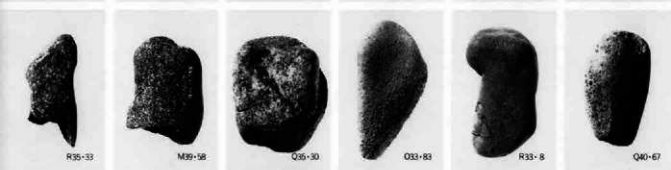
接II-55



接II-74



接II-43





13住-1



13住-2



13住-3



13住-7



13住-4



13住-5



13住-6



13住-10



13住-11



13住-13



13住-8



13住-12



13住-14



13住-15



13住-17



13住-18



13住-21



13住-19



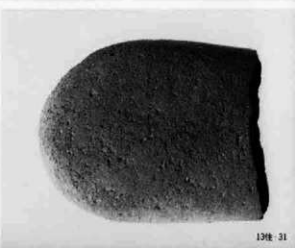
13住-20



13住-30



13住-32



13住-31



13住-30



13住-29



13住-26



13住-28



13住-27



13住-25



15住-3



15住-2

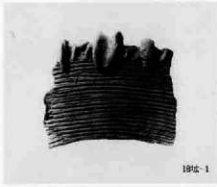
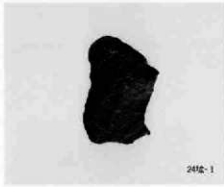
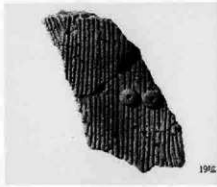


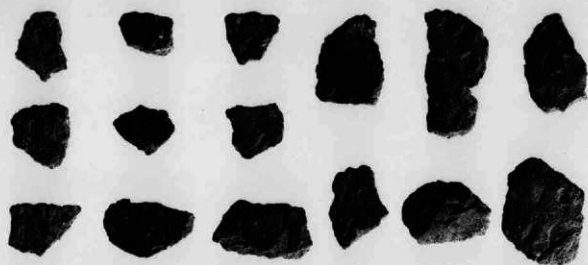
15住-4



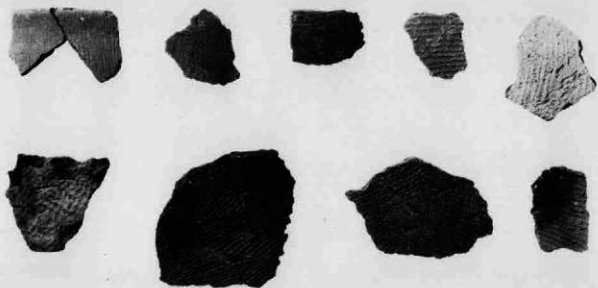
15住-1





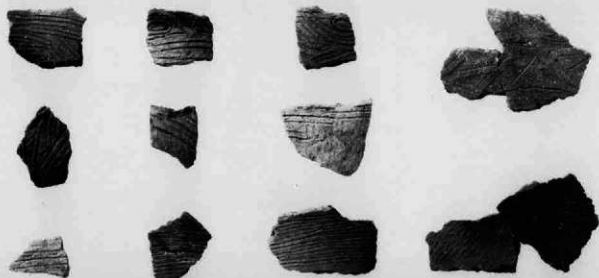


△第1類土器



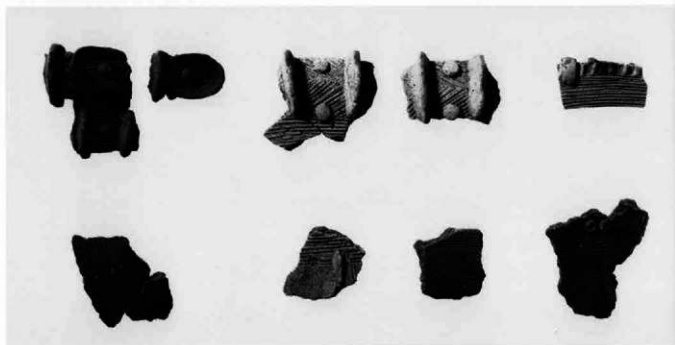
△第2類土器

▽第3類土器



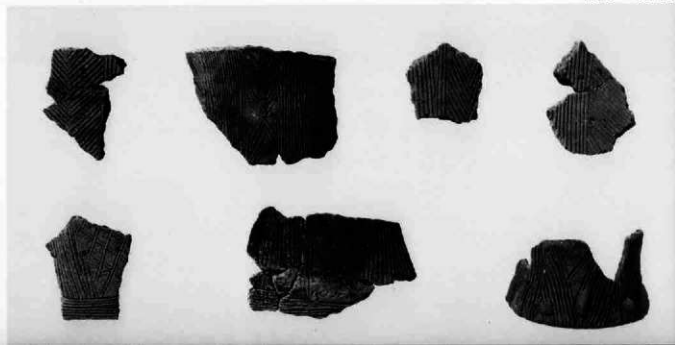


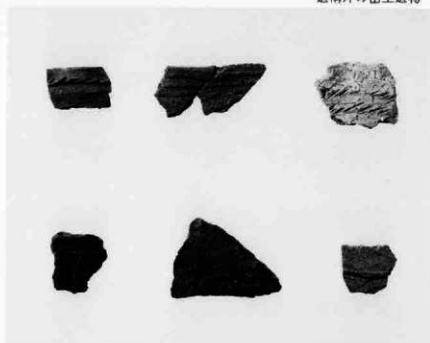
△第4類土器



△第5-a類土器

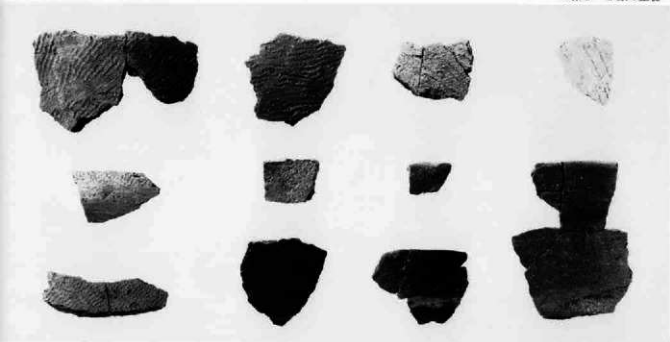
▽第5-b類土器



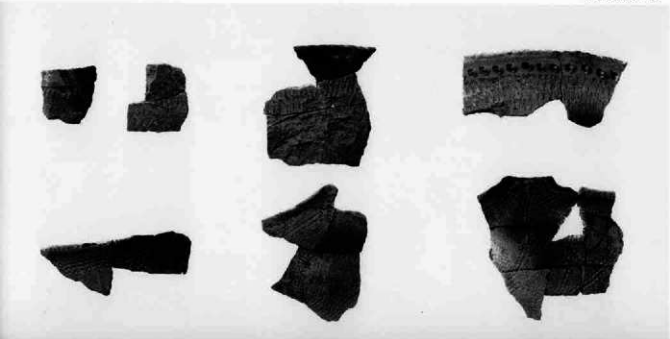


△第5-c類土器

▽第5-d類の土器



▽第6類の土器





△第7類の土器

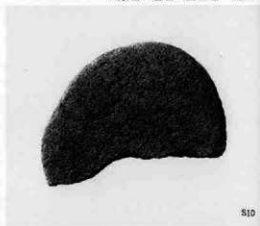
▽融石・磨石・凹み石・石皿



S9



S11



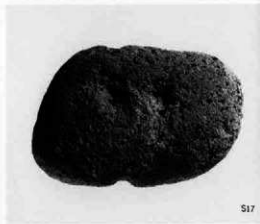
S10



S12



S14



S17



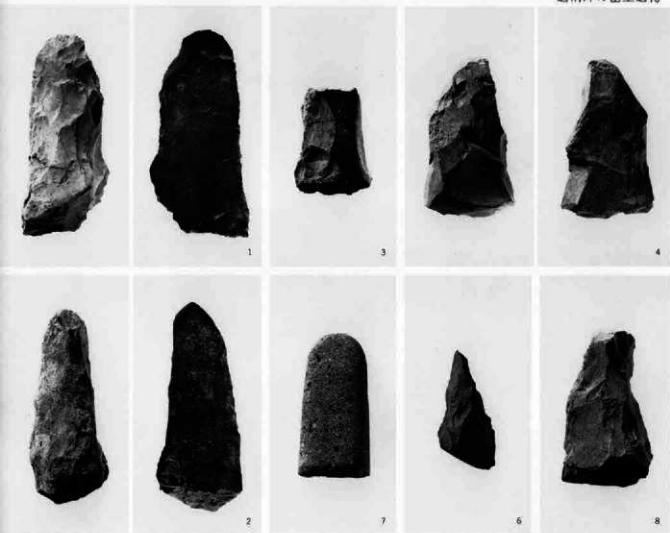
S16



S15



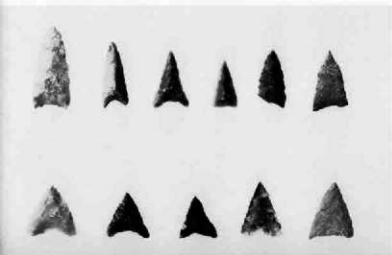
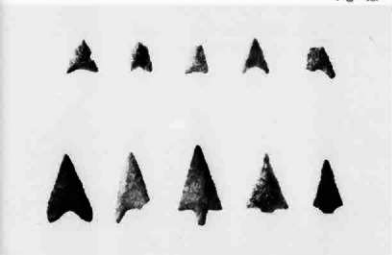
S13



△三角錐形石器

▽石 鏃

▽磨製石斧







8住-1



8住-2



8住-3



8住-4



8住-5



8住-11



8住-12



4住-1



4住-4



4住-5



4住-11



4住-7



4住-3



4住-12



4住-13



9住-1



9住-2



9住-3



6住-1



6住-2



6住-11



6住-20



6住-15



9住-4



6住-3



6住-4



6住-5



6住-16



6住-17



9住-7



9住-6



6住-20



6住-18



6住-26



6住-19



6住-29



2住-1



2住-2



2住-3



10住-9



10住-1



10住-10



10住-2



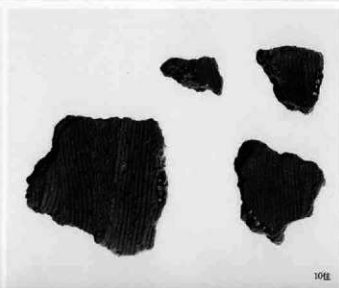
10住-5



10住-3



10住-11



10住



3住-3



3住-4



3住-6



14住-1



14住-3



3住-5



14住-2



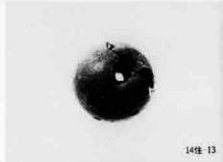
14住-4



14住-7



14住-5



14住-13



1住-1



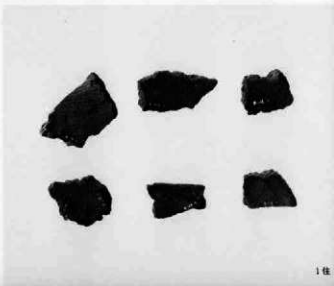
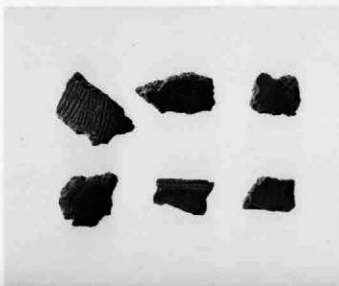
14住-6



1住-3



1住-2





12住-1



11住-1



11住-3



11住-2



11住-4



12住-3



11住-7



11住-8



11住-9



11住-10



7住-1



7住-3



7住-5



7住-2



7住-4



7住-6



7住-8



7住-9



7住-7



7住-20



7住-11



7住-15



7住-14



7住-10



7住-16



7住-18



7住-19



7住-17



7住-13



7住-12



7墳-1



3墳-1



2墳-2



5墳-1



2墳-1



5墳-2



5墳-3



2墳-3



7墳-4



5墳-4



6墳-2



7墳-9



4墳-3



8墳-1



8墳-2



1墳-1



1墳-2



1墳-3



1墳-4



1墳-7



1墳-5



1墳-6



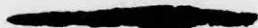
1墳-17



1墳-20



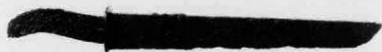
1墳-18



1墳-19



1墳-21



1墳-13



1墳-15



1墳-16



1墳-8



1墳-10-12



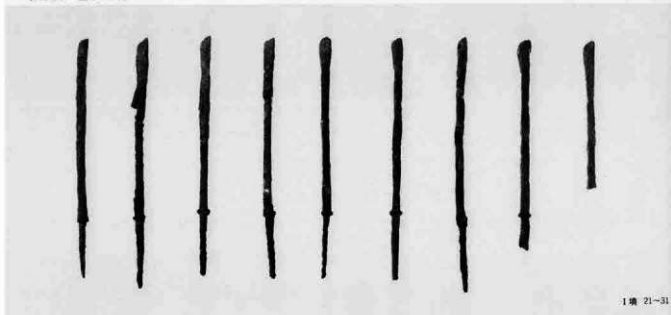
6墳-4・5



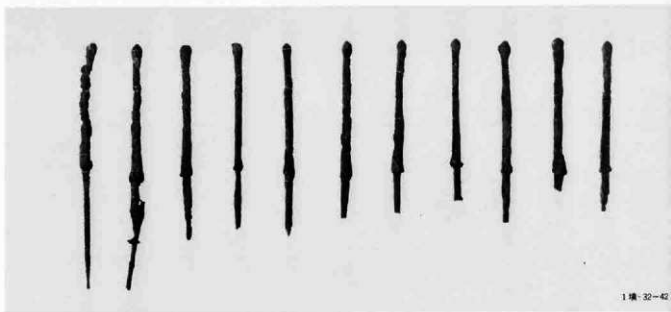
6墳-3



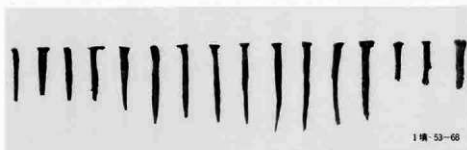
6墳-2



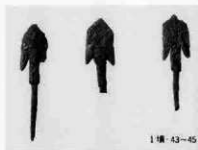
1墳 21-31



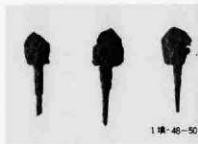
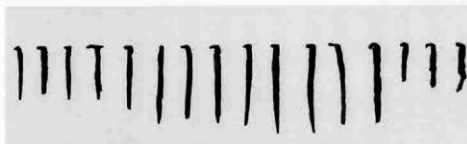
1墳 32-42



1墳 53-68



1墳 43-45



1墳 46-50

▽その他の出土遺物



3号土坑



00-4



00-5



3住

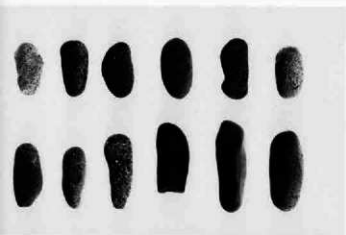
7 8 9 10
◇ ◇ ◇ ◇



6住

26 36 28 29 30 31
● ● ● ● ● ●

32 33 25 35 37 38 39
● ● ● ● ● ● ●



8住

12 14 13 15 16 17
○ ○ ○ ○ ○ ○

11住

16 13 14 15 12 17
○ ○ ○ ○ ○ ○



7住

23 24 25 26 □
▲ ▲ ▲ ▲ 10住 12

27 28 29 ■ □
▲ ▲ ▲ 10住 13



5住

1 2 3 4 5
△ △ △ △ △

14住

9 10 11 12 ☆ ☆ ☆ ☆ 10 ☆
11 9

下触牛伏遺跡 身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52-2511（代表）

印刷／朝日印刷工業株式会社
